謹賀新年

どうか本年も倍旧のご指導と
ご鞭撻をお願い申上げます

能楽の友社

# 能楽の友

題字は熱田神宮　篠田宮司筆

発行　能楽の友社
名古屋市千種区吹上本町2―20
（郵便番号　464）
電話　（731）7984
振替口座　名古屋　36393

購読料　1年　300円
郵送の場合　1年　400円
一部　30円

## 翁（おきな）

翁は古来神聖なものとして取扱われ、天下泰平・国土安穏を祈るめでたい能であり、また禁裏の饗応や、或は追善の際にも用いられ他の能と全く異なって極めて尊重されているものである。

「そもそも芸能とは、寿福増長の基、還齢、延年の法なるべし」と世阿弥が述べているように、能そのものが寿福であると考えられまた申（猿）楽の起源を神楽に求める考えは当時すでに強かったが弘安六年（一二八三年）春日臨時祭に興福寺の住僧の延年があり、児、翁、三番、父尉、延命冠者の舞が行なわれたとあり、これが翁猿楽の完全な形式記録の最初であるとされている。しかも京都今熊野神社の神事猿楽（応安七年＝一三七四年）で観阿弥が「翁」を演じ、足利義満に見出され、能楽の発展に決定的な影響をもたらしたことはよく知られるところである。

このようにすでに約六百年前の世阿弥の時代においても、特別な取り扱いをされていたのである。

古来、翁を引受けた役者は一別火」といって、各役とも一週間の間、精進潔斎をして勤めることになっている。現在でも上演当日は楽屋には「別火」を入れた火鉢が置かれてある。

内容は「とうとうたらり」の翁の賀詞にはじまり、天下泰平・国土安穏の祝祷の歌舞が千歳、翁、三番叟の三役によって順次演ぜられる。他に面箱持の役も必要であるが、金春、金剛、喜多の下掛り三流では千歳がこの役を兼ねる。観世・宝生の上掛り二流では別に一役として登場するので四人の役者が出ることになる。一般の能と同じく、地謡・囃子方も存在するが脇鼓二人が加わり、頭取とともに小鼓が三挺用いられるのは、翁のみの特異な演奏法である。

この芸能は呪師の流れとされ、その内容構成には、いろいろな説があるが、とくにその文句についてつぎのような興味ある解説がある。

河口慧海師の発見によれば（昭和三年四月十二日朝日新聞所載）この文句は西蔵国の古代語で祝言の陀羅尼歌、サンバ・ソウ（瑞祥・作成と云う意）の詞、トフーウ（得物は）タラリ（輝き）タラリ・ラ（かゞやきて）タラリ（輝きは）ア（嗟呼）ガレララ（何れも様に）リトウ（寿きあれや）ツエ・リン・ヤツ（寿命は長く善く）タラリ（輝き）タラリラ（かゞやいて）タラリ（輝きは）ガレララ（何れも様に）リトウ（寿きあれや）であるという。これに従えば、古い散楽時代にこの芸能が移入せられて、翁舞に伝わり、僧宜竹の説のように陀羅尼呪文として永く謡われて来たものゝ様である。また高野辰之博士が日本歌謡史に挙げておられる様に舞楽の最初に演ずる「振舞」の笛の譜の訛ったものであるかも知れない。

「翁」のスケッチ
仙田雪山子画

謹賀新年

熱田神宮宮司　篠田康雄
権宮司　長谷晴男

### 静岡県能楽鑑賞会主催

静岡県能楽鑑賞会主催による「狂言鑑賞会」が、きたる一月十九日午後一時半から浜松市民会館で行なわれる。

番組はつぎのとおり。

「萩大名」大名・野村万之丞、太郎冠者・野村悟郎、茶屋・野村又三郎

小舞「貝つくし」野村耕介

「千鳥」太郎冠者・野村万蔵、主・能村英丘、酒屋・野村万之丞

「奈須与市語」野村悟郎

「三人片輪」唖・野村万蔵、有徳人・能村英丘、座頭・野村又三郎、いざり・野村万之丞

### 金沢　金沢能楽会

一月五日、金沢能楽堂で定例研究会、素謡「加茂」「翁」能「高砂」「東北」狂言「雛聟」

なお次回は二月二日（日）、能「籠」「草紙洗」狂言「宗論」

### NHKラジオ第2

放送予定

一月十九日（日）午前8時～9時

観世流「東北」観世喜之ほか

〔訂正〕本紙十二月号三面西村弘敬氏の「古典雑話」とあるのは「古曲雑話」の校正の誤りにつきお詫びとともに訂正いたします。

（編集部）

社団法人　名古屋能楽会
熱田神宮能楽殿

高木栄一郎
名古屋市北区敷島町一〇七
電話　九九一―四三三七

昭和四十四年賀正

観世元正
郵便番号（一五〇）
東京都渋谷区恵比寿南一丁目二十一番地

名古屋　観世九皐会
観世喜之
観世武雄

大阪能楽会館
大西信久
大西智久
大阪市北区堂本町十二
電話　〇七六四番

梅若六郎
梅若景英

研能会
橘香会
梅若万三郎

梅猶会
梅若猶義
梅若盛義
梅若猶彦

大江又三郎
京都市東山区東町廿丁目
電話　〇六二二番

片山博太郎

井上嘉久
京都市中京区両替町竹屋町上る

武田太加志
鳳鳴会
名古屋市東区葵町二九
吉田義正方

株式会社　観正会能楽堂
上田照也

# 観能の手びき

## 一月・二月の能 熱田神宮能楽殿

――一月十五日清韻会――

**安宅**（あたか）赤間鎮雄

歌舞伎では勧進帳といって有名であるが、勿論、能から取り入れたもので、余りにもよく知られた曲の一つである。シテ武蔵坊弁慶は、ツレ同行郎等多数と共に、子方源義経を先頭に出場する。

ワキ、富樫関守が鎌倉の命により、安宅ノ関を通ろうとする山伏姿の弁慶一行を通さぬと詰めよるのである。弁慶は思案の末勧進帳を読みあげる。ワキはこれを聴聞して、漸やく関を通すことになるという、至極わかり易い、現在ものの能で解説は寧ろ不必要と言えよう。今回は小書「勧進帳」であるが故に勧進帳の読上げのところはシテ一人の独吟となる（普通は地謡）又、滝流之伝という小書つきのため、男舞の型がちがい文句も省かれる。

**安達原**（あだちがはら）長谷川実

観世流以外では「黒塚」という曲名になっている。

シテ里女は引廻しで覆った作物の萩小屋の中に入っているのを後見が二人で静かに運んで、大小前に置く。ワキがワキツレを従えて登場、人里のない野原に灯を見つけて宿を借りることに始まる。

作物の引廻しが外されると里女は、寂しい孤独の境涯を謡い、宿を断るが、なおも乞われるので、それに応じ、作物から出る。

ワキの問いに対して枠裃輪（わくかわせ）にて糸を紡ぐ所作をして見せる。サシ、クセで、浮世のつれなさをかこち、ロンギでは糸尽しの文句を連ね、月影に見入る型など、能ならではの物哀れさを感じさせる堪らない風情がある。

やがてワキ達に接応のため裏山に薪を採りに行ってくるからとて出かけるが、間の内を見ないようにと戒めて中入する。

間狂言東光坊の能力は、止めるも聞かず、遂に闇の中を見て驚きワキ達に人の死骸は山に積まれている恐ろしい有様を告げ、逃げてゆく。後シテ鬼女は柴を負って走り出る。一ノ松にてワキに向って打杖を振りかざして襲いかかる。

これからイノリになり、ワキの法力によって折り伏せられる。

（五面へつづく）

## 装束談義（十四）

# 腰巻（こしまき）

るとふみ 二井栄逸

思いきり外に飛び出した情熱は無いのだろうか、と、思われる位日本美は、〝わび〟や、〝冴え〟や、〝幽玄〟等のように、内側からにじみ出た感情が多いのであるが、その中にも、あふれるようなはげしい情熱の感情もあるのである。

その、はげしい情熱の感情を、日本美は、主として、ものぐるいの美しさから取材している。

おもに、恋する女性の狂乱の中に美化されたはげしい情熱。又、鬼神や、鬼畜物が盛り上げる異常なサスペンス。みな、はちきれんばかりの気魄に満ちたものである。そして、能の作者である世阿弥は、そういった情熱を〝秩序〟ある型に定着させて素晴しい美意

しかし、情熱を表現するにしても、〝簡素〟とか、省略美とか、〝幽玄〟〝余情〟等を愛する精神を、白雲にかいま見る、紺碧の空のようにはげしい感情の中にチラ〳〵のぞかせることは忘れてはいない。

× × ×

能とはいかなるものか、私は言う。

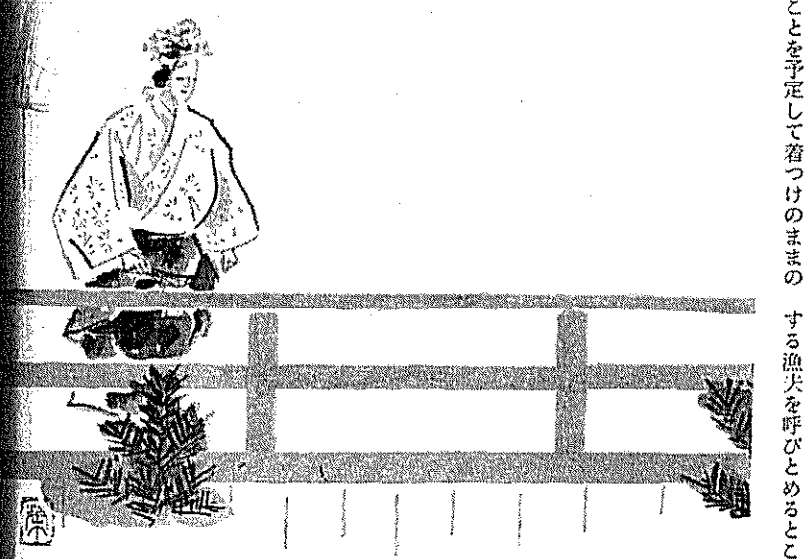
――ていこうの示す力。迫力のある美しさ。深い根。真実。刀のように冴えた智性。ほのぼのとした感情の泉、と。能はそのようなものである。

× × ×

能装束の衣類の中に、腰巻（こしまき）がある。縫箔を着附の上

れたもので、女体にのみ用いる。上には、大抵、長絹、又は、水衣を着る。又、羽衣の物着前のシテのように、摺箔に、縫箔の腰巻をまいたままの姿、あとで上衣を着ることを予定して着つけのままの姿のこと、〝もぎどう〟というのである。

図は、〝のう其の衣は……〟と、春の朝なぎに静まる松林の彼方から、自分の羽衣を持去ろうとする漁夫を呼びとめるところ。




## 演能案内

一月十二日（日）
熱田神宮能楽殿

青陽会

草紙洗小町 大辻 君子
野宮 坂田 猛
巻絹 伊勢 信雄
独吟 鉢木 稲生 清子
喪上 日七大吉郎

大槻清韻会
大槻秀夫
大槻文蔵
大阪市東区上町二番地

橋岡久共
東京都世田谷区上野毛二三三

名古屋観衛会
山本博之
山本勝一

静交会 髙橋静夫
東京都世田谷区若林三ノ二三ノ三
電話（四一三）一二二八番

藤井久雄
藤井徳三
藤井楽人
神戸市葺合区熊内町二ノ九四ノ五
電話㊀五一一四四番

雄諷会 下田雄三
大阪市東区高麗橋詰町五三

武田謡楽会 武田小兵衛
稽古場 名古屋市千種区下方町 高木方
岐阜市千石町一ノ九 安部方
四日市市諏訪山道 花田方

邦謡会
名古屋謡曲仕舞教室
梅田邦久
名古屋市昭和区台町二丁目
一六一五 電話（八三）四六三二

掬水会
柴田初太郎
柴田収武

大垣浦声会
稽古場 大垣市竹島町 善念寺
住所 京都市左京区下鴨芝本町五八
浦田保利

望月会 中川清
長浜市地福寺町八ノ二九
電話㊀〇六三〇番

若松宏守
西宮市平松町一五

名古屋淡交会
橋岡久共

澄声会 尾関健太郎

名古屋 修諷会
梅若修一

犬飼末吉
名古屋市中川区柳瀬町二一四〇

此水会 高野瀬透

猶恵会 熊沢恵美子

潤水会
名古屋市千種区今池町二ノ四九
林甲子夫
電七三一一四一八三番

観瀬会 井川秀子

藤門会
加藤良久

壺泉会
泉嘉夫
名古屋市昭和区山里町
南山大学八イム一号
電八三一一三一八五
大阪府下四条畷町雁屋
電（大東）七六一二二六九

竹韻会
杉村竹翠

名古屋風韻会
殿島修二

芳韻会
正諷会
半田市船入町三一
稲生芳雄
田村勇
電話半田二一一〇八一五

谷水会 石谷初蔵

面作り五十年
島三友 能面頒布会
清光会 岡田光紘

## 演能案内

### 青陽会

一月十二日（日）
熱田神宮能楽殿

研究能　箙　高橋　暁一　高安　勝久　寛　鉱一　福井啓次郎　鬼頭　季信　間　井上　義次

舞囃子　草子洗小町　竹内　六郎　河村総一郎　後藤孝一郎　寛　三男

仕舞　鶴亀　富士太鼓　服部　紗枝　石谷　初蔵

仕舞　鞍馬天狗　東北　祖父江修一　加賀　敏彦

能　老松　河村観世　鉦二　元昭　高安　滋郎　寛　鉱一　助川　竜夫　後藤孝一郎　佐藤　秀雄　間　寛　三男

仕舞　隅田川　柴田初太郎

狂言　酢蒟　佐藤卯三郎　井上礼之助

仕舞　春日龍神　屋島　加藤丈太郎　山中　義滋

能　花筐　河村　大　福田　幸市　柴田　収武　西村　欽也　立石　澄雄　河村総一郎　福井啓次郎　鬼頭　季信

仕舞　菊慈童　高砂　久田　秀雄　佐藤　太俊

能　鉄輪　塚本　秀雄　高安　滋郎　高安　勝久　吉田　定男　田鍋惣一郎　池田　茂　藤田六郎兵衛　間　井上松次郎

長屋潤氏
大谷一三務氏　追善会

名古屋　清韻会能

一月十五日（祭）十時始
熱田神宮能楽殿

神歌　長谷川　実　千歳　中村　克巳　地謡　赤間　鎮雄　殿島　修二　田村　修二　下山　鉱一　勇

法会之式　舞囃子　養老　稲生　芳雄　寛　鉱一　山口　亮　藤田　義郎　昭彦　栗　謡

俊寛　森田　保男　日比大吉郎　冨士道周明　福間　昌作　地謡　中村　克巳　水田　博　殿島　修二　小林　二郎　伊勢　信雄

---

### 研究能

野宮　坂田　猛　吉田　定男　後藤孝一郎　藤田　昭彦

巻絹　伊勢　信雄　寛　鉱一　田鍋惣一郎　鬼頭　八郎　寛　三男

独吟　鉢木　稲生　清子　英　上　日比大吉郎

仕舞　柳　丸　森田　保男　山姥　冨士道周明　地謡　福間　昌作　殿島　杉村　竹翠　岡田　光紘　修二

藤戸　坂崎　勝彦　下山　鉱一　地謡　杉村　竹翠　大槻　秀夫　小林　二郎　里井　順　次郎

能　安宅　子方　中原　同　山中　義登　〃　増田　滋　〃　稲生　憲　〃　水田　芳雄　〃　小林　博　〃　多久島　則利　〃　泉　康強　赤間　鎮雄　勧進帳　滝流之伝　高安　滋郎　寛　鉱一　田鍋惣一郎　藤田六郎兵衛　間　太刀持　佐藤　秀雄　強力　井上松次郎

後見　泉　嘉夫　大槻　秀夫　文蔵　地謡　中村　克巳　冨士道周明　岡田　光紘　殿島　修二　坂崎　勝彦　福間　昌作　下山　鉱一　里井　順　次郎　田村　勇　小林　二郎

狂言　三人長者　佐藤　友彦　大野　弘之　井上　義次

一調　野守　殿島　修二　鬼頭　八郎

玉鬘　奥村　久枝　河村総一郎　後藤孝一郎　鬼頭　季信

天鼓　竹内　陽子　河村　鉱一　田鍋　洋一郎　藤田　昭彦

船弁慶　中村　克巳　吉田　定男　田鍋惣一郎　山口　義郎　鬼頭　季信

能　安達原　長谷川　実　西村　欽也　高安　勝久　佐藤卯三郎　河村総一郎　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　寛　三男　間

後見　田村　勇　大槻　秀夫　地謡　坂田　猛　日比大吉郎　森田　保男　伊勢　信雄　水藤　博　泉　大槻　文蔵　杉村　竹翠　嘉夫　又吉　康強

番外舞囃子　海士　大槻　秀夫　吉田　定男　田鍋惣一郎　鬼頭喜太郎　寛　三男

主催　名古屋清韻会

御来聴歓迎

---

## 邦謡会

武田謡楽会　武田小兵衛　名古屋市千種区下方町　高木方　稽古場　岐阜市千石町一ノ九　安部方　名古屋市中区栄四丁目　東海山道　花田方

梅田邦久　名古屋謡曲仕舞教室　名古屋市昭和区台町二丁目一六―五　電話（八〇二）四六三二

松謡会　佐藤太俊

春敬会　真柄米次

鶴声会　丹下三義　岐阜市千手堂中町一丁目　電話㊀〇五三五番

正楽会　加藤丈太郎　電話（三二一）四七四一番

昭和四十四年賀正

曲水会　増田一雄

久田観正会　久田秀雄

嘉謡会　加藤総兵衛

螢雪会　後藤契雲　名古屋市中区栄三丁目三十三

河村一謡会　河村叶石会　河村鉦二　河村総一郎　名古屋市昭和区前山町一―二三　電話（七六一）四八八二番

犬飼末吉　名古屋市中川区瀬古町一―四〇

此水会　高野瀬透

猶恵会　熊沢恵美子

茲水会　有賀滋子

光謡会　飯田新子

竜神会　竹内六郎　岡崎市六供町三ッ岩五七

舞謡会　増田十草

知水会　服部紗枝

福王茂十郎
福王輝幸　大阪市東区平野町一ノ一五

久保田亘亮　芦屋市呉川町五ノ一五　郵番六五九　電話芦屋㉒三一八四番

高安流鴨方　山崎悛輔　大牟田市馬場町五七

高安滋郎
西村弘敬
西村欽也

---

谷水会　石谷初蔵

田村勇　電話平田二一―〇八一五

面作り五十年　島三友　能面頒布会　清光会　岡田光紘

四日市観世九皐会　塚本秀雄

淡水会　飯田賢

金春欣三　東京都町田市玉川学園4の3の42　電話〇四二七㊷七〇九〇番

中部金春会　前田昌廣　前田茂穂　名古屋市中区老松町一ノ二八　電話（二四一）三一四一番

豊嶋十郎　郵便番号（271）

京都高安会　岡治郎右衛門　京都府下長岡町　開田静野一―一七

高安流白水会　和泉太郎　東京都品川区二葉二―八―十二　電話（七八六）四〇九二番

谷田宗二朗　京都市北区衣笠街道町31―7

## 演能案内

第十三期・第一回
名古屋宝生会定式能
一月十九日(日)午後一時始
熱田神宮能楽殿

能組
素謡　辰巳孝　馬繰富四夫
弱法師
地謡　小沢賀一明　須木平子　鈴木稲太郎　衣斐美　馬繰富寿一夫　辰巳孝　衣斐正宜
仕舞　戸田秀雄　竹内澄子　倉本雅　地謡　宝生九郎　衣斐正宜　馬繰富敬介　小川四夫　辰巳孝　馬繰富寿一夫
船弁慶
羽衣
養老

八島
内藤泰二　竹腰勝一　西村欽也　佐藤友彦　河村総一郎　田鍋惣一郎　藤田昭彦
間　吉田俊彦　衣斐正宜　地謡　堀江近藤　松井源十郎　中野広　馬繰富寿一　辰巳孝　鬼頭喜太郎　嘉男　濱口典機
後見　井上義次　井上松次郎　大野弘之　佐藤卯三郎
狂言　鶏聟

能
衣斐正宜　宝生九郎
イロエ　高安滋郎　笠田鍋惣太郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛
間　井上礼之助
後見　浜村園子　倉本雅　地謡　石井孝三　高田真六　加藤勝利　溝口好忠　馬繰富四夫　鬼頭嘉男　戸田秀雄　辰巳孝雄
主催　名古屋宝生会
名古屋市東区東門前町三ノ二二　高橋鋳三郎方　電話九七一―四二九番

巻

名古屋梅猶会能
二月二日(日)午前十一時始
熱田神宮能楽殿

番組
素謡　梅若修一　岡田朗詠　前川芳周
藤戸
地謡　前田行夫　梅若修一　朗詠　岡田　芳周　前田和男　井戸良造　梅若行夫　前田　井戸　地謡　佐藤太俊　加藤太郎　雲林院瑞夫　大西信行　久田勝一　山本定男　佐藤久雄　梅若実　大槻文蔵　観世銕之亜流　内田安剛　観世清和　金春安明　金剛巌　金剛永謹　喜多実　能楽師
仕舞　熊沢恵美子　大槻賢次郎　河村鉦二　殿島修二　地謡　梅若修一　前田行夫　朗詠　岡田　芳周　前川朗詠　井戸和男　梅若良造　前田行夫　井戸　地謡　梅若実　高安勝久　西村欽也　立石澄雄　佐藤秀雄　河村総一郎　田鍋惣太郎　藤田六郎兵衛　地謡　池内光之助　井戸和男　前川芳周　大槻賢次郎　殿島修二　梅若盛義　井上生香　梅若実　高安勝久　西村欽也　立石澄雄　佐藤秀雄　河村総一郎　田鍋惣太郎　藤田六郎兵衛　地謡　池内光之助　前川芳周　井戸和男　大槻賢次郎　殿島修二　梅若盛義　井上生香　梅若実　高安勝久　西村欽也　立石澄雄　佐藤秀雄　河村総一郎　田鍋惣太郎　藤田六郎兵衛　地謡　池内光之助　前川芳周　井戸和男　大槻賢次郎　殿島修二　梅若盛義　井上生香　梅若実　高安勝久　西村欽也　立石澄雄　佐藤秀雄　河村総一郎　田鍋惣太郎　藤田六郎兵衛
間　梅若盛猶義
狂言　後見　河村鉦二　梅若善高　地謡　井戸和男　前川芳周　大槻賢次郎　殿島修二　梅若盛義　井上生香　梅若実　高安勝久　西村欽也　立石澄雄　佐藤秀雄　河村総一郎　田鍋惣太郎　藤田六郎兵衛　地謡　池内光之助　前川芳周　井戸和男　大槻賢次郎　殿島修二　梅若盛義　井上生香　梅若実　高安勝久　西村欽也　立石澄雄　佐藤秀雄　河村総一郎　田鍋惣太郎　藤田六郎兵衛
仕舞　井上松次郎　井上礼之助　佐藤卯三郎
餅酒
嵐山　梅若盛弘
舞囃子　梅若猶彦　笠田鉦一　後藤孝一郎　地謡　池内光之助　前川芳周　井戸和男　大槻賢次郎　殿島修二　梅若盛義　井上生香　梅若実　高安勝久　西村欽也　立石澄雄　佐藤秀雄　河村総一郎　田鍋惣太郎　藤田六郎兵衛　地謡　加藤丈太郎　善高郎　梅若実　高安勝久　西村欽也　立石澄雄　佐藤秀雄　河村総一郎　田鍋惣太郎　藤田六郎兵衛
田村

能楽
子方　河村鉦二　ツレ　梅若実　梅若修一　大猶義　笠之伝　西村欽也　高安滋郎　立石澄雄　高安勝久　笠井啓次郎　笠一　三男　地謡　池内光之助　熊沢恵美子　前川芳周　佐藤太俊　梅若実　井上生香　梅若善高　前田行夫　河村鉦二　岡田朗詠　前田行夫　井戸和男　大槻賢次郎　地謡　鬼頭喜太郎　藤田昭彦　梅若実　井上生香　梅若善高　加藤丈太郎　善高郎　梅若実　井上生香　梅若善高　殿島修二　梅若盛義　井上生香　梅若実　藤田昭彦
後見　久田秀雄　岡田朗詠
附祝言
主催　名古屋梅猶会

野守
能楽
梅若盛義　地謡　吉田定男　田鍋惣一郎　鬼頭喜太郎　藤田昭彦　井戸和男　大槻賢次郎　地謡　河村鉦二　岡田朗詠　前田行夫　梅若実　井上生香　梅若善高　殿島修二　梅若盛義　井上生香　梅若実　藤田昭彦

会員券申込所　能楽殿・出演楽師方
特別席（指定）三、〇〇〇円（税込）
A席（指定）二、〇〇〇円（税込）
B席（自由席）一、二〇〇円（税込）
学生席　五〇〇円（税込）

観世会定式能　四十四年度初会
二月九日(第二日曜日)午前十一時始
熱田神宮能楽殿

能組
舞囃子　柴田初太郎　笠井啓次郎　地謡　後藤孝一郎　鬼頭孝信　石谷初蔵　竹内六郎　杉村竹翠　柴田収武　塚本秀雄
弓八幡
田
観世元昭　西村欽也　吉田定男　福井啓次郎　藤田昭彦
替装束
間　佐藤秀雄
後見　梅田邦久　観世喜之　地謡　後藤契雲　殿島修二　加藤丈太郎　兵衛　山本甲子　藤井勝一　中久雄　義滋
狂言　野村又三郎　井上祐一
節分
杜若
観世元正　高安滋郎　河村総一郎　田鍋惣一郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛
恋之舞
後見　山中義滋　武田太加志　地謡　稲生柄　芳雄　米次　久田　三義　真本　勝一　観世元昭　勝一　笛　丹下　坂田　篠井
狂言

## 社団法人　宝生会

水道橋能楽堂
東京都文京区本郷一―五―九
宝生九郎
東京都文京区本郷一―五―五

名古屋巽会
事務所・愛知県愛知郡和合ケ丘
戸田秀雄方

吉田俊彦
衣斐正宜
竹腰勝一
茂山千作
茂山千五郎
茂山千之丞
善竹忠一郎
神戸市東灘区御影町郡家大蔵二一

金剛巌
金剛永謹
金剛流豊星会
豊嶋弥左衛門
豊嶋三千春
京都市東山区知恩院山内林下町四五五
電話（〇七五）五六一―五四〇八番

金剛流春鶯会
山田仁三郎
中部金剛会
山田仁三郎

吟風会
伊藤鉄之進
大川嘉奈子

金剛流松風社
片野東四郎
名古屋菊扇会
広田泰三

二井栄逸
二井会本部・名古屋市中区正木町五ノ三九　電話　名古屋（〇〇）二七九一
アトリエ・松阪市内五曲町前神八八

録雲会
東京都港区西麻布四―一八―二八
野口録久
電四〇九―〇六一〇番

鍵雲会
内藤泰二

梗雲会
梗風会
倉本雅
神戸市東灘区住吉町茶屋八八　宮前住宅四一三

鬼頭嘉男

金剛流大塚清風社
〒464　名古屋市千種区城山町三丁目
電話（七五一）五三八九番

喜多流

茂山忠三郎
吹田市山手町一―二二―十一
TEL（〇六）三八八―三五二八番

名古屋和泉流
狂言共同社

狂言やるまい会
野村又三郎
名古屋市中村区烏森村内上二二
電話（四七一）五〇六七

華月会
今井幾三郎
京都市万寿寺東洞院

飯島佐六
金沢市香林坊二の八の八

前川善雄

笠鉱一
吉田定男

（三面「一月・二月の能」つづき）

――一月十九日　宝生会――

**巻絹**（まきぎぬ）宝生　九郎

ワキの登場、帝の霊夢により熊野三社へ千疋の巻絹を納めよとの宣旨があり、諸国に調達を命じた処、都からの奉納が遅れている由を述べて着座する。

ツレ次第の囃子にて奉納する巻絹を肩げて登場、次第、サシ、下歌、道行、と山また山を来て熊野に着いたことの意を謡う。

着セリフの後、先づ音無の天神へ詣で、梅の香の高いことに感じ歌を一首、心のうちに詠じ、ワキに向って案内を乞う問答があり、「その身の科（とが）は免れじと」の地謡のうちに縄がかけられる。そこへシテ巫女（みこ）が幣を手にして幕から「のう〳〵その下人をば何とて縛め給ふぞ」と呼び掛け、その者は昨日音無の天神に和歌を手向けし者なれば、とくとく縄を解き給へ、とて登場する。

ワキはこれを見て怪しむ、シテは歌の上の句をツレに問ひ給へと言い、その下の句を、シテは「匂はざりせば誰か知るべき」と謡って、漸くワキの疑いを解き、ツレの後ろに廻り、縄を解き、クリ、サシ、クセで神仏の導きを説き、和歌の徳をたたえ、婆羅門僧正と行基菩薩とが歌を詠み交わして、互に仏身を現わしたことなどの意を舞い、後祝詞（ノット）をあげ次いで神楽を舞ううちに神気が揚ぶり立廻となり、キリは熊野三社の本地を説き、熊野全山にいる仏法守護の神仏に憑かれた態に狂い舞う、やがて神がかりから覚め、正気の巫女に復する。この曲シテの動きが多く初めから終りまで、舞い続けるので退屈のない見どころ多い能といえよう。

**八島**（やしま）内藤　泰二

西国行脚の旅僧（ワキ）がツレ従僧を伴って登場、讃岐の屋島まで来ると、日が暮れたので、磯辺の塩屋で一夜を明かそうと、脇座に着座する。

一声の囃子で前シテ老翁、ツレの漁夫を先に、釣竿を肩に担掛に出で、「面白や月海上に浮んで」と謡い出し、春の月下の海を愛でて舞台に入り、我が家に戻った態に釣竿を捨て、シテは大小前で床に見苦しい塩屋であるからとて、ことわるが、都の者だと聞いて泊めることになる。

シテの語（かたり）にて大将軍義経の屋島での威容を語り、一介の漁翁とは見えぬ如くに景清と、三保ノ谷とのしころ引、佐藤継信の最期の有様など所作によって詳しく示し、やがて聞（とき）の声絶えて「磯の波松風ばかりの音寂しく」と余韻嫋々の趣に結ぶ。

ロンギは「我が名や名のらん、たとひ名のらずとも名のるとも、よし常の浮世の夢ばし覚まし給ふなよ」とてツレと共に中入する。

間（あい）狂言島の浦人が、ワキの所望で、しころ引を居語りする。ワキの待謡ののち、一声の囃子で、後シテ源義経の霊が、颯爽と現われる。正中にて床几にかけ弓流しのことを語る。

クセは上端まで床几のままにて舞い、弓を敵に委ねることを怖れた心中を述べ、カケリになる。

カケリは闘争の有様を擬した所作である。キリでは更に修羅道の有様を見せ、夜も明け方に、その幻は消え、あとには浦風の音ばかりが聞える趣にて終る。

この曲は勝修羅もので、情味が豊かで、気品に富み、最も優れたもので、勇壮爽快な能である。

――二月二日　梅猶会――

**実盛**（さねもり）梅若　猶義

実盛は老武者が年齢をかくして最期の有様を描くという特に重い曲で、前シテは、ただの老翁ではなく、聖僧にだけ映じ、他の者には見えぬ姿であるから、その風情を要する。後（のち）シテは老体ではあるが盛装して出陣するのであるから、内にとった強さを示さねばならず、型どころも非常に多く、難曲中の難曲ではあるが、それだけに興趣深々たるものがある。

ワキ遊行上人はワキヅレ従僧と共に登場、ワキ座にて床几にかけワキヅレは其の下に坐る。

「それ西方は十万億土」とサシに橋懸に現われ、一ノ松で「笙歌遥かに聞ゆ孤雲の上」とサシ謡い舞台の方を見上げて「あら尊や今日もまた」と合掌、耳を傾けて聞く型をし、「よし〳〵少しは遅くとも」で舞台に入り、説教場に来たことになって、ワキに向って下居して「南無阿弥陀仏」と合掌。

ワキは毎日聴聞に来るその志を誉め、余人に姿の見えないこの不思議な老翁に、今日こそ名を名乗れという。そこで人払いを乞い、昔、斎藤実盛が篠原の合戦で討たれ、その首級は池水にて黒く染めた髪、髭を洗い落したのだが執心がこの世に残り、その亡霊は今もこのあたりの人に幻のように見えるのだという。かくして中入までは格別の型はない。

後場は、ワキが池のほとりに立ち、跡を弔う待謡を謡うと、出端の囃子にて後シテ実盛の霊がいかめしい老武者の姿で現われ、舞台に入って仏道帰依の心を謡って、ワキに合掌し、ワキとのカケ合があり、地の上歌に所作があり、クリになって正中で床几にかけ、語（カタリ）は篠原の合戦で、手塚の太郎が義仲の前にて、討ち取った首級を置き、樋口ノ次郎が其の首を検分することになる。「洗はせて御覧候へと申しもあえず首を持ち」と謡を拡げて床几を立ち、出て首を洗う所作を見せる場面は曲中での型どころである。

クセは舞いグセでなかなかに見ごたえがあり、ロンギでは折角、敵将義仲と組打ちするばかりのところを、手塚ノ太郎にはばまれ、遂に首を落される有様が演ぜられる。この場面はさまざまな型どころがあり、なか〳〵見応えのする能である。

**花筐**（はながたみ）梅若　猶義

十二月号の本紙観能の手びき欄に載せたので、省略するが、今度は筐之伝（かたみのでん）という小書つきで、後シテの装束が替わり花籠を持って舞うところが異ってくるので、興味深いものがある。


幸友会
二月十一日（祭）
熱田神宮能楽殿

たなびき会
二月二十三日（日）
熱田神宮能楽殿

主催名古屋観世会
幸友会
附祝言
観世喜之　高安滋郎　筧鉱一
戸田鍋惣太郎　筧三男
高安勝久　井上松次郎
間
後見　杉村大榎　竹翠秀夫
地謡　大飼末吉　竹内六郎　佐藤太俊　河村鉦二　藤井武久雄　藤田太加志　藤井徳三　尾関健太郎
菊慈童　山本勝一
東北　藤井久雄
邯鄲　武田太加志
舞囃子
須磨源氏　大槻秀夫　吉田定男　田鍋洋一
地謡　稲生芳雄　殿島修二　山中義滋　山本勝一　梅田邦久　野崎太郎　藤田昭彦
女郎花　熊沢恵美子
笹之段　大嶽晋次郎
難波　河村鉦二
忠度　殿島修二
地謡　井戸和男　前田行夫　梅若修一　井戸良造
巻絹　佐藤太俊
雲林院　加藤文太郎
黒木　武田太加志



節分
観世元正
若　高安滋郎
恋之舞
杜　野村又三郎　井上祐一
後見　山中義滋　武田太加志
地謡　稲生芳雄　丹下柄米次郎　河村総一郎　田鍋惣一郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛　久田秀雄　山本勝一　観世元昭　藤井徳三　飯田賢



神戸市東灘区住吉町茶屋八八　宮前住宅四一三　鬼頭嘉男

大阪市清風社　〒464　名古屋市千種区城山町三丁目　電話（七五一）五三八九番

喜多流　広田健　山本才

寺井政数　東京都世田谷区世田谷四―三―二五　電話（四二〇）六六七六番

謹賀新年　森田光春

幸圓次郎　東京都中野区中央四―三〇―一四　電話（三八一）九四一三番

昭和四十四年　賀正

幸祥光　賀正幸正影　幸潮會

亀井俊雄　〃俊一　〃忠雄　〃保雄　〃実　東京都中野区江原町一ノ九ノ一五

山本敬一郎　大阪市泉南郡南海町貝掛　南海団地八六四

名古屋市中村区烏森村内上三三　電話（四七一）五〇六七　華月会

今井幾三郎　京都市万寿寺東洞院

金沢市香林坊二の八の八　能楽師　佐藤六

前川善雄

名古屋能楽鑑賞会　かすみ会　田鍋惣太郎　洋一

藤田六郎兵衛　藤田昭彦

呉竹会　筧三男

たなびき会　田鍋惣一郎

幸友会　福井啓次郎　福井良久

桂会　岐阜市松屋町　後藤方

二井栄逸　二井会本部・名古屋市中区正木町五ノ三九　電話　名古屋柳二七九一　アトリエ・松阪市内五曲町前沖八八

筧鉱一　吉田定男

長生会　鬼頭八郎　鬼頭喜太郎

野崎太郎　池田茂

助川竜夫　山口義郎

謹賀新年

宝生流宗家本

わんや書店

東京都千代田区神田神保町3―9
電話（263）6771代表
小売部　東京都中央区銀座8―4（金春ビル）
電話（571）0514
振替　東京　4163

# 年頭随想

殿島修二

能楽の友も発刊されて早くも第三年を迎えることができた。

大方読者の御支援の賜ものと、芸に感謂の意を表します。

三歳になった今年こそは、一大飛躍をせねばと大いに発奮している。

何にせよ、しろうとばかりの集りで、毎月のことになると、さて何を書いたものかと考えているうちに、すぐ締切がきてしまう。

ほんとうのところ何も書くことなんか出来はしないのである。

同人の諸氏に依頼しても、忙しいのでなかなか書いてはくれないから、毎号記事には相当に苦心をしている。能評というものは容易に書けるものではないが、見た能から良かった、悪かった、面白かった、つまらなかった、ああしてもらいたい、こうしてもらいたいと率直に感想を書くぐらいのことなれば、やってもみたいと思うのであるが、さてとなると、どうしても、悪い面のみが印象的に先になって悪口を書いたという非難を免れないので、まあヤメておこうということになってしまう。変名で投書の形式をとるにしても、やはり何か気が咎めて、同人としては、やれないものである。

読者の皆様から、是非、能評または見たままのご意見、その他何なりともご投稿下さることを歓迎いたします。掲載の分に対しては薄謝を呈上いたします。奮って寄稿下さいますようお願いいたします。

お蔭をもちまして読者は漸増の一途を辿っているので、励み甲斐があり、それのみを楽しみに、一同張りきって続けている次第。この上ともご支援をお願いします。

年賀も意外に沢山のお申込みのご賛助を賜はり、新年号は増頁することになった。芸にご協賛の各会、各師に対し、深甚の謝意を表します。

本年度の行事（催能）も大体において決定したようで、六月の熱田神宮奉納能、八月の薪能、九月の大衆能（文化講堂にて）以上は日取りも決まった。このほか東西で催されている歳末扶け合い運動の一助としての催能をも企画されているようである。

一月十五日（祭）は名古屋清韻会能（無料）があり大曲「安宅」勧進帳、滝流之伝の小書つきで演じられ「安達原」のほか、一調、素謡、舞囃子等盛り沢山で、華々しく蓋あけする。

二月二日（日）には梅鶴会能があり、梅若猶義師の「実盛」と、「花筐」筐之伝の小書つきで、二番の能を独演されるという最近では一寸珍らしい催しで、定めし盛会であろうと期待されている。

三月の中日五流能も素晴しい好番組で催される。既に会員券の抽籤会もすんで、本月から売り出されることになった。蓋し本年度も催能中の随一の圧巻である。番組次ぎの通り。

第一部

能　高多流　頼政　友枝喜久夫
狂言　大蔵流　末広
能　観世流　砧　梅若　六郎
能　金剛流　船弁慶　金剛　巌

第二部

能　観世流　仲光　観世　元正
狂言　大蔵流　茶壺
能　宝生流　熊野　宝生　英雄
能　金春流　山姥　金春　信高

外に一調、仕舞数番

三月には藤田流先代宗家清兵衛翁孝師の四十三回忌追善能があり、これまた豪華絢爛の番組にて催される筈で、期待すべきである。

六月は淡交会能、橋岡久太郎師の追善会があり、これも観世宗家始め、名匠の出演で盛大に催能されることになっているので、共に大いに楽しみに鶴首される。

いずれも見逃すことのできぬビッグ能が目白押しにやってくるということは何とも楽しい限りであり、心豊かにお正月が迎えられたことは、何よりも嬉しいことである。

## 舞物について（3）

### 10 破の舞

これは三番目物のシテが、序の舞または中の舞を舞ったあとで、重ねて舞う短い舞である。太鼓なしと太鼓入りとがあるが、いずれも一段で、前者には「松風」「野宮」、後者には「羽衣」「巻絹」（宝生流は破の舞なし）等があり軽快な位のものである。

### 11 イロエ

これは主として、優艶な女性が演ずるもので、きわめて短い動作であるが、一曲のいろどりともみられる。大小鼓で囃し、笛はアシライを吹く。この囃子に連れてシテが静かに舞台を廻る。「船弁慶」「杜若」「弱法師」「卒都婆小野」等で太鼓は入らないが「百万」「山姥」等は太鼓が入る。

### 12 斬組

共通の場面で使用される囃子の演奏法と同じである。「夜討曽我」（十番斬）「正尊」「烏帽子折」等で、鼓は打放し、ヌク地、スキでアシライ。

### 13 舞働（ハタラキとも）

鬼神、天狗、妖怪等の演ずる豪壮な所作で笛が拍子に合うのが特長である。「小鍛冶」「竹生嶋」「賀茂（加茂）」等がある。また鬼女をシテとした曲、即ち「道成寺」「葵上」「黒塚（安達原）」の三番にある舞働を祈働といい、ワキがシテを祈り伏せる様を現わすが「葵上」は品位のあるものなのでその祈りも上品に、「黒塚」は強く演じる。

### 14 羯鼓

これは三つの部分から成り立っていて、始めと終りは中の舞で、中央の部分が羯鼓特有の譜である。非常に軽快に感ずるものなので、のりよくそそらぬ様に打つのが肝心である。稽古の順序は、楽や神楽がすんでからこれを習うことになっている。「花月」「放下僧」「望月」等にある。

### 15 神楽

女体の神、又は巫女の舞であって、神々しくのりよく打つ。小鼓は「プ」「ポ」ばかりを打つが、それで位をきめる。

神楽は鼓の音を出すためによい

### 16 楽

神楽が日本古来のものであるに対し、楽の譜には唐楽の影響がみられる様である。

エキゾティクな風格の、のりよくゆったりしたもので、太鼓入りのものには「鶴亀」「唐船」「枕慈童」があり、太鼓なしは、「天鼓」「梅枝」等である。「天鼓」は盤渉になると太鼓入りになる。

（つぎは囃子物）

（田鎖捻太郎師著「小鼓芸話」より）

鼓の手当たりをきめ、そのあと楽と羯鼓を習うのが普通である。普通の神楽は、神楽三段、直って二段であるが、五段神楽といって終りまで直りなしの事もあり、又、二段の神楽もある。「三輪」「竜田」「巻絹」（序ナシ）「絵馬」（二段）「葛城」（大和舞—宝生流の大和舞は異なる）等である。

## 乱能数首

編集同人・宝生流　戸田秀雄

行く年を惜しむが如く乱能に
長組に初冠つけ橋掛に
福の神の大笑びけり楽殿に
冬の日は早くも暮れて石橋の
此の一年繰り広げられし演能の
乱能の終りを飾ざる大獅子は
つつがなく乱能終れば楽屋にて
還暦と云ふ年来たる此の我が
人々賑はふ今日の能楽堂
立てば翁も業平の如し
来る年の福顕ふ如くに
牡丹まぶしく照明にかゞやく
最後かざれり石橋大獅子
牡丹にたわむれ豪快に舞ふ
年の終りの酒酌み交はす
福の神演じて福来るを願ふ

## （四）（つ）（の）（夢）

花木徳三郎

一、思うままに

雨も良し、風も又佳し、三伏の夏の暑さにも耐え、冬の積雪の日でも平かな気を持ち、欲はなく、決しておごらず、いつもニコニコと笑っている。

人様の役に立つ事ならどんなことでも素直に引受けて、誠意を以って一つ一つ解決して行く、この味気ない人生に味をつけて、わが身は消える。塩のような役目。

働きそのものが天職と心得て皆様の喜びを以って、自分の喜びとなす大いなる心境。

彼の行く所天地も応え、日々の奇跡の連続、何事も人様のことを考えて行動すれば、丁度良いと云う環境が自然に現われて人を感激せしめるという人物になりたい。

二、言うがままに

こう合の服が欲しいと云えば、丁度良いサイズの服が出現し、靴が欲しいと言えばこう合の靴が見つかる、車が欲しいと言えば思ったような車が出回る。

ああ二十世紀の奇蹟、シンデレラ物語。そんなことが出来ると言えば、人は精神分裂症にかかっている、というだろう。

しかし天地無限の法則を覚れば常識で割り切れないことも可能となる。必要に応じて、金が回れば財産なんか、無用の長物だ。

無から有を生ずるの法則、この道を見出すために、苦難の日々は夢のように過ぎていく。しかし彼の安心感は自らにみちている。

「この世をば望月」とよんだ満

喜にふるえているが、物はなくても心ゆたかな人物になりたい。

三、悟るままに

慈眼を以って人を見る、これが彼の夢であり、またユートピアでもある。

起きて半畳、寝て一畳の生活。子孫の為に「美田を買わず」

徳さえあれば、余財は社会福祉に寄贈するという気高い奉仕の精神。

朝には悩む人と語り、夕には病める者を見舞う。

明るい彼の思想に接し、手の舞足の踏む所を知らず。悟りて人の数多し「朝に道を聞いて、夕に死すも可なり」という、こういう人物になりたい。

四、願うままに

欲するものは集り、欲せざるものは去る。この品が売れよと願えばキット買う人が現われる。

あの人に逢いたいと願えば、キット、その人に巡り合う。

金が欲しいと言えばどこからとなく金が回る。

天地の波調に合わせれば、どんな音楽でも聞こえる。

昔の人はこれを神通力といい、現代人はチャンネルを回すと言う。

天に人工衛星が出現し、地上には無数の電波が交流し、空にはジェット機が飛ぶ現代。

精神界にもキット科学に合致する時代が来るという。

雪雪よ去れといえば、サンサンたる太陽が輝くように、天地をも動かすような徳のある人物になりたえる演能の工夫も必要となってきている。

また「申楽の一会をナス役人、面々我一身習得スル所ヲモテ、心ニ又遠慮ヲモツベキ道アリ。一座成就ノ謡乱ハ、重人の仙力和合ナ

或る意味では、乱世に生まれた能楽が、この昭和四十年代の〝安定〟と〝混乱〟の世のなかで、よりさらに深められていく大きな機会として、一個の伸展が期待されあろう。


# 多彩な催能で飾る

## 記念すべき〝明治百年〟の行事

楽師の友社
吹上本町2—20
）7984
屋36393
1年　300円
1年　400円
30円

演能案内

楽師　乱能

乱能
十二月十五日(日)　正午始
熱田神宮能楽殿

魚伊
鮮魚　鯉節
豊橋市魚町一八　電（52）5256
豊橋也留舞会連絡所（山本浅太郎方）

観世流・金剛流
宗家本発行元
合資会社　檜書店
東京都千代田区神田小川町2—1　電話(291)2488—9　振替東京3552
京都市中京区二条通麩屋町東入　電話(23)1990　振替京都113

民芸料理
らち乃
中区宮出町一九番地
電241—9078番

名物きよめ餅

# 能樂の友

題字は熱田神宮　篠田宮司筆

発行　能楽の友社
名古屋市千種区吹上本町2—20
（郵便番号　464）
電話　（731）7984
振替口座　名古屋　36393

購読料　1年　300円
郵送の場合　1年　400円
一部　30円



編集同人（五十音順）

伊藤鉄之進　杉村竹翠　内藤泰二
梅田邦久　高安滋郎　野村又三郎
加野昭二郎　田鍋惣一郎　花木徳三郎
佐藤卯三郎　戸田秀雄　二井栄逸
柴田初太郎　殿島修二


## 「能」とその思想性
### めだってきた新聞での紹介

ナリズムで「能」に関する記事や紹介が最近多くなったようである。演能の紹介と同時に〝伝承〟芸能という角度からとりあげられている。いわゆる経済の〝高度成長〟というのが、芸術の分野に大きな影響をもってきたというのはあまりにも大上段すぎるかも知れないが、現代のような目まぐるしい、秒読み、スピードの時代性に全く背反する〝静〟への志向、人間性の復活と追求がもとめられていることも事実であり、「能」がただ単に〝伝承〟とか〝古典〟といわれるものの、その内容は、「能」のもつ深さにその力があるのではないだろうか。

「日本の演劇のように、きめこまかいかげりを含んだ、しかも凝集した様式のなかにある演劇表現を学ぶのも東洋からである。またわれわれをして、もっとも静かでもっとも古い叡智の池のなかで汲みとりたいのも東洋なのである」とみる外国人は決して少くない。

ことし一月七日開かれた学生能（熱田神宮能楽殿）をみた学生がまるで自分が舞台の演者と融けこませるものが能にあるとは知らなかった〟と語り、ゴーゴーをどうみるかとの質問に対して、〝もちろんやりますが、全く違うものです〟（名古屋タイムズ）という意味のことを語っているが、これが全部の意見ではないにしても、はじめて観能の機会をもち、それがマスコミのなかで育てられてきた現代の人たちにある思索性と人間の失地回復につながる要素は大きい。

こうした時代性を反映して、新聞、雑誌の取り上げ方も鋭くなっていることは注目すべきであろう。

ことし一月一日号の日経紙は、芸の伝承として「能」「歌舞伎」て、たとえば、身振りやしぐさの表わし方でも日常的写実性をこえた表現が求められ、仮面をつけた演技感覚が重要視されてきた。その場合、西欧には昔のコメディア・デ・ラルテ（即興仮面劇）の方法があるだけで、能や狂言のように、劇的にすぐれた表現法、洗練された感覚を持ってはいない。

そこでジャン・ルイ・バローやイツでいえばベルリーナー・アンサンブルといった代表劇団、バレエでいえば20世紀バレエ団のモーリス・ベジャールといった人たちが積極的な関心を示している。

ところが、われわれ日本人自身の問題として考えてみると、あまりにも無造作に考えすぎているようだ。

ちょうどそのものの真の価値を知るまでは、粗末に扱われ、それが大切なものだと知ると、むやみに宝物扱いをして床の間や神だなに奉り、神聖にして不可侵の絶対物にあがめてしまう。そんな傾向があるようだ。窮屈きわまりない。

たしかに能会は数多く、さかんである意味で、良い舞台をつくる努力という点においては、部外者の私でさえ、不安をおぼえざるをえない。その根本課題は後継者の養成に集約されるにちがいない。シテ方は、とにかく厚い層を誇ってはいるが、ワキ方はしろうと弟子も少ないであろうし（ということは、経済的生活基盤にかわることだ）、舞台上でも地味な存在であるだけに、絶対数の不足が問題になっている。加えて、囃子（はやし）方（なかでも大鼓方）の養成の問題がある。

もちろん、こういう問題については、すでにいろいろ論議され、改善方法がとられていることである。にもかかわらず、問題は一向に解決されていない点が問題なのだ。

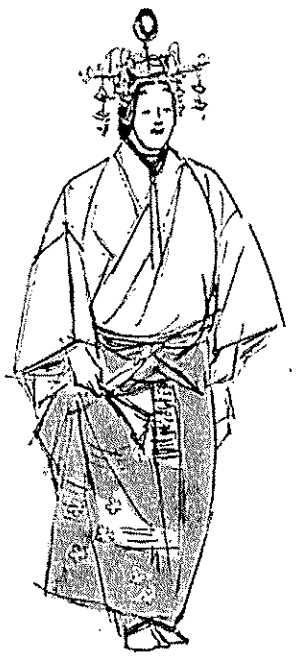
結局、高度なアンサンブル確立の方向を目ざさなければならないであろう。

私に言わせれば、演劇というものは、たえず当代に生きるものである。したがって、意欲的な試みの精神が常に必要なのである。なにも、いわゆるやわな前衛を試みろということではない。

一言でいえば、世阿弥の精神にかえれということである。観阿弥・世阿弥の親子がもった烈々たる革命的な芸術精神である。能自体のうちにひそむ不死鳥の生命をよみがえらす試みの前には、すべて白紙である。

## 「羽衣」のスケッチ

仙田雪山子　画



「ご存知羽衣」といってよいほど、謡、能に関心の有無を問わず誰でも知っておられる曲で、筋書は申し上げるまでもない。世界各地にある白鳥処女説話で文章の玲瓏美辞なことは、万人の知るところである。絵本にも、中学校の教科書にも、また観光のガイドにも「羽衣」の物語りは、親しまれている。

羽衣説話は、駿河、近江、丹後などに伝わり、能では天人が舞いながら昇天するが、説話ではいずれも漁夫と結婚するか、または人間として地上の生活を送ることになっている。

昨年出版された長篇ミステリー小説「Dの複合」（松本清張著）には、この「羽衣」説話や浦島伝説にあらわれる仙郷滞留説をとりあげ、ミステリーと民俗学を融合した小説として知られている。この小説では丹後説話として次のような原型の説話が文中にある。それを紹介すると

「丹後国中郡に比治（ひじ）山というのがあり、その山の頂きに湧水の泉があった。それを真井といい、ここに或るとき天女が八人降りてきて沐浴をしていた。すると近くの山にいた老人夫婦がそれをみて、天女の一人の衣裳を盗んだ。ほかの天女はみんな空に飛び立ったが、羽衣を盗られた天女だけはどうしても飛び立つことができない。そこで水のほとりに身を隠し、ひとり恥入って泣いていると、その老夫婦が来て彼女を慰め家につれ帰った。天女はやむなく老夫婦の家に十年ばかりいたが、帰心矢のごとくどうしても天に戻りたくて仕方がない。何度も老夫婦に頼むが、わたしたちの娘だといって老夫婦は天女の希望をかなえてやらなかった。しかし悲嘆に泣きくらす天女をみてさすがの老夫婦も我を折って彼女の希望をかなえ、天女は今まで親切にしてもらったお礼として酒を造ることを老夫婦に教えてその家を立ち去った。しかし舟木の里にたどりついた天女は飛ぶ術を忘れていて、天に翔け昇ることができずそこで生命を絶ったという。」

## 能界通信

▽…囃子方青木恒治師の引退にあたって、名古屋能楽会副会長　植村真太郎氏、中部能楽師会　田鍋惣一郎氏、熱田神宮権宮司　長谷晴男氏、青木社中湯名会　橋本竹蔵氏らが発起人となって、慰労金が募られていたが、楽師関係はじめ各界六十余名の芳志として十万円の拠金があり、贈呈された。

▽…長袖会（長田襲師）三月十六日、河村舞台


〔第27号〕昭

能道成寺　鼓田保輔　泉野口敦弘　喜八郎能村　畑中英丘　吉茲　飯島忠　住駒明弘　鬼頭喜太郎　林豊寿

金沢能楽会

舞楽神事（五月一日）
酔笑人神事（五月四日）
神興渡御神事（五月五日）
豊年祭（五月八日）
御衣祭（五月十三日）

（別宮八剣宮・末社大幸田神社の儀）

午後一時より、権宮司が斎主となり、詩頭以下奉仕。本宮大前の儀に準じて斎行する。

なお、高市子役の打ち振る鎧の

福井社中
幸友会囃子会
二月十一日（祭）午前九時半始
熱田神宮能楽殿

囃子三十数番　独調、連調

田鍋社中
たなびき会囃子会
二月二十三日（日）午前十時始
熱田神宮能楽殿

囃子三十数番

名古屋観世九皐会春季大会
三月二日（日）午前九時三十分開演
於熱田神宮能楽殿

番外開口連吟
白楽天　観世武雄
難波　舞囃子　後藤新蔵
芦刈　後藤孝一郎　笠鼓鉱一　沢田秀成　河村総一郎　田鍋洋一　鬼頭喜太郎　藤田昭彦
羽衣　後藤孝一郎　笠鼓鉱一　橋本とも　河村総一郎　田鍋洋一　鬼頭三八郎　笠鼓三男
山姥　中尾寿満　笠鼓・後藤孝一郎　鉱一　山村昌子　河村総一郎　田鍋惣一郎　助川滝夫　藤田昭彦
玄象　鬼頭喜太郎　鬼頭季信　助川三男　笠鼓
雲林院　長瀬佐喜子　田中きんゑ　笠鼓鉱一　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
富士太鼓　素謡　矢橋浩吉　中村つゆ　吉田市郎
蟬丸　省略アリ　観世武雄
巴　仕舞　増田喜男　中村つゆ
女郎花　素謡
雨月　伊藤次郎左衛門　観世武雄
田村　省略アリ　能楽（午後一時頃）
植村真太郎　西村欽也　山本敬一郎　田鍋惣一郎　藤田六郎兵衛
間　井上義次
後見　遠藤六郎　加藤正光　観世喜之　地謡　塚本秀雄　増田一雄　白滝康雄　五木田武　平富信義　南条秀雄　佐々木康之
（三面につづく）

あなたに心を
富士道
家具
本社　名古
ショールーム　TE
工場　愛知

## 作り物　一畳台のこと

背景というものを用いない能楽では、作り物は唯一の舞台装置である。一畳台について斉藤太郎氏著「私はかく能を楽しむ」（檜書店発行）から引用してみよう。

一畳台とは、一畳大の低い床の上を布帛を以て覆った台に過ぎない。しかしその用途は実に変通自在である。そして単独で用をなすこともあり、他の物と結合して複合的用途を果たすこともある。

一畳台は、写実的には全く何物をも表現していない只の物である。これを舞台の何の場所に置いたとて、それが何を意味するかも判らない。と同等に考え方によって何物をも象徴し、何物にも化け得るのである。山であると思えば山になり、石であると思えば石になり得るのである。「此所に山あり」「此所に川あり」と紙に書いて貼ってあるようなもので、形の上では何物をも象徴せざる只の物が、観念的にそのように成り得るのである。能楽の象徴主義は、この範囲まで領分を拡げているのを注目すべきである。能楽愛好者の頭は、これまで修練を経ているのである。そして無限の楽しみに浸ることが出来るのである。試みに書き上げて見ても、

小鍛冶、鉄輪では祭壇、職場
石橋、張良では橋
皇帝、土蜘蛛では寝台
鶴亀、咸陽宮では玉座
雷電では紫宸殿と清涼殿
忠信では檜

その他、嵐山では桜花と共に満山の春を示し、また「宮」「引立大宮」等の他の作り物と複合して、宮殿楼閣の壮厳を示すことなど枚挙に暇なきほどであり、紅葉狩のごとく塚と複合して、巌峻たる深山の容相を表わし、かつ「そのた け一丈の鬼神」の演技に絶大の補助を与えているものもある。

## 観能の手びき

三月二日、名古屋観世九皐会春季大会能「鉄輪」の解説は、本紙十二月号3面、観能の手びきをご参照下さい。

## 宝生流関係開催案内

■五月五日（祭）巽会
能「橋弁慶」「胡蝶」「隅田川」「乱」

■六月五日（木）熱田神宮大祭奉納能
能「井筒」「通小町」

■六月二十一日（土）定式能
（二面観世九皐会つづき）

舞囃子
熊野　水野あや子
花筐　伊藤　睦子
東北　大鷹　明子
藤戸　後藤　鈴子
遊行柳　芝村　栄枝
青柳之舞
阿漕　吉田　妙
立廻り
素謡
鈴木　正徳
浅野　常誠
加藤　春二
大河内多吉
上狂言
石　佐藤　友彦
井上松次郎
佐藤　秀雄
能楽（午後四時頃）
森川みどり
輪　高安　滋郎
高安　勝久
河村総一郎
福井啓次郎
鬼頭喜太郎
藤田昭彦
大野　弘之
間
後見　遠藤　喜六郎
観世　台持　塚本秀雄
加藤正光
地謡　深見弥太郎
青木　武弘
加藤　保彦
長谷川　章
平富信義
五木田武計
観世　武雄
小島　芳雄
番外視言仕舞
松　観世　喜之
以上（終了午後五時二十分頃）

名古屋市東区武平町二丁目（増田方）
主催　名古屋観世九皐会
電話　㈹三一六八番

## 謡曲の作法

謡曲といえば、とかく形式ばったものに考えられがちですが、要は心ですから、心さえ礼にかなっていれば、かならずしも形にこだわる必要はありません。作法といってもそうむずかしく考えなくてもよいのです。しかしそこにも当然ながら一定の作法があるのは、あらゆる芸道に共通したことです。

素謡の作法で一番複雑なのは謡会の場合のそれで、稽古や、人前で謡うときには、すべてそれにもとづいて行えばよいのです。

### 一、見台

見台は曲のはじまる前に、あらかじめ役の人数に合せて並べておきます。見台はできたら同じものを揃えたほうが見た目によいのですが、なければ最前列だけでも揃えたいものです。見台を並べるときに謡本もいっしょに出しておきます。しかし演者が登場する時、自分で持って出るやり方もあります。

### 一、扇の取扱い方

舞台に持って出られるのは、原則として謡本と扇とだけです。そのうち扇の取扱いはとくに注意を要します。

着座したら、袴の紐あるいは洋服のベルトに挿した扇を右手でぬいて座の右側に置きます。全員が出揃ったら、一同同時に扇を右手で前にまわしながら左手を添え、膝の前に正しく横たえます。すぐに謡い出さない役は両手を袴の下に入れて待ちます。そして自分の謡い出す個所が近づいたら、その三句前で手を膝に置き、二句前で扇を両手で膝の上に取上げ（草の構え）、一句前で静かに扇の先を垂らして床につけて、姿勢をととのえます（真の構え）。謡い終れば、右の順序の逆を追って両手を袴の下に入れます。一曲全部終了すれば、一同いったん扇を前に置き、はじまりの時の順序の逆に扇を袴の紐に挿します。

### 一、退場の仕方

退場はすべて登場の逆順に行います。一曲が終って客席から拍手などがあっても、挨拶は不要です。楽屋にかえったらお互いに「ありがとうございました」「お邪魔いたしました」等と挨拶をかわし、自分の謡に過失があった時にはすなおに詫びます。風邪、多忙などを口実にくどくど言訳けするのは聞苦しいものです。

### 一、聴き手の態度

談笑、あくびなど演者や同席の聴衆に対して失礼をする態度をとらないように心がけることは当然でしょう。とくに舞台の謡に合せて低い声で謡ったり、手拍子をとったりするのは絶つつしまなければ息もつがせぬ迫力の場面が繰り展げられる。最終シテは橋掛に行き「日高の川波深渕に」で幕へ飛び込む。ワキが常座にて勇健して留拍子を踏むのである。

今度は小書つき「中之段数調」

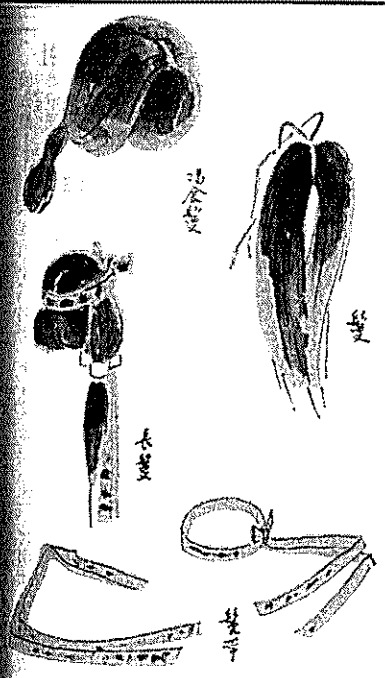
先代藤田清兵衛重孝四十三回忌
追善能
三月二十一日（祭）午前十時半始
熱田神宮能楽殿

能組
舞囃子
士　柴田初太郎
河村総一郎
福井良久
海　辰巳孝
吉田定男
後藤孝一郎
乱
仕舞
網之段　加藤良久
笹之段　山田仁三郎
一調一声
小督　宝生九郎
田鍋惣太郎
一管
紫　覚三男
一調
誓願寺　橋岡久共
鬼頭八郎
小谷津治男
助川竜夫
鹿取希世
舞囃子
東方朔　大槻文蔵
梅若盛義
吉田定男
田鍋洋一
仕舞
鵜之段　本田光洋
野崎太郎
鬼頭孝信
玉之段　長田驍


中日新聞
中部日本新聞社
名古屋市中区大の内3-12-21
TEL大代表(231)-8811

中日スポーツ
THE TOKYO CHUNICHI SPORTS
東京中日新聞
北陸中日新聞
月刊　岳人
中日文化センター
中日劇場
CHUNICHI THEATRE

東京新聞
中日新聞東京本社
東京都千代田区内幸町2-3-13
TEL大代表(591)-2211


## 装束談義（十五）

# 鬘（かつら）　鬘帯（かつらおび）

逸井栄逸　ふとふみ

十年前の初夏の頃であった。

国際ペンクラブの西尾さん（現在ブラジル在住のアントニオ西尾）から、次のようなことを頼まれたことがあった。カリフォルニアのグリーバーネットさんといって、当時、三十五才になるアメリカ人が、丈なす黒髪をもつ日本女性と結婚したいと頼んで来ているので、候補者をさがして貰えないかということであった。

グリーバーネットさんは、電気技術家で、養魚場を経営している前途有為の男性であったらしい。長い黒髪の日本女性に限りないあこがれを持ち、もし、そんな女性で自分と結婚してくれるという人があるなら、全財産を使っても、その人を幸せにしたいという大変の熱の入れ方であった。

この話が中日新聞の耳に入り、全国版にのってしまったので、各地から候補の申込みが舞い込んだものである。唯、条件の中に、多少笑会話が出来る人、年令は二十五才から四十才まで、と、いうのはとにかく、絶対条件として、〝髪の長さ三フィートから四フィートまで〟という難問があった。この話は結局、緑の黒髪求婚物語という一つのエピソードに終わったのであるが……。

まこと、女の心を象徴するものは黒髪である。艶やかなふくらみをもって、むすばれさえも容易にくしけずられてゆく黒髪は、日本女性の限りない誇りである。

遠い上代のこと、葛飾の真間の手古奈という娘があった。いつも粗末な麻衣を身にまとった貧しい娘であったが、黒髪がこよなく美しかったのである。能のおみな達が気品たかく、華麗さを舞台にまき散らすのは、髪という特殊な結び方をする黒髪が大きな力をもっていることを知らなければならない。

× × ×

能装束の中に、頭髪の部として頭（かしら）、垂（たれ）、髪（かつら）、髪（かみ）の四種類がある。まず、髪から説明してゆきたい。

髪は、下締の黒紐で緊め、その上から髪帯をしめる。髪帯は、すなわち結髪したかつらの上に掛け結ぶ帯であるから髪帯（かつらおび）という理。

髪帯は、つまり、景観の美を装う目的であるから外見としては、細く、わずかな個所であるが、意匠をこらし、善美をつくしてある。若い女性には紅色を土台に、金糸銀糸

普通、かつらといえば、長髪をいうのであるが、この、かつらの用い方は、まず、かつらを、あたまに載せて、真中から左右に分け両方の耳を蔽い、後方へ撫でおろして束ねる。上部は、下締の黒紐で緊め、その上から髪帯をしめる。髪帯は、すなわち結髪したかつらの上に掛け結ぶ帯であるから髪帯（かつらおび）という理。

髪帯は、つまり、景観の美を装う目的であるから外見としては、細く、わずかな個所であるが、意匠をこらし、善美をつくしてある。若い女性には紅色を土台に、金糸銀糸

能のかつらは、舞台に出る時に結うので、芝居のときのように、あらかじめ、こしらえて置くことはない。使わない時はさばいて吊って置く。

黒い毛を図のように束ねつくられたもので、これを用いて結ぶかつらには女性専用の長髪と仏家の少年を表現した喝食専用の喝食髪（かつじきかづら）がある。髪物能の語原は、長髪を用いるがゆえんである。

花や、虫、鳥類を刺繍したものが多く、中年以後の女性の場合は、前述の模様を、紅色を含まない他の色で描かれている。胴箔地に前述の模様を刺繍したものは、かつら帯の中では一番華麗であり、本三番目物に専用される。なお、髪には、附髪といって、一握りのかみを、髪のところから垂らすことがある。これは、狂乱を象徴するもので、浮舟の浮舟の君、玉葛の内侍、蝉丸の逆髪等がそれである。また髪の中には、白毛のものがあり、これは、老女髪、半白のものは姥髪（うばかづら）として結ぶ。

清　経（きよつね）

恋之音取（こいのねとり）

梅若六郎

囃子はなく、ツレ（清経の妻）が出て脇座に坐る。次第の囃子でワキ（淡津ノ三郎）が登場し、筑

清経は三ノ松、二ノ松、一ノ松でその笛に魅せられるように、静かに、そして様々のしぐさによる運びで、笛にのって登場する。

ここが聴きどこう見どこうで、

シテは白拍子）は次第の囃子にて舞台に入り、次第、サシ、道行を謡い、着セリフになり、能力と所作があって後、鐘の落ちた理由の問答ありて、物着になる。この

鐘を吊ってある紐を放つと、鐘は地響きをたてて落ちる。

橋掛の狂言座の能力二人は、この音に舞台へ転げ込み、驚き騒ぐ拍子を踏むのである。

ワキが常座にて勇健して留

一切女性を入れてはならぬように と布告をする。

シテ（白拍子）は次第の囃子に

いう悲愴極まる笛を奏する。

シテは三ノ松、二ノ松、一ノ松

びき

宮能楽殿

# 観能の手びき

## 三月の能　熱田神宮能楽殿

### 清経（きよつね）
恋之音取（こいのねとり）
梅若六郎

囃子はなく、ツレ（清経の妻）が出て脇座に坐る。次第の囃子でワキ（淡津ノ三郎）が登場し、筑紫の戦で入水した亡き主君、清経の形見の髪を携え、都にいる清経の妻に逢いに行く意味を謡いて後案内を乞う。ツレ清経の妻は、月夜の晩、舟から身を投げた夫の最後を聞いて悲しむ。ワキは形見の品を渡して退場する。

シテ（清経の霊）は地謡のうちに登場するのであるが、恋之音取という小書（異色演出）のために非常に位が重くなり、笛は一子相伝（笛方の秘事）で、笛座から前へ、にじり出で、幕の方に向う。

外見としては、細く、わずかな個所であるが、意匠をこらし、善美をつくしてある。若い女性には紅色を主台に、金糸銀糸

能装束の中に、頭髪の部として頭（かしら）、垂（たれ）、髪（かつら）、髪（かみ）の四種類がある。まづ、髪から説明してゆきたい。髪は、

シテは三ノ松、二ノ松、一ノ松でその笛に魅せられるように、静かに、そして様々のしぐさによる運びで、笛にのって登場する。

ここが聴きどころ見どころで、真に迫るものがある。この小書のために、サシは前半は省略され、他にも常とは違った演出がなされる。修羅ものの中では最も幽玄な曲で、舞はない。

### 道成寺（どうじょうじ）
観世武雄

狂言の後見方が、作物（つくりもの）の鐘を、四人で担いで出で舞台中央に吊り上げる。

ワキ（道成寺住僧）はワキヅレ従僧を従えて登場する。鐘の供養のことを述べ、間狂言を呼んで、一切女性を入れてはならぬように と布告をする。

シテ（白拍子）は次第の囃子にて舞台に入り、次第、サシ、道行を謡い、着セリフになり、能力との問答ありて、物着になる。この間大鼓は一調にてアシラウ。物着に烏帽子を着けてシテは、掛り一ノ松へ出で、舞台の鐘を見込み大鼓のツヅケヨセの手で舞台に入り、ここで乱拍子となる。乱拍子は舞台を鱗形に廻り、小鼓の一調に、笛が入り、独得の所作を展開するのである。中之段を過ぎて、ワカを謡い、乱拍子を踏み終り、ここで、極度の静から動に移る急之舞にと貌変する。舞い終って、烏帽子を打ち落し、余勢を駆って鐘の下に走り寄り、拍子と共に飛び

地響きをたてて落ちる。

掛の狂言座の能力二人は、この音に舞台へ転げ込み、驚き騒ぐ所作があって後、鐘の落ちた理由をワキに告げる。

ワキはワキヅレと共に鐘楼に赴く態に鐘に向い、鐘の故事と女人禁制の謂われを、所作を交えて語り、鐘に向って祈る。鐘の中にてシテは、自身にて物着をすませて蛇体になり、地謡「撞かねどこの鐘響き出で」にて鐘の中の鐃鉢を打ち鳴らし、「程なく鐘楼に引き上げたり」にて鐘がまた引き上げられる。と、そこに坐った姿で打杖を手にした蛇体の後シテ鬼女が現われ、唐織を腰に巻いて、烈しい祈りの所作となる。祈りには、

息もつがせぬ迫力の場面が繰り展げられる。最終シテは掛掛に行き「日高の川波深淵に」で幕へ飛び込む。ワキが常座にて勇健して留拍子を踏むのである。

今度は小書つき「中之段数調」（なかのだんかずびょうし）「無調之崩」（ひょうしなしのくずし）「五段之舞」「赤頭之伝」であるので、いろいろ異色の演出がなされるので、見応えがある。曲の眼目は急之舞、乱拍子にあるが、各役々に秘事、口伝（くでん）があり特に小鼓は重大な役割で、体力を要するので、この日のために相当の日数を体力の調整にかけるなどシテと共に、大へんな大曲で、シテ、小鼓共に、道の登龍門として大きく扱われる所以である。

# トリ談義

佐藤卯三郎

ことしは酉年で、何もかもトリ込むという欲張りの年である。欲心は、誰しももっているであろう。神仏でないかぎり、凡夫として存命するうえは、一日一刻も離すことはできない生物の本能である。ただそれが過度になると、間違いが起こり易いものである。

それは別として、雞鳴暁を報ずとか、東天の紅を報ずとか景気の良い当たり年である。雞は元来、声を尊重したものである。わが国の神話に「天照大神、素盞嗚尊の乱行を怒り、天ノ磐戸を鎖し籠り給ひければ、天地皆暗となり、諸々の悪神時を得て、萬づの妖怪悉く起り、世界騒乱沸くが如し。爰に八百萬の神たち集り、大神の出現を願い、磐窟の前にて長鳴雞を集めて諸声に鳴かしめ、女神天鈿女神（あめのうずめのみこと）は正木を襷となし、日かげの蔦をたすきとして、小竹の葉束を手に持ち、胸を披きて白きふくやかなる乳を露わし、木槽（きぶね）を伏せたる上に足拍子を取り、「ひとふたみよ、いつむゆなゝやここのたり、ももちよろづ」と節面白く歌いつつ、篝火明かき前にて、一曲の道化踊りければ、八百萬の神たち一度にどっと笑ひ、高天原も振動するばかりなりき。」今日のジャズ、いわゆる土人ダンスであったろうと思われる。「大御神は外の様子を聞き、何心なく少し磐戸の扉を開け見給うところをすかさず手力男命御手を取りて無二無三に引出し奉りぬ。此時光明赫奕と照り渡り、再び天日（あまつひ）の光に浴しければ、八百萬神たち歓び限りなく「あはれ、あな面白、あな楽し、あな清（さや）け」と一斉に歌いはやし、太玉命は尻久米縄（しりくめなわ）を大御神の御後ろに張りわたして「之より内には再び還り入りますな」と祝しき。この尻久米縄は、今のしめなわにて、悪鬼邪神の入るを禁止する意味に用いる。このときの鶏は、日本特有の鶏で、一声十五秒より二十秒の引音を有する。またその鳴音により時を知り、原始時代の時計として尊重され、まだ食用ともされたものであろう。

中国の古代の伝説には「桃都山に播挑という大樹あり、その枝相去ること三千里、其上に天鶏あり。日出て初めてその樹を照す時、天鶏先ず鳴く。天下の鶏みなこれに隨って和す」とあり、いかにも中国らしき伝説である。

野鶏（しゃも）は、シャムより渡来した鶏で、闘争性が強く、往昔は、斗鶏とて競合せ優劣を争わせて楽しみ、雄略帝頃よりあるということで、三月四日清涼殿南殿階下で行なわれた記録がみえ、絵巻等によくその様が出ている。

能狂言の「鶏聟」は、室町時代の風俗、情調を面白く作曲されたもので、嫁取りの場合、当時は聟入といって、聟が嫁里を訪れる習わしである。聟は作法を知らないから、とある物知りの人を訪ね、作法を問い合わせに行くと、その教え人は、本の事を教えては面白くない。後々まで笑い草になる事を教えてやろうと、聟に向かい聟入には色々の作法がある。大昔、中昔、当世様とあるが、そなたは何れが習いたいかと言う。聟の言うには、大昔はあまりに古うござる、中昔も昔のこと、皆人の御雑談を承れば、何事も当世様々と仰せらるるにより当世様の聟入を教えて下されい。そこで教え手は、当世様の作法を教えてやろう。それにはまず男の家へ行き、鶏の真似をしてけあう様（てい）をすればそれですむことじゃと言う。聟は喜んで男の家へ行き、男に向かい自慢そうに扇を開き、素袍の袖を打ち合せ、いかにも鶏が羽ばたきをする様にクククククカア〳〵と飛び上り見せる。男は、これは狂がった事じゃと驚いた。これは何者かになぶられて来たものであろう。さりながらこちらはあの様にせずば、聟が気を悪くするであろうと、自分も烏帽子の先に緋の布を着せ聟に向かい、調子を合わせてクククククカアー〳〵と飛び回り、目出度く祝言を納める。尤もこれには謡があり

聟「聟は男の家に行き〳〵御座敷までは厝々なりとてかゝりのもとにそたったりけるクククククカア〳〵」

男「男は之を見るよりも〳〵、聟のしつけに劣らじと、広縁よりも飛びおり羽ばたきをしてこそ、たったりけれ、クククククカアー〳〵」

地「爰は所もかゝりなれば、柳桜をおいまわし、松はもとより常盤なれば、もみじにまごうとさかけられてかなわじと男は内に入りぬれば、聟は聟入しすまして鶏音（かちどき）作ってかへりけれ」と留になる。その天下泰平、ユーモアな風趣こそ時代を物語るものである。

鶏には尾長鶏がある。これは中古朝鮮から輸入したもので、土佐で発達し、その尾の長さ丈二尺五寸に及び、山内侯が道中の時、行列の先頭に掲げて自慢して歩いたという。今なお天然記念物の栄冠を獲得している。

唐丸は、唐土より輸入されたかと思われる壮大で顔貌偉大姿勢高きものである。

## 2月の謡曲狂言番組

NHK ラジオ 第2放送
毎日曜日　午前8時から9時まで（再放送）
毎金曜日　午後2時から3時まで

2月11日（祝）　午前10時～10時45分　ラジオ第2
観世流「花　月」　藤波重満　沖宗久　浅見重信　ほか
宝生流「嵐　山」　当山興道　ほか

2月14日（金）
宝生流「巴」　野村蘭作　ほか
観世流「雲林院」　岡久雄　ほか

2月16日（日）
金剛流「二人静」　金剛巌　ほか

2月23日（日）
観世流「実　盛」　坂井音次郎　ほか

◉三月の催能予告
金城学院大南山　狂言会　三月十二日
曲水会素謡会　三月二十三日・熱田神宮能楽殿

観世流・金剛流
宗家本発行元
ひのき
檜書店
東京都千代田区神田小川町2－1
電話(291)2488－9
振替東京3552
京都市中京区二条通鉄屋町東入
電話(231)1990
振替京都113

貴金属・アクセサリー・喫煙具・オルゴール
花木商店
記念品・ご贈答品に好適な品ばかりです……
宝石のことはどんなことでもご相談承ります
名古屋市中区栄2丁目16（中日シネラマ前）
電話(231)2891・6727
(211)1019・1974

東京新聞
中日新聞東京本社
東京都港区港南町2－3－13
TEL大代表(471)－211



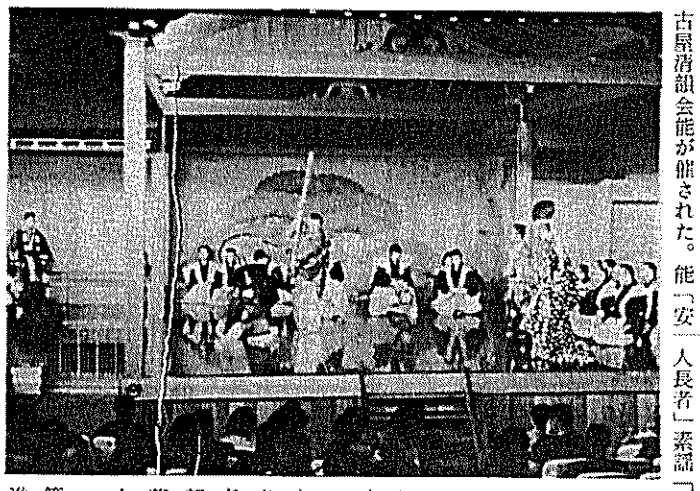
能　清経　恋之音取　梅若六郎　西村欽也　河村総一郎　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
山本勝一
狂言　泣尼　和泉保之　井上松次郎
一調一管　江口　観世喜之　谷口喜代三　森田光春
能　道成寺　観世武雄　中之段数調　五段之舞　赤頭之伝　無調崩之之
高安守彦　高安滋郎　高安勝久　笛鼓　田鍋惣一郎　鼓一　鬼頭喜太郎　藤田昭彦
囃子　東方朔　大槻文蔵　梅若盛義　吉田定男　田鍋洋一　野崎太郎　鬼頭季信
仕舞　鵜之段　本田光洋　玉之段　長田驍　笠之段　内藤泰二
小督　田鍋惣太郎
一管　筑紫一　笛　三男
調　橋岡久共　前川光雄
誓願寺
有料　佐藤卯三郎　佐藤秀雄
藤田六郎兵衛
龍吟会

（毎月一回10日発行）
楽の友社
区吹上本町2—20
話 464）
1）7984
古屋 36393
1年 300円
1年 400円
30円

山子画

## 一月の演能記録

### 「安宅」清韻会能



一月十五日（成人の日）に、名古屋清韻会能が催された。能「安宅」「安達原」の二番、狂言「三人長者」素謡「俊寛」「藤戸」ほか舞囃子、独吟、一調など。参会者は見所を埋めるほど盛会であった。

「安宅」は小書・勧進帳、滝流でシテ・赤間鎮雄、子方・中原憲、同山・山中義滋、増田登、稲生芳雄、水田博、小林則夫、多久島利之、泉泰孝、ワキ・高安滋郎、同太刀持・佐藤秀雄、強力・井上松次郎の諸師。

波瀾曲折に富む筋書きの展開、勧進帳の吟詠と弁慶の主君への打擲、豪勇、沈着をともに備えたシテ弁慶の熱演、子方中原憲君の判官義経の冷静な所作は充分に堪能させるものがあった。

※ 各会の記録として、演能写真、記事をお寄せ下さい。

## 謡曲名吟シリーズ頒布

### 喜多流謡曲鑑賞会で

喜多流謡曲鑑賞会では声の名吟シリーズ（テープ使用）を毎月頒布することになった。

囃子、仕舞、連吟、独謡等の独習用、復習用に最適のシリーズである。

第一巻は、「松風」「弱法師」「八島」「田村」。演者は、シテと地謡二井栄逸師、助吟には広田健師。

**申込み先**

名古屋市中区正木町五ノ三九
泰雲寺内
喜多流謡曲鑑賞会
（電話六七一—二七九一番）

**扇**

観世流では扇の長さが、一尺一寸のものを仕舞扇、九寸のものを素謡扇と呼んでいますが、一尺一寸の扇が素謡扇としても正式のものです。このほうが、扇の先が楽に床につき、姿勢を崩さぬためにもよいのです。

女性の扇として一尺及び七寸のものがありますが、最近では男と同じ長さのものを用いるのが普通になっています。

また、模様は各流儀によって異なり、これを、きまり扇といいます。

## 囃子について ①

### 1. 次第

これは主としてシテ、ワキの登場の際の囃子で、大小鼓で囃し、笛はアシライ。正式には三段であるが、只今は大抵時間の関係で一段となっており、稀には無段（だんなし）ということもある。のらず三ツ地とツヅケを打つが、最後に打切という手があって、シテ（ワキ）が次第の謡をうたい出す。次第の次には必ず「道行」があり道行は謡のきかせ場所ですから三ツ地とツヅケで拍子に合う。

### 2. 真の次第

脇能物のワキの登場の場合に奏せられるもので、次第の特殊なものである。正式には五段あって打切、次第の謡になることは普通の次第と同じであるが、その中に「早目ガシラ」という手があって（これで早目ガシラ囃子に入り、大小前[illegible]）

第の謡は「三遍返し」といって、地取りが普通のように小声ではなく、中音でワキの通りを謡い、ワキがまたその後を謡い、三度次第を謡うことになる。

### 3. 一声

シテ（ワキ、又はツレ）の登場の際の囃子で、大小鼓で囃し、笛がアシライを吹く。のっておるもので、打放シと長地のあと、段を取り、そのあとに「越の段」がある。但し狂女物は狂女越といって手が少し違う。昔は、「修羅越」「かづら越」といって修羅物、鬘物もそれぞれ手が異なっていたが今はこれを打たない。「越の段」のあと、二の句で段を取り、カシラを打つ。シテはそこで幕を離れ、鼓の長地にのって掛りにか[illegible]

後シテも、何れも共に一声で出るが、初めは童子、後は田村麿ですから全く気分を変えて打たねばならない。一声の謡は舞台で謡うものと、橋掛りで謡うものとあり、狂女は「謡イ掛け」といって囃子のコイ合中に謡い出す。

また一声早笛といって一声のあとすぐ早笛でシテが出る場合がある。これは普通の早笛と全く異なり、太鼓がなく、「鉢木」「夜討曽我」等の後シテの場合である。また一声の一種に「カシラ越」というものがある。これは、「橋弁慶」「山姥」「忠度」（下掛り）であって、初めから「越の段」となるもので、後シテの位をつけるために打つものである。

一声で一番面倒なものは「鵜鳥」が「鵜鳥小町」は一声で出る。この一声は老女の足付きのとぼとぼと歩き煩らう様を、のった拍子でしかもしっとりとさかせる。

### 4. 真の一声

脇能物の前シテ（ツレを伴う）の登場の時の囃子で、一声の特殊のものである。非常に静かなもので、越の段のあとに「シズメガシラ」があり、その後「チ、チ、ポン」をきいて一声を謡い出す。ツレはシテと一緒に「ハコビコミ」の手（ツヅケの一種、大小アシライ）で舞台に入り、サシを謡う。

真の一声は、脇能の外には「松風」一曲であるが、幸清流では「チ、チ」だけで「ポン」がなく「汐汲車」と謡い出しますが、この呼吸はなかなかむつかしいものである。一声はのった調子であるが真の一声はのった調子をしっとりと打たねばならない。（つづく）

（田鍋愛太郎師著「小鼓芸話」より）

## 浜松で狂言鑑賞会

### 静岡県能楽鑑賞会主催

静岡県能楽鑑賞会主催による「狂言鑑賞会」が、きたる一月十九日午後一時半から浜松市民会館で行なわれる。

中日五流能
三月三十日（日）
中日劇場

第一部（午前十時開演）

喜多流能 頼政
友枝喜久夫
江崎金治郎　瀬尾乃武
大倉長十郎　藤田六郎兵衛
間　野村又三郎

一調 笠之段
豊島弥左衛門　田鍋惣太郎

大蔵流狂言 末広
高井則安　山本則直
山本則寿

観世流能 砧
梅若景英
梅若六郎
松本謹三
鏑木峯男　亀井俊雄
梓之出端　幸祥光　柿本豊次郎
間　杉市太郎
善竹忠一郎

金剛流仕舞 葛城
山田仁三郎

観世流仕舞 忠度
観世元昭

喜多流仕舞 天鼓
粟谷新太郎

金剛流能 船弁慶
広田幸稔
金剛巌
西村欣也
高安滋郎
高安勝久
遊女之序　谷口喜代三
波間之伝　曽和博朗
間　前川善雄
山本則寿　森田光春

第二部（午後四時開演）

観世流能 伸光
観世元昭
観世清和
関根祥人
観世元正
慈悲之舞　江崎金治郎　山本敬一郎
大倉長十郎　杉市太郎
間　茂山忠三郎

一調 放下僧
林喜右衛門
幸祥光

一調 春日龍神
片山博太郎
柿本豊次

宝生流仕舞 鵜之段
辰巳孝

観世流仕舞 野守
梅若泰之

大蔵流狂言 茶壺
善竹忠一郎　茂山忠三郎
善竹孝夫

宝生流能 熊
本間英孝
宝生英雄
野村
松本謹三
漆膠　鏑木峯男　瀬尾乃武
住駒　陽介　藤田六郎兵衛

金春流仕舞 玉之段
金春栄治郎

観世流仕舞 班女
柴田初太郎

宝生流仕舞 実盛
大坪十喜雄

金春流能 山姥
本田光洋
金春信高
西村欽也
高安滋郎
高安守彦
谷口喜代三
曽和博朗
前川善雄
森田光春

御寿司　仕出し
新東寿司
名古屋市千種区楠元町2
電話（761）9428番

中華料理
御宴会・御集会・御商談等には是非御座敷を御利用下さい
桃源亭
中区栄三丁目29（松坂屋南）電話 241－2938・6081
支店　名鉄百貨店9階　のれん茶屋

掛金のもどる……エコー保険・支払いの早い……火災保険
貴方自身を守る…傷害保険・事故処理は引受けた…自動車保険
大東京火災海上保険（株）代理店
中京損害保険事務所　大辻君子
名古屋市中川区横堀町1の15　〒454
〈052〉（361）6661
保険は「お君さん」にまかせれば心配ない
Miss Kimiko's good for your insurance

能楽殿御用達
割烹料理仕出し
西みやか
名古屋市西区浅間町
電話（531）5507・6666

社団法人 名古屋能楽会
梅若六郎
梅若景英

# 能樂の友

題字は熱田神宮　篠田宮司筆

発行　能楽の友社
名古屋市千種区吹上本町2－20
（郵便番号　464）
電話（731）7984
振替口座　名古屋　36393

購読料　1年　300円
郵送の場合　1年　400円
一部　30円

# 世紀の万博に公演

## 大阪フェスティバルホールで　五流能

〈写真説明〉
踏歌神事　本宮大前

〈註〉
大的の寸法　径六尺
千本の寸法　中央の千本、横一寸八分。縦六寸。上下・左右の千本、横十寸五分

〈女竹で作る。長さ鯨尺一尺二寸、羽根は奉書にて作る〉をつがえ、先ず天の矢を放ち、次いで地

に供して神事を終り、宮司以下退出、斎館に入るのである。

この歩射の儀の終るのを待って、拝観者が一斉に大的を目ざして押かけ、之を奪い合うが、特に大的中央の千本は、古来魔除けの

熱田神宮能楽殿で藤田流先代家元清兵衛重孝四十三回忌追善能（①面演能案内参照）さらに四月六日、金沢能楽会別会能（⑭面に番組掲載）で演ぜられる。

筋書は申し上げるまでもないが蛇の執念と法力との抗争が展開されるというようなきわめて多彩な舞台的変化の多い大曲で、シテ方のみならず、囃方にとって、登龍門ともいうべき曲である。

この曲にある乱拍子についていえば、乱拍子は中世の寺で行なわれた延年の乱拍子を模したといわ

「事」に訂正。
・第三段七行目
「祢宜は本座復にし」とあるのは「祢宜は本座に復し」に訂正。
・同十二行目
「斎宜以下退出」は「禰宜以下

地になっているのに反し、乱拍子は小鼓のみで囃し、笛は時々アシライを吹くだけである。従って小鼓方に取っては特に重いものとされている。乱拍子は蛇体が道成寺の高い石段を上るのに形どるともいわれ、または足の動きが蛇体の鱗をあらわすともいわれている。

歌舞伎をはじめ種々の文芸にいく度となく形を変え摂取されたが、女性の執念を追求し抜いたその内容は、これを表現するのに、寸分隙のない演技は能に勝るものは他にないであろう。

## 道成寺

〈人類の進歩と調和〉のテーマのもと、三三〇万平方㍍という広大な会場に、世界の国々が一堂に集まって、それぞれのお国ぶり豊かな産業や文化を持ちよってくりひろげる人類の祭典――日本万国博は、明春三月十五日の開幕まで丁度一年。参加国もとれまでの万国博のうちで最大となっている。

産業の祭典であると同時に、文化の祭典でもある万国博にとって催し物が占めるウェイトは非常に大きい。とくに、日本万国博では人類交換の場となるお祭広場が計画されている。

各国を代表するクラシック音楽やオペラ、バレーなどは大阪市内の大劇場で行なわれる。

イタリア、ドイツ、ソビェトなどオペラ、バレーが芸術の枠を競うが、日本を代表する芸能として能楽が参加。芸術のきょう宴をくりひろげる。

日本万国博協会の計画によれば能楽は大阪・フェスティバルホールで五流能が催されることになろうと語っている。

また、万国博における最大の展示館と注目される日本館（敷地面積三七、〇〇〇平方㍍）は、「日本と日本人」を主題として日本人の過去、現在、未来のすべてにわたり文化・経済・社会の各面について、総合的な展示が行なわれるが、その歴史の展示のなかで、古代から現在までの日本の発展を文化面を中心に展開、源氏物語絵巻の王朝文化、禅の空間と鎌倉室町の文化、安土桃山の黄金文化のなかに能面などの文化財が出品される。

## 伊勢神宮奉納能

伊勢神宮神楽祭で、きたる四月四日金春流奉納能がつぎの番組で行なわれる。（伊勢神宮内宮能楽仮舞台）

能　賀　前　金春信高
後　本田光洋
茂　高安滋郎　河村総一郎　鬼頭喜太郎
田鍋惣一郎　藤田昭彦

能　杜　金春欣三
若　高安滋郎　筧鉱一　山口義郎
田鍋惣太郎　筧三男

四月七日には大規清韻会が奉納する。（番組未定）

## 各地だより

### 京都

#### 広田後援会能

金剛能楽堂で

広田後援会では、三月十六日午後一時半から、京都・金剛能楽堂で「後援会能」（第三十二回）を開催する。

番組はつぎのとおり。

能　高砂　重本昌三　広田泰三　遠藤赫　谷田宗二郎　北沢正次

能　羽衣　谷口勝三　藤田善一　前川善雄　森田光春

間　茂山正義

後見　金剛巌　広田陛一　谷口宗義

地謡　種田治郎他

狂言　土筆　茂山千五郎　茂山千之丞

能　景清　谷口宗義　広田陛一　清岡治郎右衛門　森晴蔵

谷口喜代三　田鍋惣一郎　杉市太郎

後見　金剛巌　広田泰三　宇高朝雄

地謡　今井幾三郎他

故片山博通師

#### 七回忌追善能盛会

卒都婆小町など上演

故片山博通師七回忌追善能が三月九日（日）京都観世会館で行なわれ、きわめて盛会であった。

能組は、能「安宅」（勧進帳・酌掛り）シテ片山博太郎、子方杉浦豊彦、ワキ岡治郎右衛門、能「千手」（舞曲之舞）シテ観世元正、ツレ杉浦元三郎、ワキ高安滋郎、能「卒都婆小町」（一度之次第）シテ片山博太郎、ワキ宝生弥一、能「鵜飼」（真如之月）シテ観世鈴之丞、ワキ今村和史、舞囃子「天鼓」（盤渉）観世元昭、一調「鐘之段」大西信久、田鍋惣太郎、一調「杜若」林喜右ヱ門、小寺金七、そのほか連吟、仕舞など。

狂言は片山博通作・演出「契りの袋」茂山千五郎、茂山千之丞、茂山忠三郎の諸師であった。

### 東京

#### 能楽養成会発表会

梅若能楽学院会館で

社団法人日本能楽会、能楽養成会共催の昭和四十三年度研究発表会は、三月十日東京・梅若能楽学院会館で行なわれた。

第一部　舞囃子六番、狂言一番、第二部（養成会教務講師出演）は、能「羽衣」（小書盤渉）シテ金剛巌、ワキ森茂好、ワキツレ工藤和哉、森常好、大鼓安福春雄、小鼓鵜沢寿、太鼓金春惣右ヱ門、笛藤田大五郎の諸師、狂言「宗論」三宅藤九郎、和泉保之、和田裕の諸師。

## 演能案内

先代藤田清兵衛重孝四十三回忌追善能

三月二十一日（祭）午前十時半始
熱田神宮能楽殿

能組

舞囃子
士　柴田初太郎　河村総一郎　福井良久　鬼頭八郎　小谷津治男
乱　辰巳孝　吉田定男　後藤孝一郎　助川滝夫　鹿取希世

仕舞
網之段　加藤良久
笹之段　山田仁三郎

一調一声
小督　宝生九郎　田鍋惣太郎

一管
筑紫　筧三男

一調
誓願寺　橋岡久共　前川善雄

舞囃子
東方朔　大槻文蔵　吉田定男　野崎太郎
梅若盛義　田鍋洋一　鬼頭孝信

仕舞
鵜之段　本田光洋
玉之段　長田驥
笠之段　内藤泰二

能　清経　山本梅若勝一郎　西村欽也　河村総一郎　福井啓次郎　藤田六郎兵衛

恋之音取
狂言　泣尼　和泉保之　井上松次郎　井上礼之助

一調一管
江口　観世喜之　谷口喜代三　森田光春

能　道成寺　観世武雄　高安守彦　高安滋郎　高安勝久　筧鉱一　田鍋惣一郎　鬼頭喜太郎　藤田昭彦

中之段数調
無調五段之舞
赤頭之伝

間　佐藤卯三郎　佐藤秀雄

◎有料

藤田六郎兵衛
龍吟会

## 装束談義（十六）

# 頭（かしら）

二井栄逸

暖冬のまま陽春になるのかな、と思っていたら、また逆もどりしてしまった。奈良のお水取りがすむまでは、どうしても暖かにはならないんだよ、と、祖母がよく言ったことを覚えている。天然現象と歴史的行事とは、なぜ、とんなにうまくむすびつくのだろうか。

お水取りと言えば、二月堂縁起の中に、夢のように現われる青い衣をきた女人からヒントを得て作られた、青衣女人の能を思い出す。青衣女人は、昭和十八年十月六日夜、東大寺の大仏造立発願一千二百年記念法要の節、満天の星の下、二月堂礼堂で、喜多実師によっておごそかに演ぜられたことを覚えている。

× × ×

謡の装束のことについて一寸一言。

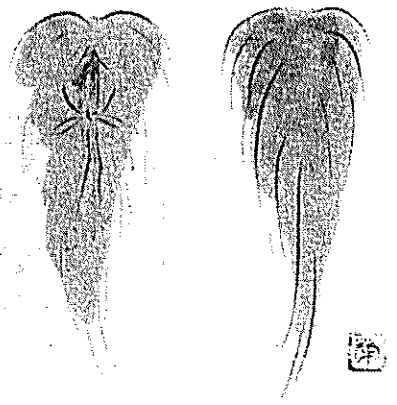
キチンとした紋服、角帯、折目正しいはかま、白足袋、扇、これで舞台に出る準備はすっかり出来る。謡会というものは、そのようにキチンとしたものだし、楽屋にあっても、正座をしているものなのである。謡会は、皆かしこまっているし、気がはっていやだと言う人があるが、それは大変考え違いである。人間の暮しの中には、いっとき、しゃんとした時がなければだらけきってしまう。お稽古の時でも、身じまいをキチンとし正座をし、ピンと心の底に張った気持ちを持たなければほんとうの稽古の姿とは言えない。そうすることがその人に勇気と、まじめさをあたえ、その人の生活の中に、ある輝きを加えることになるからである。趣味が生活の一こまになるということは、そのようなことをいうのである。能装束に関連して一寸一筆。

× ×

装束談義は、頭髪の部として、鬘（かつら）は前号に記したから、本号では、頭（かしら）をかく。幽霊、化現、怪物等を、表現する場合に用いる毛の長い頭髪でその色によって、赤頭（あかがしら）黒頭（くろがしら）白頭（しろがしら）等という。

赤頭は、主として妖怪変化の類に使い用途がすこぶる多い。赤毛の中背に一条の白毛を交えて、之を被るときは、この曲が強き鬼畜物であることを表わすのである。猩々等は、白毛を交えないのが定法。

白頭は、主として老体のシテにつけるものであるが、特に、赤頭をつける曲のシテで、重く演じる場合は、おおむね、白頭を被るのである。また黒頭はおおむね幽霊ものによく用いられるのである。



（スケッチは黒頭をつけた藤戸及び、頭（かしら）の前と後）

## 松本恵雄氏が受賞

**43年度芸術選奨新人賞**

文化庁は三月四日、四十三年度の芸術選奨文部大臣賞と芸術選奨文部大臣新人賞の受賞者二十三人を決めた。

新人賞の受賞者に古典芸術部門で能楽シテ方松本恵雄氏（五十三才）が選ばれた。

授賞式は、四月十一日、東京・虎ノ門の国立教育会館で行なわれる。

## 囃子について ②

### 5. 出端（出羽とも書く）

後シテ又は後ツレの登場の際の囃子で、大、小、太鼓で囃し、笛がアシライを吹く。「高砂」「養老」「遊行柳」「西行桜」「竹生島」「阿漕」「鉄輪」「藤戸」等のほか、「阿漕」「鉄輪」も出端で出る。「藤戸」は上掛りは一声、下掛りは出端である。これ等は曲によって、掛声、打ち方、気分共に変えなければならない。

### 6. 早笛

これも後シテ、後ツレ登場の時の囃子で、笛が主となり、大、小、太鼓が入り、テンポの早い爽快な囃子である。

「船弁慶」「小鍛冶」「賀茂（加茂）」「竹生島」等、竜神・怨霊の出を囃すものであるが、それぞれ気分は違う。同じ早笛でもツレは軽く、シテの方はしっかりと打つ。早笛の後には普通舞働がある。

### 7. 大癒

これも天狗の登場の際に用いられる。「鞍馬天狗」「是界」「車僧」「張良」等である。早笛に似ているが、しっかり、ゆったりとした囃子で、余程囃子方が手揃いでないとやりにくい物である。小書「白頭」となると一段と豪壮な感じになる。早笛は一段と二段があるが、大癒も同様段をとってからシテが出る。大癒の時の謡は余程どっしりしっかりと謡わねばならない。

### 8. 下り端

これも後シテ、後ツレ登場の際の囃子で大癒と同じく笛が合う。のりよく、ゆったりした調子である。「清経」「田村」「班女」「実盛」「玉之段」「野守」「茶壺」「熊野」「鵜之段」「伸光」「放下僧」「春日龍神」「船弁慶」「葛城」「忠度」「天鼓」「砧」「頼政」「笠之段」「末広」「鵜飼」「善知鳥」「山姥」「熊坂」「実盛」「盛久」「百万」「百萬」「百万」「百萬」「百万」「百萬

# 観能の手びき

## 四月の能　熱田神宮能楽殿

——四月十三日観正会——

### 鉢木（はちのき）

吉川宇良子

囃子はなく、ツレ常世の妻が出て地謡の前に坐る。

ワキ客僧は次第の囃子にて笠を被り雪中行脚の態にて登場。

着セリフの後、ツレに一夜の宿を乞うが、主（あるじ）が不在の由を告げて断るので、一旦後見座にクツログ。ツレは戸外に出で、夫を迎える態に二、三足運び出る。前シテ佐野源左衛門常世が登場し、一ノ松で「あゝ降ったる雪かな」と、この曲で特に大切な句を謡う場面である。舞台に入りツレとの問答ありて後、ワキ再び宿を乞うが、シテは荒れ果てた家を恥じてそれを断るので、余儀なく笠を被り大雪の中を行く態に橋掛りにかかり三ノ松にたたずむ。

シテはツレの詞に思い返し、舞台正先から遥か彼方のワキに向って「のう〳〵旅人お宿参らせうのう」と呼びかけ。ワキのところまで迎えに行き連れて戻りわが家に招じ入れる。

夫婦は旅僧に粟の飯を供し、やがて、秘蔵の鉢木を焚いてもてなす鉢木の段となる。シテは梅松桜の鉢に強い愛着の念を抱きながらこれを諦めてワキに接応する曲中での眼目である。

クセ後の問答からロンギ、中入地にて、ワキはシテの素性を識り鎌倉に大事があれば、一番に馳せ参ずるという気概を語る場面など実に劇的で、この曲中での型も、謡も、見どこうである。

ワキはそれとなくシテに再会を約して去る。シテとツレも続いて中入する。

間狂言、早打が登場し、関八州の軍を鎌倉に召集する旨を布告して退場する。

後ワキ最明寺時頼はワキヅレを従え、一声の囃子で登場する。脇座にて床几にかけると、早笛の囃子になり、後シテ源左衛門常世が薙刀を肩に、手に鞭を持って馬に乗った態にて現われ、橋掛で馬を駆り、常座に来て薙刀を肩にして立つ。

ワキは間狂言に諸軍勢の中からシテを探させて対面し、以前の大雪の時の接応を謝し、その返報に旧領地を返し与える旨を言い渡す場面で、終ってシテは喜び勇みて馬を駆って故郷へ帰って行く。

舞らしい舞はなく、総てが劇的な構成であるため、それを能らしく演出するところに難かしさがあり、曲の特色がある。余りにもよく知られた曲柄で、現在ものの中でも最もわかり易い曲である。

### 舟弁慶（ふなべんけい）

前シテ　松井ちえの
後シテ　松井省吾

次第の囃子で、子方源義経を先頭に、ワキの武蔵坊弁慶がワキヅレ諸共に登場、子方は脇座にて床几にかける。ワキは同行の静を都に返すようにと義経に進言して静の宿へ使者として行く。

橋懸一ノ松から常に向って案内を乞う。前シテ静が「武蔵殿とはあら思いよらずや」と謡いながら三ノ松に出でワキと応対する。

やがて舞台に入り正中に下居して子方と相対する。義経もひとまず都に帰るようにと言い聞かせ、それより別離の悲嘆にくれる情味に満ちた場面が展開されるが物着までは、さしたる所作はなく、笛座の前にて物着に烏帽子をつけて「立ち舞うべくもあらぬ身の」と謡いながら大小前に出で、クセ、中ノ舞を舞い、決別の涙にむせび「烏帽子直垂脱ぎ捨てゝ」と烏帽子を前に脱ぎ落し「涙に咽ぶ御別れ」としおりながら立ち、静かに中入する。

子方は床几に残る。やがて間狂言によって舟の作り物がワキ座前に出され、一同はこれに乗る。

間狂言の船頭は櫓を漕ぎながらワキとの語合いのうちに俄かに風が変って、怒涛の逆巻く情景になる。狂言のセリフと所作、囃子の「波がしら」という手組によってそれが、面白く表現される。

いよ〳〵早笛の囃子にて後シテ平知盛の怨霊が薙刀を提げ、怒涛の中より浮び出でた態にて颯爽と登場する。子方義経との渡り合いが展開される。舞働きが入りシテの活躍はめざましいものがあり、見どこうが多い。ワキは子方と怨霊の間に割って入り、数珠を採んで祈り、ついに波間に退散することになって終る。

## 古曲雑話 (2)

西村弘敬

### 第一番　板敷山

常陸の国板敷山の麓に、弁圓（べんねん）という山伏が住んでいて、山伏修験道を行なっていた処へ、都から一向念仏宗を弘めんとて、親鸞（しんらん）という法師が来り、念仏法座を開いて土地の人々へ念仏をすすめるため、老若男女がその方へなびきよせられ修験道の方は追々さびれてくるので、何んとかしてこれを追い払わんと弟子の山伏達と相談して親鸞が宿所へ帰る道に待伏せして討ち果さんとした所、行き違いで遂に討つことが出来なかったので、こんどは親鸞の宿所へ押寄せて討たんとしたるに、却って釈尊の難行苦行の有様やら色々の法門を説き聞かされて遂に屈伏して御弟子となった。この物語を謡に作られたもので、この宗旨の宣伝の匂いが濃厚のように思われる。

### 第二番　池上

この曲も前曲同様に、宗旨の宣伝のためらしく思われる。佐渡の国の僧が身延山に参詣してから、池上本門寺へと詣でに来たところ若い兄弟の男子が目籠に小石を入れ持ってきたので尋ねたところがこれは、この本堂建立のさい浄財を寄進せられた施主の永代供養のため、一字一石の法要を勤められるのでこの石を運び来るとのことであった。それにつき、この本門寺の謂われを語り聞かされた。昔身延山の近くの波木井の郷に、池上左ヱ門太夫という人があって、その子に男子兄弟の者、兄は右ヱ門太夫宗仲、弟は兵衛の佐といい共に鎌倉殿に仕えており、法華に深く信仰帰依していたが、父の左ヱ門太夫は初めは邪見の人であったが、追々と二人の子達の信仰に感化せられて法華に帰依し、遂に文永十一年に至り、この地に本門寺を建立し、四所道場の随一としたので、この地を池上と名付くることとなった。その後弘安五年に日蓮上人は身延山を出てここに来られ、安国論を説き給い、遂にこの所において入寂せられた由を語り、なお我等は池上の兄弟の亡身であって、古えの浄蔵浄眼の再来であると名乗りもあえず仏体となり、法華法門の色々を説き明かしたとの筋である。

### 第三番　稲荷

和泉式部が都に住んでいた頃に恋人が不良となり、時雨（しぐれ）が烈しく降って来たが、生憎雨具の用意がなくて困っていた時に、伴の者がちょうどその辺りにいた賤しい下人の着ていた「麻苧」（あを）という麻の衣類を借りてきて、輿の上に掛けて雨を凌いだことがあった。その後一首の歌を詠んで送ってきた者があったが、その者は稲荷山で衣類を貸してくれた下人で、その歌は

時雨せし稲荷の山の紅葉ばの
あをかりしより思ひ初めてき

とあって、あの時に和泉式部の御姿を見初め賤しなき恋となったとのことであったが、もとより賤しき下人のこととて取り上げず、そのまま打捨てて置かれたが、その者は遂に恋に焦がれて死んでしまった。その後和泉式部の息女小式部の内侍が風の心地で打臥していたところ、何となく物狂ほしくなったので、よくよく案じてみるに彼の恋の歌をよせてきた者の執心らしいので、早速色々と仏事をなして跡を弔っていると、かの者の亡霊が顕われ色々と恨みごとを述べていたが、遂に仏事の功力により成仏したという筋で、かの恋重荷や綾鼓と似た筋合である。

## 各地だより

### 金沢能楽会定例研究発表会

金沢能楽会では、さる二日、金沢能楽堂で定例研究発表会を催した。

能「国栖」シテ　佐野萌、ツレ　村井美智子、天女　島村巌、子方　河原進、ワキ　殿田保輔、ツレ　泉喜八、同北村善三、能「俊成忠度」シテ　渡辺容之助、俊成　疋田文一郎、ツレ　服部恒男、ワキ　北村善三、狂言「八幡前」　増田秋雄、殿村与作、畑中吉松、素謡「生田敦盛」　吉本幸吉、中越敬夫、田村茂雄の諸氏。

### 次回は4月13日

なお次回は四月十三日（日）、能「嵐山」「富士太鼓」狂言「縄ない」の予定。

## 3月の謡曲狂言番組

NHK ラジオ 第2放送
毎日曜日　午前8時から9時まで
（再放送）
毎金曜日　午後2時から3時まで

3月16日（日）
21日（金）
観世流「百　万」大江又三郎　ほか

3月23日（日）
28日（金）
宝生流「隅田川」近藤乾三　ほか

3月30日（日）
4月4日（金）
観世流「源氏供養」梅若万三郎　ほか

で能楽シテ方松本恵雄氏（五十三才）が選ばれた。

授賞式は、四月十一日、東京・虎ノ門の国立教育会館で行なわれる。

### 8. 下り端

これも後シテ、後ツレ登場の際の囃子で極めて勇ましいもので、大、小、太鼓で囃し、笛がアシライを吹く。この囃子の終りに獅子が登場する。乱序は獅子のあるべき囃子で極めて勇ましいもので、大、小、太鼓で囃し、笛がアシライを吹く。この囃子の終りに獅子が登場する。乱序は獅子のあ

[illegible]

石・白頭）。（囃子の項おわり）

[illegible]

掛をきくことになっている（殺生

[illegible]

も打掛をきく。普通は打掛をきかぬ曲でも小書のついた場合には打掛をきくことになっている（殺生石・白頭）。（囃子の項おわり）

[illegible]

〈新　刊〉
池田和市著　うたい名所を歩く　価 600円　〒 70円
全国の謡曲名所旧蹟を足でたずねた紀行集
宝生宗家著　図解仕舞集 第8巻　価 700円　〒 70円
加茂・小袖曽我・藤・松風・高野物狂　他
東京都千代田区神田神保町3-9. 振替 東京 4163番　わんや書店　東京都中央区銀座8-7-5 電話（571）0514

中華料理　桃源亭
御宴会・御集会・御商談等には是非御座敷を御利用下さい
中区栄三丁目29（松坂屋南）電話 241－2938・6081
支店　名鉄百貨店9階　のれん茶屋

観世会定式能
四月二十日（日）
熱田神宮能楽殿

[illegible]

久田観正会
四月十三日（日）午前九時始
熱田神宮能楽殿

[illegible]

四月六日（日）
熱田神宮能楽殿

[illegible]

1800余年の歩みをたどりながら、東海の要衝の地を占めてきた熱田神宮は「景清」の物語、「楊貴妃」の蓬萊信仰など、そのゆかりはきわめて深い。本紙では、長い伝統をもつ熱田神宮の行事、伝承などについて、熱田神宮権宮司　長谷晴男氏に筆を執って頂くことになった。その第1回として今号から「熱田神宮の特殊行事」を連載する。

―カットは東海道五十三次で広重が描いた宮の神事―

# 熱田神宮の特殊神事

熱田神宮権宮司　長谷晴男

特殊神事とは、神社に於ける祭典・神事のうち、特にその神社にとって由緒の深いもので、通常の祭典方式とは異なった、独自の祭式・行事作法によって行う神事の総称であり、古式祭ともいう。

その分類法については種々あるが一例をあげると次の通りである。

1　神の降臨出現を中心とするもの
2　神の託宣によるもの
3　卜占により神意をはかるもの
4　斎忌を中心とするもの
5　禊祓を中心とするもの
6　除厄招福を中心とするもの
7　競技を中心とするもの
8　神輿渡御に関するもの
9　農耕に関するもの
10　火に関するもの
11　芸能に関するもの
12　採取行事に関するもの

さて、熱田神宮の特殊神事は、

世様神事　（一月七日）
踏歌神事　（一月十一日）
封水世様神事（一月十二日）
歩射神事　（一月十五日）
舞楽神事　（五月一日）
酔笑人神事　（五月四日）
神輿渡御神事（五月五日）
豊年祭　（五月八日）
御衣祭　（五月十三日）

御田神社御田植祭（六月十八日）
神輿渡御神事（八月八日）

で、年間十二度の特殊神事が、今もなお厳然と斎行されている。

今回は本紙を通じて、順次その大要を説明し、読者諸賢のご参考に供することとする。

## ○世様神事　一月七日

世様神事は、年の始に当り、その年の豊凶を占う神秘的な神事であって、前年の封水世様神事（一月十二日）に、清水を入れて本宮東宝殿（古くは権殿又は御饌殿）の床下に納めた斎甕を、末社大幸田神社の前に据え、祢宜検知のもとに、雁使が斎甕の封を解き、尺本（神事用の特殊なもので木製、長さ一尺、両端に紙垂を付ける）を執って水量を計り、その年の雨量の多少、旱魃の有無を占うのである。

神事の次第は、当日午後二時、祢宜、雁使、白丁（二員）斎館より参進して本宮東宝殿の前に列立する。次いで白丁斎甕を本殿に再び[illegible]この間に詰頭、舞人は末社影向間に至り、斎甕を神前に据え、祢宜以下所定の座に著く。次いで祢宜斎甕を点検して側に蹲踞する。次いで雁使斎甕の蓋を除き、尺本を執って水量を計り、微声で「減水何分」と称し、減水量を祢宜に報ずる。次いで祢宜は本座復にし、雁使は斎甕の蓋を覆い、終って本座に復する。

次いで前儀に準じて再び本宮東宝殿の前に至り、斎甕を同殿床下に納め、斎宜以下退出、斎館に入るのである。

〔附記〕

一、封水世様神事（一月十二日）及び豊年祭（五月八日）「おためし所」の項を参照されたい。

二、往昔、この神事は夜間に行ったと伝えられている。

## ○踏歌神事　一月十一日

踏歌神事は、一名「アラレバシリの神事」又、俗には「オベロベロ祭」とも称する。

平安朝時代の宮中年中行事の一つであった踏歌節会の行事が、何時の頃よりか、当神宮の神事に取り入れられた。踏歌節会とは、年の始に当って大地を踏んで土地の精霊を鎮め、除厄と招福とを神に祈る意義をもっている。

神事を行う場所は、末社影向間（古くは旧政所）本宮、別宮、末社大幸田神社である。

神事の次第は、当日午前十時、詰頭以下斎館より参進、被所に於て被を受け、次いで陪従、笛役、高巾子役は末社大幸田神社の前へ進み、陪従、笏拍子を打ちつつ「竹川半首」を歌い、次いで鎮皇門（この門は戦災により焼失）跡に至って「竹川半首」を歌い、次いで末社影向間社に至る。

この間に詰頭、舞人は末社影向間社

# 能樂の友

題字は熱田神宮　篠田宮司筆

発行　能楽の友社
名古屋市千種区吹上本町2－20
（郵便番号　464）
電話　（731）7984
振替口座　名古屋　36393

購読料　1年　300円
郵送の場合　1年　400円
一部　30円



◉購読のお申し込み

本紙のご購読は一カ年三百円、郵送の場合は四百円。

お申し込み方法は、能楽の友社、または先生にお申し込み頂ければ幸甚です。

なおご送金の場合は、払込み料金能楽の友社負担の用紙をお送り致しますから、はがきにて申しつけ下さい。


## 伊勢神宮 文化殿着工

### 今秋10月に完成予定

### 奉納舞台も建設

伊勢神宮では、第六十回式年遷宮を四年後にひかえて、全国的に奉賛の気運が盛り上がっている折から、神宮文化殿の起工式が、二月十二日行なわれた。

この神宮文化殿（仮称）は、総工費一億三千万円、建設は伊勢神宮式年遷宮奉賛会の事業として実施されるが、かねてより神宮の御遷宮映画の製作に協賛している船舶振興会が一億円の奉納協賛を申し出て本格化したものである。

建設概要は、鉄筋コンクリート、二階建の中央棟、平屋建の奉納殿、休憩所、参集殿、回廊式の神殿造りで、延べ一千九百八十平方㍍。とくに、これまで能や民俗芸能などを奉納しようという場合に本格的な施設がなく、神宮関係者の悩みであったが、この文化殿中庭には奉納舞台が設けられ、名実ともに充実した文化殿が誕生する。

また展示所には、神宝、装束やいろいろな資料の一部も陳列して神宮の歴史を一堂におさめている。

神宮では、一つの建物がそっくり鉄筋コンクリート建というのは内宮神域では初めてで、軒を深くし、屋根にそりをつけるなど、神域との調和を考えて設計されている。

起工式は、うららかな春日和のもと、斎主大西権祢宜以下の神職が奉仕、笹川日本船舶振興会会長の刈初めの儀、高崎松村組社長代理の穿初めの儀などが執り行なわれ、つづいて参列の徳川神宮大宮司、足立奉賛会長、中野神宮責任役員その他の諸氏が玉串を奉奠、工事の無事完成を祈った。

なお竣工は十月下旬が予定されている。

神宮神苑では、ことし一月十六日から宇治橋の解体、架換の工事が始められているが、十一月二日に斎行される宇治橋の渡御式（渡りぞめ）には、文化殿は神宮の諸行事、崇敬者の文化活動にふさわしい施設となる、と期待されている。

## 「花月」の解説

西村弘敬

この「花月」という曲は、筑紫彦山の麓にいた七才の男児が、或る時、彦山に登ったところ、天狗にさらわれて、それより諸国を廻っているうちに、遂に京都へ来り東山の雲居寺（今の高台寺）に居られた自然居士の弟子となって、花月と名乗り、喝食（かつしき）を勤めていた。一方、その父は我が子が行方不明となったので、世をはかなんで、遂に出家して諸方を探し廻っているうちに、京の清水寺迄来たところ、遂に花月という我が子に廻り逢い悦んで打連れ帰国したという。

「花月」のスケッチ

仙田雪山子画

## 掬水会

四月六日(日)午前九時始
熱田神宮能楽殿

素謡　鞍馬天狗　桜井光成　相原紀元　安藤勝義

【仕舞】嵐山　加藤本邦夫、富士太鼓　林勝彦

素謡　大仏供養　山田久子　松井愚子　上杉不二子

【舞囃子】高砂　箕田康子、羽衣　加藤美恵子、安宅　鬼頭千恵美、玄象　宮本まき

【独吟】松風　棚橋くに、橋弁慶　長谷川幸寿、鐘之段　国府谷英以知

【仕舞】通小町　寺田鈴子、花筐　藤井春子、鵜　塚本繁雄

【舞囃子】鶴亀　後藤和子、百万　磯羽早苗、三輪　秋元操、融　吉田美津子

素謡　竹生嶋　児玉すみ子　磯部恒子　川島千代

番囃子　花筐　岩井富美　杉山鈴子　西村友本子　河村総一郎　和田寿代　福井啓次郎　鬼頭季信

【独吟】吉野天人　長谷川武寿、雲雀山　加藤ちる子、梅ケ枝　桐本陸良、熊野　石原和子、隅田川　成田竹蔵

【仕舞】玄象　長谷川寛寿、春栄　長谷川いづみ、桜川　中西和子、屋嶋　犬塚孝信

【舞囃子】老松　芝村栄枝、小袖曽我　深見真澄、松風　水野寿美、船弁慶　谷野博

【仕舞】西行桜　植村真太郎

素謡　杜若　吉川洋充良　後藤寿子

【仕舞】歌占　柴田芳江、猩々　柴田初太郎

## 久田観正会春季大会

四月十三日(日)午前九時始
熱田神宮能楽殿

【番外仕舞】賀茂　久田徹二、田村　下川宜長、雨月　山田義高、天鼓　藤谷政二、善界　笠田稔

素謡　安達原　国病観正会

小袖曽我　滝寿美子　岡田京子　加藤操　白木健司　立花孝之　伊藤薫　藤巻佐賀薫

小督　木村忠夫

【連吟】橋弁慶　富成孫吉　福井隆郎、羽衣　細木正巳　中山勉、菊慈童　大東紡観正会、熊野　名市観正会

【仕舞】葛城　今尾正治、鵜ノ段　堀尾たま子、東北　小田切敏子、杜若　伊藤正子、笹ノ段　大脇寿美子

【舞囃子】芦刈　高雄和江、吉野天人　三宅シズ子、砧　西堀たつ子、松風　山崎美三子、鞍馬天狗　玉木孝男

素謡　俊寛　木野島定子　鈴木金子　山岡みつ子　棚沢しげ子

能鉢　木　高安滋郎　高安勝久　寛鉱一　久田舜一郎　藤田昭彦　大脇寿美子　吉川宇良子　井上松次郎　大野弘之　間

## 観世会定式能

四月二十日(日)午前十一時始
熱田神宮能楽殿

観世銕之丞

久萬中之出　高安滋郎　高安勝久　寛鉱一　田鍋惣一郎　藤田昭彦　間　佐藤秀雄

仕舞

西王母　竹内六郎
屋島　丹下三義
雲雀山　加藤丈太郎
大江山　久田秀雄

素謡

半蔀　飯田賢　尾関健太郎

熊野　梅田邦久　武田太加志　高安滋郎　立石澄雄　谷口高代三　田鍋惣太郎　藤田六郎兵衛　村雨留

狂言　佐藤卯三郎　井上礼之助

鐘の音　仕舞　兼平　片山慶次郎　松風　柴田初太郎　善知鳥　武田小兵衛

舞囃子

邯鄲　観世静夫　寛鉱一　福井啓次郎　藤田昭彦

橋岡久共　西村欽也　吉田定男　後藤孝一郎　鬼頭寛　八郎　三明

守　間　佐藤友彦

間狂言

（有料）


小料理
料風カ
欧ん
と

〔第28号〕昭和44年4月10日　月刊一回10日発行）

## 装束談義（十七）

# 髪（かみ）

二井栄逸　ふとふみ

杉菜がつん〳〵芽を出す園生。朝風が爽かな新緑の香りを運んでくる、はるけき五月。白山吹は、四方へ枝をひろげ、葉隙を深く掘りこんだような、薄青いやわらかな葉の間に、しらじらと四瓣の花を咲かせ、初夏の風に見えがくれする。私は、私のささやかな庭をこよなく愛し、こよなく楽しんでいるのである。

白山吹を見ると、何故か、半蔀に出てくる夕顔の上を思い出すのである。〝源氏この宿を、見初め給いし夕つ方、これ光を招き寄せあの花折れと宣へば……〟と、源氏が、侍臣、惟光に命じたのは夕顔の花であるのだが、私は何か白山吹（しろやまぶき）を見ると真っ先に思い出すのが、夕顔の上であり半蔀を揺うと白山吹を思い出す。それは光る君と、初めてあった時の思い出を胸に秘め、うらみもなく、執心もなく、この世を去ってゆく薄倖の美人、夕顔の上の風情が、いかにも白山吹の淡い花に似ているからなのである。

私は、白山吹を白さびのかごに生け、細がすりを着た少女のような、みやこ忘れをアシラウのが好きであった。

× ×

白山吹が咲く頃は、樹々の新緑が絵具をぬったように峰まで続き、空の青さを一そう深くさせる季節である。水にぬれたガラスを通して見るように、野も、山も、全体がみずみずしく、若々しく

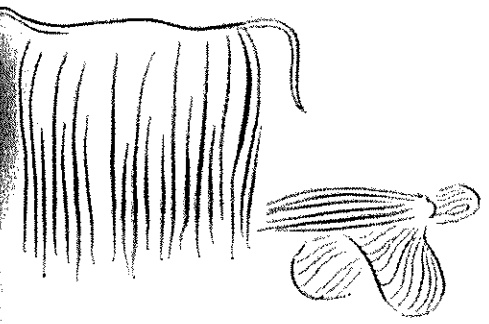
樹々の芽と言えば、半蔀とは反対の曲柄であるが、島頭の初同が思い出されてならない。越中の国、立山の峻路に現われた亡者が遺族への伝言と、木曽の麻衣の片袖を解き放し、証拠の品として、廻国の僧に托し、〝雲や煙の立山の、木の芽ももゆるはるばると……〟と、僧を見送るところである。新緑の立山の陰森とした情景が、あざやかによみがえるのである。能は不思議なもので、見る人自身のイメージによって、小雨そぼふる立山の細道であってもいいし、さん〳〵と初夏の陽が降るような故郷の山であってもいいし、木の芽のけぶるような薄暮であってもいいのである。音楽にうっとりとする心と同じである筈。能はそのようにファンタスティクである。

× × ×

装束談義。頭髪四種類のうち、本稿では、髪（かみ）とする。髪というのは、尉髪（じょうがみ）のことで、水衣を着け、尉の面をつける前シテには、頭に図のような、尉髪を結ぶ。尉髪は、白いバス（馬毛のこと）で出来ている。

島頭の前シテも、この尉髪を結ぶし、実盛、融、高砂、養老、鵜飼、頼政等、用途が広い。

（スケッチは白山吹の花・尉髪・



## 大西一門歓迎

沼帥雨

この度の別会は、将に、大西一門の歓迎会である。名古屋松瀬社がいつから出来たのかは知らないが、名古屋に最も深いつながりを

新らしく廻子を迎えての、井田文二氏の披露のものとして意義が深い。

大西信久という人は、大まかさと、気品をもって知られているだけに「景清」のような骨っぽさの

は、正に、本三番目物でない恋慕の能として、生彩をはなつものがあろう。特に、前の「妻戸をきり」の型や、心持に、喜之氏を強く感じることであろう。鄙曲之舞になると、ツレの重衡の役が重く

## 演能案内

つづき

### 名古屋猶諷会春季大会

四月二十六日（土）午前九時半始　熱田神宮能楽殿

素謡
清経　流島とみ子
三野宮　木村洋子　羽原沢美　長崎鉱右衛門　平子利枝　北湯口安子　鈴木喜久子　熊沢恵美子　加藤章一　松本律子　井戸和男　池内光之助　熊沢敦
融　安達原　雲林院　葵上　実盛
小野島参郎　菊池重郷　梅若猶義　梅若修一

独吟
卒都婆小町　佐藤豊次

能楽
ツレ　梅若盛義　杉田倉子　高安滋郎　覚福井啓次郎　鉱一助川竜夫　藤田六郎兵衛
梓之出　井上松次郎
間　梅若修一　後見　観世静夫　池内一之助　地謡　井戸賢次郎　大槻和男　梅若善高　佐藤朗詠　猶義　前田行夫　梅若良遠
仕舞
玉之段　社本みき江
清経クセ　伊藤恵美
忠度　中山栄子
井筒　大島貞子
綱之段　浜口知子
舞囃子
田村　小野島参郎　神田佳代子　半部　上羽秀　熊野　深谷和代　三輪　鼓　菊池敏子　天　西尾房子　融　海士五段　菊池重郷
番外舞囃子
橋弁慶　梅若猶義　梅若猶彦

### 芳韻会

四月二十七日（日）十時始　熱田神宮能楽殿

素謡
神歌　田村勇　千歳　稲生芳雄
舞囃子
高砂　赤間鎮雄　吉田後藤孝一郎定男　藤野崎太郎　田村昭彦
草子洗小町　吉房徳二　吉田後藤孝一郎定男　覚三男
素謡
俊寛　安達岩雄　杉浦竜二郎　加藤克明　三輪泰造
仕舞
東北通小町　藤井三弘　長谷川実　福間昌作　伊勢信雄
藤野宮戸
清経　中村克巳　吉田後藤孝一郎定男　鬼頭季信
桜川　金丸洋子　河村後藤孝一郎　鹿取希世
船弁慶　奥村久枝　河村後藤孝一郎　野崎藤田太郎　昭彦
独吟
咸陽宮　稲生清子
花筐　平野陽子
忠度　渡辺節子　覚福井啓次郎鉱一　鬼頭季信
熊野　守部啓子　吉田福井啓次郎定男　覚三男
杜若　三木美智子　吉田福井啓次郎定男　野崎藤田太郎　昭彦
天鼓　冨士道周明　河村後藤孝一郎　田鍋惣一郎　藤田六郎兵衛
独調
阿漕　日比大吉郎
福井啓次郎
連吟
大原御幸　坂崎勝彦　下田鉱一
実盛　佐藤アヤ子　覚田鍋惣太郎鉱一　鬼頭季信
弱法師　水野雍子　河村後藤孝一郎　福井啓次郎　鬼頭季信
狸々　大辻君子　河村後藤孝一郎　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　鹿取希世
絹　水田稲生博雄　芳雄　高安滋郎　覚田鍋惣一郎鉱一　鬼頭喜太郎　覚三男
間　井上礼之助　古房徳二　冨士道周明　香川小林二郎　菊香勇
後見　殿島修二　大槻田村文蔵　松井定之
狂言　多久島中村利之　宛巳
番外仕舞
笠之段　大槻文蔵
笹之段　田村勇
玉之段　殿島修二
鵜之段　柴田初太郎
波　大槻秀夫
狂言
争　大野弘之　佐藤友彦

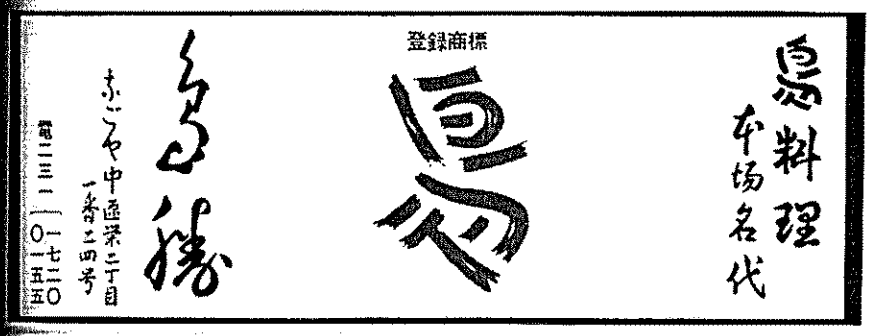
### 四月二十九日（祭）

五月三日（祭）午前十時始　熱田神宮能楽殿

仕舞
桜川　服部紗枝
鵜之段　有賀滋子
小塩　加藤良久
舞囃子
養老　井田十三比古　井田文二　鬼頭喜太郎　藤田昭彦
水波之伝　後藤孝一郎　覚鉱一
能組

### 幸友会

五月四日（第一日曜）正午始　熱田神宮能楽殿


流元　剛行　流本・金発　世家　観宗
ひのき
檜書店
東京都千代田区神田小川町2－1　電話(291)2488－9　振替東京3552
京都市中京区二条通烏丸東入　電話(231)1990　振替京都113

# 観能の手びき

## 五月の能　熱田神宮能楽殿

——五月四日——

### 別会　名匠鑑賞能

新緑の五月四日、熱田神宮能楽殿で、別会名匠鑑賞能（第五十九回）が催される。能「景清」「千手」「小鍛冶」の三番。狂言、舞囃子、一調と名匠鑑賞にふさわしい好番組。とくに今回の別会によせて能楽評論家沼艸雨氏はつぎのように述べている。（能組は㊐面掲載）

### 沼艸雨

この度の別会は、将に、大西一門の歓迎会である。名古屋松諷社がいつから出来たのかは知らないが、名古屋に最も深いつながりをもつ観世喜之氏が、この歓迎の先鋒に立っていることは、快い限りである。

人も知る大西家は、姫路から出て、すでに七代に亘る名家で、その家系の中には、幕末からの大西寸松、明治、大正を通じて大阪を代表していた大西関雪、と二代つづいて名人を出している家で、当主信久氏は、その孫で七代目にあたっている。現在、能楽協会大阪支部長であり、先年は、「檜垣」で大阪文化祭金賞を得ているという、名実共に大阪の第一人者である。今回の番組を見ると、令弟の信彦氏はもとより、昨年の大阪文化祭賞受賞者の井田文三氏を初め一門の幹部をすぐっての出演である。

舞囃子の「養老」に水波之伝の小書をつけ、シテと天女の合舞という能そのままの演出は、恐らく二氏の披露のものとして意義が深い。

大西信久という人は、大まかさと、気品をもって知られているだけに「景清」のような骨っぽさの強いものは全く珍らしい。景清—大西信久、地謡観世喜之、つづいて千手—観世喜之、地謡大西信久と聞いた時には、これは反対だろうと思った。この常識的観測を破るのは、景清での森茂好のワキに囃子が、藤田六郎兵衛、田鍋惣太郎、山本敬一郎、という最も景清らしい最高の布陣である。これは「千手」でもいえることである。

私は、他の役々が、この二曲のシテに、いかに影響を与えるかということに大きな興味をもっている。

「景清」は、演者によって、その表現に、武骨の老将の面と、父性愛の面の強弱があるが、大西氏のもつ父性愛というものは、関西の能の一つの系譜を示すものではなかろうか。また、「千手」は、憂愁の貴公子の謡観と、美女と語らう短夜のはかなさを見せるものの能として、生彩をはなつものがあろう。特に、前の「妻戸をきり」の型や、心持に、喜之氏を強く感じることであろう。郢曲之舞になると、ツレの重衡の役が重くなり、両シテの扱いになるので、近来、大曲をひきつづいて舞い、頓に芸格を高めた観世武雄氏の安定と充実が、それに答えてくれるであろう。

大西信彦という人は、大西家にあって、何でも知っている、何でも出来る人として、一門の信頼を受けているだけに、その正確性は誰れにも理解出来るのである。

「小鍛冶」の黒頭は、白頭より重いもので、前シテは喝食憂に喝食、モギドウで、稲穂をもって出、中入の緩急も違う。後は黒頭でモギドウ、出は囃子方の手揃いが要求されるもので、威々（たけだけ）しいというのが黒頭の定義である。

景清の滋味、千手の情趣、小鍛冶の流動感、能のもつそれぞれの美をこの名匠鑑賞能は、また私らに見せてくれるのである。

## 古曲雑話 (3)

### 西村弘敬

#### 第四番　篭祇王

平家の勢いが盛んであった頃入道清盛に召され寵愛せられていた祇王祇女という白拍子があった。

この祇王は、紀州粉川の出身で粉川には老いた父が残っていた。或る時、清水寺の観世音へ参籠に行った時に、父親が何かの罪で籠舎にこめられているという夢想の告げを受けたので、直ちに難波津へ行き、そこから紀州へ下り漸く粉川へ着いた。

早速粉川の何某に面会して父に逢い、色々と尋ねたところ、さきごろ、この地方に動乱があった際に、若い男が生捕りにされ、籠舎にこめられ、この番人に祇王の父の老人をつけて置いた。老人は若い者が斬られるのを不憫に思いこの者を逃がしてやったので、その代りに籠舎せしめられたとのことであった。祇王は愈々父が斬られるというので、窄の戸にすがり歎き悲しみ、自分を父の身代りにしてくれとて頼んだが容れられずに愈々父が斬られるので一心に清水の観世音を念じ、観音経を読誦していたところ、時刻迫り、粉川の何某が太刀を抜き振り上げ斬ろうとしたとき、俄に目が眩み、太刀を取り落したるに太刀が段々に折れた。一同大いに驚き、粉川の何某も驚き入り、遂に老人を許したので悦んで親子打ちつれ家に帰った。丁度盛久の曲に似た観音の利益を強調した曲である。

#### 第五番　六代

平清盛の孫三位中将維盛の子に六代御前という幼き人があった。平家没落の際に、洛北鞍馬の奥大覚寺葛蒲ケ谷という所に隠れていたところ、平家残党狩りのため、鎌倉より北条時政が上って来て、遂にこの隠れ家も探し出され、六代御前も召捕られた。

乳母の女は大きに悲しみ、或人のすすめにより、高雄の文覚上人に六代御前の命乞いをして貰うように頼んだところ、文覚もこれを承知して時政に逢い、六代の処刑を二十日間延期するように頼み、直ちに鎌倉へ向け馳せ下り、遂に頼朝より六代赦免の状を取りつけ急ぎ上洛の途についた。

一方都の方では、文覚との約束の二十日を過ぐるに、何の沙汰もないので、六代御前を連れて、鎌倉へと下る途中、駿河の国千本松原に着き、この所にて六代を斬ろうとしているところへ、文覚が大声にて呼ばりつつ、早馬にて馳けつけ、赦免状を差し出し、遂に六代御前は命を助かり悦び、文覚に連れられて上洛したといういきさつをこと細やかに書かれたる曲である。

#### 第六番　箱崎

百人一首の中に名を連ねて知られている壬生忠峯が、九州箱崎の宮へ参詣に来ていると、一人の女性が一本の松の下を浄め祟めているので、不審に思い尋ねたところ昔時神宮皇后が異国征伐のためにこの国に下り給い、戦勝祈願のために戒定恵の三学の妙文を、黄金の箱に納めてこの松の根方に埋められたにより、この松を箱崎の松と申し習わし、またこのところに御祀りして箱崎の宮と崇めている由申され、御身も妙文の箱を拝みたくば、この松の下にて一心に祈念すれば拝ましてやろうとの神の告げぞと言い捨てて本隠れに失せられた。忠峯は教えの通り祈念して待つ程に、神が顕われて、金の箱を取り出して拝ませ、なお衆生の願いを満てしめるとの神の誓いを示し給い、箱は元の松の根方に埋まれて、松風のひびきと共に神は上らせられたという筋である。

## 4月の謡曲狂言番組

NHKラジオ第2放送

毎日曜日　午前8時から9時まで（再放送）
毎金曜日　午後2時から3時まで

4月6日(日)
11日(金)
観世流「鞍馬天狗」観世鎮之丞　ほか
4月13日(日)
18日(金)
狂言「千鳥」大蔵弥太郎　ほか
宝生流「善知鳥」松本恵雄　ほか
4月20日(日)
25日(金)
観世流「杜若」大西信久　ほか
4月27日(日)
金春流「加茂」金春欣三　ほか
喜多流「雲雀山」粟谷菊生　ほか

## 能の手びき

### 五月の能　熱田神宮能楽殿

五月三日(祭)午前十時始

#### 別会　名匠鑑賞能

（能組は㊐面掲載）

#### 第四番　篭祇王

平家の勢いが盛んであった頃入道清盛に召され寵愛せられていた祇王祇女という白拍子があった。

この祇王は、紀州粉川の出身で粉川には老いた父が残っていた。或る時、清水寺の観世音へ参籠に行った時に、父親が何かの罪で籠舎にこめられているという夢想の告げを受けたので、直ちに難波津へ行き、そこから紀州へ下り漸く粉川へ着いた。

早速粉川の何某に面会して父に逢い、色々と尋ねたところ、さきごろ、この地方に動乱があった際に、若い男が生捕りにされ、籠舎にこめられ、この番人に祇王の父の老人をつけて置いた。老人は若い者が斬られるのを不憫に思いこの者を逃がしてやったので、その代りに籠舎せしめられたとのことであった。祇王は愈々父が斬られるというので、窄の戸にすがり歎き悲しみ、自分を父の身代りにしてくれとて頼んだが容れられずに愈々父が斬られるので一心に清水の観世音を念じ、観音経を読誦していたところ、時刻迫り、粉川の何某が太刀を抜き振り上げ斬ろうとしたとき、俄に目が眩み、太刀を取り落したるに太刀が段々に折れた。一同大いに驚き、粉川の何某も驚き入り、遂に老人を許したので悦んで親子打ちつれ家に帰った。丁度盛久の曲に似た観音の利益を強調した曲である。

#### 第五番　六代

平清盛の孫三位中将維盛の子に六代御前という幼き人があった。平家没落の際に、洛北鞍馬の奥大覚寺葛蒲ケ谷という所に隠れていたところ、平家残党狩りのため、鎌倉より北条時政が上って来て、遂にこの隠れ家も探し出され、六代御前も召捕られた。

乳母の女は大きに悲しみ、或人のすすめにより、高雄の文覚上人に六代御前の命乞いをして貰うように頼んだところ、文覚もこれを承知して時政に逢い、六代の処刑を二十日間延期するように頼み、直ちに鎌倉へ向け馳せ下り、遂に頼朝より六代赦免の状を取りつけ急ぎ上洛の途についた。

一方都の方では、文覚との約束の二十日を過ぐるに、何の沙汰もないので、六代御前を連れて、鎌倉へと下る途中、駿河の国千本松原に着き、この所にて六代を斬ろうとしているところへ、文覚が大声にて呼ばりつつ、早馬にて馳けつけ、赦免状を差し出し、遂に六代御前は命を助かり悦び、文覚に連れられて上洛したといういきさつをこと細やかに書かれたる曲である。

#### 第六番　箱崎

百人一首の中に名を連ねて知られている壬生忠峯が、九州箱崎の宮へ参詣に来ていると、一人の女性が一本の松の下を浄め祟めているので、不審に思い尋ねたところ昔時神宮皇后が異国征伐のためにこの国に下り給い、戦勝祈願のために戒定恵の三学の妙文を、黄金の箱に納めてこの松の根方に埋められたにより、この松を箱崎の松と申し習わし、またこのところに御祀りして箱崎の宮と崇めている由申され、御身も妙文の箱を拝みたくば、この松の下にて一心に祈念すれば拝ましてやろうとの神の告げぞと言い捨てて本隠れに失せられた。忠峯は教えの通り祈念して待つ程に、神が顕われて、金の箱を取り出して拝ませ、なお衆生の願いを満てしめるとの神の誓いを示し給い、箱は元の松の根方に埋まれて、松風のひびきと共に神は上らせられたという筋である。

#### 能組

五月四日(第一日)曜)正午始
熱田神宮能楽殿

舞囃子　養老　井田十三比古
水波之伝　井田文二
地謡　後藤孝一郎　覚鉱一　鬼頭喜太郎　藤田照彦　増田南条秀一　大西信彦　五木田武計

能　景清　平野元章　ヒメトモ　木内菁　大西信久
小返　森茂好　田鍋惣太郎　山本敬一郎　藤田六郎兵衛
後見　小山敏夫　井田文二
地謡　殿島修二　加藤正光　塚本秀雄　五木田武計　南条喜之　観世武雄

一調　笠之段　小山敏夫　福井啓次郎

能　千手　観世武雄　観世喜之
郢曲之舞　高安滋郎　飯島田鍋惣一郎　佐六　覚三男
後見　五木田武計　南条秀雄
地謡　杉村翠　竹内信彦　井河村鉦二　大西信久　高野瀬十三比古　井田透

狂言　入間川　佐藤卯三郎　佐藤秀雄　井上礼之助

能　小鍛冶　大西信彦　黒頭森茂好　常好
間　井上松次郎　田鍋洋一　河村総一郎　小寺鬼頭　金七季信
後見　木内菁　柴田初太郎
地謡　坂口信男　井田十三比古　平野元章　小西弘通　南条秀雄　五木田武計　観世武雄　小山敏夫

宣持　塚本秀雄　加藤正光

（終了五時半頃）

#### 囲祝言

#### 能組

五月三日(祭)午前十時始
熱田神宮能楽殿

仕舞　桜川服部紗枝
鵜之段　有賀滋子
小塩　加藤良久

素謡　姫師竹下稲子　横山くに江　山本章代

象　トモ寺田鈴子　ツレ森幸子　武内薫代　熊谷敏

景清　舞囃子　川本通子　早川とよ　覚鉱一　鹿取希世　そで　加藤

芦刈　舞囃子　田中きんま　覚鉱一　横山くに江

熊野　高木美智子　田鍋惣一郎　覚鉱一

巻絹　寺田鈴子　那幸江　河村総一郎　田鍋惣一郎　覚鉱一　鹿取文子　福井啓次郎　野崎三男　鹿取希世

雲林院　素謡　横山くに江　山本章代

班女　舞囃子　田中きんま　早川とよ　福井啓次郎　河村総一郎　藤田六郎兵衛

花月　舞囃子　福井啓次郎　河村総一郎　藤田六郎兵衛

藤戸　後藤鈴子　渡部知江子　覚鉱一　覚三男

邯鄲　バンシキ　鹿取文子　河村総一郎　大野喜子　野崎太郎　藤田六郎兵衛

通小町　素謡　石井鐘子　覚鉱一　田鍋惣一郎　覚三男

藤戸　舞囃子　浅野静子　大鹿栄子　後藤鈴子

松虫　舞囃子　高田みね子　河村総一郎　福井啓次郎　鹿取希世

砧　竹下稲子　覚鉱一　植村きん　覚野崎三男

遊行柳　森幸子　河村総一郎　石井鐘子　覚野崎三男

猩々　中村つゆ　覚鉱一　福井啓次郎　野崎太郎　藤田六郎兵衛

#### 囲祝言

#### 能組

五月四日(第一日)曜)正午始
熱田神宮能楽殿

舞囃子　養老　井田十三比古
水波之伝　井田文二
地謡　後藤孝一郎　覚鉱一　鬼頭喜太郎　藤田照彦　増田南条秀一　大西信彦　五木田武計

能　景清　平野元章　ヒメトモ　木内菁　大西信久
小返　森茂好　田鍋惣太郎　山本敬一郎　藤田六郎兵衛
後見　小山敏夫　井田文二
地謡　殿島修二　加藤正光　塚本秀雄　五木田武計　南条喜之　観世武雄

一調　笠之段　小山敏夫　福井啓次郎

能　千手　観世武雄　観世喜之
郢曲之舞　高安滋郎　飯島田鍋惣一郎　佐六　覚三男
後見　五木田武計　南条秀雄
地謡　杉村翠　竹内信彦　井河村鉦二　大西信久　高野瀬十三比古　井田透

狂言　入間川　佐藤卯三郎　佐藤秀雄　井上礼之助

能　小鍛冶　大西信彦　黒頭森茂好　常好
間　井上松次郎　田鍋洋一　河村総一郎　小寺鬼頭　金七季信
後見　木内菁　柴田初太郎
地謡　坂口信男　井田十三比古　平野元章　小西弘通　南条秀雄　五木田武計　観世武雄　小山敏夫

宣持　塚本秀雄　加藤正光

（終了五時半頃）

## 三月の演能記録

藤田追善能を詠む　戸田秀雄

いにしえの武将のみたま呼ぶ如く　今能堂に笛静かにひゞく
音取の笛低くこもりて西海に　沈みし清経弔らふがごと
雑兵の手にかゝるよりと身を投げし　武将のさだめに涙催ほす
道成寺の石段のぼる乱拍子　小鼓の声するどくせまる
小鼓の音こゝろよき一調に　嵯峨野の秋の仲園を思ふ

× × ×

泣き尼の居眠むる春の舞台かな

※編注　藤田流先代家元清兵衛重孝四十三回忌追善能は去る三月二十一日熱田神宮能楽殿で催された。

## 熱田神宮の特殊神事

熱田神宮権宮司　長谷晴男

②

### ○封水世様神事　一月十二日

封水世様神事は、世様神事のところで述べた斎甕を、神楽殿（古くは旧政所）に据え、祢宜検知のもとに、雁使が斎甕に新たな清水を汲み入れ、尺木を執って水量を計り、終って厳封の上、これを東宝殿の床下に納めるのである。

神事の次第は、当日正午、祢宜、雁使、白丁（二員）斎館より参進して東宝殿の前に列立する。次いで白丁斎甕を奉舁、再び列次を整えて神楽殿に至り、斎甕を神前に据え、祢宜以下所定の座に著く。

次いで雁使祈念の後、斎甕の目方を計り、古水を除き、斎甕の目方を計り、清水を汲み入れ、尺木を執って水量を計る。次いで祢宜尺木を執って水量を点検する。次いで雁使斎甕の目方を計り、蓋を覆い、紙捻にて結び、尺木を添え両端に紙垂をつける。終って雁使本座に復する。

次いで前儀に準じて東宝殿の前に至り、斎甕を床下に納め、祢宜以下退出、斎館に入るのである。

〔附記〕

一、雁使は目方を計る度毎に、これを記録する。

二、往昔、この神事は午前十時に行ったと伝えられている。

三、前号（能楽の友第二十七号）「世様神事」の項を参照されたい。

### ○歩射神事　一月十五日

歩射神事は、一名「歩射会」又、俗には「御的」とも称する。

起源は詳かでないが、古来朝廷で行われた新春の歩射の行事に倣った、一種の豊年と除災とを神に祈る神事で、もとは当神宮摂社高座結御子神社で行われたのを、元禄の頃から本宮に移したものと伝え、尾張国内の各神社で行われる同一神事の源流をなすものである。

神事を行う場所は、旧海上門（この門は戦災により焼失）内の場であるが、これに先立ち、当日早朝祭典が執り行われる。

神事の次第は、当日午前十時、宮司以下祭員斎館より参進、被所歩射の儀は、午後一時、宮司、権宮司、矢頃役、魔津星役、射手、雁使、小祢宜斎館より参進（参進の順序・列次については古式があるが、説明を省略する）所定の座に著く。次いで雁使大的の前に進み、之を点検し、終って幄舎に復する。

### ○酒調の儀

小祢宜（白木弓、白羽矢、幣被具を載せた小案を捧持する）中立射手（二員）初立射手（二員）魔津星役、雁使の列次で大的の前に至る。

次いで小祢宜小案を大的の前に置き、魔津星役以下所定の座に著く。次いで小祢宜「クヒツミの膳」を配り、次に魔津星役以下に神酒を進める。

### ○魔津星行事

魔津星役、大的の前に進み、先ず、幣を大的の天、左右に挿し、被具（切麻散米）で大的を祓う。

次いで白木弓（樫の木で作る。長さ鯨尺三尺三寸、弦は麻苧を捻って作り、白紙を巻く）に白羽矢（女竹で作る。長さ鯨尺一尺二寸、羽根は奉書にて作る）をつがえ、先ず天の矢を放ち、次いで地の矢を放ち、次いで中央の千木に向って放つ。

次いで魔津星役以下所定の座に著く。

### ○奉射行事

先ず初立射手二員（介添役二員添う、以下之に倣う）進んで射場所定の位置に至り、矢一手（二本）宛を交互に射放ち復席する。

次いで中立射手二員、次いで後立射手二員の順序にて同様に射放つこと三度、即ち射手一員にて矢六本宛、計三十六本の矢を奉射する。この射礼は当神宮独特のもので、社伝の古式に拠っている。

奉射が終ると、射手は夫々、宮司の前に進んで、三色の禄を受けまた矢頃役は、矢頃を宮司の閲覧に供して神事を終り、宮司以下退出、斎館に入るのである。

この歩射の儀の終るのを待って、拝観者が一斉に大的を目ざして押かけ、之を奪い合うが、特に大的中央の千木は、古来魔除の霊験あらたかなるものと、群集のひしめき合うさまは、言語に絶するものである。

なお、奉仕員の服装は、宮司、権宮司、矢頃役、魔津星役、介添役は狩衣。射手は麻浄衣、雁使は直垂、小祢宜は黄色の麻布衣、矢取役は素襖を著けるのである。

（以下次号へつづく）

〔訂正〕

・前号（第二七号）中、間違いがありましたので、次のように訂正します。（編集部）

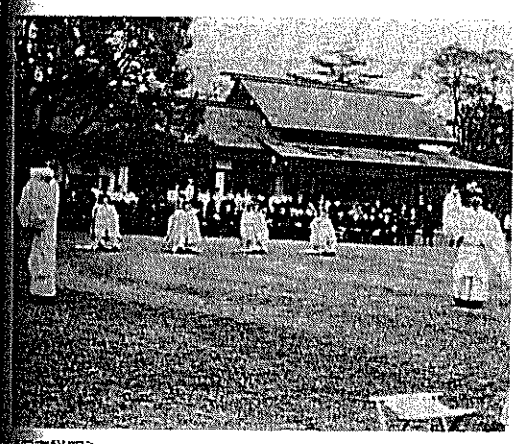
・右上絵図の説明のうち「熱田神宮の行事」とあるのは「神事」、「特殊行事」とあるのは「特殊神事」に訂正。

・第三段七行目

「祢宜は本座復にし」とあるのは「祢宜は本座に復し」に訂正。

・同十二行目

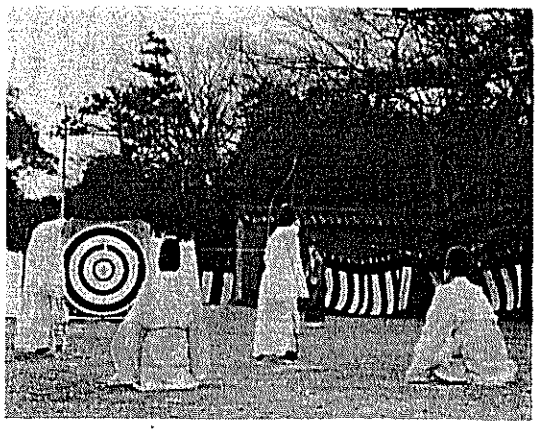
「斎宜以下退出」は「祢宜以下



〔写真説明〕

**能歌神事　本宮大前の儀**

前頭が詔文を読み、「カナワサ左」の所で、詔文を左右にかざして合図する。高巾子役はこの合図により左方に向い、蜜を高くかざして数度打ち振る場面である。向う側、床に著いているのが舞人である。



〔写真説明〕

**歩射神事　奉射行事**

射手二員、右側を太郎、左側を次郎と称する。蹲踞しているのが介添役である。太郎の右向うに立っているのが矢取役、左向うにも一人いるが写真では見えない。次郎が大的中央の千木を射んとする場面である。太郎は次の矢をつがえて待っている。

## 各地だより

### 京都　豊春会春の能

創立七年を迎え、豊春会では、四月二十日（日）午後一時から、金剛能楽堂（京都市中京区室町四条上ル）で、豊春会第十三回能会を開催する。

能「熊野」「絃上」の二番、金剛宗家の一調、とくに絃上は、越天楽楽人、早舞舞返、三調之会釈という珍らしい小書つきである。

中尾六三郎
豊嶋三千春

能　野　岡治郎右衛門
森　晴蔵

能　谷口勝三
林　吉兵衛　光田洋一

狂言　真髪　茂山千五郎　茂山真吾
佐々木千吉

一調　杜若　金剛巌　前川善雄

仕舞　笠之段　金剛永謹

竜神　豊嶋三千春
姥　植田昌三
師長　重本恭三
豊嶋弥左衛門

能　絃　谷口宗二郎　遠藤赫
上　北沢正次
河村稔一郎　小寺金七
曽和博朗　森田光春

### 金沢　金沢能楽会

金沢能楽会では、四月十三日午後一時から、金沢能楽堂で定例研究発表会を開催する。

能「嵐山」シテ田宮義男、ツレ河合誠二、勝手河原進、木守島村明宏、ワキ泉喜八、「富士太鼓」シテ渡辺哲之助、子方中村豊、ワキ殿田保輔、狂言「縄ない」殿村与作、畑中吉茲、能村祐丞、素謡「鞍馬天狗」供田孝之、福岡岩雄、瀬川清。なお次回は五月四日（日）、能「三輪」「善知鳥」狂言「瓜盗人」の予定。

### 催馬楽「桜人」鑑賞会

南区郷土文化会が開催

名古屋市の南区郷土文化会（会長久野國吉氏）では、さる三月一日（土）午後二時から市内南区鳴尾町八幡・西来寺で、催馬楽（さいばら）桜人を鑑賞の会を催した。

出演は中部日本雅楽連盟のみなさんで、曲目は、催馬楽「桜人」「君が代」管絃「越天楽」。

「桜人」は名鉄豊橋線の「さくら」駅付近の催馬楽で、古来絶えていたが、南区郷土文化会で復興し、昭和三十一年九月、名古屋市無形文化財に指定されたもの。


名古屋市北区杉栄町3ノ5（カムカム劇場前）
医療法人 仁愛会　奥田歯科診療所
奥田継一
電話（981）4554・7720番

昼間部・夜間部　生徒募集
愛知県公認　二葉洋裁学園
名古屋市中区錦2丁目11の13（広小路バス停より北へ3分）
電話（221）8521番

名古屋　亀末漬
中区錦3丁目14—5　962—3831（代）

御料理
蓬莱軒
本店　熱田区神戸町34　電話（671）8686～8688
神宮東門店　熱田区新宮坂町1　電話（671）5596～5598


演能案内

先代藤田清兵衛重孝四十三回忌追善能

財産相談のことなら
ぜひ〈安田〉へ
安田信託銀行
名古屋支店　中区・栄3丁目（丸栄前）
名古屋駅前支店　中村区笹島町1丁目（都ホテル前）

# 能樂の友

題字は熱田神宮　篠田宮司筆

発行　能楽の友社
名古屋市千種区吹上本町2—20
（郵便番号　464）
電話　（731）7984
振替口座　名古屋　36393
購読料　1年　300円
郵送の場合　1年　400円
一部　30円

## 第四回　名古屋薪能

### 8月3日、能二番を上演

市民の納涼能楽の夕べとして毎年夏行われている「薪能」（たきぎのう）は、ことし第四回を迎え名古屋能楽師協会では、八月三日（日）開催と決定、準備がすすめられている。

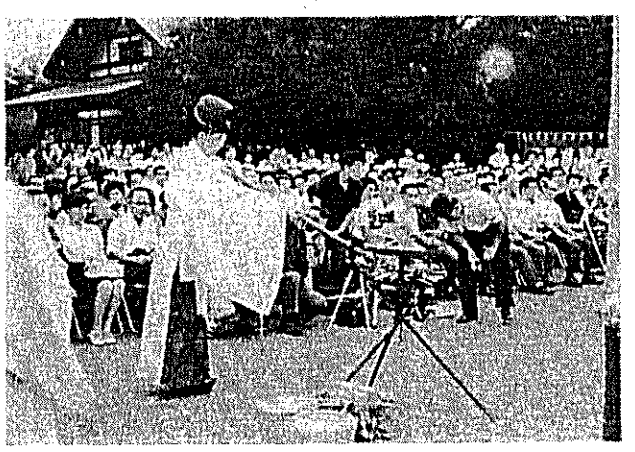
会場は、昨年と同じく熱田神宮神楽殿前に仮設舞台を造り行なわれるが、とくに舞台構成、会場施設などについては、昨年の経験をいかして考慮され、また火入れ式の儀も厳かに行なわれる。

開演は午後五時半、能組は、能二番、観世流「花月」シテ殿島修二師、宝生流「橋弁慶」シテ内藤泰二師、さらに喜多流舞囃子「養老」長田驍師、金剛流「安宅」大塚一二の諸師ほか狂言、仕舞など神苑に催能をくりひろげる。

すでにこれまでも解説してきたが、薪能は、春日大社と関係深い奈良の興福寺で、平安の昔から行われて来た神事能で、本来はこの神事能の固有名詞である。（薪能の起原については本紙第21号にて熱田神宮権宮司　長谷晴男氏の「薪能について」を参照されたい）

この薪能という名称が一般化され野外能として、東京、京都、大阪で行なわれるようになり、名古屋では昭和四十一年の夏からこの催しが毎年、市民納涼能楽の夕べ「名古屋薪能」として、市民に親しまれてきており、今年の演能に大きな期待がよせられている。

（能組の詳細は次号掲載）



写真は第3回薪能の火入れ式の儀

## 日本能楽団が渡欧

### 6月に各国で演能

シテ方梅若万三郎、観世静夫、ワキ方宝生弥一、狂言方茂山千五郎師らを中心とする日本能楽団がきたる六月、フランス、ベルギー、オランダ、イタリー、スイス、ドイツなど欧州諸国で公演することになった。

今回公演の発端となったのは、スイスのチューリッヒで開かれるフェスティバルに、日本の能の公演招待が能楽協会によせられ、その結果日本能楽団に委嘱されたものである。

公演予定は、六月九日～十四日＝パリ、同十六日～十七日＝アントワープ、同十八日＝ブリュッセル、同十九日～二十五日＝アムステルダム、フランクフルト、ミラノ、二十六日～二十九日＝チューリッヒの日程。

公演曲目は、能「松風」能「船弁慶」（又は「熊上」）狂言「二人大名」

一行は全部で二十六人、団員として（シテ方）梅若万三郎、梅若万佐晴、梅若基宣、観世静夫、上田照也、片山慶次郎、杉浦元三郎、高山新一郎、山本順之、遠藤六郎、倉持宗徳（ワキ方）宝生弥一、宝生閑（囃子方）柿原崇志、宇野親一ほか大小鼓方、狂言方茂山千五郎、山本則孝、山本則俊（舞員）戸井田誠一の諸氏である。

**故浦田保嗣師三回忌追善大会**

京都浦声会主催、大垣浦声会後援で五月十八日、京都観世会館で故浦田保嗣先生三回忌追善大会が催される。

**京都　豊鶴弥左衛門師古稀祝賀　豊星会大会**

豊鶴社中金剛流豊星会では、五月十八日（日）午前十一時から京都・金剛能楽堂で、豊鶴弥左衛門師古稀祝賀「豊星会大会」（第一回）を催す。

番組は、能「卒都婆小町」「望月」「翁」「乱」はじめ狂言「予の目」連吟、仕舞十数番、京都、大阪、名古屋、東京その他各地の豊星会、金剛会婦人部が参加する。なお第二回は九月二十一日に予定されている。

## 5月の謡曲狂言番組

NHKラジオ第2放送
毎日曜日　午前8時から9時まで
（再放送）
毎金曜日　午後2時から3時まで

5月4日（日）・9日（金）
観世流「邯鄲」本原　康次　ほか
観世流「清経」橋岡　久馬　ほか

5月11日（日）・16日（金）
宝生流「蟬丸」武田　光雲　ほか

5月18日（日）・23日（金）
金剛流「国栖」金剛　巌　ほか

5月25日（日）・30日（金）
金春流「小袖曽我」桜間　龍馬　ほか

## 故片山博通師追善能楽鑑賞会

### 五月十一日（日）午前十一時始　熱田神宮能楽殿

**仕舞**
敦盛（クセ）塚本　秀雄
仕舞（キリ）殿島　修二
網之段（キリ）佐藤　太俊
松虫（キリ）杉村　竹翠

**能楽**
河村　大
片山博太郎

**邯鄲**
西村　欽也
立石　澄雄
河村総一郎
田鍋惣一郎
覚鬼頭喜太郎
三男

**間**
佐藤　秀雄

**狂言**
宗論　井上松次郎
井上礼之助
佐藤卯三郎

**能楽**
片山千佐子
片山慶次郎

**隅田川**
高安　滋郎
高安　勝久
吉田　定男
田鍋惣太郎
藤田六郎兵衛

**連吟**
菊上　尼関健太郎
林甲子夫

**仕舞**
高砂　小林　慶三
経正（キリ）分林　弘一
松風　佐野　亨
箙之段　浅井　安杰
天鼓　柴田　収武

**能楽**
梅田　邦久

**融**
クツロギ　谷田宗三朗
覚鉦一
福井啓次郎
助田　竜夫
藤田　昭彦
間　佐藤　友彦

（有料）
主催　邦謡会
後援　名古屋幽花会

## 五月十七日（土）九時始　熱田神宮能楽殿

**素謡**
小袖曽我　亀山盛一
蒲田明安
蒲田真三
頼政　寺西　弘次
浅井　悦
新川　守
三輪　佐藤ゆき子
林　大造
蟬丸　友野たけよ
石村ちゑ子
和波　敏子

〔仕舞〕鶴亀　角田富美、田村伊藤康子、羽衣　高木のぶ、笠之段　吉川たま、紅葉狩　林蟬子
〔囃子〕吉野天人　跡田喜代子、班女　長戸花子、富士太鼓　山崎晴代、草子洗小町　石原良二、葛城　高芝ときゑ

**番囃子**
羽衣　増田　糸
橋本　金子
山崎　晴代
跡田喜代子
田鍋惣太郎
鬼頭八郎
藤田六郎兵衛

〔囃子〕高砂、玉葛、山姥、三輪　村木寿恵子、松風　内田睦子、猩々　林千鶴

**能**
鞍馬天狗　河村真之介
大橋　史子
柳瀬　欽也
河村　玲子
近藤　大
重治
高安　勝久
大野　弘之
佐藤　友彦
河村総一郎
田鍋惣一郎
鬼頭喜太郎
覚三男

〔独吟〕野宮　鶴田清三郎
〔連吟〕松虫　伊藤逸　若杉鈴栄
〔囃子〕経政、蟬丸、熊野、船弁慶
〔仕舞〕屋島　小林琢麻、合浦　河村真之介、熊坂　亀山盛一

**素謡**
経政　名謡会（中央電報局）
東北　小林　辰彦　太田　喜昭
〔囃子〕融　澄川幸子、雲林院　海田トシ子、邯鄲　遠藤俊男、雛波　川瀬絹子
仕舞
若船　河村　雅二
（御来聴歓迎）

## 霞会春季囃子会

### 五月十八日（日）午前十時半始　熱田神宮能楽殿

養老　長谷川章、実盛　金兒晶子、羽衣　守部啓子、桜川　内藤式子、胡蝶　内藤伸、歌占　柴田只男、野宮　福間昌作、鵜飼　芳賀忠、花筐　殿島修二、唐船　戸田秀雄、芦刈　加藤保彦、桜川　鈴木貞子、融　竹内陽子、熊野　谷沢トミコ、雛波　深見弥太郎、井筒　戸田和、田村　渡辺節子、石橋　内藤泰二、杜若　坂田猛、雲雀山　福田歌子、藤戸　水藤又吉　高野瀬透、雲林院　後藤玉恵、百万　佐藤アヤ子、融　内藤　純子、熊坂　広隆夫、猩々　加藤そで

## 装束談義（十八）

# 垂（たれ）

ゑとふみ　二井栄逸

花には、かず〳〵の伝説がある。はつ秋の風が、軒の玉すだれをはたはたと打つ頃になると、女郎花、男郎花にまつわる悲しい物語りが思い出される。

むかし、小野の頼風という男が妻を都に残して故郷へ戻ったところ、それきり都に帰らないので、妻は淋しさのあまり、故郷へ頼風をたずねてゆくと、美しい女が出てきて、〝私は頼風の妻ですが、只今、主人は不在なのです〟と、いったので、もとの妻はおどろいて、近くの放生川へ身を投げて死んでしまう。その時、ぬぎすてた黄色い小袖は女郎花になった。

頼風はそれを見て、後悔の涙にくれ〝ゆるしてたもれ〟と叫びながら自分もまた、放生川に身をなげ密しくなってしまう。頼風のぬぎすてた白い衣は、男郎花になったのである。この伝説を若い女性に話して見ると、色々な意見が出て面白い。

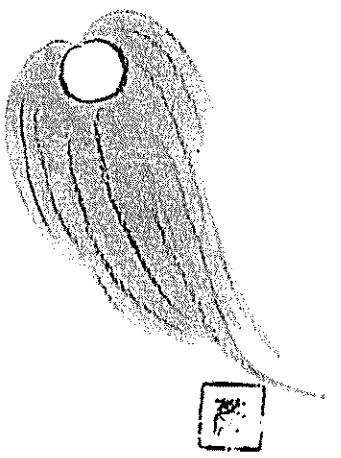
〝何よ、女の二人位、うまく操縦出来ない男って問題にならないわ〟、とは勿論ドライな娘。〝可愛そうなお話。頼風もその奥さんもほんとうに可愛そうです〟とはウエット嬢。そこでインテリはこういう。〝三人とも、冷静に話し合うべきです〟等、まちまちの意見が飛び出すのである。

この伝説は、すでに亀阿弥によって、風雅と愛慾を密着させた四番目能として完成している。

藻塩花に、〝平城天皇の御時、小野頼風という人、男山に住みけり。京の女と契りし後、かの女八幡へ尋ね行きて、頼風がことを問う。家なる貴答えて云う。此程始めたる女房ましますが、そこへ往き給うと答う。此女うらめしくおもいて、八幡の川の端に山吹襲の衣脱ぎ捨てて、身を投げ死にけり。其の衣、朽ちて女郎花生い出でたなり〟と、いうことが書かれてあるが、能の資料としては、古今集の序の〝男山の昔を思出で女郎花の一時をくねるにも歌をいいてぞなぐさめける〟がもとのようである。何にしても、花にまつわる伝説は、洋の東西を問わず、美しく哀愁に富んだものである。

× × ×

装束談義。本稿では垂（たれ）とする。頭（かしら）より毛の短かいもので、輪状のものより毛を垂れ作ったもの。男体、女体のシテ、ツレに用途が多い。天冠、輪冠、透冠、梨子打烏帽子、風折烏帽子等の下に垂れ、結ぶことはない。同型で、白毛をつかったものは白垂（しろたれ）と称し、老体に用いる。（図は、黒垂をつけた女郎花のシテ）



# 観能の手びき

## 五月の能　熱田神宮能楽殿

——五月十七日（土）一謡会能——

### 鞍馬天狗（くらまてんぐ）

シテ　近藤重治
牛若　河村大

前シテ山伏は常座で名ノリの後鞍馬寺の花見をする旨を述べて、後見座にクツログ。暫く姿を隠す意味である。狂言西谷の能力が文を捧げて登場し、花見の案内に東谷へ赴く旨を述べて橋懸に行くと数人の稚児を先に、子方牛若がワキ僧と従僧を伴って出、橋懸に列ぶ。ワキが能力の差出す文を読み招きによって西谷の花見に赴く態にて一同舞台に入り、脇座に着く。

狂言方が稚児達の恩みに舞を舞う間に、シテは立って舞台に入り安坐する。狂言方は、それを苦々しく思い追出そうとするが、[illegible]シテは安坐のまま「遥かに人家を見て」と静かに謡い子方とのカケ合いの後、地になるが、格別の型はない。ロンギになり子方はシテに向い「さるにても如何なる人にましませば」と謡う。シテは大天狗であると名のりて後、来序の囃子で中入する。続いて子方牛若も退場する。間狂言は、木ノ葉天狗で、セリフ仕ぐさいう〳〵あって退場する。

一声の囃子で、牛若丸が薙刀を肩に登場、常座にて薙刀をつき立て、サシを謡って脇座に立つ。

大べしの囃子で後シテ天狗僧正坊が出で橋懸一ノ松にて「そもそもこれは」と謡い出し地とのカケ合いありて舞台に入り、大小前にて床几にかけ、張良が黄石公から兵事を授かった故事を語って聞かせ、牛若に[illegible]家を討つべき[illegible]うとする、牛若は袂をとって引き留めるが、今後とも影身を離れず弓矢の力を添へ守るべしと誓い、鞍馬山の梢にかける態で橋懸へ行き幕際でノリ込み、羽ウチワを後へ投げ捨てて飛び返り立って拍子のあと幕へ入る。

——五月二十五日　正楽会——

### 竹生島（ちくぶしま）

前シテ　間下藤平
後シテ　山森幸男
ツレ　岡部すゞ江

前段は春うららかな湖に舟の中の老漁夫と若い海女が、あたりの景色を賞美する場面で長閑な舞台である。後段は、ツレが天女の舞を舞い、シテ龍神は舞働を舞う豪[illegible]

## 狂言だより

### やるまい会　十周年記念公演

7月20日に注目の狂言会

### 鶴声会創立三十周年　丹下三義金婚式

記念　素謡会
祝賀

とき＝五月十一日（日曜）
ところ＝岐阜市民会館

### 還暦寿祝記念　正楽会能会

五月二十五日（日）午前九時始
熱田神宮能楽殿

素謡　大沢寛　吉田隆美
神歌　山本とよ子　今井春　神谷兼三郎　高木昌一　三浦文雄　吉田和之
嵐山　義経　三村恵子　同山　丸山勘兵衛　横山健次　浅井竜雄　木島康信　梶田年男　松井佐高　西田万寿男　佐藤英雄　竹田太一　二村昌彦
安宅　立王　今井種子　貫之　浅井かね　シテ勝谷照子　春立岡本岩越秀子　ワキ大島久一　山田茂　野村又三郎　弘
葛進帳
草子洗小町　秋子
〔連調〕小袖曽我　三村恵子　神辺要市　吉田和之　小瀬松子　山森幸男
岡部すゞ江　勝谷照子　後藤迪夫　山本とよ子　浅井かね　高木昌一　岩越秀子　野崎まさ子　三浦文雄　松井弘
菊慈童　恩田時次郎　西田万寿男　長谷川大沢　徹寛
鵜飼　上米昇一　長瀬久兵衛　板倉伸一
〔仕舞〕笠之段　奥村種子、東北　堀田照、天鼓　橋本淑子
東方朔　二村昌彦　浅井竜雄　梶田年男　横山健次　木島康信　高田太一
国栖　坂井益司　熊田綾子　熊田鉄男　後藤留吉　奥村勝彦　朝日中岐
〔仕舞〕蟬丸　岡本秋子、松風　小瀬松子、遊行柳　深見鉱三
〔囃子〕敦盛　伊藤実、通小町　郡幸江、玄象　西川貴美子
〔独吟〕景清　丸山勘兵衛
硅　後藤迪夫　橋本淑子　神辺要市
能竹生島　岡部すゞ江　山森幸男　間下藤平　立石澄雄　高安滋郎　吉田定男　高安勝久　山本とよ子　佐藤英雄　寛三男
後見　柴田初太郎　加藤丈太郎　河村延二　間井上礼之助
木賀曽書　奥村勝彦　後藤留吉　坂井益司　和田清一　三村房雄　鳥居喜三郎
葵上　押水孝太郎　岩越秀子　深見鉱三　堀田照
〔仕舞〕高砂　竹内正、杜若　神辺要市、鞍馬天狗　佐竹皓
〔囃子〕羽衣　三村恵子、桜川　野崎満佐子、山姥　山本一
狂言　昆布売　野村又三郎　井上松次郎
能猩々　加藤丈太郎　西村欽也　山本福井啓次郎　吉田和之　藤田昭彦
仕舞　網之段　柴田千代子
笹之段　畔柳久子
巻絹　林銀一
連吟　俊寛　柴田博　則武富貴夫　見田村義信　林浪雄
仕舞　二人静　鳥沢信子　土屋美根

### 金剛流山田社中　春嘗会春季謡曲囃子会

五月二十五日（日）午前九時三十分始
名古屋駅前松岡旅館

素謡　神歌　北村厚代　千歳　百々貴美子　水谷さく　後藤さの　高田はる　岡田もと　牧野元子
素謡　加茂　服部金一　水谷泰典　清田一男　伊藤杉三郎　林茂　山田治助
素謡　草紙洗　子方ツレ　貫之
〔仕舞〕田村　牧野元子、富士太鼓　能木春江、杜若　水谷さく
〔連吟〕鞍馬天狗　高橋三市　堀喜十
素謡　胡蝶　加藤たづ子　中村あさ子
〔独調〕鉄輪　安部長太郎　中内ます
〔仕舞〕忠度　松本秀子、清経　小鳥民子、笹之段　水谷泰典、黒塚
榊葉武、笠之段　百々康治
〔独吟〕蟬丸　加藤志津、小督　宮口光芳
舞囃子　敦盛　中村あさ子
〃　羽衣　加藤たづ子
〃　雲雀山　田財とみえ
素謡　雪　秋田善守
舞囃子　邯鄲　亀井良子
〃　班女　若尾和佐女
〔独吟〕鵜之段　松原利重、
〔仕舞〕玉葛　村田たつ子、
素謡　盛久　鈴木クミ
舞囃子　東北　百々貴美子
〃　融　近藤かすみ
〃　芦刈　大津米子
〔独吟〕田村　服部金一、網之段　徳永寛一
〔仕舞〕歌占　鈴木タミ、加茂　吉川周子、殺生石　小関慶子、駒之段
安部長太郎
舞囃子　善知鳥　後藤さの
〃　雲林院　後藤玉恵
〃　高砂　五段　北村房代
附祝言

### 熱田神宮大祭奉納能

六月五日　一部11時始、二部2時始
熱田神宮能楽殿

〔舞囃子〕高砂　長田槳　〔仕舞〕笠之段　辰巳孝　〔狂言〕清水
能蟬丸　シテ竹腰勝一
〔舞囃子〕絃上　山田仁三郎　〔仕舞〕船弁慶　前田茂穂　〔狂言〕抗か
人か　野村又三郎　佐藤卯三郎
能百万　シテ福井[illegible]子
〔一調〕鵜飼　山本博之　鬼頭八郎
〔仕舞〕熊坂　野村四郎
能葵上　藤井千鶴子　高橋静夫　西村欽也　高安勝久

# やるまい会 十周年記念公演

## 7月20日に注目の狂言会

狂言やるまい会では、十周年を迎え記念別会として、七月二十日（日）熱田神宮能楽殿で狂言会を開催する。

とくに今回は、野村兄弟、茂山兄弟が参加競演、曲目は、「牛盗人」、「井杭」、「縄綯」、「水掛聟」、「首引」を上演、名曲、稀曲をそろえ、狂言の醍醐味を十分味わうことができようと期待されている。

会員券はA一、二〇〇円、B八〇〇円、学生五〇〇円

取扱い　〒453 名古屋市中村区鳥森村内上二二　野村方　やるまい会

電話（471）5067

### やるまい会記念別会

七月二十日（日）午後四時半始
熱田神宮能楽殿

| 番 | 組 | |
|---|---|---|
| 牛盗人 | 井上礼之助 | 野村耕介 |
| 井杭 | 井上松次郎 | 野村万之丞 |
| 縄綯 | 野村又三郎 | |
| 水掛聟 | 茂山千之丞 | 茂山千五郎 |
| 首引 | 野村万作 | 野村悟郎 |

# 観能の五月の

# 丹下三義金婚式記念 祝賀素謡会

とき＝五月十一日（日曜）
ところ＝岐阜市民会館

| 番 | 組 | |
|---|---|---|
| 神歌 | 村橋淳作 | 千歳　村瀬正一 |
| 鶴亀 | 村橋淳作 | ワキ　村瀬正一 |
| 連吟 羅生門 | 橋本要三 | 柴田博 |
| 羽衣 | 柳原市雄 | 見田村義信 |
| 大仏供養 | 内田志さ | 井道玉温 |
| 鳥追舟 | 中島和恵 | 鶴田迪子 |
| 天鼓 | 大野田鶴子 | 八木法光 |
| 巻絹 | 外川かつ子 | 深尾田美子 |
| 草子洗小町 | 熊田末男 | 千葉健一 |
| 仕舞 経正 | 猪野間たづ子 | 児玉博次 |
| 蟬丸 | 岩田龍蔵 | 斉藤庫吉 |
| 小鍛冶 | 村橋佐和子 | 鶴田迪子 |
| 連吟 駒之段 | 中島和恵 | |
| 山姥 | 酒井みさを | 加藤てる子 |
| 玄象 | 林ユキエ | 高木鴻子 |
| 笠之段 | 向井信 | 村瀬信義 |
| 仕舞 屋島 | 岩田雅 | 八田孝 |
| 船弁慶 | 河村進一 | 外五名 |
| | 三島喜嗣 | 佐藤よし子 |

# 古曲雑話 (4)

## 西村弘敬

### 第七番　花軍（はないくさ）

都方に住居する人が花に好き、色々の花を集めようとして、伏見深草の辺りへ行ったところ、一人の女性が来り、この所の名草は菊草という白菊で、これが花の王座であると教え、その他色々の花もあれど先づ女郎花（おみなめし）を折り給えという。都の人は名草である白菊を先に折るべきでないかと争っているうちに、牡丹（ぼたん）女郎花、黄菊、赤菊など色々の花の精が顕れ出でて花の王座を占めんと互に花の打争いをなして花軍を始めたるも、遂に菊草の白菊に打伏せられて和睦をなし、それぞれに花の舞を舞い終わるといういとも優雅な曲である。

### 第八番　鶏龍田（にわとりたつた）

河内の国平岡の伺基という人が紅葉を見んとて龍田山へ行き、龍田明神の境内で参詣していると、いとも美しい鶏がいたので、供の者が捕えて持ち帰ろうとした所へ社人が出で来り、その鶏は捕えてはならぬ、これは朝廷が悪魔除けのためにしけいの祀りとて、鶏に木綿幣（ゆうしで）をつけて都の四方の関々へ放たれたる木綿附鳥（ゆうつけどり）というもので、捕えはならぬから返して行けといわれ、やむなく鳥を返して帰って行った。然るところ、供人の中の一人の女性が俄に物狂わしくなり、よくよく見ると、鶏の霊が憑いたらしく思えるので早速あたり近い信貴山にいる山伏岡閑梨を呼び迎えて、色々と祈祷して貰い漸く悪霊を払い除けたということが作られた曲である。この夕村鳥というのは、前記のように朝廷で行なわれた行事の一つで、主上を始め色々の悪事災厄が重なったので都の四方の関々へ木綿幣（いうしで）をつけた鶏を放ったもので、一般に夕付鳥といい習わした。ちなみに都の東は逢坂山、南はこの龍田山、西は穴太（あのふ）北は育乳（あらち）であったという。

### 第九番　鳶の巣（とびのす）

大和の国より出た客僧が、三熊野へ参籠したるに、或る夜の霊夢に筑紫（九州）の地に渡り、瑞雲たなびく山を尋ねて、そこを清浄結界の地となせとのことであったので、早速九州の旅に出で、ここかしこと探し求めて遂に薩摩の国まで行きついたところ、一人の猟師に行き逢った。客僧は霊夢のようを物語り、ここを清浄結界となし衆生を助けんとしたきよし申したるに、猟師はこの所が結界の地などになるならば、我々猟師は生活が出来なくなるから困るとて承引しないので、昔比叡山の東の麓の湖水にて釣りの漁翁に対しこれと同様のことを釈尊が話されたる彼の白鬚の翁の曲（くせ）の事柄を語って聞かせたところ、猟師は俄に気色変りて大きに怒りをなし天狗の相を表わし、杉木立の中にある鳶の宿（とびのいわや）に走り込んで行った。客僧はこれは容易ならぬ事態となったので、熊野権現に祈誓をなして祈りに祈って、遂に天狗を祈り伏せたという曲である。

# 能楽上演

## 熱田神宮能楽殿

〔舞囃子〕高砂　竹内正、杜若　神辺要雨、鞍馬天狗　佐竹皓
〔囃子〕羽衣　三村恵子、桜川　野崎満佐子、山姥　山本一
狂言　昆布売　野村又三郎　井上松次郎
能　猩々　加藤丈太郎　西村欽也　山本福井啓次郎　吉田和之　竹内六郎　藤田昭彦
〔仕舞〕高砂　笹之段　柴田千代子
〔囃子〕羽衣　三村恵子、桜川　野崎満佐子、山姥　山本一
狂言　昆布売　野村又三郎　井上松次郎
能　猩々　加藤丈太郎　西村欽也　山本福井啓次郎　吉田和之　竹内六郎　藤田昭彦
〔仕舞〕高砂　笹之段　畔柳久子
〔舞囃子〕高砂　竹内正、杜若　神辺要雨、鞍馬天狗　佐竹皓
〔囃子〕羽衣　三村恵子、桜川　野崎満佐子、山姥　山本一
狂言　昆布売　野村又三郎　井上松次郎
能　猩々　加藤丈太郎　西村欽也　山本福井啓次郎　吉田和之　竹内六郎　藤田昭彦
〔仕舞〕高砂　笹之段　畔柳久子
〔舞囃子〕高砂　長田驍　〔仕舞〕笠之段　辰巳孝　〔狂言〕清水
能　蟬丸　シテ　竹腰勝一
〔舞囃子〕絃上　山田仁三郎　〔仕舞〕船弁慶　前田茂穂　〔狂言〕抗か
人か　野村又三郎　佐藤卯三郎
能　百合反　シテ　福井
〔舞囃子〕高砂　長田驍　〔仕舞〕笠之段　辰巳孝　〔狂言〕清水
能　蟬丸　シテ　竹腰勝一
〔舞囃子〕絃上　山田仁三郎　〔仕舞〕船弁慶　前田茂穂　〔狂言〕抗か
人か　野村又三郎　佐藤卯三郎
能　百合反　シテ　福井
〔仕舞〕高砂　笹之段　畔柳久子
〔舞囃子〕高砂　竹内正、杜若　神辺要雨、鞍馬天狗　佐竹皓
〔囃子〕羽衣　三村恵子、桜川　野崎満佐子、山姥　山本一
狂言　昆布売　野村又三郎　井上松次郎
能　猩々　加藤丈太郎　西村欽也　山本福井啓次郎　吉田和之　竹内六郎　藤田昭彦
〔仕舞〕高砂　笹之段　畔柳久子
〔舞囃子〕高砂　長田驍　〔仕舞〕笠之段　辰巳孝　〔狂言〕清水
能　蟬丸　シテ　竹腰勝一
〔舞囃子〕絃上　山田仁三郎　〔仕舞〕船弁慶　前田茂穂　〔狂言〕抗か
人か　野村又三郎　佐藤卯三郎
能　百合反　シテ　福井
〔舞囃子〕高砂　長田驍　〔仕舞〕笠之段　辰巳孝　〔狂言〕清水
能　蟬丸　シテ　竹腰勝一
〔舞囃子〕絃上　山田仁三郎　〔仕舞〕船弁慶　前田茂穂　〔狂言〕抗か
人か　野村又三郎　佐藤卯三郎
能　百合反　シテ　福井

〔仕舞〕高砂　笹之段　畔柳久子
〔舞囃子〕高砂　竹内正、杜若　神辺要雨、鞍馬天狗　佐竹皓
〔囃子〕羽衣　三村恵子、桜川　野崎満佐子、山姥　山本一
狂言　昆布売　野村又三郎　井上松次郎
能　猩々　加藤丈太郎　西村欽也　山本福井啓次郎　吉田和之　竹内六郎　藤田昭彦
〔仕舞〕高砂　笹之段　畔柳久子

# 熱田神宮の特殊神事

③

熱田神宮権宮司　長谷晴男

## ○舞楽神事　五月一日

舞楽神事の起源は詳かでないが、平安朝の初期には既に行われていたと伝えられる。即ち百十三歳の高令で、よく和風長寿楽を舞って、仁明天皇（約千百年前）の天覧を蒙った、かの有名な尾張浜主は、赤白桃李花や、青白蓮華楽の舞の作家である尾張秋吉などと共に、当神宮の社家であり、現存する重要文化財（旧国宝）の舞楽面十二面に、治承、寿永（約七百八十年前）の頃に修復した墨書のある点などからして、その歴史の古いことが窺われ、恐らく宮廷以外では、日本最古の舞楽であるということが出来よう。爾来一千有余年、隆替はあったが、よく保存継承せられて現今に及んでいる。

神事の当日は、楽所の前庭に大太鼓及び舞台を鋪設する。本宮内玉垣御門前に築を設け、舞楽目録を奉奏、中重に祝詞座並びに宮司以下の本座を鋪設する。

神事の次第は、午前十時三十分、宮司、副従権祢宜一員斎館より参進。被所において祓を受け、本宮中重所定の座に著く。次いで宮司進みて祝詞座に著き、祝詞を奏上する。終って各退出。次いで宮司舞台の北方に卓立（南面）副従権祢宜は、神前の舞楽目録を捧持して宮司に従う。

これより先、半臂装束を著けた楽人二員（左方・右方各一員）舞台の両側北寄りに進み、宮司の参著を待つ。次いで宮司、目録をそれぞれ楽人に授け、宮司は所定の幄舎に入り、楽人は楽所に復する。

これより、振鉾に始り長慶子に終る八番の舞楽が、順次奉奏される。この番組には古来左に示す十組があって、十年目毎に反復して行なわれている。

**○舞楽番組**

一、振鉾　桃李花　太平楽　陵王
二、振鉾　綾切　陪臚　落蹲　長慶子
三、振鉾　甘州　春庭花　散手　登天楽　白浜　貴徳　長慶子
四、振鉾　萬歳楽　窣摩（二之舞）　陵王　延喜楽　納曽利　長慶子
五、振鉾　賀殿　五常楽　還城楽　地久　長保楽　抜頭　長慶子
六、振鉾　桃李花　胡飲酒　陵王　林歌　落蹲　長慶子
七、振鉾　巣頭楽　央宮楽　散手　仁和楽　新鮮組　貴徳　長慶子
八、振鉾　承和楽　春庭花　抜頭　綾切　古鳥蘇　還城楽　長慶子
九、振鉾　萬歳楽　打球楽　陵王　延喜楽　狛鉾　納曽利　長慶子
十、振鉾　賀殿　甘州　還城楽　地久　林歌　抜頭　長慶子

宮司及び副従権祢宜は狩衣、舞楽奉仕員は裏束、蛮絵裏束、鋪福裏束等の所謂舞楽裏束を著けるのである。

〔附記〕

一、過般の戦災に依り、東楽所、大太鼓一基（二基の内）、舞台並びに舞楽裏束の一部を焼失したが、戦後、鋭意これが復興につとめたので、現今においては既ね旧儀に復し、厳粛に斎行されている。

二、この神事は、当神宮職員と橘竹会（当神宮の雅楽奉仕団体）全員等の奉仕のもとに執り行われる。

朱塗の舞台で奉奏される数々の舞は、神苑の新緑に映えて、平安の昔を偲ばせるまことに優雅な神事である。

## ○酔笑人神事　五月四日

酔笑人神事は「金影堂神事」とも書き、又俗に「オホホ祭」「於賀斯祭」とも称する。これは天智天皇七年に故あって、神剣が皇居に留まらせ給うたが、天武天皇朱鳥元年、御神慮により還座遊ばされた時、社中挙って歓喜笑楽したさまを今に伝える珍らしい神事である。

神事の次第は、午後七時、祢宜以下祭員斎館より参進。被所において祓を受け、束社影向間社に至り、左右に列立する。次いで笛役一員、神前に進みて面笥の封を解く。次いで上﨟より一員宛、神前に進み出て笛役の授ける神面を、裏束の袖の中に受けて隠し持ち、各復座する。

次いで下﨟二員、神前に進みて蹲踞、この時左右側の祭員、相寄って半円形にこれを囲む。次いで下﨟二員、中啓にて神面を袖の上より軽く叩くこと三度、一度毎に微声で「オホ」と唱える。次いで二員相対して蹲踞し、同様の所作を行う。次いで笛役「タロリー」と笛を吹く。全員大声を挙げて笑う。次いで三度、繰り返して各復座する。

前、清雪門前に於て同様の行事を行い、清雪門前で神面を笛役に返して祢宜以下祭員退出。斎館に入るのである。

〔附記〕

一、この神事は浄闇の裡に斎行するのであり、特に神面は見てはならない神秘的なものとされている。

二、この神事には献饌、祝詞奏上が無い。

（つづく）

〔写真説明〕

舞楽神事　散手（左方舞）

楽人（執筆者）鉾を執って舞台へ昇り「出手」を舞っている場面である。鋪福裏束を著け、太刀を佩き、朱塗の面、大きな宝冠をかぶり、手に長い鉾を持って舞う。舞は「序」と「破」の二つより構成されている。左端に見えるのが大太鼓、向う側が西楽所である。

〔写真説明〕

酔笑人神事

下﨟二員相対して蹲踞して神面を叩き、全員大声で笑っている場面である。右下に見えるのが面笥である。

## 熱田神宮舞楽執行

熱田神宮では、さる五月一日午前十時三十分から「舞楽神事」を神楽殿前広場で行った。

## 竹韻会素謡会

竹韻会では、五月二十五日、素謡会を開催する。

## 此水会春季素謡会

此水会では五月二十五日、春季素謡会を高野瀬透師宅（名古屋市東区橦木町二ノ九）で開催する。

連吟「実盛」高野瀬透、小川貞三、高野瀬恵三、高橋宗司。素謡「東北」日野美知子、野田房子、清経」守屋満江、山口とし、浅井明「吉野天人」鈴木明、稲垣治巳、長瀬綾夫「知盛」藤本俊夫、高橋宗一郎、加野昭二郎「千手」小川貞三、高橋宗司、今村喜男「弱法師」高橋ちか子、伊藤彰「小袖曽我」高木喜八、佐藤勇、水野進三「熊坂」加藤有毅、二宮義雄「鶏亀」加藤陸祥、加藤夫人

## 名古屋巽会大会盛会

名古屋巽会では、五月五日熱田神宮能楽殿で春季大会を開催、能「橋弁慶」足立暁「胡蝶」植村本子「隅田川」浜村園子、川地玲子「乱」戸田和子、狂言「舟ふな」ほか舞囃子、仕舞十数番で盛会であった。

## 呉竹会社中会

覚三男社中「呉竹会」では六月一日、東陽飯店で社中会を開催する。

## 新刊紹介

### 「明治能楽史序説」

古川久氏著

わんや書店発行

古川久氏の労作「明治能楽史序説」がこのほどわんや書店から刊行された。

明治維新から百年、日本の新しい発展のなかで、能楽が歩んできた道は、けわしく、また深い。筆者はその序の中で「明治百年目を迎え、各自関心のある部面で、わが国の近代化という問題を真剣に考え直すのは、現在を反省し将来を見通すために何よりの好機会である。私は明治の能楽をその受難の歩みとして受取ったが、ここには現在の繁栄に酔ってばかりいられないことを諭す多くの教訓が潜んでいる。「過去の光に照らして現在を学ぶ」というのは、また、現在の光に照らして過去を学ぶということをも意味しています」と語っている「歴史とは何か」（F・H・カー）には「歴史の機能は、過去と現在との相互関係を通して……」

る。明治百年を意義あるものとするには、現在との関連を保つ歴史を記すことが、何よりの事業であろう」と記しているが、全ページ三百五十頁におよぶ概説、研究、論考は、十五年間にわたる非常なる努力の集大成ともいえよう。明治の能楽についての著作は多いがこの著は、そのすべてにこたえてくれる内容と蘊蓄をもっている。

主題は三部に分かれ、「明治能楽史概説」「欧米人の能楽研究」「明治能楽史論考」のいずれも貴重な資料と史実により、鋭く、暖かい著者の眼で基礎資料をまとめ読者に生き生きとした明治能楽史を展開してくれる。年表も豊富にまた詳細な凡例、索引等、能楽に注ぐ著者の愛情と気力が強く感ぜられる貴重な著作である。

大きさ　A5判、総頁　三百五十ページ、クロス張り、口絵、鋳造


小料理と樽酒　●ご会席にもご利用下さい●
安田屋
名古屋・東新町東北側
電話（971）0916・0158番

〈新刊〉
池田和市著　うたい名所を歩く　価600円　〒70円
全国の謡曲名所旧蹟を足でたずねた紀行集
宝生宗家著　図解仕舞集第8巻　価700円　〒70円
加茂・小袖曽我・藤・松風・高野物狂　他
東京都千代田区神田神保町3-9　振替東京4163番　わんや書店　東京都中央区銀座8-7-5　電話（571）0514

欧風料理　とんかつ　きん亭
名古屋市千種区大久手町4-11　TEL731-3680

みなさまの新しいビジョンセンター
眼鏡・光学品専門店
メガネのムラタ
名古屋市昭和区阿由知通り2ノ23　TEL 741—3706
昭和区役所（御器所電停）北へ100メートル東側

# 能楽の友

題字は熱田神宮　篠田宮司筆

発行　能楽の友社
名古屋市千種区吹上本町2—20
（郵便番号　464）
電話（731）7984
振替口座　名古屋　36393

購読料　1年　300円
郵送の場合　1年　400円
一部　30円


**⊙購読のお申し込み**

本紙のご購読は一カ年三百円、郵送の場合は四百円。お申し込み方法は、能楽の友社、または先生にお申し込み頂ければ幸甚です。

なおご送金の場合は、払込み料金能楽の友社負担の用紙をお送り致しますから、はがきにて申しつけ下さい。

## 能「花月」「船弁慶」上演

### 第4回 名古屋薪能

**第四回 薪能**

八月三日(日)午後五時半始
熱田神宮境内

**能組**

舞囃子　養老　喜多流　長田驍
能　花月　観世流　殿島修二
火入れ式　熱田神宮　長谷権宮司
御挨拶　名古屋市長　杉戸清
舞囃子　安宅　金剛流　大塚一二
能　船弁慶　宝生流　内藤泰二

（以上のほかに狂言（曲未定）と仕舞数番あり）

主催　名古屋楽師協会
後援　名古屋市教育委員会

## 「頼政」のこと

村山祐吉

この能で忘れないのは、戦前大阪の朝日会館で、先代金剛巌師の所演で、前シテの名所教えの情趣に加えて、後シテの素晴らしかったこと、殊に床几に掛ってからの合戦の模様は鮮烈極まるもので、今も目に浮かぶほどであった。当代では、まず喜之師のものであろう。

前シテは常の翁ではなく、一くせも二くせもある尉で、ワキ僧の問いに答えるのでも「尉は知らず候」ととぼける。前段の一つボイ

「頼政」のスケッチ
仙田雪山子画

初冠で月は出ても河面に立ちのぼる夕靄のおぼろおぼろと暮れなずむ初夏の夜越が、若葉のむせるような香りを漂わす。

丁度対岸の興聖寺の山吹も今がまっ盛りだろう。昔の源平先陣争いのたちばなの小島崎から岸づたいに平等院にかかる。釣殿の前に昔は藤の棚があって見事な花をつけていた。

「扇の芝」も今の観光にくる若い人々には、何の興味がないのか素通りする人が多い。徒らに平等院の高い入園料と拝観料と二重に徴られるのみ、地下の頼政も苦笑いしていることであろう。

それはさておき、後シテは、面も装束も事変り面は本曲のみに使う叛骨たくましいつらがまえとなり、頼政頭巾という扮たちにて、「伊勢武者は皆緋縅の鎧着て」といよいよ目も鮮かに合戦の幕があき、サシになって床几にかかってからは、息をもつがせぬ数々の聖

つぼみを振へ川水に」瓜下盛み迫んで行き、宇治川の激流に死闘が展開する。「さる程に入り乱れ」衆寡敵せず戦は利あらず、今は何をか期すべきと唯一筋に老武者が七十余年の数々の思いを埋木の辞世に託して扇の芝の露と消える。

三修羅　朝長、実盛と共に仲々の難曲、朝長は哀怨、実盛は幽怨。本曲は哀れのなかに、あきらめきった、からっとしていて初夏の季節に最もふさわしい。

ついでながら、頼政の首は敵には渡さじと家来が故郷の下総古河へ持ち帰る途中、岐阜県関市附近で葬むり、蓮華寺境内に墓所がある。また古河市に頼政神社として祀られており、地元の平等院最勝院内にもある。

※筆者村山祐吉氏は観宮能楽評論家として活躍、仙田雪山子画伯の依頼を得てとくに筆をとって頂きました。（編集部より）

## 厳かに京都薪能

### 平安神宮で挙行

京都薪能はことし二十周年記念能として、さる六月一日、二日の二日間にわたって平安神宮で行なわれた。

主催は京都市・京都能楽会・協賛　平安神宮・後援　NHK京都放送局で、番組はつぎのとおりであった。

第一日　観世流「翁」　金剛流「絵馬」観世流「羽衣」彩式、観世流「鷺」大蔵流狂言「骨皮」観世流「小鍛冶」

第二日「弓矢立合」（観世流・金剛流・金春流）観世流「鶴亀」大蔵流狂言「末広がり」　観世流「熊野」村雨留、観世流「安宅」勧進帳、滝流、金剛流「乱」

## 6月の謡曲狂言番組

**NHKラジオ第2放送**

毎日曜日　午前8時から9時まで（再放送）
毎金曜日　午後2時から3時まで

**6月8日(日)・13日(金)**
宝生流「高野物狂」宝生　九郎　ほか

**6月15日(日)・20日(金)**
観世流「熊野」大西　信久　ほか

**6月22日(日)・27日(金)**
和泉流狂言「鈍太郎」野村　万蔵　ほか
独吟・喜多流「鵜之段」喜多　節世
宝生流「網之段」今井　泰男
観世流「笠之段」観世　静夫

**6月29日(日)・7月4日(金)**
喜多流「田村」和島富太郎　ほか
観世流「羽衣」山本　勝一　ほか

**観世会定式能**（四十四年度第三回）
六月十五日(日)午前十一時始
熱田神宮能楽殿

素謡　高野瀬　透　後藤　契雲
三輪　仕舞　敦盛　河村　鉦二
羽衣　仕舞　杜若　加藤総兵衛
前　阿漕丸　稲生　芳雄
後　塚本　秀雄
養老　泉　藤井　大槻　秦孝　徳三　秀夫
水波之伝　高安　立石　高安　滋郎　勝久　澄雄
後見　梅田　大槻　邦久　文蔵
地謡　田鍋　覚　惣一郎　鉦一
飯田　丹下　殿島　後藤　三賢　修二　契雲
高野瀬　片山　南条　増田　秀一　透　博太郎　雄　鬼頭　田　喜太郎　昭彦
狂言　井上松次郎　井上礼之助
二千石

喜多流　和調会
六月十四日(土)午後一時始
熱田神宮能楽殿

番外仕舞　田村　キリ　新熊　弘蔵
湯谷　長田　驍
藤戸　栗谷　菊生
（仕舞）猩々　伊藤寿枝樹　壁谷寿静、月宮殿　西川寿々千恵　西川寿々紀、猩々　西川里金　西川寿瑛、葛城　伊藤さく
唯一　雲雀山　和島　敏子　後藤孝一郎　鉦一　覚　三男
唯一　青刈　西川里喜寿　後藤孝一郎　鉦一　覚　三男
（仕舞）田村　西川寿紅、猩々　西川寿々加、葛城　西川満寿子、月宮殿　西川寿々敏
唯一　高砂　西川長寿　河村総一郎　田鍋惣一郎　鬼頭喜太郎　覚　三男
松風　西川司女　河村総一郎　田鍋惣一郎　覚　三男
実盛　松村治郎兵衛　覚　後藤孝一郎　鉦一　藤田　昭彦
素謡　井筒　辻田　たま　川井さみ子
唯一　放下僧　西川梅代　覚　後藤孝一郎　鉦一　藤田　昭彦
葛城　西川司津　河村総一郎　田鍋惣一郎　鬼頭喜太郎　藤田　昭彦
番外独吟　鬼界島　二井　栄逸
能　羽衣　和島富太郎　西村　欽也　河村総一郎　田鍋惣一郎　鬼頭喜太郎　藤田　昭彦
附祝言（入場歓迎）

（三面へつづく）

## 装束談義（十九）

# 烏帽子（えぼし）

ふとふみ　二井栄逸

奥山の湖底に沈んだ秘箱の中にある虹色の玉のような得がたいもの……。ロマンチックな言い方かも知れないが、そのような宝玉を持っている人はこの世の中にたくさんいる。

趣味に徹し、趣味を自分のものにしている人達。能楽師、作家、音楽家、建築家等、素晴らしい作品や芸を世におくり出す人達等、みんな無形の得がたい宝玉を持った人達である。その虹色の光芒はいろんな意味で社会を明るくし、自分を豊かにしてゆく。私は、美しく年老いる、ということをよく文にも書くが、この宝玉を持った人達は、誰しもが美しく年老いてゆくからである。それは、檜の芽のような若さ、若結のようにピチピチした若さを死ぬまで心の中に躍動させているからであろう。

かつら、楓、いちょう等の葉は、黄金色、青銅色、深紅色等の光に満ち満ちて大地に落ちてゆく。それも、一段と輝きまさる時が最後なのだ。そして、いさぎよく、何のくったくもなく、さらさらと散ってゆく。その華麗な落葉のように、天寿を全うし、社会のためにつくしきって死んでゆく人達、私は、現実にそのような人達をいくたびも見ている。

私達のジャンルで言えば、円熟した芸を人に見せながら舞台の上に散ってゆく人達のことである。

謡曲、仕舞、囃子等お稽古をしていられるみなさん方も、どうかみずみずしく、豊じゅんな日々のたつきの中に、美しく年老いてゆく幸せな方々であれかしと祈る思いである。

× × ×

能装束七つの分類の内、冠り物を順次書いてみる。冠り物を三つに分けると、烏帽子類、冠類・頭巾類と、三通りに分けられるが、本稿では、烏帽子類を説明することにしたい。

烏帽子は、曲柄により、現在次のように十種類あまり用いられている。

●翁烏帽子（おきなえぼし）

これは、黒の立烏帽子で翁の式に被る烏帽子で、いわゆる観世撚という紙撚を紐として結ぶ。これは、鶴亀、雨月、春日龍神、小督等のシテにも用いられる。紙でこしらえ、黒うるしで塗りかためたもの。

●小立烏帽子（こだてえぼし）

翁烏帽子より、やや小さいもので、観世流では松風等の物着後に用いている。

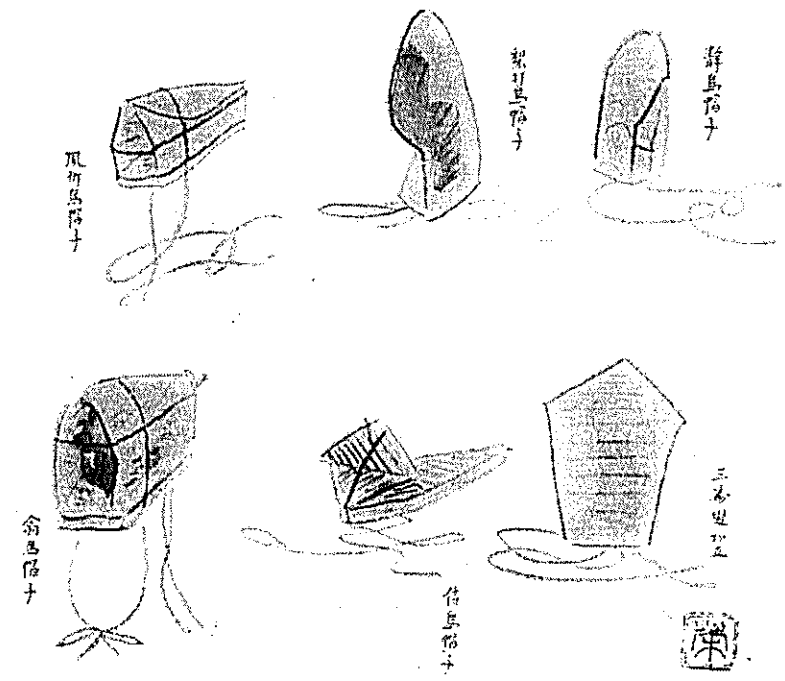
●風折烏帽子（かざおりえぼし）

上部を折りつけ、黒漆でぬり固めたもの。また、草紙洗小町の物着後とか、三輪等に用いる女風折烏帽子は、やや小型である。

また金地のものを金風折烏帽子という。常の風折は揉しわがあるが縦に条目のあるのを柳寂風折烏帽子（やなぎさびかざおりえぼし）と称し、遊行柳、西行桜等のシテが頂くもの。

●静烏帽子（しづかえぼし）

常の前折烏帽子（まえおりえぼし）と、同じであるが、金地に文様がある。前折りというのは、前方を折り平（たいら）にして形を




●後折烏帽子

立烏帽子は普通、前折りであるが、花月、東岸居士等のシテには後折りの烏帽子を頂き、遊狂の興いを表現する。

●梨打烏帽子（なしうちえぼし）

梨打ちにかぎらず普通烏帽子は一面にさざなみのような横じわがあるが、梨打ちは、その後部を平にし、上部を右または左に折り傾ける。右折りは平氏、左折りは源氏である。すべて修羅能に用いるもので、頼政を除くほかはこれを着る。なおこれをきるときには、鉢巻のあるのが定法である。

●侍烏帽子（さむらいえぼし）

三角形の折烏帽子で武士に用いるもの。

●大臣烏帽子（だいじんえぼし）

高砂等のワキが用いる烏帽子で調度掛を用いるのが定法。

●小結烏帽子（こゆいえぼし）

烏帽子折の子方等に用い、さむらいえぼしに似て元服のよそおいを表現したもの。

●刺先烏帽子

翁の三番叟がいただく烏帽子で三番叟切立ともいう。

（次号は烏帽子類と静えぼしを

---

## 観能の手びき

### 六月の能　熱田神宮能楽殿

――六月十五日（日）観世会能――

**養老**（ようろう）

水波之伝（すいはのでん）

シテ　大槻　秀夫
前ツレ　泉　泰孝
後ツレ　藤井　徳三

ワキ（勅使）は真ノ次第の囃子にてワキヅレ従者を伴って出て立て、美濃国本果にて霊泉の湧き出ることを、雄略天皇から、その検分を命ぜられて養老の滝に来た旨を謡ってワキ座に着く。

真ノ一声の囃子にシテ熊翁（父）は桶を持ったツレ（子）を先立て、出、橋懸にて向き合い、連吟の後舞台に入り、サシ、下歌、上歌を謡い、松蔭の霊泉を讃える。

ワキは詞をかけて、勅使の意味を伝える。親子は敬々しくこれを聞いて、シテはこの子が霊泉を発見して父母に与え、養老と名づけることになった所以を語るのである。前段は、さして型もなく、今度は、小書「水波之伝」であるので、ロンギに特殊の型があり、位は重くなり異色演出がなされる。

中入はシテが先に入り、ツレは来序で入る。間狂言は省かれ、すぐ出端にて天女が出て天女ノ舞を舞い、「ありがたや」と、シテの謡を謡う。シテは半幕を揚げさせて後より出て「われはこの山」と謡い出す。神舞は普通より段数を増した緩急に富む面白いものである。「波悠々たり」の後にイロエが入るのも異色演出で、観者には大変にむづかしい大曲とされている。

**百萬**（ひゃくまん）

シテ　柴田初太郎

次第の囃子で、子方百万の子を先にしてワキが登場し次第、名ノリの後、子方は脇座に坐る。

ワキは常座近く行き、間狂言に詞をかけ、百万という女物狂のいることを聞いてから座つく。

間狂言は狂女を誘い出すために大小鼓の入り方で拍子念仏を

（二面「観世会定式能」つづき）

子方　河村　大
柴田初太郎

**百萬**

間　酒村　弘歌　谷口　正晴
佐藤　友彦　福井啓次郎　助川　竜夫
後見　杉村　竹翠　大飼　東吉　藤田六郎兵衛
柴田　収武　地謡　竹内　六郎　尾関　健太郎
真柄　米次　大槻　文蔵
河村　鉦二　藤井　久雄　藤井　徳三

仕舞

賀茂　大槻　文蔵
雨月　南条　秀雄
鵜之　藤井　久雄

**鉄輪**

片山博太郎　西村　欽也　河村総一郎
高安　勝久　田鍋惣太郎　鬼頭　八郎
佐藤卯三郎　鬼頭　季信

附祝言

会員申込受付　関係各楽師方及名古屋観世会事務所
名古屋観世会事務所＝名古屋市千種区本山町一ノ三一
柴田初太郎方　電話七五一―六六七六番

---

## 狂言案内

七月二十日（日）
やるまい会
牛盗人

が牛を盗んで親を弔う事、何の科にかなり候べき」と、牛奉行は盗みをするほどの者だが、小賢しい

**鉄輪**（かなわ）

シテ　塚本　秀雄

最初に間（あい）狂言貴船の宮の社人が出、丑刻詣をする都の女に、神託を告げる旨を陳べて狂言座に着く。この形式を狂言口開（くちあけ）という。

前シテ都の女が次第の囃子にて出、嫉妬の念抑え難く、都からはるばる貴船ノ宮に参詣する意を謡い、大小前で床几にかけ、笠を脱ぎ掛手に持って前に当てている。

間狂言の社人が神託を告げ、鬼になりたいなら、身に赤い衣をつけ、顔に丹を塗り、頭に鉄輪をいただき、その三つの足に火をともして怒る心を持てと教え「急ぎ帰り告（つげ）の如くに習され鉄へ」と言って退場する。シテはこれを聞き怨をこめた仕ぐさがあって荒々しく中入する。

後シテは鬼女となって出端の囃子で出て、橋懸り一ノ松でサシを謡い、ノリ謡のカケ合に舞台に入り「恨したる男の枕に寄り添い」で作物を見込み台に上る。以下或は恨み、或は恋う悲々の情を所作に見せ、やがて憎い女の命を取ろうとする様々の型があり、見どころの多い四番目ものの劇作で、傑作の中に数えられる能である。

### 名古屋から放送

「田村」と「羽衣」

きたる二十九日（日）NHK第2放送で、名古屋から「田村」、「羽衣」が全国放送される。

喜多流「田村」和島富太郎、二井栄逸、長田驍、新熊弘憲、笛・藤田昭彦、小鼓・後藤孝一郎、大鼓・吉田定男の諸師。観世流「羽衣」山本勝一、柴田収武、久田秀雄、高安滋郎、笛・藤田六郎兵衛、小鼓・田鍋惣一郎、大鼓・筧

---

**朝日狂言会**

六月二十二日（日）午後二時半始
熱田神宮能楽殿

番組「二人大名」「賽薬練（こうやくねり）」「猿座頭（さるざとう）」「素袍落（すおうおとし）」「六地蔵」ほかに素ばやし。

和泉流　和泉保之、野村又三郎、河村丘造、佐藤卯三郎、井上松次郎ほか

大蔵流　茂山千作、茂山千之丞、木村正雄

（有料）

**宝生会定式能**

六月二十一日（土）
熱田神宮能楽殿

素謡　敦盛　宝生公恵
能　井筒　辰巳孝
能　小町　宝生英雄

**宝生会定式能**

六月二十二日（日）午後二時半始
熱田神宮能楽殿

素謡　嵐山　水谷安子　塚田治子　鬼頭豊子
小督　山口圭子　西本富久枝　草之瀬照子　山田八寿子
羽衣　白石淑子　白滝史子
富士太鼓　川瀬裕子　川本通子　太田美恵子

〔舞囃子〕高砂五段山村昌子、吉野天人草之瀬照子、安宅川本通子、紅葉狩山口圭子

〔仕舞〕熊野木村ふみ子、鶴亀佐藤千代子、八島朽木まり子、綱之段坂本京子、鵜之段荒川はつ、清経森川みどり、敦盛橋本翠渓、班女清水むつ

素謡　千手　荒川はつ　白石和子　大鷹明子
通　小町　中尾寿満　田中きんえ　山村昌子

〔舞囃子〕草子洗小町西本富久枝、松虫水野あや子、葵城白石和子、巻絹深見一枝

〔連吟〕竹生島木村ふみ子佐藤千代子、吉野天人中沢文子早川芳子長谷川正子近藤みね子奥村貞子藤井弘子

素謡　雨月　中村つゆ　加藤あさの　鈴木高広

〔仕舞〕野宮橋本とも、雲雀山後藤節子、花筐芝村栄枝、笠之段伊藤睦子、笹之段中村つゆ、阿漕吉田妙

〔舞囃子〕巻老石田糸代、雲林院大鷹明子、班女田中きんえ、女郎花中尾寿満、深草黄子

---

**研究能**

羽衣　祖父江修一　高安勝久　河村総一郎　後藤孝一郎　池田季信
後見　加賀敏彦　柴田収武

**六月二十九日（日）午前十一時始**
**熱田神宮能楽殿**

# 古曲雑話 (5)

西村弘敬

京都の町の南に鳥羽という所がある。保元平治の世の乱れにともない、後鳥羽天皇が鳥羽の離宮に押し込められて、そのうえ強制的に出家せしめられ給い、さらに隠岐の島へ流謫せられ給い、遂にその島において御痛わしくも崩御せられた。

その頃、鳥羽に住んでいた親子の者で母親は早く死し、父親と娘とが残っていたが、父親は世をはかなみ遂に出家して行方知れずに家を出て行ってしまった。残った娘は生活が出来ないので、都の内にある知るべを頼って行くつもりで出掛けて行った。道がわかり難い所があったので、道行く人に道を尋ねたところ、この男は隠岐の島から出て来た人商人（ひとあきんど）の悪漢であったので、道を教えるようなふりしてあらぬ方角へ連れて行こうとしたので、その娘とがめたところ、やにわにねじ伏せ、猿ぐつわを噛ませ強引に引立て引立て山陰道の道へ連れて行き、遂に隠岐の島まで連れて行った。娘は道々の苦労やら心労のため、狂気を発して物狂いとなった。

（おきのはん）

自分の出身である鳥羽の御所に出でになった縁で、一層おなつかしく御痛わしくて、御出家からこの島まで流され給いたる道々の御有様などを曲舞に作り、謡い舞いながら狂い遊ぶようになった。一方先に家を出て行った父親は、僧体となって諸国を廻り廻って、遂にこの隠岐の島まで来てしまった。これも鳥羽に住んでいた関係で、後鳥羽の院の御跡を弔いに御陵にも参拝してきた。里人から狂

女の話を聞き曲舞を見物しているうちにこれが別れた娘であり、父であることが判り、悦び勇んで打連れ帰国したという筋合である。ちなみに、この曲のうちの「ケセ」を取り入れて、観世流の乱曲隠岐院として用いられている。

**第十一番　吉野（よしの）**

彼の有名な歌人紀の貫之が、未だ吉野を知らぬので、桜見物かたがた吉野山の寺社参詣のため、吉野へと行かれた。そこに一人の山賤（やまがつ）の老人が、花の木

で帰ったという筋合で、別段変った所もない曲である。

**第十二番　横山（よこやま）**

武蔵（むさし）の国の住人横山の十郎晴尚は、《おのちの庄》というところ一円を所領していたが鎌倉の公方（くぼう）の上意に背きたるため、本領を召しあげられ散々に疲労の身となって零落した。召し使いの者なども追々と去り、遂に夫妻二人となり、只一頭ある馬さえも飼草一すじもなくなり、今や頻死の状態となったので

蓋に十郎が未だ世にあった時には、時々は鎌倉へ出ることもあって、亀がえ谷（かめがえがやつ）に初雪と申す女と駒染を重ねていたことがあった。その初雪という女が十郎晴尚がひどく零落した身となったことを聞き、慰めのため訪れて来たが、生憎十郎が草刈のため留守であったので待つ程に、十郎も帰宅したので久し振りに面会して色々の物語をした。折り節丁度白い酒があったので酒宴を催し、十郎は肴にと夏狩のいわれを語り、昔在原の業平が罪を得て遠流の身となり当国に下り入間の郡今の川越の山家の庄へ行き、その長のひとり姫と契りし故事などを語り舞を舞い謡い明かした。そこへかねてから従弟（いとこ）の久米川何某を鎌倉へ遣わして色々と公方へ歎願させてあったのが漸く聞き届けられ、元の如く本領安堵の御教書を戴いて帰って来たので大変に喜び、一同打連れて御礼のため、鎌倉へ上ったという筋である。

ちなみにこの謡の曲（くせ）をとり観世流の乱曲横山として用いられている。

# 各会だより

## 山田社中春鶯会

五月は各会社中の発表会が盛んに行なわれた。

金剛流　山田仁三郎社中　春鶯会

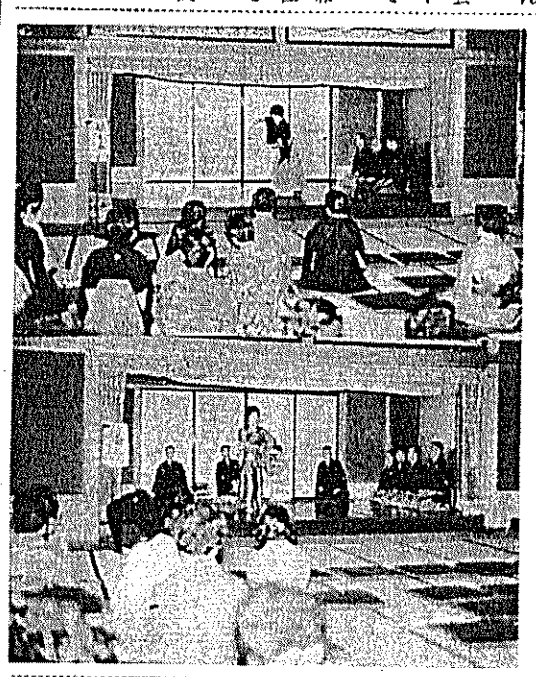
春挙謡曲囃子会は、さる五月二十五日に名古屋駅前松岡旅館で催された。

素謡、仕舞、連吟、独吟、舞囃子等三十数番。午前九時半始で社中の熱心な出演で日ごろの精進を発表した。

写真は(上)仕舞「殺生石」小関慶子さん(下)舞囃子「融」近藤かすみさん。

## 「金春古伝書集成」わんや書店から発刊

わんや書店では、このほど「金春古伝書集成」（表章・伊藤正義校注）を発刊した。



定価八、五〇〇円（七月末日まで特価七、八〇〇円）、わんや書店に申込めば内容見本が送呈される。

## 東京五流能

6月29日　帝国劇場で

きたる六月二十九日（日）東京丸の内帝国劇場で「東京五流能」が行なわれる。

第一部（午前十時開演）

喜多流能「経政」（烏手）後藤得三、和泉流狂言「文山賊」野村万蔵・三宅藤九郎、一調「松虫」観世流能「住吉詣」（悦之舞）観世元正、金剛流能「殺生石」（玉藻前）金剛巌

第二部（午後三時半開演）

金春流能「通小町」（イロエ之働）金春栄次郎、大蔵流狂言「二人袴」観世流能「千手」観世銕之丞ほか一調「羅生門」、宝生流能「鞍馬天狗」（白頭）宝生英雄

# 狂言案内

七月二十日（日）　やるまい会

## 牛盗人（うしぬすびと）

鳥羽の離宮の牛奉行は、法王御幸の時の御車を引く牛を預っていたが、或る雨の夜に牛が盗まれてしまった。探しあぐねて牛盗人を訴人したものには、同類たりともその科を許し、褒美は何なりともとらせるとの高札を出す。そこへ一人の子が、隣在の兵庫三郎という者が盗んで、よその土地の市へ引いて売ったことを告げる。牛奉行の命をうけた太郎冠者、次郎冠者は、兵庫三郎を召捕えてくるが訴人に対面してびっくりするのであった。

詮議のさびしさに、三郎は「当年は親の年忌に当たっているのだが、身上不如意のため法事ができない。それで牛を盗んで売り、その代りをもって追善を勤めた」と答える。奉行は〝牛を盗んで親を弔ったからといって、何の孝養になるものか〟となじるが、三郎は仏の故事を引いて滔々と牛盗人の理をつぎのように述べる。

「殺生偸盗、邪淫妄語飲酒戒。これみな仏のいましめなり。仏出世の御時、しょうしん比丘とて貧賤第一なる御弟子のありしが、親の追善あらんと思し召せども、さらに叶わず。ある所にて牛を一匹盗取り、盗みたる牛売ろうといえば勿体なし。ただ売ろうといえば妄語戒を破る。所詮山に入り、諸木に妄語戒を授け、戒の布施に取らばやと思召し、頓て深山に分け入り、諸木に妄語戒を授け、それより布施に取りたる牛売ろうと宣えば、市人出合い布に代ゆる。頓てお僧を供養し、かの布を布施に参らする。布施とは布を施すと、書きたるもこの謂われなり。仏弟子の御身にさえ、牛を盗んで親の追善をし給う。いわんや凡夫の某が牛を盗んで親を弔う事、何の科にかなり候べき」と、牛奉行は盗みをするほどの者だが、小賢しいことをいうと感じながらも、獄屋に引立てる……。

## 井杭（いぐい）

井杭という者に、なにかと目をかけてくれる何某は、井杭が行くたびに頭をたたく悪いクセをもっている。それがうるさいので清水寺に参籠しているうちに井杭は、それを着けると姿が見えなくなる不思議な頭巾を授かる。かくて、久々に何某の家をたずね、例によって頭を叩かれようとするとき、頭巾を着けると急に井杭の姿はみえなくなる。どうしても頭を叩けぬ何某は、折よく通りかかった占師に、人の失せ物を探し出せと頼む。はじめはよく当てた占師だが頭巾をつけて人目にうつらない失せ物をめぐって、何某と占師は遂にケンカになってしまう。

## 縄綯（なわない）

博奕好きの主は、負けがこんで遂に金銀どころか、召使いの太郎冠者まで引渡すことになってしまった。このことを隠して、主人は太郎冠者に、〝相手のところにいけ〟と命ずる。太郎冠者は〝またいつものように寄合われるのですか。あらぬお手慰みを世間の人はよくいわない〟とたしなめるが、〝そんなことではないわ〟と使いに出させられる。太郎冠者は〝バクチといっても、世間の人は五度に三度は勝つと聞くが、うちの主人ときたら、いまだ一度も勝ったことはない。負けて何が面白いのやら〟とぼやきながら相手の家につく。ここで初めて、自分がバク銭のかわりに追われ、そこで奉公しなければならないことを知るのだが……。


研究能　六月二十九日（日）午前十一時始　熱田神宮能楽殿

羽衣　祖父江修一
高安勝久　河村綜一郎　池田後藤孝一郎　鬼頭茂季信
後見　加賀敏彦　柴田収武
仕舞　風　加賀敏彦
松車　僧　高橋暁一

芦刈　佐藤塚本　太俊秀雄
刈間　西村欽也　吉田福井啓次郎　定男　寛　三男
仕舞　井上礼之助
藤戸　仕舞　柴田初太郎
観世武雄
宮間　西村弘敬　河村綜一郎　後藤孝一郎　寛　三男
大野弘之
仕舞　河村征二　柴田収武
鞠之段　加藤丈太郎
飼間　西村欽也　高安勝久　寛一　田鍋惣一郎　助川龍夫　鬼頭季信　井上松次郎
能鵜

狂言　鏡男　佐藤卯三郎　佐藤秀雄　井上礼之助
能野宮　通小町　柏崎　服部紗枝　竹内六郎　久田秀雄

（鈴鹿子）草子洗小町　西本高久枝、松虫　水野あや子、蔦城　白石和子、巻絹　深見一枝
（連吟）竹生島　木村ふみ子　佐藤千代子、吉野天人　中沢文子　早川芳子　長谷川正子　近藤みね子　奥村貞子　藤井弘子
素謡　雨月　中村つゆ　加藤あきの　鈴木　高広
（仕舞）野宮　橋本とも、雲雀山　後藤鈴子、花筐　芝村栄枝、笠之段　伊藤藤子、征之段　中村つゆ、阿漕　吉田妙
（舞囃子）菊老　石田糸代、雲林院　大盛明子、班女　田中きんま、女郎花　中尾時恵、唐船　深見智子、千鳥　[illegible]

七月二十日（日）午前十一時始　熱田神宮能楽殿

調友会

能船弁慶　河村梅若　大鶴義
前後之替　西村欽也　河村綜一郎　田鍋惣一郎　助川龍夫　藤田昭彦
ほか囃子、狂言、一調

（有料）

十周年記念やるまい会　七月二十日（日）　熱田神宮能楽殿

社中発表会（午前十時始）
素謡、狂言、独吟、仕舞、小舞　十数番

記念別会（午後四時半始）

| 番 | 組 | | |
|---|---|---|---|
| 牛盗人 | 井上礼之助　井上松次郎 | 縄綯 | 野村又三郎 |
| 井杭 | 野村栄介　野村万之丞 | 水掛聟 | 茂山千之丞　茂山千五郎 |
| | | 首引 | 野村万作　野村悟郎 |

（有料）　A一、一〇〇円、B八〇〇円、学生五〇〇円

# 熱田神宮の特殊神事

④

熱田神宮権宮司　長谷晴男

当日は午前八時、本宮に於て奉告祭を執行、午前十時、同じく本宮に於て発興の儀があり、次いで列次を整えて鎮皇門跡（鎮皇門は戦災に依り焼失）に神幸、祭儀を行い、再び列次を整えて本宮に還幸、神事を終る。

神事の次第は、午前八時、権宮司以下祭員斎館より参進、被所に於て被を受け、本宮瑞垣御門内所定の座に著き、小祭式に依り奉告祭を執行し、引続き権宮司、御霊代を神輿に遷し奉り、終って各退出、斎館に入るのである。

次いで午前十時、宮司以下祭員・神幸所役斎館より参進、被所に於て被を受け、本宮所定の座に著く。次いで宮司一拝の後、宮司、神輿の前に進みて祝詞を奏上する。

次いで祢宜、召立文を読み、神幸所役、召立につれて、夫々執物を捧持し、前陣・後陣の列次を整える。次いで発興、行列は表参道を出で、市場町、中瀬町を経て、鎮皇門跡に著輿、神輿を中央に据え奉り（西面）諸員所定の座に著く。

次いで宮司一拝、献饌、祝詞奏上、神楽、拝礼等があり、次いで再び列次を整え、神幸と同じ道筋を経て本宮に還幸、祢宜の召立につれて、執物を元の位置に復し、諸員所定の座に著く。次いで祭儀を行い、終って宮司以下祭員・神幸所役退出、斎館に入るのである。（神輿渡御の列次参照）

宮司以下祭員は斎服、神幸所役は夫々の役に応じ、狩衣、浄衣、裃衣、裃、迦陵頻装束、束帯、遊装束等を著ける。

尚、過般の戦災により、神輿、神幸具、神幸装束並びに鎮皇門を焼失したので、神幸の儀は一時絶えていたが、先年之を再興して今日に及んでいる。

## ○豊年祭　五月八日

豊年祭は、一月七日の「世様神事」と共に、農事に関係の深い重要な祭で、俗に「花の挿」「花の頭人」「おためし」とも称する。

これは当神宮相殿の神に坐す、日本武尊が、東夷御平定の際に、御道すがら普く農民に、農耕、養蚕、培綿の術を授け給うた御鴻徳を、今に追仰する祭である。

祭典の次第は、午前七時、宮司以下祭員斎館より参進、被所に於て被を受け、本宮瑞垣御門内所定の座に著き、小祭式に依り執行する。宮司の祝詞奏上に次いで、開扉所役が楽所の扉を開く外は、普通の祭典と異なる所が無い。

この祭に附随する行事として、楽所には、数日前から参籠の神職によって作られた、陸田模造の「畠所」と、水田模造の「田所」とを飾り、八日より十三日まで、之を一般に展観する。農民はこの飾物を見て、その年の豊凶を占うのである（以下次号へつづく）

## ○神輿渡御神事　五月五日

神輿渡御神事は、神剣遷座（前号の「薛笑人神事」の項参照）の縁故に因む神事で、遷座の際「都を離れて熱田に幸すれど、永く皇居を鎮め守らん」との御神託のまに〳〵、鎮皇門（当神宮の西門、旧国宝）に神幸せられ、楼上に神輿を舁上げ、遥かに皇居をみそなわし、皇城鎮護の祭を斎行するので、古くは「神約祭」とも称した。

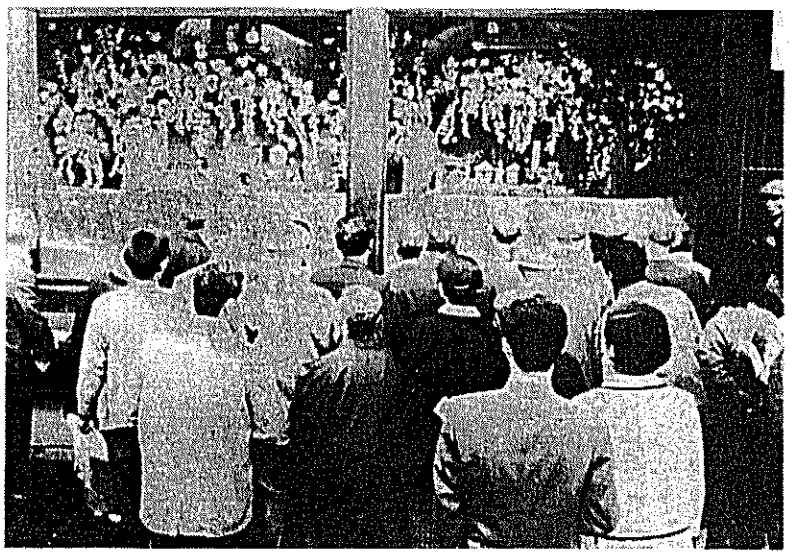
○神輿渡御神事　神幸の儀

神輿が本宮より出御になる場面である。褐衣を著けた輿丁が奉舁、神輿の前面「八の字型」に翳しているのが「紫御翳」、前方に在って御誘導申し上げるのが「前行所役（祢宜）」である。左右に相対して並んでいるのが、後陣の神幸所役で、神輿御通過後、進行方向に向って進む。

### ⊙神輿渡御の列次

先駆衛士（一員）
前導神職（一員）
大鉾（一員）　控（一員）
真榊（一員）
控（一員）
先駆衛士（一員）
警護（五員）　御楯（一員）　御鉾（一員）
警護長（一員）
警護（五員）　御楯（一員）　御鉾（一員）
控（一員）

御幾（一員）　御弓（一員）　御太刀（一員）
御鞘（一員）　御弓（一員）　御太刀（一員）
伶人（一員）　伶人（五員）
伶人（一員）　伶人（一員）　巫子（二員）
荷太鼓　荷鉦鼓　紫御翳（一員）
白丁（二員）　白丁（二員）　巫子（二員）　前行所役（一員）　紫御翳（一員）
御綱（二員）　輿丁（七員）　随従（二員）
神輿　宮司　権宮司　祢宜
御綱（二員）　輿丁（七員）　随従（二員）
側衛衛士（一員）
側衛衛士（一員）
御鉾（一員）　御墨壺（一員）　御糸巻（一員）　御火袋（一員）　御笙（一員）
御鞘（一員）　御手斧（一員）　御桜（一員）　御巻物（一員）　御琵琶（一員）
警護長（一員）
警護（五員）　供奉員（二員）
警護（五員）　供奉員（二員）　後衛神職（一員）
後駆衛士（一員）
後駆衛士（一員）



○豊年祭　「花の挿」の飾物

楽所に飾られた「畠所」「田所」を、参詣者が参観して、その年の豊凶を占っている場面である。

## 仕舞入門

その一　殿島修二

お謡を習っているうちに、いつとはなくお仕舞がやってみたくなるものである。一見何でもないことのように思え、すぐ舞えるようなつもりで始めてみたものの、なかなか思うように動けないので、すぐ止めてしまう人が多いようだが、謡十年、仕舞三年と言われるように三年位いは辛抱せねば楽しく舞うようにはなれない。それでも謡十年では一寸人に聴かせる程の謡は望めないに比べて、仕舞は三年やれば、とにかく舞台で大衆の前で充分見て貰える程度になれるので、この点仕舞の方がらくであるともいえる。しかしこれはその人によって違うことは論をまたないが概してといっておこう。

スポーツをやったことのある人は、たしかに早く習得するようだがこれにも例外はなしとしない。

謡よりは早く上達することには間違いない。始めてみたいが、とても近づき難いものかなと思いこれの方法を知るのが本書である。

んでいる人が多いことと思うが、敢てここにお奨めしておく。

能を見ている人々の眼つきや態度を見ても「型」をやっている人と、やっていない人では違うように矢張り「型どころ」を見究めようとする真剣さがあり、見る楽しみも倍増することは事実である。

さて、お仕舞を始めるにはどうするかということに発展してゆかねばならぬが、それはまたの機会にすることにして、始めること自体は至極簡単で、舞扇と白足袋とがあればすぐ始められるのであるが、ただ練習の時間があるかどうかが第一の条件となるのである。例えばお謡の練習は本を見て謡うだけで、許されれば声を張りあげずとも勉強は出来るのであるが、仕舞は動作でやって見なければ練習にはならないので何としても練習の時間をもたねばならぬのが必要条件と言えばいえよう。ただそれも近づき難いものかなと思いこれの方法を知るのが本書である。


第四回　名古屋薪能

8月3日、能二番を上演

楽の友社
区吹上本町2—20
号　464）
1）7984
古屋 36393
1年 300円
1年 400円
30円

演能案内

故片山博通師追善能楽鑑賞会
五月十一日(日)午前十一時始
熱田神宮能楽殿

叶石会能楽会
五月十七日(土)九時始
熱田神宮能楽殿

あなたに心をこめておおくりする……
富士道の婚礼道具
家具のふじみち
本社　名古屋市中区栄3丁目34番40号
ショールーム　TEL 代表（262）5547
工場　愛知県西加茂郡三好町　TEL (05613) 2—1178

観世流・金剛流
宗家本発行元
ひのき
檜書店
東京都千代田区神田小川町2—1　電話(291)2488—9　振替東京3552
京都市中京区二条通鉄屋町東入　電話(231)1990　振替京都113

味奏司　仕出し
新東奏司
名古屋市千種区楠元町2
電話（761）9428番

# 能樂の友

題字は熱田神宮　篠田宮司筆

発行　能楽の友社
名古屋市千種区吹上本町2－20
（郵便番号　464）
電話　（731）7984
振替口座　名古屋　36393

購読料　1年　300円
郵送の場合　1年　400円
一部　30円

## 名古屋 薪能近づく

### 能楽五流が総出演

名古屋薪能（たきぎのう）は、八月三日（日）熱田神宮で開催される。

既報のように、会場は熱田神宮神楽殿前、開演は午後五時三十分。

能五流の総出演で、神苑に市民納涼能楽の夕べの催しを繰りひろげる。

名古屋での「薪能」はすでに四回目になる。各地の薪能としては京都はととし六月一、二日に四千人の大観衆をあつめて開催された。（二十回）大阪薪能は生国魂（いくたま）神社で、八月十一、十二日の二日間開催の予定（十三回）。鎌倉薪能は九月二十二日（十一回）。また彦根薪能が秋に行なわれる。さらに東京では、ことし八月山王・日枝神社で初の東京薪能が行なわれることも新しいニュース。

名古屋薪能は、熱田神宮権宮司長谷晴男氏の火入れ式、さらに杉戸清名古屋市長のあいさつがあり市民の夏の恒例行事として愛好者の期待を高めている。

お能のお戻りには
ぜひ蓬莱軒へ
お立寄り下さるよう
お待ちいたします
熱田神宮東門そば
蓬莱軒
電話（671）5596－8

## 「広瀬賞」を受賞

### 金剛流・豊嶋弥左衛門師

金剛流シテ方豊嶋弥左門師は、このたび能楽界の功労賞というべき「広瀬賞」を受賞。なお豊嶋弥左衛門師は今秋十月東京金剛会で「道成寺」を上演する。番組（予定）はつぎのとおり。

十月二十四日（金）午後六時始
東京水道橋能楽堂

東京金剛会別会
道成寺を観る会

一調　葛城　夷野達也　観世元信
仕舞　枕慈童　金剛巌
狂言　鳴子遣子　大蔵弥太郎
能　道成寺　豊嶋弥左衛門　高安滋郎

## 7月の謡曲狂言番組

NHKラジオ第2放送
毎日曜日　午前8時から9時まで
（再放送）
毎金曜日　午後2時から3時まで

7月13日（日）・18日（金）
下懸宝生流「弱法師」宝生弥一　ほか

7月20日（日）・25日（金）
観世流「屋島」井上嘉久　ほか

7月27日（日）・8月1日（金）
喜多流「咸陽宮」金子五郎　ほか
大蔵流狂言「鐘の音」茂山忠三郎　ほか

◎番組は変更されることがあります。
ご了承下さい。

## 暑中御見舞申し上げます

熱田神宮　宮司　篠田康雄
権宮司　長谷晴男

八月三日（日）午後五時半始
熱田神宮神楽殿前広場
仮設舞台（但し雨天の場合は能楽殿）

### 能組

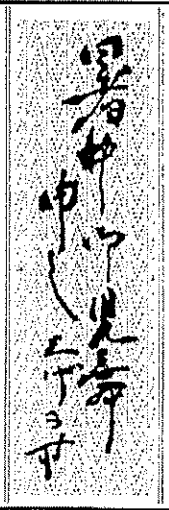
舞囃子（金剛）養老　長田驍　河村総一郎　野崎太郎　福井啓次郎　鹿取希世
能（観世）花月　高安滋郎　寛一郎　後藤孝一郎　藤田昭彦
間　佐藤秀雄
仕舞（観世）経正　有賀滋子
松虫　加藤良久
火入れ式　熱田神宮　長谷権宮司
ご挨拶　名古屋市長　杉戸清
舞囃子（金剛）安宅　大塚一二　河村総一郎　福井良久　鬼頭季信
仕舞（金春）鶴之段　前田茂穂
舞囃子（宝生）山姥　辰巳孝　寛一郎　鬼頭八郎　田鍋惣一郎　鬼頭季信
仕舞（観世）松風　加藤丈太郎
野守　杉村竹翠　梅田邦久
狂言　千鳥　野村又三郎　井上礼之助　井上松次郎
能（宝生）船弁慶　内藤泰二　足立孝二　西村欽也　高安勝久　吉田定男　田鍋洋一　鬼頭喜太郎　寛三男
間　大野弘之
附祝言

主催　名古屋市
協賛　熱田神宮　中部能楽師会

社団法人　名古屋能楽会
熱田神宮能楽殿

観世元正
東京都渋谷区恵比寿南一丁目二十一番地

名古屋中日文化センター
特別講座
観昭会
観世元昭




大西信久
大西智久
（〒530）大阪市北区堂本町十二
電話（06）〇七六四番

大槻清韻会
大槻秀夫
大槻文蔵
大阪市東区上町二番地

井上嘉久
京都市中京区両替町竹屋町上ル

片山博太郎

株式会社　上田観正会能楽堂
上田照也

山本博之
山本勝一

藤井久雄
藤井徳三
藤井楽人
神戸市葺合区熊内町二ノ九四ノ五
電話　㊐五一四四番

掬水会
柴田初太郎
柴田収武

澗水会
林甲子夫
名古屋市千種区今池町二ノ四九
電話（〇五二）㊐四一八三

## 装束談義（二〇）

# 冠（かんむり）

忍とふみ　二井栄逸

紫のしたたるような花、と、きけば、私は当下に、それは杜若の花ですネ、という位、杜若の濃紫の花が好きである。それに、やわらかで素直な若緑の葉も美しい。かきつばたは、その若々しい、すべ〳〵したひらたい葉を、すだれのように林立させ、葉先とすれ〳〵に紫の花を咲かせている。葉越しに咲く花は、いちはつ科のうちでは、かきつばただけである。

名鉄の三河線八橋で下車し、新緑のまぶしい田舎道をゆくと、すぐ森の中に無量寿寺があり、かきつばたが一面に咲いている。ここが能のふるさと、古えの三河の国八橋で、現在は、愛知県碧海郡知立町字八橋という。寺の入口には〝八橋旧蹟〟と彫った古碑がひっそりと建っており、寺内は閑雅に静まりかえっている。吹く風は爽かで始終私のたもとをなぶり、業平池の方へ吹いていってはかきつばたの葉先をなびかせている。目曜日でないにしても、こんなに静かな所は珍らしいと思う位。

無量寿寺には、業平の木像も蔵されている。また、寺内には、業平化粧の井が昔をしのばせており業平池には、八橋になぞらえた橋が風情をそえている。

在原の業平がこの杜若を見て、都に残してきた妻をおもいながらかきつばたの五文字を上の句に置いて

からころも　きつゝなれにし
つましあれば　はるばるきぬる
たびをしぞおもう

と、詠んだのも、紫の香がただようこの風景であったのだろうとしみ〴〵思う。この歌からあの艶麗閑雅な能が誕生したのだ。

世阿弥は、この歌を基に、まことに情趣つきせぬ能を作り、不滅のものにしたのである。

× × ×

さて、装束について今日は、冠り物の内、冠類を書いてみる。冠類の内にも、初冠（ういかんむり）透冠（すきかんむり）類と、金の瑰珞の垂れた天冠類と、瑰珞の無い輪冠類と、三つに分類される。

今日は、初冠を説明してみたい。初冠には、垂纓、巻纓、立纓の三種があり、垂纓は文官、巻纓は武官、立纓は天皇と決められていた。能にあっては、概ね、高貴の役に垂纓をつかい、他は巻纓のようである。

○初冠（ういかんむり）

融・老松等のシテは、垂纓をつかい、杜若、井筒等は巻纓である。なお老松のシテには、初冠に松をかざすことがあって、これを松かざしという。また、巻纓にはすべて追懸をつける。

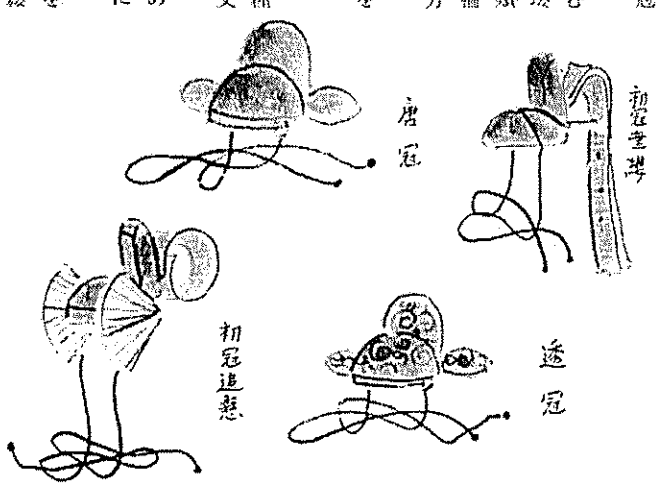
○透冠（すきかんむり）

纓の代りに巾子を立てたもの。

○唐冠（とうかんむり）

小べしみの面をつける曲等、頭（かしら）の上に之を頂く。その他、鶴亀、咸陽宮、加茂等のシテ及び、張良、東方朔、西王母等のワキがこれを冠して、唐人または位のあることを表わすのである。

（スケッチは、初冠を頂いた杜若のシテ、冠類各種）




## 玄恵法印生誕七百年記念
## 大蔵流狂言大会

狂言始祖として、また、狂言作者として名を伝えられる玄恵法印（一三六九～一三五〇）生誕七百年を記念して、大蔵流では流祖の祭祀をいとなむ意味から、東京、京都、大阪はじめ各地で記念狂言大会を行なう。

都では、七月十二日京都観世会館で、大蔵流のオール・メンバーで公演される。主な曲目は次のとおり。

「釣狐・白式」大蔵弥太郎　善竹圭五郎「石神」茂山千作　山本則孝「唐相模」茂山千五郎　茂山忠三郎　善竹幸四郎　善竹玄三郎　舞囃子「安宅」片山博太郎「鶴弁慶」金剛巌

なお記念狂言会は、大阪（八月二十四日）につづき、松山（九月二十一日）北九州・八幡（同二十四日）熊本（同二十五日）大分（同二十七日）福岡（同二十八日）で地方公演が行われる。出演は、家元大蔵弥太郎はじめ茂山千作、茂山千五郎、茂山千之丞、善竹忠三郎、茂山忠三郎の諸師ほか

【おことわりとお知らせ】

◎各会、各師より暑中見舞広告を頂き厚く感謝申し上げます。七月号、八月号の二回にわたって掲載いたしますのでご了解下さるようお願い致します。

◎仙田雪山子画伯スケッチ、紙画の都合で八月号に掲載致

### 第十三番　橋（はしがら）

漢の武帝の頃に、玻玖（はきう）の里というところに、大瓶（おうがめ）の如き大橋の実がみのりたる山を武帝が聞き及ばれ、臣下の者に怠ぎ見て参れとの宣旨が下り

### 第十五番　七夕（たなばた）

本曲も前掲の橋と同様実際には在り得ない空想的な作り事のように思われる曲である。漢の武帝が天上の星の運行やら色々の有様を

た由を申し、この大橋は一花千年と十花一万年を保つといわれるもので、彼の西王母の園の桃と同じく世に珍らしき芽出度き極みなれば君に捧ぐるとて舞楽を奏し飛龍に乗りて帰ったという曲である。

然るにこの涿鹿の地へ行くには二日三日の間は道に人家絶え煙を見ることもなく、岩石重畳として馬蹄の凌ぐべき道にあらず、また東の方へ廻らんとすれば烏江（お

た。


梅若六郎
梅若景英

研能会
橘香会
梅若万三郎

梅猶会
梅若猶義
梅若盛義
梅若猶彦

名古屋修諷会
梅若修一

邦謡会
名古屋謡曲仕舞教室
梅田邦久
名古屋市昭和区台町二丁目一六—五　電話（八〇）四六三二

河村一謡会
河村叶石会
河村鉦二
河村総一郎
名古屋市昭和区前山町一—二三　電話（七六一）四八六二

宗家宝生九郎
東京都文京区本郷一—五—五

観瀬会　芹川秀子
嘉謡会　加藤総兵衛
猶恵会　熊沢恵美子
此水会　高野瀬透
雄謡会　下田雄三　大阪市東区高麗橋詰町五三

壺泉会
泉嘉夫
名古屋市昭和区山里町　南山大学八イム二号　電八三一—三一八五
大阪府下四条畷町雁屋　電（大東）七六—一二六九

竹韻会
杉村竹翠

毎日婦人文化センター
名古屋風韻会
殿島修二

金剛巌
金剛永謹

名古屋和泉流
狂言共同社

金剛流春鶯会
山田仁三郎

中部金剛会
山田仁三郎

広田後援会
広田陸一
広田泰三

名古屋菊扇会
広田泰三
能泰

高安滋郎
西村弘敬
西村欽也

京都高安会
岡治郎右衛門
京都府下長岡町開田　静野一—一七

豊嶋十郎
〒二七一　松戸市下矢切五五　電話（〇四七三）②一九八二

谷田宗二朗
京都市北区衣笠街道町31—7　電話（四六三）四八七五番

桂会
岐阜市松屋町　後藤方

幸友会
福井啓次郎
福井良久

者として名を伝えられる玄恵法印（一二六九～一三五〇）生誕七百年を記念して、大蔵流では流祖の祭祀をいとなむ意味から、東京、京都、大阪はじめ各地で記念狂言大会を行なう。

# 観能の手びき

## 八月の能

内場　壙広　宮前　神殿　田楽　熱神

八月三日（日）第四回名古屋薪能

### 花月（かげつ）

シテ　殿島修二

次第のハヤシでワキ座僧が登場筑紫ノ国彦山の麓に住む僧で、在俗の時、七歳になる一人子が行方知れずになったので、出家して諸国を行脚、都に着き、清水寺に参り、花を眺めようとの着セリフを述べる。間狂言門前の者が、花月という人を見せようとて橋懸へ行き、幕へ向って呼び出す。

ハヤシはなく、シテ花月は喝食の姿で烏帽子をつけ、弓矢を携えて現われ、舞台正中に立ち、自分の名の謂われを述べて、小唄を戯れに謡い、咲き乱れた桜に驚かいると見て、目付柱の方を見、花を踏み散らす鶯を射て落そうと弓に矢を番えて狙い寄るが「仏の戒しめ給う殺生戒をば破るまじ」にて弓矢を打捨てる。ここが弓の段と称し、謡も型も趣に富む。

次いでシテは、クセを舞う。

ワキはこれをとくと見て、この少年が尋ねる我が子であることを識り、その素性を問い糺して名のる。間狂言も、その事を聞いて二人の邂逅を喜び、さらに羯鼓の舞をすすめる。

シテは物着に羯鼓を前腰につけ撥を持って立ち、羯鼓舞を舞い、続いて幼い時天狗に連れられて諸国の山々を廻り歩いた有様を、地謡につれ基本的な型によって、興味豊かに見せる。

シテは終始下に居ることなく、所作の連続であるため飽くことのない面白い曲で劇能ものの中でも最も大衆的で、薪能には相応しいものといえよう。

### 舟弁慶（ふなべんけい）

シテ　内藤泰二

次第の囃子で、子方源義経を先頭に、ワキの武蔵坊弁慶がワキツレ諸共に登場、子方は脇座にて床几にかける。ワキは同行の静を都に返すようにと義経に進言して静の宿へ使者として行く。

橋懸一ノ松から幕に向って案内を乞う。前シテ静が「武蔵殿とはあら思いよらずや」と謡いながら三ノ松に出でワキと応対する。

やがて舞台に入り正中に下居して子方と相対する。義経もひとまず都に帰るようにと言い聞かせ、それより別離の悲嘆にくれる情味に満ちた場面が展開されるが物着までは、さしたる所作はなく、笛座の前にて物着に烏帽子をつけて「立ち舞うべくもあらぬ身の」と謡いながら大小前に出で、クセ、中ノ舞を舞い、訣別の涙になせび「烏帽子直垂脱ぎ捨てゝ」と烏帽子を前に脱ぎ落し「涙に咽ぶ御別れ」としおりながら立ち、静かに中入する。

子方は床几に残る。やがて間狂言によって舟の作り物がワキ座前に出され、一同はこれに乗る。

間狂言の船頭は艪を漕ぎながらワキとの謡合いのうちに俄かに風が夢って、怒涛の逆巻く情景になる。正言のセリフと所作、囃子の「涙がしら」という手組によってそれが、面白く表現される。

いよ／＼早笛の囃子にて後シテ平知盛の怨霊が薙刀を提げ、怒涛の中より浮び出でた態にて颯爽と登場する。子方義経との渡り合いが展開される。舞働きが入りシテの活躍はめざましいものがあり、見どころが多い。ワキは子方と怨霊の間に割って入り、数珠を揉んで祈り、ついに波間に退散することになって終る。

この船弁慶も、名曲中の名曲でよく演ぜられるが、何度見ても興味深い見飽かぬものである。

---

漢の武帝の頃に、玻玖（はきう）の里というところに、大瓶（おうがめ）の如き大橘の実がみのりたる山を武帝が聞き及ばれ、臣下の者に急ぎ見て参れとの宣旨が下り臣下の者は早速玻玖の里へ赴き一人の老人にこのことを尋ねた。

老人はそのようなことは一向に知らぬので多分よそのことであろうと答えたが、どうやら惜しんで隠している様子なので、隠すならば重き罪科にとわれると告げたので老人は探し求めてくる間お待ち下されとて山の中へ行き、やがて戻り来り、こんどは勅使を案内して大橘のある所へ連れて行った。勅使は驚いて早く木よりおろせと命じて木よりおろすと、ふしぎや橘が二つに破れ砕けて、中から二人の仙人が顕れ出た。

そしてこの仙人の一人は東園公、今一人は夏黄公といい、木の実の中に月日を送り酒を飲み舞楽をなし碁を打って楽しみ居るが、臣下の者があって、この者が或る時、庭の池に柳の枯葉が浮いているのに蜘蛛（くも）という虫がその上に乗って風に送られて岸へ着いたのを見て遂に舟を案出した。黄帝を始め兵一同これに乗り烏江を押渡り蚩尤の軍と激戦を交し、遂に蚩尤を亡ぼしたいきさつを謡ったもので、彼の自然居士や藤栄の謡の曲（くせ）にある故事と同

# 古曲雑話

## (6)

## 西村弘敬

この曲も支那大陸における歴史的の物語である。昔軒轅黄帝の時代には万機の政事正しく行なわれ世は泰平であった酷には、また蚩尤（しゆう）という悪逆無道の臣下もあって、常に天下を覆えさんと計る者もあったので、黄帝は時に兵を送り征伐の戦いをしていたが、蚩尤も追々と追われ、兵一万にも足らぬ弱体となって涿鹿という

---

四月）熊本（同二十五日）大分（同二十七日）福岡（同二十八日）で地方公演が行われる。出演は、家元大蔵弥太郎はじめ茂山千作、茂山千五郎、茂山千之丞、善竹忠一郎、茂山忠三郎の諸師ほか

然るにこの涿鹿の地へ行くには二日三日の間は道に人家絶え煙を見ることもなく、岩石重畳として馬蹄の凌ぐべき道にあらず、また東の方へ廻らんとすれば烏江（おおこう）という湖水ありて空飛ぶ鳥にあらざれば行くこと叶わぬので一同困却することになった。然るところ、貨狄（かてき）という

---

た曲を申し、この大橘は一花千年と十花一万年を保つといわれるもので、彼の西王母の園の桃と同じく世に珍らしき芽出度き極みなれば君に捧ぐるとて舞楽を奏し飛龍に乗りて帰ったという曲である。

なお、この曲は古い金春流の能である由。

第十四番　涿鹿（たくろく）

---

わたって掲載いたしますので、ご了解下さるようお願い致します。

◎仙田雪山子画伯スケッチ、紙面の都合で八月号に掲載致

第十五番　七夕（たなばた）

本曲も前掲の橘と同様実際には在り得ない空想的な作り事のように思われる曲である。漢の武帝が天上の星の運行やら色々の有様を知りたく思われ、張賢と申す臣下に見て参れとの宣旨を下されたので、張賢は浮木の後に棹さし河上さして登って行き天の河原に着いた。

そこに一人の男が牛を曳いて来り、また一人の女が糸を繰り、機（はた）を織る気色が見えた。いかなる者ぞと尋ねたところ、茲は銀河と申す天の川で、河を隔てて住む二つの星で男は遊子と申し、女は伯陽と申す年に一度今日の逢瀬を楽しむのである由申し、七夕の星の謂れなど色々と物語り、また五百機（いをはた）織るを見せ申さんと、五百の天人を集め、五百の錦を織りて見せ、且つ舞楽を奏して勅使を慰めたという筋である。


河村一謡会
河村叶石会
河村鉦二
河村総一郎
名古屋市昭和区前山町一―二三
電話（76）四八八二番

宗家宝生九郎
東京都文京区本郷一―五―五

近藤乾三
東京都豊島区西巣鴨四―二七五

緑雲会
東京都港区西麻布四―一八―二八
野口緑久

喜多流
二井会
二井栄逸

三宅藤九郎
三宅右近
東京都豊島区北大塚一―二四―一六

和泉保之
東京都豊島区駒込六ノ七一三

茂山千作
茂山千五郎
茂山千之丞

善竹忠一郎
神戸市東灘区御影町郡家大歳二一

茂山忠三郎
〒565 吹田市山手町一―二二―十一
TEL（〇六）三八八―三五二八

金剛巌
金剛永謹

名古屋能楽鑑賞会
すみ会
田鍋惣太郎
洋一

狂言共同社

名古屋和泉流
幸友会
福井啓次郎
福井良久

谷田宗二朗
京都市北区衣笠街道町31―7
電話（四六三）四八七五番

桂会
岐阜市松屋町

杉市太郎
京都市東山区大和大路四条下ル亀井町

幸圓次郎
幸義太郎
東京都中野区中央四―四七―一一
電話（三八一）九四一三番

亀井俊雄
〃　俊一
〃　忠雄
〃　保雄
〃　実
東京都中野区江原町一ノ九ノ一五

飯島佐六
金沢市香林坊二の八の八
電話（〇四三四）〇

藤・田六郎兵衛
藤田昭彦
龍吟会

たなびき会
田鍋惣一郎

筧鉱一
吉田定男

呉竹会
筧三男

前川善雄
京都市右京区御室芝橋町一ノ六

長生会
鬼頭八郎
鬼頭喜太郎

野崎太郎
池田茂

助川竜夫
山口義郎

# 熱田神宮の特殊神事

⑤

熱田神宮権宮司　長谷晴男

と改めたと伝え、或は、旗屋の地は、当神宮の相殿神に坐す宮賀媛命が、忌機殿に籠らせ給うて、神御衣を織られた遺蹟であるから、機綾という、などの諸説が存する。

何れにしても、この祭は相当古くから行われていたことが窺われる。中世一時絶えていたが、明治十二年に再興せられ、昭和三十年（末殿遷座祭斎行の年）には、熱田神宮神御衣奉献会を結成し、爾来、毎年本会から御衣奉献正使・副使が奉仕し、半田市の絹糸奉献会から奉献せられる絹糸と共に、御衣御料を奉ることとなり、現今に及んでいる。

祭典の次第は、当日早旦御衣御料は、機殿のある港区築地神社奉賛会の人々によって捧持せられ、築港から海上をさかのぼって、熱田区大瀬古町の神戸の浜に向う。

この頃、御衣奉献正使・副使は斎館より参進、神戸の浜に至って御衣御料を迎え、これより「大一御用」の幟を先頭に、列次を整えて神宮南門より参入、第三鳥居内に於て祓を受け、本宮中重所定の座に著く。

## ○御衣祭　五月十三日

御衣祭は、大神に神御衣を奉る祭典であるが、その起源は詳かでない。当神宮の北方に「旗屋」という町がある。この地名については、雄略天皇（凡そ千五百年前）の御代に、呉の国から我が国の朝廷へ奉られた漢織が、後世この地に住みついたから、機綾と称したのを、更に後に至って、之を旗屋

〔写真説明〕

御衣祭

第三鳥居内に於て祓を受けた後、「大一御用」の幟を高々と掲げた行列が、本宮に参進する場面である。

「列次」参照のこと。

◎列次

前導神職　幟　大麻　大麻　伶人

御料札　和妙御料　御料札　荒妙御料　正使　副使（二員）　織女

築地神社奉賛会員・半田絹糸奉献会員・其の他一般参列員　稚児

午前十一時、宮司以下祭員斎館より参進、祓所に於て祓を受け、本宮中重所定の座に著く。宮司祝詞奏上に次いで、副使、和妙・荒妙を幸櫃より執り出して、之を仮室上に置く、次いで祢宜、和妙・荒妙を折櫃に納む。次いで権宮司之を点検す。次いで祢宜、御衣御料を神前の案上に献ず。次いで御衣御奉献使祭詞を奏上。次いで宮司以下祭員、御衣奉献使以下、参列員の拝礼があり、次いで御衣御料、神饌を撤して各退出、斎館に入るのである。

なお、宮司以下祭員、御衣奉献正使・副使は、すべて斎服を著ける。

## 狂言案内

七月二十日（日）

やるまい会

### 水掛聟（みずかけむこ）

聟を主人公とする「聟物」の代表作。

自分の田を見にいった聟は、昨日までなんなんとあった水が全くなくなっているのにびっくり。みると井手を堰きとめて隣りの男の田には水がなみなみ。水が無くては田が枯れると、畦を切り落して我が田に水をひき、山の手の田を見回りに行く。そこへ男が登場、[illegible]

いいながら、みると自分の田の水が枯れている。隣りの聟の田になんなんと水があるので、合点がいかぬと思いながら調べると、井手が切落してある。よもや聟がこのようなことはせまい。門外の者がしたのであろうといいながら畦をつけ見張る。山の手の田から帰って畦がつけてあるのをみた聟は、男どのがつけられたのかと問いただす。身どもがつけたという男の答えに、聟は「聟子というて、聟は子ではないか、その聟の田に水が無ければ、気の毒に思って水を入れてくれてもよいではないか」[illegible]

「男は親ではないか。その親の田に水が無ければ、手伝って水を入れてくれてこそ、聟の甲斐もあるというもの」とやりかえす。はては、畦をつけたり、切り落したり。とばしるを掛けられた男は怒って、聟に水を掛け、男もこれをやりかえす……。

### 首引（くびひき）

西国にあった鎮西八郎為朝、都へ上る途中、播磨の印南野のあたりで日が暮れたが、天下において誰恐らしいこともないと、この雑所を通ろうとする。

人のにおいに気がついた鬼は、七つ下ると人の行き通いもないこのところを通る横着な根性が許せぬとただす。そして鬼は自分の[illegible]

いないので、お前のような血の多い逞しい男を食わせたいといい娘を呼び出す。娘は父から、今日は人の食初め、このよい若い者を食えと命ぜられ、シテの側に寄ると扇で叩かれる。鬼は怒るが「昔から鬼神に横道なしという、何か勝負をして負けたならばどのようにも致されましょう」と提案されて娘を相手に腕押しの勝負をすることになる。腕押しと腮押しと勝負に負けて泣く鬼の娘、いらいらする鬼の父、〃とかく柔かなお身へ私のふつつかな手足が触れるによって、どきげんを損ずる。〃こんどは首引〃といわれ、しぶる娘を叱りつけて首引をさせる……。

見かけと反対に、他愛のない押しのきかない狂言の「鬼」の本領[illegible]

## 演能案内

やるまい会　社中発表会

七月二十日（日）午前十時始

熱田神宮能楽殿

〔素謡〕小鍛冶　大島登　後藤紀一　池田正之、羽衣　丹羽菅美子　石川昌子

〔狂言〕引括　徳田文三　鬼頭秀治、墨塗　井口鴨留　井口きくゑ　井上礼之助

〔素謡〕卒都婆小町　丹羽兵三郎　塚本秀雄　加藤丈太郎、菊慈童　小川登四雄　若杉勝彦

〔狂言〕竹の子　山本浅太郎　鬼頭秀治、碁智　森巳千江　森久見子　森昭男

〔独吟〕加茂　池田正之、田村　亀井良逸、熊野　木村栄一、笠之殿　後藤紀一、花筐　吉田章夫、鞍馬天狗　遠藤茂

〔素謡〕船弁慶　後藤正二　田中艶　陸井啓四郎　木村栄一

〔狂言〕昆布売　森久見子　野村又三郎

〔仕舞〕蝉丸　井口きくゑ、玉之殿　村井碩子、狙々　後藤初子

〔小舞〕名取川　牧野素子、七つ子　金子睦子、景清　佐藤はつ

視言　岩船　林本政夫　亀井良逸

主催　名古屋信謡会　豊橋也留舞会

## 仕舞入門　その二　殿島修二

謡は心身の鍛練には殊のほか良いものであるが、お仕舞もそれに勝るとも劣らぬ効用のあるものである。胸を張って腰に力を入れる仕舞の作法は健康上非常に良い。

さてお仕舞は初めのうちは何が何やら訳がわからぬもので、ただ先生について動いているだけで決して面白いものでも愉しいものでもないが、謡のリズムに乗って動く所作、それのみで、ずいぶん気分の味わえるものである。

観世流は初めての人のために仕舞入門という手ほどきの本があって、最初は「熊野」から始まる。

これは比較的型が少くて静かであるためで決して一番易いからではない。クセの中の「立ち出でて峯の雲」からで、これを三カ月か四カ月ないしは半歳かかってでも繰り返し、基本をしっかり勉強しておくことが一番大切なことで、次ぎ次ぎと曲目を替えて数多く覚えようとすることは避けるべきで[illegible]

古に最初構えの姿勢から立つだけのことを三、四カ月もかけて教えるということを聞いたことがあるが判るような気がする。もっともこれは玄人になる人達のための基本的な稽古ではあるが。

とにかく基本は充分にやっておかねば、先へ行って非常に損をすることは事実である。基本がしっかりやってある人と否とでは、先になって段々とその効果の顕われが甚だしく違ってくることをよく識って置くべきである。

もう一つ心すべきことは、ちょっと舞えるようになると、能を見てきて、いういうの人の型、特に悪い面、癖のようなものを悪く取り入れてすぐ真似る人があるが、これは余程気をつけねばならぬことで、見た目に非常にイヤなもので、えてして悪い所をのみ拾ってくるものなのである。

この点、謡にも共通するものでよくよく気をつけねばならぬ大切[illegible]

初冬で月は出でても河面に立ちのぼる夕霧のおぼろおぼろと暮れなずむ初夏の夜趣が、若葉のむせるような香りを漂わす。

丁度対岸の興聖寺の山吹も今がまっ盛りだろう。昔の源平先陣争つばみを揃へ川水に」以下畳み込んで行き、宇治川の激流に死闘が展開する。「さる程に入り乱れ一衆寡敵せず戦は利あらず、今は何をか期すべきと唯一筋に老武者が七十余年の数々の思いを胆木の辞

## 演能案内

喜多流　和調会

六月十四日（土）午後一時始

熱田神宮能楽殿

番外仕舞

村キリ　新熊　弘遠

田

やるまい会十周年記念公演

七月二十日午後四時三十分始

熱田神宮能楽殿

解説　吉川久

牛盗人　井上松次郎　井上礼之助　鬼頭秀治　佐藤友治　井上豊彦

水掛聟　茂山千五郎　茂山千之丞　茂山正義

縄綯　野村又三郎　鬼頭秀治　野村万作

菊法師　殿島修二

仕舞　二人静　塚本秀雄　加藤丈太郎

クセ　梅田邦久

野守

井杭　野村万之丞　野村耕介　野村万之丞

首引　野村万作　野村梧郎　野村又三郎　井上松次郎　佐藤友彦　鬼頭秀治　保克人　井久礼之助

都心に近代的で高雅な
ビジネス＆リビングに最適の
中央マンションへ
名古屋市中区錦3丁目13番5号
中央地所株式会社
電話（961）3271（代）

うなぎ　大友
ナゴヤ納屋橋畔店（231）2709・6818
名鉄百貨店九階　のれん茶屋店

〔第31号〕昭和44年7月10日
（毎月一回10日発行
楽の友社
吹上本町2—20
464）
1）7984
古屋 36393
1年 300円
1年 400円
30円

現代をみつめる眼
東海テレビ

# 能樂の友

題字は熱田神宮　蓬田宮司筆

発行　能楽の友社
名古屋市千種区吹上本町2—20
（郵便番号　464）
電話　（731）7984
振替口座　名古屋　36393
購読料　1年　300円
郵送の場合　1年　400円
一部　30円

# 名古屋薪能盛大に

## 熱田能楽殿で繰展げらる

市民納涼能楽の夕べとして、第四回を迎えた「名古屋薪能」は、さる三日熱田神宮神楽殿前の特設舞台で催される予定のところ、台風七号のため熱田神宮能楽殿で盛大に行なわれた。

午後五時三十分の開演を前に、愛好者は続々来会、夏の行事能とに高まっている。

囃子「養老」（長田驍師）につづいて、能「花月」（シテ殿島修二師、ワキ高安滋郎師）仕舞「経正」（有賀滋子師）「松虫」（加藤良久師）ののち、熱田神宮長谷権宮司から「多数の来会を感謝、あいにくの空模様のため、火入れ式の儀式をやむなく中止した」とあいさつ、田鍋能楽協会名古屋支部長、市長代理浅井助役、宮田市会議長からそれぞれあいさつがあって、舞囃子「安宅」（大塚一二師）仕舞「鵜之段」（前田茂穂師）囃子「山姥」（辰巳孝師）仕舞「屋島」（加藤丈太郎師）「松風」（杉村竹翠師）「野守」（梅田邦久師）狂言「千鳥」（野村又三郎、井上礼之助、井上松次郎の諸師）と上演、最後に「船弁慶」（シテ内藤泰二師、子方　足立学、ワキ西村欽也師、ワキツレ高安勝久師）の迫力ある上演、五流の総出演で演者、観客一体の興趣のうちに午後九時すぎ終了した。

お能のお戻りには
ぜひ蓬莱軒へ
お立寄り下さるよう
お待ちいたします
熱田神宮東門そば
蓬莱軒
電話（671）5596—8

「氷室」のスケッチ
仙田雪山子画
（解説②面に掲載）

# 大阪薪能

## 8月11、12日　能六番上演

大阪薪能は、ことし第十三回を迎え、八月十一日、十二日の二日間にわたって、生国魂神社境内で行なわれる。

主催は能楽協会大阪支部、大阪薪能委員会、後援大阪市、大阪市教育委員会、両日とも午後四時二十分開場、午後五時二十分開演、能組は次のとおり。（敬称略）

第一日（八月十一日）

解説「本日の能について」能楽評論家　沼艸雨氏、観世流能「小督」大西信彦、平野元章、大澤多信明、江崎康雄、大蔵流狂言「蚊相撲」善竹忠一郎、安東伸元、宮崎章治

火入れ式

大阪薪能委員長沢田寅太郎氏あいさつ

金春流舞囃子「能坂」金春晃実、観世流能「源氏供養」生一泰知、久保田亘亮、石村哲三、森本幸治、観世流仕舞「小鍛冶」若松宏守「放下僧」春日照寛「隅田川」小寺一郎「鵜之段」武中俊一「昭君」山中義滋、観世流能「一角仙人」山本博之、中村弥太郎ほかの諸師。

第二日（八月十二日）

解説「本日の能について」能楽評論家　沼艸雨氏、観世流能「小督」大西信彦、平野元章、大澤多信明、江崎康雄、大蔵流狂言「蚊相撲」善竹忠一郎、安東伸元、宮崎章治

火入れ式

大阪薪能委員長沢田寅太郎氏あいさつ

金春流舞囃子「能坂」金春晃実、観世流能「源氏供養」生一泰知、久保田亘亮、石村哲三、森本幸治、観世流仕舞「小鍛冶」若松宏守「放下僧」春日照寛「隅田川」小寺一郎「鵜之段」武中俊一「昭君」山中義滋、観世流能「一角仙人」山本博之、中村弥太郎ほかの諸師。

## 鈴鹿　龍光寺薪能

### 三重県で初の催し

三重県下で初の薪能がさる九日（土）鈴鹿市の龍光寺境内で催された。

この催しは、かねて文化と歴史をもつ鈴鹿市で薪能開催の機運が盛りあがり、辰巳孝師らの努力、鈴鹿市教育委員会、鈴鹿JCの後援が実って初めて行なわれたものである。主催は鈴鹿宝生会・龍光会、後援鈴鹿市教育委員会、鈴鹿青年会議所。

番組は能「経政」衣斐正宣、高安滋郎、仕舞「松風」倉本雅、狂言「棒縛」井上松次郎、井上礼之助、佐藤卯三郎、能「葵上」辰巳孝、葛原正枝、西村欽也、高安勝久、間　佐藤秀雄、囃子方　河村総一郎、福井啓次郎、鬼頭憲太郎、筧三男の諸師が出演した。

名古屋　観世九皐会
観世喜之
観世武雄

武田太加志
鳳鳴会
名古屋市東区葵町二九
吉田義正方

大江又三郎
京都市東山区本町廿丁目
電話五六一—〇六二二番

幽花会
片山慶次郎
〒603
京都市北区小山下花ノ本町二一
電話四九二—五三〇二番

橋岡久馬
橋岡久春

橋岡久共

大垣浦声会
稽古場　大垣市竹島町　善念寺
住所　京都市左京区下鴨芝本町五八
浦田保利

（〒四六二）名古屋市北区敷島町一〇七
電話　九九一—四三三七

武田謡楽会　武田小兵衛
稽古場　名古屋市千種区下方町　高木方
岐阜市千石町一ノ九　安部方
四日市市海山道　花田方

笠月会　中川清
長浜市地福寺町八ノ二九
電話㊐〇六三〇番

曲水会　増田一雄

静交会　高橋静夫
東京都世田谷区若林三ノ二三ノ三
電話（四一三）一二二八番

竹翠会　若松宏守
（〒662）西宮市平松町一五
電話（〇七九八）三二—七六三九

四日市観世九皐会
塚本秀雄

淡水会　飯田賢

久田観正会　久田秀雄

春敬会　真栖米次

正楽会　加藤丈太郎
電話（三二一）四七四一番

松謡会　佐藤太俊

藤門会
加藤良久

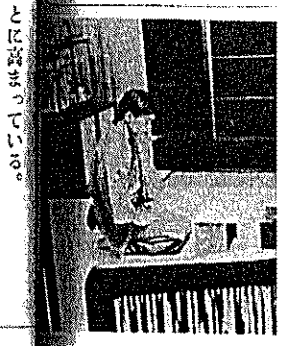


前に於て小祭式に依り、祭儀を行うが、斎主の祝詞奏上に次いで、陪従の謡う「田歌」につれて白衣・緋袴・緋襷に、芙蓉の挿頭花をつけ、榊（玉苗を付す）を採った早乙女四人の優美な田舞が奏せら

同斎田に於て「御田植祭」が執り行われている。

### ○神輿渡御祭　八月八日

神輿渡御祭は、朱雀天皇天慶二年（九三九年）平将門が下総に謀

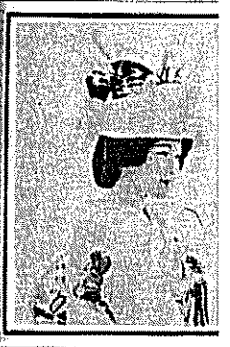


気合のこもった張扇の音が響いて——お父さんの高安滋郎さんから謡いのけいこをつけてもらう勝久さん（左）

・熱田神宮で催された「第四回名

とは、父とともに能の舞台に立つことである。さる三日夜、名古屋受継いで行きたいという気はあるようです」と父は子に望みを託し「これが家の芸だ。なんとかし

いつもの夏なら、東京の大学に行っている長男の守彦さん（二三）も、このけいこに加わっているはずだが、大学が紛争中で帰ることができない。父子三人の謡いがこの座敷に響くのは、まだ、だいぶ先のことかもしれない。



日本のどこで
優れた品質と
誇るブラザー
ペースセッター7
世界の有名品

## 名古屋薪能フォト

（写真）（上）（右）能「花月」（左）熱田神宮長谷権宮司のあいさつ、後列（右）から名古屋市浅井助役、能楽協会田鍋名古屋支部長、宮田市会議長（中）「船弁慶」（下）熱田能楽殿の見所スナップ

◉秋の大和路を訪ねて趣味のバスツアー

# 謡曲名所めぐり

## 第一回会員募集

本紙では、読者に贈る新しい企画として、第一回謡曲名所めぐりを左の通り開催致します。多数御参加のうえ趣味の一日をおたのしみ下さい。

■日時　昭和四十四年十月十日（祝）貸切デラックスバス八時三十分出発（名古屋テレビ塔）十九時三十分帰着、雨天決行致します。

■コース　名古屋テレビ塔下―名四国道―名阪国道―天理（井筒）―三輪神社（三輪）―奈良（春日竜神・大仏供養・野守）昼食―奈良街道（百万）―宇治（頼政）―山科（通小町）―逢坂山（蝉丸）―三井寺（三井寺）―大津―名神ハイウェイ―名古屋テレビ塔

■ガイド　各地の案内及び謡曲名所の説明に加え、謡曲を謡って頂きます。

■定員　六〇名限り、満員になり次第締切ります。申込順にバスの席を前からお取り致します。（特別の場合のほか補助イスは使用しません）

■会費　（バス代、拝観料、昼食、お茶代を含む）一名　三、五〇〇円

■申込み　会費を添えて（現金、振替いずれも可）本社宛、または熱田能楽殿にお申込み下さい。なお出発一週間前迄に取消された場合金額お返し致します。それ以後は一切お返し致しませんので御注意下さい。

■その他　出発は（八・三〇）テレビ塔（八・三五）、金山橋電停（八・四〇）、熱田神宮前駅（八・四五）、昭和橋で御乗車出来ますからお申込みのとき御書き添え下さい。なお百番集を御持参下さい。

## 能を伝える村

# 黒川を訪ねて

湧口陽子

この曲の発想が余り面白いものと思われないのは、時代感覚の相違による。話は日本書紀に記載されている千数百年の昔、仁徳天皇の頃にはじまる。

時の朝廷が山城、丹波、大和、河内、近江の五カ国に朝廷の氷室を設定したが、本曲は丹波の氷室を舞台に、その守護明神によって氷が守られ、無事朝廷におさめられるという皇道礼賛の趣を伝えるものであるが、能楽という舞台構成の芸術価値は相変らず完璧である。謡も冬のきびしさ寒さが実感としてひしと感じられる。

シテ氷室明神が「曇なき」と謡い出して、地と掛合になって「氷室の神体浮え輝きてぞ現われたる」の氷のつくりものをもって氷室のうちから姿を現わし、やがて「霰は横ぎりて岩洩る水もさざれ石の深井の氷に閉じつけらるを引き放し引き放し浮かみ出でたる氷室の神風」で白から飛び下り「あら寒や冷やかや」と難儀な舞働となる。このはたらきの舞が見どころである。この舞働の神体を荒神、鬼神、竜神に凡そ分けられるが、氷室は野守や鐘鬼、黒雲、昭君と共に鬼神である。赤がしらに唐冠を頂き、瘤見の面を着ける。白頭の場合は、裝束も、白癩見悪尉という面を用いるが、この面の方が私は好む。思い切ったこうした表情の面と対決していると、想像が無限に拡がって楽しい。

なお神体を世阿弥は、風姿花伝に、「凡そこの物真似は鬼懸（風情）なり、何となく怒れる体いあれば神体によりて鬼懸りにならんも苦しからまじ、但しはたと変れる本意あり、神は舞懸りの風情ようし、鬼は更に舞懸りの便り（てだて）あるまじ、神をば如何にも神体によろしき様に出立ちて気高く、殊更出物（装して現われる姿の意）にならでは神ということはあらまじければ衣裳を飾りて衣文（気附をちゃんと整える）を繕いてすべし」と述べているが、鬼神については、紀元前数百年もの昔からの儒、道仏学書万巻に伝え生きて、その概説すら容易ならず、曲の作者の博学たるか努力を今更に驚く次第である。

## 「氷室」の解説

仙田雪山子

## 8月の謡曲狂言番組

NHK ラジオ 第2放送
毎日曜日　午前8時から9時まで（再放送）
毎金曜日　午後2時から3時まで

8月10日（日）・15日（金）
宝生流「経　政」野口　泰久　ほか
〃「巻　絹」高橋　進　ほか

8月17日（日）・22日（金）
観世流「山　姥」藤井　久雄　ほか

8月24日（日）・29日（金）
喜多流「海　士」喜多　長世　ほか

8月31日（日）・9月5日（金）
観世流「小　督」小田切梧陽　ほか

◎ 番組のかわることがあります。ご了承下さい。

〔おことわりとお知らせ〕

◇各会、各師よりの暑中見舞広告を頂き、厚く感謝申し上げます。

◇二井栄逸氏執筆の連載「裝束談義」は、本号紙面の都合にて次号きましたので、ご理解頂きたくお願い申し上げます。

時中さながらの混雑だ」と誰かれの口からともなく、言いはなたれた。

ともあれ、無事五時半すぎ鶴岡駅に到着、駅前から車で南に三十分程行くと、能を伝える黒川に着た。長い石段の上に拝殿、境内が広がり、祭礼とあって子供の好きな店が軒を並べている。遠方に嫁いだ人であろうか、今日の日のために子供連れで帰郷したのであろう、これも田舎のお祭りの楽しさ

なお書物が出版されいう〳〵紹介されているので、それに譲りたい。しかし、五、六才位の少年が見所の一番前、かぶりつきで一心に舞台に見入っている姿は、ここならではと感動させられた。


名古屋淡交会　橋岡久共
澄声会　尾関健太郎
面作り五十年　島三友　能面頒布会
清光会　岡田光紘
峰風会　増田十草
茲水会　有賀滋子
竜神会　竹内六郎　岡崎市六供町三ツ岩五七
犬飼末吉　名古屋市中川区柳瀬町二―四〇
螢雪会　後藤契雲　名古屋市中区栄三丁目三十三
光風会　飯田新子
知水会服部紗枝
豊嶋弥左衛門
豊嶋三千春　京都市東山区知恩院山内林下町

名古屋巽会　事務所・愛知県愛知郡和合ケ丘　戸田秀雄方
梗風会　梗雲会　倉本雅　神戸市東灘区住吉町茶屋八八　宮前住宅四一三
内藤泰二　鍵雲会
衣斐正宜
竹腰勝一
吉田俊彦
喜多流　和島富太郎会　西宮市津門西口町五―二一　電話（〇七九八）二二―七二九七番
喜多流　広田健　山本才
金剛流松風社
久保田亘亮　高槻市昭川町五ノ一五　電話西屋敷三一八四番
森茂好

# 能を伝える村
## 黒川を訪ねて

湧口陽子

由形県黒川にある春日神社の例大祭（五月三日―昭和四十一年迄は五月十三日に行なわれていた）に、下座の蛸井伊右衛門氏より御招待を受けられた金剛巌師御夫妻のお誘いを受け、加藤勝弘、仙田雪山子、中村保雄、前西芳雄、村山裕吉の諸氏と私の六名は、待望の黒川能見学に同行させて頂くことになった。

五月の連休とあって、二日、上野発二十一時の「鳥海二号」の切符は、四枚しか入手出来ず、後の四人は混潮鶴岡に着くまで、デッキに立ったまま身動きもままならぬ状態であった。

上野駅に増田正造、小林貢画氏のお見送りを受けたが、汽車のガ

黒川能「小袖曽我」　仙田雪山子画

時中さながらの混雑だ」と誌れかれの口からともなく、言いはなたれた。

ともあれ、無事五時半すぎ鶴岡駅に到着、駅前から車で南に三十分程行くと、能を伝える黒川に着いた。蛸井家に寛がせて頂き、お心ずくしの朝食のおもてなしを受ける頃には、先刻までの汽車の疲れもいやされ、同家御所蔵の面、五面を拝見させて頂いた。なかでも、鬼面と称されている、角が生え、歯形の彫られた面は、剣落して本地が出、それが黒光りしていたが、素朴で心を引かれた。能開演までの時間を、絵筆をとる者、同家の庭裏に流れる赤川の流れに詩情をそそる者など、適宜過ごさせて頂く。囲りの家の見事なわら葺の眺めに郷愁を感じシャッターを押す。話に聞いていた程、由深くには思わなかったけれども、雪のある王祗祭の頃には、やはり大変なことであろうと思われた。

能楽の友社

時中さながらの混雑だ」と誌れかれの口からともなく、言いはなたれた。

ともあれ、無事五時半すぎ鶴岡駅に到着、駅前から車で南に三十分程行くと、能を伝える黒川に着いた。蛸井家に寛がせて頂き、お心ずくしの朝食のおもてなしを受ける頃には、先刻までの汽車の疲れもいやされ、同家御所蔵の面、五面を拝見させて頂いた。なかでも、鬼面と称されている、角が生え、歯形の彫られた面は、剣落して本地が出、それが黒光りしていたが、素朴で心を引かれた。能開演までの時間を、絵筆をとる者、同家の庭裏に流れる赤川の流れに詩情をそそる者など、適宜過ごさせて頂く。囲りの家の見事なわら葺の眺めに郷愁を感じシャッターを押す。話に聞いていた程、由深くには思わなかったけれども、雪のある王祗祭の頃には、やはり大変なことであろうと思われた。

黒川能は、本来は王祗祭に奉仕するためのものであるが、年に数回、祈年祭、慰霊祭、新宮祭などに演能の機会があり、この日の例大祭の演能もその内の一つで、「翁」にはじまり上座の「淡路」下座の「夜討曽我」が出された。

舞台は拝殿の中に常設され、鏡板はなく、舞台をはさんで左右に直接橋掛りが付き、揚げ幕も楽屋も二つついている。上座は正面からみて左、下座は右に位置を占めている。装束の着付、動き、謡、囃子なども各々に黒川能独特のきまりがあるようで、謡は東北弁の訛りもあってか、一音一音にナビキがついて、私には聞き難かった。しかしそうした謡いぶりや動作に、雪国に伝わる能の素朴さが感じられ、うれしい気持がした。また、御好意によって所蔵の面、十数面を、上下座各々神社までお運び頂き、拝見させて頂いた。

◎筆者湧口陽子さんは、愉書店編集部（東京）に勤め「観世」「金剛」誌に活躍、「黒川能見学記」を本紙のためとくに筆を執って頂きました。スケッチ仙田雪山子画伯の「小袖曽我」のご寄稿とともに紙上をもってお礼申し上げます。（編集部）

# 古曲雑話 (7)

西村弘敬

### 第十六番　為世（ためよ）

京都市の西南に、山崎という所がありそこに水無瀬宮（みなせぐう）という神社がある。この辺りは昔水無瀬の里といわれた地で、そこに為世の郷という神社がある。この辺りは昔水無瀬の里といわれた地で、そこに為世の郷（ためよのきょう）という郷士があった。その人が何か世の無常を感じ妻や子供二人を残して家出して高野山へ登り、遂に僧となった。

その後幾年かを経てから故郷に残した妻子のことが心許なく思われて、それとなく様子を見ようとて水無瀬の里へやって来た。

然るところ、母親が病死して丁度七日目に当たる日に、姉と弟の二人の子供が花水を携え墓参に行くのに行き逢ったので、兄弟の者は父とも知らず出家の人なれば何卒家にて亡母の回向をして戴きたしと頼むので、父の僧は無慙にも父とは知らずに頼む兄弟のあわれさにその家に至り、懇に読経して回向をしてやっていると、母の亡霊が顕われ子供達の手をとり父の僧にすがりて名乗れと迫り遂に父も争いかねて父であると名乗り共に懇に仏事をなして母親の菩提を弔ったという筋である。

### 第十七番　丹後物狂（たんごものぐるい）

丹後の国白糸浜というところに岩井何某という人があって、生来子供が無いので九世戸（くせと）一名切戸（きれと）の文珠堂へ一子を授かるように願をかけていたところ、或る夜の霊夢に、文珠菩薩より松に花を添えて給わったと見て程なく一子をもうけたれば、これを花松と名付けていつくしみ育て、やがて長ずるに及んで辺り近き成相寺に学問修行のために上せて置いた。

元来利発な素質であったので、経論聖教は申すに及ばず、歌道の双紙八代集なども習い覚え、そのうえ「さゝら」「八撥（やつばち）」などの遊興ごとなども達者に行っていたのを、或る由なき者が花松は遊興を事として学問などは一向に精を出さぬなどと悪しざまに告げ口をしたのを、父の岩井某は誠と思い、花松を寺から呼び戻し酷しく叱りて遂に勘当するなど言い出したので、花松は幼な心にも非常に悲しく思い、夜に紛れ家を出て橋立の海へ身を投げた。

一方父は花松が居らぬので所々尋ねたるに、海に身を投げたるとのことを聞き知りたるも死骸が見当たらず、或は他の所へでも行ったのかも知れぬと遂に狂気となり母親と共に家を狂い出て諸方を狂い廻っていた。

また一方の花松は海に身を投げたる所を、筑紫船の船頭に助け上げられ、そのまま、筑紫（九州）の地へ連行せられ、彦山の山寺へ預けられ、ここにて学問に勤み、遂に隠れなき学匠となったが故郷のことが心にかかり丹後の白糸浜へ来り尋ねてみたところ、父母は狂気して家出して見当らず、やむなく文珠堂で一七日の間説法をして後に再び海に身を投ずる覚悟していた所へ、狂気の父母が尋ね来り互い身の上の話しから、遂に親子であることが判明して悦び合いて元の如くに栄えたという筋合の曲である。

### 第十八番　湛海（たんかい）

源義朝の子牛若丸は、平治の乱に義朝は敗れて敗走したる後に、平家に捕えられたるも、幼少なりしと清盛の同情とにより命を助かり、鞍馬の寺へ預けられて名を沙那王と改められた。その後追々と成長するに及んで、武術や兵法などに心を寄せ励んでいた。その頃二条堀川辺に住んでいた鬼一法眼という兵学者の許へ弟子入りして兵法の講義などを受けているうちに、法眼の秘蔵する兵法の一巻を盗み取ったのを法眼が知り、何とかして取返えさんと思えども、その頃既に沙那王は武術の腕前も相当上達していて、自身にては到底叶い難きを知り、鞍の長谷部湛海を呼びつけ、秘かに沙那王を討取り、かの一巻を奪い返すことを依頼したので、湛海易々と引受けて時期を待っていた。或る時師匠の命によって沙那王は五条の天神へ参詣に行ったのを湛海は待伏せしていて、長刀かざして躍り出で切りかかり、ここに双方秘術をつくして戦い大乱闘の末に湛海は切立てられ、遂に首打落されて敗北した。沙那王はそのまま鞍馬の寺へと帰って行ったという曲である。


◉秋の

能楽の友社

■定員　六〇名限り、満員になり次第締切ります。申込順にバスの席を前からお取り致って頂きます。

宮前駅（八・四五）、昭和橋で御乗車出来ますからお申込みのとき御書き添え下さい。なお百番集を御持参下さい。

（おことわりとお知らせ）

◇各会、各師よりの暑中見舞広告を頂き、厚く感謝申し上げます。前号既報のように、七月号（八月号）広告が出願されていう（紹介）なお、「能楽の友」は、本号紙面の都合にて次号に掲載致します。

◇二井栄逸氏執筆の連載「装束談義」は、本号紙面の都合にて次号に掲載されているので、それに譲りたい。しかし、五、六才位の少年が見所の一番前、かぶりつきで一心に舞台に見入っている姿は、ここならではと感動させられた。

演能の後、社務所で上座、下座合同の直会があり、お招きを受けた。能を舞う人の手には鍬を握る日焼けした逞しさがあった。かっての黒川能東京公演で、今は故人となられた観世左近師と剣持左近氏両人の初対面の時のお話から、つい先日のテレビ放映の観世宗家、元昭両師の「石橋」のことまで、話題は尽きそうにもなかったが、時も過ぎお暇乞いをした。

その日は湯野浜温泉に一泊、翌日、羽黒山にお参り、宝物の室町期の女面一面を拝見、その夜の寝台車にてこの由緒の地をあとにしたのであった。

きましたので、ご理解頂きたくお願い申し上げます。

◇二井栄逸氏執筆の連載「装束談義」は、本号紙面の都合にて次号に掲載されているので、それに譲りたい。しかし、五、六才位の少年が見所の一番前、かぶりつきで一心に舞台に見入っている姿は、ここならではと感動させられた。

演能の後、社務所で上座、下座合同の直会があり、お招きを受けた。能を舞う人の手には鍬を握る日焼けした逞しさがあった。かっての黒川能東京公演で、今は故人となられた観世左近師と剣持左近氏両人の初対面の時のお話から、つい先日のテレビ放映の観世宗家、元昭両師の「石橋」のことまで、話題は尽きそうにもなかったが、時も過ぎお暇乞いをした。

その日は湯野浜温泉に一泊、翌日、羽黒山にお参り、宝物の室町期の女面一面を拝見、その夜の寝台車にてこの由緒の地をあとにしたのであった。

暑中見舞申し上げます

光瀧会　飯田新子

知氷会服部紗枝

豊嶋弥左衛門
豊嶋三千春
京都市東山区知恩院山内林下町

金剛流大塚清風社
〒464　名古屋市千種区城山町三丁目
電話（七五一）五三八九番

吟風会
伊藤鉄之進
大川嘉奈子

本田光洋
（〒164）東京都中野区上高田三の二五ノ二
電話（三八六）二六四一

中部金春会
前田昌広
前田茂穂
名古屋市中区老松町一ノ二八
電話（二四一）三一四一番

福王茂十郎
福王会
大阪市東区平野町一ノ一五

福王輝幸
西宮市名次町六ノ一二

高安流白水会
和泉太郎
東京都品川区二葉二―八―十二
電話（七八六）四〇九二番

山本才

金剛流松風社
久保田亘亮
宮崎市呉川町五ノ一五
電話宮崎㊀三一八四番

森茂好
東京都渋谷区代々木四―三八―二

大蔵会大蔵彌太郎
東京都渋谷区千駄谷二丁目一〇ノ五
電話（〇三）㊀五九七七番

野村又三郎
やるまい会
名古屋市中村区烏森村内上二二
電話（四七一）五〇六七

幸祥光
幸正影

山本敬一郎
大阪市泉南郡南海町貝掛
南海団地八六四

暑中御見舞
森田光春
京都市東山区八坂上町三七六

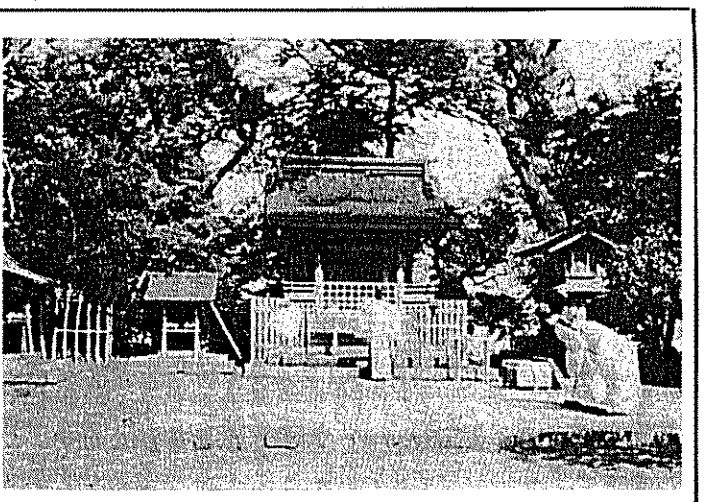
寺井政数
東京都世田谷区世田谷四―三―二五
電話（四二〇）六六七六番

能楽の友社
同人一同

# 熱田神宮の特殊神事

⑥

熱田神宮権宮司　長谷晴男



南新宮社祭〔写真説明〕
南新宮社の社前で、祢宜が祝詞を奏上している場面である。向って左側に並んでいる社が「八子社」左端に一寸見えている社が「曽志茂利社」である。各社の柱、並びに、八子社と曽志茂利社の間には、奉飾した「芦」が見える。南新宮社・八子社は西面、曽志茂利社は南面して建てられている。

## ○南新宮社祭　六月五日

南新宮社祭は、摂社南新宮社（祭神、須佐之男命）で行われる疫病除けの祭儀で、御芦祭とも称する。その起源は詳かでないが、江戸中期の文献によれば、六月四・五・六日の三日間、社頭で行われたもので、四日には舞楽を奏し、五日には供御を行い、六日にはこの御芦祭を行った。前日社頭に飾った吉凶物（俗に「みよ」たところ、恩頼も著しく、さしもの疫病も退散してしまった。村人等は大変喜んで、それ以降は毎年お祭を執り行うようになった。後の世に至っては、御芦祭とも称し、笛吹き、鼓打ち、山車をも曳き並べて御神慮を和め奉った。このような古い手振りに神習い奉って、今日お祭を執り行うのである。大神の御神徳によって、疫病の禍事が無いように御護り下さい。」

これらに依っても、祭典の主旨並びに古儀の大要を知ることが出来る。現今では、殿内及び社頭に「芦」を奉飾し、六月五日午後三時、祢宜以下祭員斎館より参進、社前に於て小祭式に依り、祭儀を行うのである。式次第については、特記する事項は無い。

なお、この祭典に引続き、末社八子社（祭神　天忍穂耳尊・天穂日命・天津彦根命・活津彦根命・熊野杵樟日命・田心姫命・市杵島姫命・湍津姫命）末社曽志茂利社（祭神　居茂利大神）の御前に於ても祭典が執り行われる。

### ◎芦の奉飾について

| 長さ | 一束の数 | 結び方 | 奉飾箇所 | 束数 |
|---|---|---|---|---|
| 二尺五寸 | 二〇本 | 五箇所 | 殿内 | 二束 |
| 三尺六寸 | 一八本 | 三箇所 | 八子社　曽志茂利社　各二本を左右の柱に立てかく。 | 四束 |
| 四尺八寸 | 同 | 同 | 南新宮社の階の、左右の柱に立てかく。 | 二束 |
| 四尺 | 同 | 同 | 芦台に立つ。 | 一二束 |
| 一束宛に四垂の紙垂を附す。 | | | 計 | 二〇束 |

（附記）

一、社頭に奉飾した芦は、南新宮社の殿内より取り出した芦と共に、祭典終了後、之を御池に流す。

二、「芦迎の儀」（現今はこの儀なし）

一員並びに白丁一員、青衾神社（当神宮摂社、天道日女命を祀る）に至り、予め氏子によって、社前に置かれた芦を受けて帰る儀式があり、芦の授受は祭員並びに氏子、終始無言の裡

前日午後殿内に納む。
前年納めた芦は、殿内より取り出し、向拝長押の上左右に立てかく。

# 演能案内

## 大能

九月七日（日）熱田神宮能楽殿

（観世）能　土蜘蛛　シテ　頼光　塚本秀雄　ト　竹内六郎　モ　胡蝶　殿島修二　シテ　前後　加藤久田秀雄　丈太郎　ツレ　西村滋　高安勝久　ワキ　高安滋郎　ツレ　間　西村欽也

（宝生）能　枕慈童　シテ　内藤泰二　ワキ　西村弘敬

（喜多）能　羽衣　シテ　長田鹿　ワキ　西村欽也　舞込

（和泉）狂言　墨塗　大名　和泉保之　女　太郎冠者　佐藤友彦　井上松次郎

名古屋観世会定期能

九月十四日（日）午後一時始
熱田神宮能楽殿

素謡　頼政　岡久雄
〃　花筐　坂井音次郎
〃　葵上　山階信弘

# 仕舞入門

その三　殿島修二

「熊野」（ゆや）のクセを三、四カ月もかかって覚えると、どうにか動けるようになってくる。

引き続き、クセのもので静かでやさしいものを四、五番習えば大体の要領が摑めるものである。次ぎは、キリのもの、少し動きの早いものの順序で進めてゆき、躰が動くようになると「小袖曽我」とか「菊慈童」のようなもの、次ぎが修羅ものという順に漸次荒いものに移行する。斯くて、脇能のもの、キリ能のもの「竹生島」「嵐山」「鞍馬天狗」「小鍛冶」等々を終えてから、また元に戻し、手の込んだクセのものとか「玉葛」「鉄輪」の如き、心持ちのあるものなどを修得して一通りの基本を身につけ、舞囃子でも舞って見たくなれば、もう一人前で、次ぎはお能というように発展して行くことになるのである。この間早い人で三年、遅くも五年という年月が流れている筈である。

能が舞える段階になればもう押しも押されもせぬ舞い手として楽である。それまでは続けねばならない。斯くの如く、いとも簡単なものの如くに思われるように書いてしまったけれども、ある程度稽古熱心で、よく勉強する人にあて篏まることで、現にそういう人は沢山にあるのである。

なお稽古の順序等はその人によって違ってくるので飽く迄先生に相談して、その人に合うものを撰んで貰うべきで、徒らに人のを見て、すぐに真似て舞ってみたいと思うようなことは避けるべきで、その人の力に応じたものを撰んで貰って後やって行くことが最も好もしいことで、見た目にも非常に麗わしいものである。

もう一つ、お仕舞を始めて見ようとお考えになる方のため、参考までに茲に言って置きたいと思うことは、年令のことである。

余りお歳を召した方が始められると、どうしても感が鈍っていて覚えるのに時間がかかるということを知って置いて頂かぬと、後でこんな筈ではなかったと思って貰げると、限度として五十才ぐらいまでに始めることで、それ以上の年齢の人でも、やれぬことは決してないが、現に七十才で始めた人だってあり、立派に舞っておられるのを知っているが、楽しみに始めてみるもよいと思う。大それた野心をもたずに、五、六番か十番位い覚えて置きたいぐらいの気持で始めて、一生懸命に精進すれば寧ろ若い人に劣らぬ程の上達を見せる人だって少くはない。

謡曲でも仕舞でも、なか〳〵若い時から始めるという気にはなれないようで、或程度の歳になり生活の安定も出来て初めてやってみようかということになるので、年令的には三十才、四十才になるのが普通のようで、これでまたよいのである。目まぐるしい現代の世相に甚だ不釣合いのようで、考えようによっては段々趣味者は減ってゆくかに思われやすいのに、決して減るどころか益々増加の一途を辿りつつあるのは事実で、殊に若い層、学生などの間に、研究的に、この道に取組んでいる人々の余りに多いことにいつも驚きを感じている。またこの研究的態度の意欲的且つ真剣さには真に眼を瞠るものがあり、彼等の将来に大き

# 京だより

さる七月六日、故片山博通師七回忌追善として、井上八千代氏指導の京舞が京都観世会館で披露された。

祇園のきれいどころが一年有余にわたって能の形をとり入れた舞をくりひろげ、その美しさは芸術性にあふれ、感動きわめて深いものがあった。（SS生）

## 第七回北陸中日能

第七回北陸中日能は、九月七日正午から金沢市観光会館で行なわれる。

能は、宝生流「橋弁慶」宝生九郎、観世流「二人静」梅若猶義、梅若盛義、宝生流「絃上」野口禄久。

## 第四回　新能

八月三日（日）午後五時半始
熱田神宮楽殿前広場
仮設舞台（但し雨天の場合は能楽殿）

能組

舞囃子（シテ）　養老　長田鹿
舞囃子（シテ）　河村総一郎　野崎太郎　福井啓次郎　鹿取希世

婚礼貸衣裳
装粧品卸
美容器材料卸
(株)才世幸や　衣裳部
名古屋市中区栄3丁目22—30号　☎（241）0555

〈新刊〉
池田和市著　うたい名所を歩く　価600円　〒70円
全国の謡曲名所旧蹟を足でたずねた紀行集
宝生宗家著　図解仕舞集第8巻　価700円　〒70円
加茂・小袖曽我・藤・松風・高野物狂　他
東京都千代田区神田神保町3-9　振替東京4163番　わんや書店　東京都中央区銀座8-7-5　電話（571）0514

蔵元直営
酒蔵　白龍
社長　大西三郎
金山店・富士銀行西50米（金山ビル一階）電(681)6702
大津橋店・大津橋南50米西側電(681)8051

欧風料理
とんかつ
きん亭
名古屋市千種区大久手町4-11　TEL731-3680


（毎月一回10日発行）
楽の友社
（吹上本町2—20
ト464）
1）7984
古屋36393
1年300円
1年400円
30円

づく

演

社団法人　名古屋能楽会
熱田神宮能楽殿

片山博太郎

# 能樂の友

題字は熱田神宮　篠田富司筆

発行　能楽の友社
名古屋市千種区吹上本町2－20
（郵便番号　464）
電話　（731）7984
振替口座　名古屋　36393

| | | |
|---|---|---|
| 購読料 | 1年 | 300円 |
| 郵送の場合 | 1年 | 400円 |
| 一部 | | 30円 |

名古屋市・市制八十年記念

## 市民古典邦楽の会

### 10月11日　熱田能楽殿で

名古屋市はことし市制八十年を迎え、十月の名古屋まつりに各種の行事が予定されているが、邦楽関係では、能楽を中心として名古屋市芸術祭参加、名古屋市市制八十年記念「市民古典邦楽の会」が熱田神宮能楽殿で行なわれる。

この催しは名古屋古典鑑賞会主催、名古屋市、名古屋市教育委員会はじめ名古屋能楽会、名古屋邦楽協会、中部能楽師会、能楽の友社が後援、古典芸能の粋を網羅して舞楽、平曲、能、狂言の競演は、市制八十年記念、名古屋市芸術祭参加にふさわしい企画として、教育界でも大きな注目をあつめている。

出演は、邦楽として舞楽、「胡蝶」井野川、土居崎、三品三検校による平曲「横笛」、能楽は能「羽衣」狂言「柿山伏」「昆布売」そのほか舞囃子十五、六番が予定されている。なお、入場は無料、開演は午前十時。

（番組㊐面に掲載）

### 大和路の謡曲名所めぐり　会員受け付け中

読者におくる新しい企画として、「第一回謡曲名所めぐり」は、読者からすでに多くの申し込みを頂いております。

詳細は㊐頁掲載のとおりですが、現在受付け中ですのでご希望の方はお誘い合わせのうえお申し込み下さい。

「三輪（前シテ）」のスケッチ　仙田雪山子画

### 「三輪」の解説

玄賓僧都三輪の山本に庵を結び住める所に、毎日閼伽と水を仏にささげに来る女あり、不思議に思いて同所のものなるかと尋ねければ三輪の里のものなりという。且つ秋も漸く末となりて、夜寒を覚ゆれば衣を一領給りたしと請えるまに、有合せたる法衣を与えければ女深く喜びて立去れり。玄賓余りに不思議なる女なりと思いて、試に三輪の里に尋ねゆきしに、一本の杉ありて前に与えたる法衣かかりけり。愈々いぶかしみて近づき見れば、三つの輪は清くきよきぞから衣くると思ふな取ると思はじ、といえる一首の歌を金色の文字にて記されありて、杉の木陰より神々しき声にて我罪を助け給えといいつつ女体の神現われて神代の物語をなし神楽の舞を奏し給いけるより、玄賓深くその奇瑞を崇仰して歓喜せりといえるがこの曲の大意なり。土地は大和、季節は秋にして、世阿弥の作なりという。

## 演能案内

観世会定式能
四十四年度第四回
九月十四日（第二日曜日）正午始
熱田神宮能楽殿

素謡組
仕舞
氷室正　福井道子
経東北　熊沢恵美子
松風　眼部紗枝
菊慈童　有賀滋子
　　加藤良久
素謡
頼政　岡久雄　坂井音次郎
花筐　坂井音重　坂井音次郎　山階信弘
仕舞
通小町　岡久雄
野宮　坂井音次郎
山姥　山階信弘
舞囃子
融　柴田初太郎　河村綜一郎　田鍋惣一郎　鬼頭八郎　藤田昭彦
葵上　梅田邦久　山階信弘　岡久雄　塚本秀雄
附祝言
大槻清韻会能
九月二十三日（祭）午前十時三十分始
熱田神宮能楽殿
能組
仕舞
龍田　加藤丈太郎
遊行柳　河村鉦二
松虫　久田秀雄
舎利　多久島利之　水田博
連吟
小督　シテ　岡田光絃　阿部信之　林甲子夫
蟬
セミ丸　三島幸吉　サカ近藤憲江
間　高安勝久　西村欽也　立石澄雄　佐藤卯三郎　吉田定男　福井啓次郎　藤田昭彦
狂言
萩大名　大野弘之　佐藤友彦　佐藤秀雄
舞囃子
実盛　殿島修二　笠田鍋惣太郎　鉦一　鬼頭季信
一調
葛城　杉村竹翠　鬼頭八郎
羽衣
大槻秀夫　彩色之伝　脇留　西村欽也　笠田鍋惣太郎　鉦一　野崎太郎　藤田六郎兵衛
素謡
玄象　編田村二郎　小林孝　藤井久雄　里井順次郎
仕舞
雅楽之段　藤井徳三
野宮　大槻文蔵
龍虎　山中義滋　柴田収武
望月　シテ　中原憲　泉泰孝　泉嘉夫　高安滋郎　河村綜一郎　田鍋惣一郎　鬼頭喜太郎　笠田三男
間　井上礼之助
附祝言
主催　大槻清韻会
後援　中日新聞

## ◆演能カレンダー◆

〔9月〕
14日（日）　観世会定式能（有料）番組別掲
15日（祭）　婦人師範連合会（無料）
21日（日）　名古屋金春会（無料）
23日（祭）　大槻清韻会（有料）番組別掲
28日（日）　霞会（無料）

〔10月〕
5日（日）　風韻会（無料）番組別掲
10日（祭）　中部金剛会（午前の部無料・午後の部有料）番組別掲
11日（土）　名古屋市芸術祭参加　市制80周年記念　市民古典邦楽の会（無料）番組別掲
12日（日）　青陽会（有料）
19日（日）　橘諷会（無料）番組別掲
26日（日）　名匠鑑賞能（有料）

―― 以上　熱田神宮能楽殿

### ◆その他の催し

9月15日（祭）　桂会
岐阜・護国神社境内　せいらん会館
午前九時始

9月21日（日）　福井幽誦会
福井市

10月12日（日）　松阪二井会
松阪市・本居神社　参集殿

（以下次号に掲載します）

## 装束談義（廿一）

# 天冠（てんかん）輪冠（りんかん）

ふとふみ　二井栄逸

能が大成された当時、流行していた舞歌に曲舞という音曲があった。謡曲のクセという名称は、その曲舞（クセマイ）から出た言葉である。

曲舞は、すこぶる音楽的なもので、その曲舞の基調が謡曲に巧みに取り入れられたのがクセなのである。謡本に曲（くせ）とあるのは、クセの本体が始まる所であり序（クリ地）、サシを併せたものがクセの全部である。私はよく、稽古場で、序は滝の如く、サシは流れの如く、クセは淀みの如く、と、教える。これは、古人の言いつたえで、その言い表わし方が誠に当を得て、門生に判らせるのによい言葉なのでよくつかうのである。この三種三様の謡い方を知りたければ、クセの謡は生きてこない。

クセの場面は、シテが事柄を細かに叙述する場面であるし、またシテとの問答の末、因縁話等を聴かされたワキが、一そう、立ち入った説話をシテに求めるところで、シテがことあらためて細述を試みるといった場面である。しかし、シテはだまったまま坐っているか（居グセ）だまったままで舞うか（舞グセ）の二つで、いつの場合も地謡が代弁するのである。

そこに謡の重要性がある理で、能そのものを生かすのも、こうすのも、実は謡にあるのである。

地謡の美しい腕律と、幽玄な囃子の音の流れにつつまれて、シテの細述はワキにそそがれてゆく。

ワキは、ワキ座に唯坐っているのでなく、実は、熱心にその細述をきいているのである。それは、素謡を謡う場合も同じである。素謡は舞も囃子もなく謡一本であるから、謡曲同好者は心の中で自由に能が舞え、能を演出することが出来て面白いのである。それだけにほんとうの素謡はむづかしく、また格調の高いものでなければならないのである。

× × ×

能装束冠り物の内、冠類の中にもこの前に書いた、初冠、透冠類と、天冠類、輪冠類と三つに分類される、ことでは天冠、輪冠を書いて見る。

天冠は金属で作ったもので、上に月輪等を立て、左右に金の瓔珞（ようらく）を垂らす。これに似て瓔珞のないのを輪冠といっている。天冠・輪冠には、花や虫・鳥類、または、虎・龍・狐等を立てその曲のシテの精を象徴することが多い。

（スケッチは天冠をいただいた羽衣のシテ）

秋の大和路を訪ねて…

# 謡曲名所めぐり

## 第一回会員募集要項

能楽の友社では、前号既報のように、秋の大和路を訪ねて趣味のバスツアー第一回「謡曲名所めぐり」を募集中です。（満員になり次第締切ります）要項は次のとおりです。

（ゴジック体の活字は追加又は変更の部分です）

◆**日時**　昭和四十四年十月十日（祝）貸切デラックスバス八時三十分出発（名古屋テレビ塔）十九時三十分帰着、雨天決行致します。

◆**コース**　名古屋テレビ塔下―名四国道―名阪国道―天理（井筒）―三輪神社（三輪）―奈良（春日龍神・大仏供養・野宇）昼食―奈良街道（百井寺（三井寺）―大津―名神ハイウエイ―名古屋テレビ塔

◆**ガイド**　各地の案内及び謡曲名所の説明に加え、謡曲を謡って頂きます。

◆**定員**　五十五人　満員になり次第締切ります。申込順にバスの席を前からお取り致します。（特別の場合のほか補助イスは使用しません）

◆**会費**　（バス代、拝観料、昼食、お茶代を含む）一名　三、五〇〇円　ただし小人（小・中学生）の場合は二、五〇〇円、補助イスを使用する場合があります。

◆**申込み**　会費を添えて（現金、振替いずれも可）本社前迄に取消された場合全額お返し致します。それ以後は一切お返し致しませんので御注意下さい。

◆**その他**　出発はテレビ塔北側（八・三〇）▽金山橋バス停（南行き停　八・三五）▽熱田神宮前バス停（南行き乗り場　八・四〇）▽昭和橋バス停（西行き　八・四五）で乗車できますからお申し込みのときお書き添え下さい。百番集をご持参下さると興趣もまたひとしおと存じます。

（なお国鉄千種駅前八時二十五分発）

☆☆お申し込みの方には名所めぐり会員券をお送り致します。ご乗車の節お示し下さい。

## 風韻会秋季能楽大会

十月五日（日）午前九時三十分始
熱田神宮能楽殿

**能組**

素謡
上モ　橋本芳子
朗蝶　御牧紀子
頼光　伊藤しゅん
高橋香代子

土蜘蛛　トモ　加藤千代
ツレ　中村清久子
古井佐平　鬼頭貴代子

小督　連吟　山本林子
福江千陽
大井政子
問山美恵子

天鼓　田中久子
山田富美
島津春子
平田文子

熊野

**仕舞**

龍田　鬼頭貴代子
女郎花　奥村久枝
花筐　長谷川実
善知鳥　伊勢信雄

山姥　長谷川鍵子
平野陽子
鹿田豊子

一調

野守　日比大吉郎　助川龍夫

舞囃子

放下僧　殿島潤里子　笛　鉦一　篠田正蔵　鹿取希世
玉鬘　守部啓子　水谷文雄　武田孝子　鹿取希世

多久島利之
富士道周明

能清経　替之型　高安滋郎　吉田定男　福井啓次郎　鬼頭季信

葛城　大和舞　奥田薫　笛　鉦一　後藤孝一郎　笛　助川龍夫　笛　後藤孝一郎　三男

井筒　高田みね子　笛　村瀬恒史　鉦一　笛　三男

船弁慶　キリ　三木美智子　吉田定男　浅野芳比沙　高井敏雄　藤田昭彦

殿島博子
佐藤アヤ子

能松風　問　西村欽也　笛　田鍋惣一郎　笛　三男

佐藤卯三郎

狂言

柑子　佐藤友彦　井上礼之助

頼政　赤間鎮雄　吉田定男　後藤孝一郎　鬼頭季信

羽衣　和合之舞　水谷文雄　水野雍子　半田智子　藤田六郎兵衛

唐船　バンシキ　福間昌作　笛　田鍋洋一　鉦一　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛

番外一調

松虫　殿島修二　後藤孝一郎

番外仕舞

田村　視言養老　大槻文蔵　大槻秀夫

主催　風韻会
後援　殿島修二
毎日新聞社

御来場歓迎

## 中部金剛会

十月十日（祭）
熱田神宮能楽殿

能阿漕　金剛巌　漕　西村欽也

一調松虫　豊鶴三子春　今井幾三郎　田鍋惣太郎

能紅葉狩　高安滋郎

名古屋市・市民芸術祭参加
名古屋市・市制八十年記念

## 市民古典邦楽の会

十月十一日（日）午前十時始
熱田神宮能楽殿

邦楽

舞楽　胡蝶　熱田神宮桐竹会

平曲　横笛　井野川検校　土居崎検校　三品検校

能楽

能羽衣　赤間鎮雄　和合之舞　高安滋郎　河村総一郎　田鍋惣一郎　鬼頭喜太郎　藤田昭彦

狂言　柿山伏　井上松次郎　井上礼之助

狂言　昆布売　森久見子　野村又三郎

舞囃子　十五、六番

主催　名古屋古典鑑賞会

後援　名古屋市
名古屋市教育委員会
名古屋能楽会
名古屋邦楽協会
中部能楽師会
能楽の友社

## 橘諷会

十月十九日（日）
熱田神宮能楽殿

能隅田川　奥田敏子　高安滋郎　笛　鉦一　福井啓次郎　藤田六郎兵衛

ほか　素謡・仕舞・囃子等

# 観能の手びき

## 九月の能　熱田神宮能楽殿

### ——九月二十三日　清韻会——

**蝉　丸**（せみまる）

蝉丸　三島　憲
逆髪　近藤幸江

次第の囃子で、蝉丸ノ宮とそれに供をさしかけるワキヅレ二人を先にしてワキ侍従が登場し、次第・サシの謡に、蝉丸ノ宮が生れながら両眼盲目のため、逢坂山に捨てるようにという勅諚のあった由を述べ、下歌、道行、着セリフが



丸の前に出て、父帝の勅諚を恐しみ、蝉丸を慰める問答あり、髪を剃り落す態のツレの物着になる。間狂言博雅三位が登場し、ツレを労わり、作物の中へ介け入れ、重ねて訪れる旨をいって退場する。

一声の囃子にてシテ、狂女逆髪ノ宮が登場し、橋懸り一ノ松にてサシを謡い、次第に狂乱の態になるが、この一段は、曲中の見どころであり、聞きどころと言えよう。

藁屋の中のツレは「第一第二の絃は」と琵琶を弾く心に謡い出すと、この琵琶の音（ネ）が姉宮の逆髪と弟宮の蝉丸二人の邂逅の機縁となり、姉弟は相抱いて互いの薄幸を嘆き合う。クセは居グセで型はなく、ロンギになって二人は共に立ち、シテは涙に咽びながら橋懸へゆき、悲しい別れの掛合いを謡いながら次第に遠のいてゆく。

蝉丸は常座で見送り、シテは「互にさらばよ」と三ノ松で振り返りて向合い、シオリながら幕へ入り、ツレは舞台で、シオッて、トメる。両ジテものの代表的なもので、狂女能の中で、特にその構想が特異である。

### 羽　衣（はごろも）

彩色之伝（いろえのでん）

シテ　大槻秀夫

今回は小書「彩色之伝」である

天冠に鳳凰（白塗ニモ）の立物を挿し、クリ、サシ、クセが省かれる。序の舞が盆渉調となり、破ノ舞はイロエに替る。なお脇留の小書がついているので、シテはキリに「霞に紛れて」と幕に入るがワキはこれを見送り、常座にてトメ拍子を踏む。

彩色之伝は大習物とされ、常々よく観ている「羽衣」ではあっても、彩色之伝となると、とてもたまらぬ佳さがシミ出てくる。

### 望　月（もちづき）

シテ　泉　嘉夫
ツレ　泉　泰孝
子方　中原　憲

シテ近江ノ国守山の甲屋という宿の亭主が登場して、名ノリだけ言って地の前に坐る。

次第の囃子で、子方花若を先にしてツレ安田ノ友治ノ妻が登場、望月の秋長に夫が討たれてから、多くの家人は四散し、敵から花若を守るために旅に出たことを謡い、守山に到着した態で舞台に入り宿を乞う。シテは立って迎え入れツレと子方は地の前に坐り、シテ橋懸にゆき、不思議なことに今の旅人は昔の主君の妻とその子供であると述べ、舞台に戻って、以前召使われていた小沢ノ刑部友房であると名のる。ここで主従の対

次第ノ囃子で、ワキ望月ノ秋長が、間狂言の太刀持を従えて出、荘司友治を討った罪科を受けていたが、申開きが立ち、郷里信濃に帰るとこうだとその喜びを述べ、狂言に命じて宿を乞わせる。狂言はシテに宿のことをいうが、その時、望月、秋長の名を伝える。

ワキは、そのことに気づかずに宿に入る態にワキ座に着く。

シテは思いがけぬ敵が泊り合せたことに驚き、ツレと子方にそれを知らせ、敵討の策を練る。物着でツレは水衣を着け、杖を持ってめくら芸人に扮し、子方は羯鼓をさげて、橋懸に立つ。

地の上歌で、ツレは子方に扶けられて舞台に入り、脇正に坐り、やがて羯鼓を打ちながら曽我の五郎十郎の敵討を謡うことになる。シテは太鼓前に坐り、ワキと対座する。クリ・サシ・クセとあってクセの終りの「敵を討たせ給えや」で「いざ討たう」と子方が叫びワキも刀に手をかけてときめくがシテは「何事を御騒ぎ候ぞ」とこれを制し、討とうとは、八ツ撥を打とうといったのだと言訳して自分は獅子舞を舞うと座を立って中入する。ツレも続いて橋懸で杖を捨てて退く。子方は後見座で羯鼓を腰につけて出羯鼓を舞う。

羯鼓舞のトメに子方は撥を上げ

いよいよ曲の眼目である獅子舞になり、シテは獅子頭をつけて走り出て、舞台に入り獅子を舞う。

この獅子舞のうちに、ワキは扇を置に、静に伏す態をし、シテは拍子を踏んで静をためし、子方と共にワキを突って名のりをあげる。ワキはここで、笠を置いて切戸から退く。シテと子方は笠で表現された敵の体に斬りつけて、本望を遂し、シテは常座で「今の世にその名隠れぬ」云々とユウケン謡してトメる。剛能として代表的なもので、重い習物になっている。

### 十月五日　風韻会

**清　経**（きよつね）

替之型（かえのかた）

シテ　富士道馬明
ツレ　多久島利之

囃子はなく、ツレ（清経の妻）が出て腸座に坐る。次第の囃子でワキ（淡津ノ三郎）が登場し、筑紫の戦で入水した亡き主君、清経の形見の髪を携え、都にいる清経の妻に逢いにゆく意味を謡いて後案内を乞う。ツレ清経の妻は、月夜の晩、舟から身を投げた夫の最後を聞いて悲しむ。ワキは形見の品を渡して退場する。

シテ（清経の霊は）は地謡のうちに、戦陣のいでたちで何処から

いにしへ人」でツレにアシライ、以下カケ合に妻は夫を怨み、夫は妻をなだめて、形見の黒髪を中心に恋愛情痴の場面を描く。

やがてシテは大小前に出て床几に掛け、平家一門の敗残の有様を述べる。舞ゲセでは戦に敗れ暁の月を眺め舟に立ち、横笛を吹いて今様を歌い、西に沈む月と共に身を投げるまでの経過を、寓意的な所作や基本的な型で示す。いかにも敗戦の平家の公達らしい。

今回は小書替の型であるのでクセの中で橋懸へ行く所作などあって面白く見せるのである。

キリは一転して修羅もの本来の苦悩を太刀を抜いて激しい所作の連続のうちに凄絶と舞うので目を離す暇はない、修羅物の中でも最も幽玄な曲の一つである。

### 松　風（まつかぜ）

シテ　佐藤アヤ子
ツレ　殿島博子

囃子方・地謡方が座つくと後見が松の作物を舞台正面先に置く。名ノリ笛でワキ旅僧が登場し、名ノリの後、須磨の浦に着いた旨を謡い、磯辺の松の由ありげな様を見て、その謂われを問狂言浦人に尋ね、松風・村雨の跡と聞いて作物の前に出、懇ろにその霊を弔い

後見は汐汲車（作物）を目付柱の手前に置く。真の一声の囃子で、シテは汐汲女の姿で現われ、橋懸で向き合って一声を謡い、二ノ句のあと、アシライで舞台に入り、サシを謡う。詩情に富んだ所作が多く、特に遠辺の鶴の群の立ち騒ぐのを眺める型、更けゆく月を空に仰ぐ型、桶に汐を汲み入れる型など出色である。

ロンギでは、シテは月影の乱れる汐汲車を引いて家に戻る態で、大小前へ行き、手にした車の組を捨てて、掛子を踏み、太鼓前で床几にかけ、ツレはその右手に坐る。ワキが宿を頼んで、二、三の問答があり、やがて許されたワキは二、三足出て坐り、磯辺の松に流経したことを語ると、二人は涙にくれる。シテとツレは初めて松風と村雨の霊であることを明かして身の上を述べる。クドキ・下歌・上歌が、その姉妹の物語で、二人の霊は、その恋を語り、罪の深さを弔ってくれとワキに頼む。

クセになって、後見は行平の形見の烏帽子と長絹を、シテの左手に持たせる。シテはその形見に思慕の情がつのり、ついにはそれを固く抱いて狂わしいさまを見せ、「せん方涙に伏し沈むことぞ悲しき」と面を長絹に埋めて泣く。曲

け、作物の松を見て、「行平のお立ちあるが」と行さかい、ツレに引き止められ、次いでイロエ掛の中ノ舞を舞うのである。

キリの舞中で「いざ立ち寄りて磯馴松の懐しや」と作物の松をかき抱く型どころなど堪えられぬ情趣頻々たるものがある。

姉妹の霊は旅僧に回向を頼み、やがて夜が明けると、松風・村雨の姿は既になく、旅僧の耳には、ただ須磨の朝風に鳴る松の声だけが聞えてくる態で終るのである。

### 融（とおる）

十三段之舞

シテ　渡辺節子

半能であるので、前段は省かれるのである。

出端の囃子で、後シテ融ノ大臣ノ霊が、昔の優雅な姿で現われ、橋懸一ノ松でサシを謡い、「千重ふるや」と一セイで舞台に入り遊舞の楽を奏する心で舞う。

小書「十三段舞返し」は、早舞五段と替の型五段、それに急ノ舞を加えて計十三段となるのであって、途中橋懸一ノ松まで行くクツロギの型が入り、且まぐるしいほどに舞い続け、キリの舞も、非常に秀れた型が多く、優雅で、退屈をしらぬ豪華能といえよう。

秋の謡曲

第一

◆コース　名古屋テレビ塔下—名四国道—名阪国道—天理（井筒）—三輪神社（三輪）—奈良（春日龍神・大仏供養）—野守（）昼食—奈良街道（百

ただし小人（小・中学生）の場合は二、五〇〇円、補助イスを使用する場合があります。

◆申込み　会費を添えて（現金・振替いずれも可）本社

※お申し込みの方には名所めぐり会員券をお送り致します。ご乗車の節お示し下さい。

たひとしおと存じます。（なお国鉄千種駅前八時二十五分発）

唐船　福間　昌作　覚鍔　鬼頭喜太郎
バンシキ　田鍔　洋一　藤田六郎兵衛
番外一調　殿島　修二　後藤孝一郎
松虫　渡辺節子

熱田神宮能楽殿

能隅田川　奥田　敏子　覚鍔　福井啓次郎　藤田六郎兵衛
高安　澁郎
ほか　素謡・仕舞・囃子等

# 古曲雑話

(8)

西村弘敬

**第十九番　陀羅尼落葉**（だらにおちば）

この曲は源氏物語の中の一部分で出来ているもので、この外に落葉という曲が金剛流にあるが大部似てはいるが、これとは相違している。

北国方から出て来た僧が洛北の小野の里へ来かかると、一寸先も見えぬ程の深い霧が立ち込め前後を忘じている内に、ふと昔の人の霧を詠じた歌を思い出し

おぎわらや
軒端の露にそぼちつゝ
八重立つ霧を
わけぞ行くべき

と口ずさんだ、所へいずくよりか女性一人来られ、只今の詠歌は何と思いよりて口ずさまれたかと問いかけられたので、僧は余りの深い霧なので苦い事を思い、只何となく口ずさんだと答えた。女性の曰くこれは昔夕霧の大将と申す方の小野の別荘へ御母の一条御息所（いちじょうみやすどころ）の御病気看護のために来て居られたが夕霧の大将は柏木の生前より色々の世話をして居られる内に宮が未亡人となられてよりは何となく恋慕の心が出来し、或る時この別荘へ訪れて来た時に非常に深い霧に出逢いて前記の歌を詠んだとのことであった。そして夕霧の迷いを

の詠歌だと教えられ、それにつきその当時の色々の事情を物語られた。この夕霧の大将と申すは、光源氏の長男で、その親友であった柏木の衛門の督（ゑもんのかみ）この人は太政大臣の長男であったが、病死されて以来その北の方である落葉の宮（これは朱雀帝の女第二の宮）が未亡人となって、こ

はらしてやってくれと言いすててその姿を消された。僧はその跡を弔い色々の陀羅尼を読んだので、その功力により成仏したという筋である。

**第二十番　高　安**（たかやす）

都方より出た僧が龍田川の紅葉を見物してから龍田山を越えて西の麓高安の里へ来た。一人の女性に逢ったので、ここは何と申す所ぞと尋ねたらば、このところは高安の里といい、またあれなる松は笛吹きの松と申すと教えられた。その笛吹の松の謂れを尋ねたるに、昔在原の業平卿がこの高安の里に知る女人があって、はるばる石の上（いそのかみ）からここまで通って来て、あの松の下で笛を

吹いて合図をしたので、笛吹の松と申す。私は昔の高安の女の執心であるが、今宵はこの松のもとで御経を読んでお弔い下さらば、我も顕われて昔の御物語りを致しますといい捨て人影に立かくれて失せた。僧は教えの如くに弔っていると、再び女の亡霊が顕われ、業平がここまで通ってくるにつけ、彼の紀の有常の娘が詠みたる

風吹けば沖津白浪龍田山
夜半にや君が独りゆくらん

と表面には一向に妬むけしきもなき様子なれども、よくよく見れば胸の内の炎は烈しく燃えて胸の上に乗せていたひさげの水が沸き返り、思いにくゆる埋み火の烈しさに業平も遂にこの高安通いを思い止まったので、この松の下の笛の音もそのまま絶えた。私も遂に捨てられて妄執の迷いに沈む身であります。何卒よくお弔い下されといって消えた。

# 三重県で初の薪能

去る八月九日夕より、鈴鹿市能光寺境内で、三重県最初の薪能が行なわれた。曲目は経政（シテ衣斐正宣）葵上（シテ辰巳孝）の二番であったが、同寺は芸大出身宝生流職分衣斐正宣氏の生家であり、思い切って境内に舞台を設けて篝火を焚き、本格的の薪能を催されたことは、中部文化の発展に寄与された大きい功績と言ってよい。

当日は絶好の快晴に恵まれ、番組（8月号掲載）の如く順調に行なわれたが、観客は地元は勿論、名古屋、南勢方面から五百余名もあり「鈴鹿の薪能」として能界の年中行事となろうとしている。

## 鈴鹿薪能二首

寺男の「おしゃか」と染めし
はっぴ着て
かがり火焚けば
古式もゆかし

宵闇のかがりの影より
現われし
「経政」はまこと
亡霊の如し

（宝生流職分・戸田秀雄記）

（写真）鈴鹿薪能「葵上」のスナップ

## 9月の謡曲狂言番組

**NHK ラジオ 第2放送**
**毎日曜日　午前8時から9時まで**
**（再放送）**
**毎金曜日　午後2時から3時まで**

**9月14日（日）・19日（金）**
金春流「景　清」金春　信高　ほか

**9月21日（日）・26日（金）**
金剛流「遊行柳」豊嶋弥左衛門ほか

**9月28日（日）・10月3日（金）**
観世流「殺生石」山階　信弘　ほか
喜多流「玉　葛」福岡　周斎　ほか

◎ 番組のかわることがあります。
ご了承下さい。

# 熱田神宮の特殊神事

㊐

熱田神宮権宮司　長谷晴男

御田植祭　〔写真説明〕

御田神社の社前で早乙女四員が「田舞」を奏している場面である。向って右側が権宮司以下祭員、起立して笏拍子を打ちながら「田歌」を謡っているのが陪従である。

## ○御田神社　御田植祭　六月十八日

御田神社御田植祭は、摂社御田神社（祭神・大年神）で行われる五穀豊穣を祈る祭儀で、御田神社の例祭である。

祭典の次第は、当日午前十時、権宮司以下祭員斎館より参進、社前に於て小祭式に依り、祭儀を行うが、斎主の祝詞奏上に次いで、陪従の謡う「田歌」につれて白衣・緋袴・緋襷に、芙蓉の挿頭花をつけ、榊（玉苗を付す）を採った早乙女四人の奏する田舞が奏せられ、祭典は終了する。

○田歌

（陪従が笏拍子を打ちつつ之を謡う）

若種うゑうよ　苗種うゑうよ　女とのの手に手をとりて　ひろろむ　とるとよ　やれ〳〵

さみだれに　みすそぬらして　うゆる田を　きみが千年の　みまくさにせん　やれ〳〵

みましもしげや　若苗とる手やは　白玉とる手こそ　とみくさのはな　やれ〳〵

福万ごくに本国へ　うゑちらし　手に手をとりて　ひろろむ　とるとよ　やれ〳〵

（附記）

一、昔では、当神宮の近くに「八丁殿神田」があり、祭典終了後、熱田神宮奉仕のもとに、田植の儀を行ったが、事情により、この儀は廃止せられた。

二、当神宮の斎田としては今一つ大高町に「大高斎田」があり、毎年六月二十八日には、同斎田に於て「御田植祭」が執り行われている。

## ○神輿渡御祭　八月八日

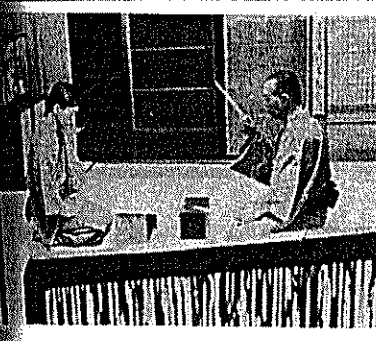
神輿渡御祭は、朱雀天皇天慶二年（九三九年）平将門が下総に謀を奉じ、征討におもむく途中、熱田神宮に逆賊誅伐の祈願をこめた。ために神輿は、愛知郡星崎の邑に渡御あらせ給うた。その霊験あって、将門は下総国辛島に亡んだという。

この故事に習って、毎年八月八日に、神輿は摂社孫若御子神社（祭神・天火明神）に渡御せられたが、戦後は事情により、当日午前十時、本宮に於て、権宮司以下祭員奉仕のもとに祭典を行うのみで、神幸の儀は中絶のまま、今日に及んでいる。

（「熱田神宮の特殊神事」完）

（編集部より）本紙第27号より7回にわたって掲載された「熱田神宮の特殊神事」は今回で終わります。由緒ある熱田神宮の古式祭はその長い歴史のなかに民衆との深いむすびつきをいきいきと物語っております。ご執筆を賜った熱田神宮権宮司長谷晴男氏に紙上をもってお礼申上げるとともに、ご愛読を感謝致します。

**朝日新聞では、同紙家庭欄で「親と子の夏」シリーズとして能楽ワキ方高安滋郎師父子を掲載した。（八月十二日号）本紙でここに再録、紹介する。**



床の間を背に父がすわる。向いあって、見台を前に子が正座する。緑の外の庭は夕やみに沈んだ。どこからか、かすかな風鈴の音が伝わって来る。一座の衣は鈴懸（すずか）けの……。創々と父がうたう。謡曲「黒塚」の冒頭。子がつづける。「そうじゃない。そこはもっと高く」。再び子が繰返す。ピシッ、ピシッ。父が打ちおろす張扇の音が、子の謡いに正確な句読点を打つ。父の顔は次第に紅潮し、子の額に汗が光る。

一調、二気、三声。「謡いは一に調子、二に気合、三に声といわれましてね、気合が大事なんです。だから、これをやると汗びっしょりになります」と父、高安滋郎さん（五二）が説明する。能楽のワキ方三流の一つ、高安流の十三世宗家である。子は、その次男、大学二年生の勝久さん（二〇）。父が会社勤めから帰って、夕食前の一時間が、父子相伝の芸道のけいこ。もう小学生のころからの勝久さんの日課だ。

「必要にせまられないと、なかなか、けいこしないんです」と、笑いながら父。必要にせまられるとは、父とともに能の舞台に立つことである。さる三日夜、名古屋・熱田神宮で催された「第四回名古屋薪（たきぎ）能」では、父は観世流の「花月」に、子は宝生流の「船弁慶」に出た。九月にも、鈴鹿市で開かれた宝生流の薪能にそろって出演したばかり。やがて秋の〝能繁期〟。中部能楽師会主催の「大衆能」の舞台をはじめ、いくつかの出演が待っている。

「夏の間に、たとえ数番でもいい、謡いの神髄を会得させたい」と父は願う。

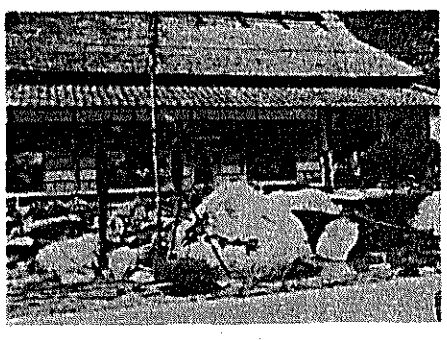
## 家の芸

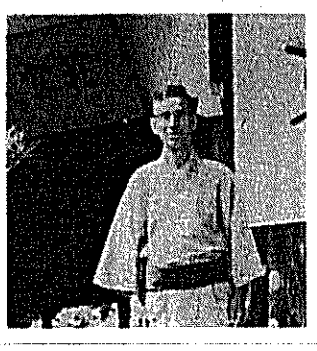
# 伝統継承にこもる気合

けいこは確かにつらい。言われた通りの緩急、強弱が出ない。調子がととのわない。気合がはいらん。――とわれたレコードのように、同じ所を何回も何回も。それでも父は、よしと言わない。一番の能をつとめるためには、二、三回は泣く思いをせねばならぬ。しかし「これが家の芸だ。なんとか受継いで行きたいという気はあるようです」と父は子に望みを託す。花やかなシテ方に比べて、ワキ方は地味な縁の下の力持ち。ワキ方を志望する者はごく少ない。いま、自分が、この父の芸を吸収しておかなかったら、父に伝えられた四百年近い家の伝統は消滅せねばならない。そういう危機感が勝久さんにはある。この三月、父が交通事故にあって、しばらく舞台を休んだことも、子にとっては一つの転機であったかも知れない。最近は自分から進んで、けいこを申出るようになった。

きびしいけいこ。しかし「おしつけ、詰めこみではなく、ここはこうだからこうなくてはならんと教えてくれます。仲よくやって行けます」と勝久さん。「うたっていると、すっかり主人公になりきる感じで、すばらしいと思います。おもしろいですよ」ともいう。一方、父も「うまい、下手の問題ではなく、謡いの調子になりかかっているようです。案外イケるのではないか」と、子を励ます。

いつもの夏なら、東京の大学に行っている長男の守彦さん（二三）も、このけいこに加わっているはずだが、大学が紛争中で帰ることができない。父子三人の謡いがこの座敷に響くのは、まだ、だいぶ先のことかも知れない。





（写真は代宮荘全景と八田氏）

## 目手耳口

# 田振りのヤナ

八月の吉日、誌友八田常次郎氏の経営されている田振りのヤナへ編集部同人有志で一日の清遊を試みた。場所は足助の香嵐渓の下流で、巴川に設備されたヤナである。が、折悪しく七号台風のために出水してヤナも、またその他の設備も大きな被害を受け、目下復旧工事中であったので、ヤナで鮎を拾うというようなことは出来なかった。

しかし本年六月に完成した代宮荘なる建物は、東加茂郡松平村にあった代宮屋敷を大正年間に碧海郡渡刈の里に移築したものをまたここに再建されたもので、その当時の民家の代表的なものだということである。玄関の天井など寄せ木細工のような美事なもので、柱の太さ古さなど趣きのある建物であり、八田氏はこの屋内の一部に敷舞台を拵えておられ、明年はここで是非能を舞い度いとの意向を洩らしておられた。

九月一杯は落鮎を楽しむことが出来る。名物はやはり鮎料理であるが、その他に五平餅、山菜料理として椎茸、わらび、ぜんまい、山椒などまた冬期にはしし鍋など山里の味を充分堪能出来る。用向いには山荘が点在し、静かな雰囲気の中で山家料理を味うのも一興でしょう。

正式の地名は愛知県東加茂郡足助町大字追分字田振、「巴水苑」電話（〇五六五六）②〇五八〇番。

交通の便は名鉄で東岡崎下車、バス足助行きにて一時間「巴水苑前」下車、料金は名鉄名古屋―東岡崎百五十円、バス東岡崎―巴水苑前百六十円。（T生）

# 仕舞入門

その四　殿島修二

仕舞入門も先月号で何となく終ったみたいな結果になってしまったが、実を言うと初めの着想は、仕舞の手ほどきを書くつもりで始めたのであった。しかし、これは月刊「観世」などに、大家のそれが載っているのに、若輩が識ったかぶりして書いて、お叱りを蒙るようなことがあっては、割の悪い話だからと気がついたので、やめてしまったので、「仕舞入門」という題の手前、甚だ内容空虚で、締めくくりのないものになってしまったが、ほんとうは仕舞を始めたいと思っている人、初めたすぐの人のために、参考になるようなわかり易い解説をして、少しでもお役に立てばよいがと考えたのであるが、流儀による違いとか、その人・人で教え方、舞い方が多少は違うであろうし、その他決定的な主張は、家元でなくては、書くことは許されぬようなことだってあるであろうから、かれこれ考えた末、遂に触れることを避けた。

ともかく、お仕舞を、広く皆さんに、始めて貰うつもりで、この欄を設けた意図に、ほかならなかったのだけれども、手ほどきを書かなくなったとなれば、これを以て終るしかないので、本月号で「仕舞入門」は終りにする。

次号からは、実は以前からズッとお願いしていた「地拍子の解説」または「拍子謡いについての講義」題は未定なるも、以上のような意義ある講義録のようなものを掲載すべく、特にこの道の大家である、大槻秀夫師に書いて頂くことになっているので、次回からの、それをお楽しみにご期待を乞う。

必ずや好参考資料となり、拍子謡の研究を始めて頂くための、指針となるは必定、不可解な地拍子の研究になくてはならぬ、好伴侶となること請け合いと思う。

是非ともご熟読あらんことを、お奨めする次第です。（おわり）

婚礼貸衣裳　装粧品卸　美容器材料卸
（株）才也キヤ　衣裳部
名古屋市中区栄3丁目22－30号　☎（241）0555

日本のどこでも……世界のどこでも……
優れた品質と性能を
誇るブラザー
ペースセッター701
世界の有名品
BROTHER ブラザー
ブラザーミシン販売株式会社

# 能樂の友

題字は熱田神宮　篠田宮司筆

発行　能楽の友社
名古屋市千種区吹上本町2—20
（郵便番号　464）
電話　（731）7984
振替口座　名古屋　36393

購読料　1年　300円
郵送の場合　1年　400円
一部　30円



編集同人（五十音順）

伊藤鉄之進　杉村竹翠　内藤泰二
梅田邦久　高安滋郎　野村又三郎
加野昭二郎　田鍋惣一郎　花木徳三郎
佐藤卯三郎　二井栄逸　柴田初太郎
殿島修二


## 伊勢神宮 文化殿が完成

## 10月21日 能舞台披き

能舞台をそなえる伊勢神宮文化殿は、本紙で報道したように、ことし二月十二日起工式が行なわれ、順調な工事運びで予定どおり完成、きたる十月二十一日能舞台披きが催される。

伊勢神宮では、第六十回式年遷宮を四年後にひかえ奉賛の気運が全国的に盛り上がっているが、この神宮文化殿は、伊勢神宮式年遷宮奉賛会の事業として実施、かねてから神宮の御遷宮映画の製作に協賛している船舶振興会が一億円の奉納協賛で本格化したものである。

神宮文化殿の総工費は一億三千万円、鉄筋コンクリート二階建の中央棟、平屋建の奉納殿、参集殿、回廊式の神殿づくりで延べ一九八〇平方㍍。とくにこれまで能などを奉納しようという場合、本格的な施設がなかった伊勢神宮としては、名実ともに見事な能舞台が完成したもので関係者の喜びは大きいものがある。

文化殿能舞台披きは、十月二十一日午後一時から能二番、舞囃子三番、狂言一番で奉納。観世、宝生、金剛、金春、喜多の五流をそろえ、厳粛かつ盛大に催される。

番組の大要は、②面掛藏のとおり、喜多流能「翁」、宝生流舞囃子「鶴亀」、金剛流舞囃子「田村」、観世流舞囃子「羽衣」、狂言「素袍落」、金春流・半能「高砂・祝言之式」の予定である。

なお二十二日には、引き続き、新設の能舞台で有志による五流の舞囃子が奉納され伊勢神宮文化殿完成を祝す行事がくりひろげられる。

なお神宮神苑では、ことし初めから宇治橋の架換工事がすすめられてきたが、きたる十一月二日には、宇治橋の渡御式（渡り初め）が斉行されることになっており、この渡御式とともに文化殿の完成は、神宮の諸行事、崇敬者の文化活動にふさわしい施設となると大きく期待されている。

「花筐」のスケッチ　仙田雪山子画

### 「花筐」の解説

四番目物のうち狂乱物。反魂香の故事をクセに取り入れてあり、型も節も甚だ精彩に富む曲である。

作者は世阿弥元清。世阿弥はその著「風姿花伝」のなかで物狂について、その冒頭に「この道の、第一の面白づくの芸能なり」とし能において狂女物は重要であることを記し、とくに「物狂いの品に多ければ、この一道に得たらん達者は、十方へわたるべし」と書いている。

また狂乱の場合「いかにも、物思う気色を本意に当てて、狂う所を花に当てて、心を入れて狂へば感も、面白き見所もある」（花伝書）とあるとおり、高貴の方に対する恋慕の狂女物として代表作である。金剛流では「花形見」という。

## 演能案内

### 中部金剛会定式能（第二部）

十月十日（祭）午後二時半始
熱田神宮能楽殿

能組

舞囃子　安宅　金剛流　広田泰三　河村総一郎　後藤孝一郎　鬼頭季信
能　関寺古木　西村欽也　吉田定男　田鍋惣一郎　野崎太郎　藤田六郎兵衛　井上松次郎
狂言　狐塚　佐藤卯三郎　井上礼之助　大野弘之
独吟　花形見　伊藤鉄之進
仕舞　八嶋　松野恭憲
雪　片野東四郎
船橋　キリ　豊嶋弥左衛門
一調　松虫　今井幾三郎　田鍋惣太郎
能　紅葉狩　小林忠三　橋本幸雄　中尾六三郎　豊嶋三千春　西村欽也　高安滋郎　高安勝久　佐藤秀雄　佐藤友彦　筧鉱一　田鍋洋一　鬼頭八郎　藤田昭彦
間
附祝言

主催　中部金剛会
後援　中日新聞社

### 名古屋市・市民芸術祭参加
### 名古屋市・市制八十周年記念
### 市民古典邦楽の会

十月十一日（土）十時始
熱田神宮能楽殿

舞楽　胡蝶（邦楽）　法師美輝子　美智子　鈴枝　三波市之進　太鼓祐　鉦鼓進　笛悠逸雄　清孝　紀男　鉦一

平曲　横笛　井野川検校　土居崎検校　三品検校

（能楽）
舞囃子　（金）西王母　花木徳三郎　吉田定男　田鍋惣一郎　池田茂　鬼頭季信
狂言　柿山伏　井上礼之助　井上松次郎
舞囃子　（春）八島　広田外雄　吉田定男　後藤孝一郎　鬼頭季信
（観）鶴亀　高木美智子　筧鉱一　奥田敏子　助川竜夫　藤田六郎兵衛
（宝）経政　芳賀忠　筧鉱一　田鍋洋一　鬼頭季信
（観）芭蕉　中村つゆ　河村総一郎　田鍋惣太郎　藤田六郎兵衛
（観）那須　吉川美津枝　吉田定男　内藤式子　鬼頭喜太郎　筧三男
（観）井筒　坂田猛　筧鉱一　橋本竹蔵　冨士道周明
（宝）胡蝶　浦野倭子　河村総一郎　谷沢トミコ　助川竜夫　藤田六郎兵衛
能　赤間　鎮雄　高安滋郎　河村総一郎　田鍋惣一郎　鬼頭喜太郎　藤田昭彦
和合之舞
狂言　昆布売　森久見子　野村又三郎
（観）舞囃子　海士　五段　桑原信夫　吉田定男　橋本竹蔵　鬼頭喜太郎　筧三男
（観）花月　五段　田中きんさ　筧鉱一　後藤孝一郎　筧三男
（観）藤戸　植村真太郎　筧鉱一　田鍋惣一郎　藤田昭彦
（宝）井筒　木全正江　吉田定男　内藤純子　藤田昭彦
（観）頼政　松井省吾　筧鉱一　福井啓次郎　筧三男
（宝）通小町　松本治郎兵衛　亀山盛一　後藤孝一郎　鬼頭季信
（観）融　吉川宇良子　河村総一郎　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　筧三男
（金）山姥　亀井良子　吉田定男　後藤孝一郎　池田茂　鬼頭季信
附祝言

主催　名古屋古典鑑賞会
後援　名古屋市・名古屋市教育委員会　名古屋能楽会・名古屋邦楽協会　中部能楽師会・能楽の友社

## ◆演能カレンダー◆

〔10月〕
5日（日）風韻会（無料）
10日（祭）中部金剛会（午前の部無料・午後の部有料）番組別掲
11日（土）名古屋市芸術祭参加 市制80周年記念 市民古典邦楽の会（無料）番組別掲
12日（日）青陽会（有料）番組別掲
19日（日）橘諷会（無料）番組別掲
25日（土）龍吟会（無料）
26日（日）名匠鑑賞能（有料）番組別掲

〔11月〕
2日（日）観世九皐会（無料）
3日（祭）名古屋淡交会（有料）
8日（土）修諷会（無料）
15日（土）和泉会（有料）
16日（日）名古屋観世会定式能 番組別掲（有料）
23日（日）観衛会（無料）
29日（土）南山大学自演能
30日（日）竹韻会大会（無料）
——以上熱田神宮能楽殿

### ◆その他の催し

10月12日（日）松阪二井会　松阪・本居神社
10月19日（日）此水会　東区・高野瀬邸
10月21日（火）伊勢神宮文化殿能舞台披き　伊勢市
11月9日（日）龍神会　岡崎・随念寺
11月23日（日）春鶯会　名駅前・松岡旅館


東京新聞
中日新聞東京本社
東京都港区港南町2—3—13
TEL大代表111—2211

## 装束談義（二十二）

# 頭巾（づきん）

二井栄逸　ふとふみ

づきんは一般社会の間に古代からつかわれていたが、一番広く愛用されたのは江戸時代である。色々な型式があって調べて見るとなか〳〵興味深いものである。型式をおおまかに分けて見ると大体次のように五つに分けることが出来る。能装束の冠り物の内にあるづきんも能の演出に大事な役目をはたしているが、一般市井のものと対照して見るのも面白い。

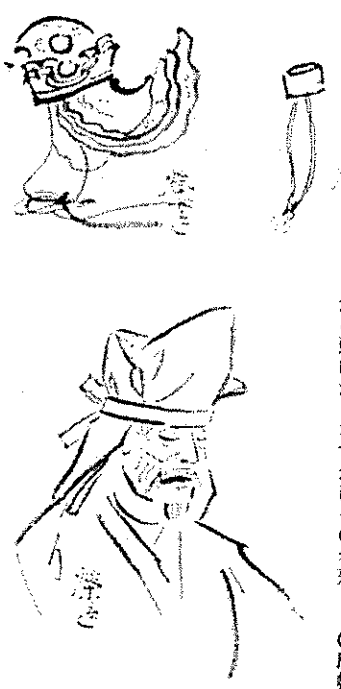
(1)丸頭巾……
一番古い方のもので、首丁頭巾、炮烙頭巾（ほうろくづきん）、投頭巾等の類。

(2)丸頭巾に鍔をつけたもの……
宗十郎頭巾、熊坂頭巾、講武者頭巾等の類。

(3)丸頭巾に覆面の工夫をほどこしたもの……
元禄時代に全盛を極めた、女性専用の奇特頭巾、気儘頭巾、また猫頭巾（火事頭巾）等。

(4)着物の袖に似て、頭巾から背中をおおうもの……
山岡頭巾、これは江戸の武士がよく用いた。また、腐匠の用いた学帽頭巾（おくそづきん）等。

(5)方形の布で頭から顔を包むもの……
御高祖頭巾（おこそづきん）等である。頭巾はこのように各階層にわたって普及し、時代のイメージを残したが、明治以後は帽子の普及ですっかり姿を消し、現在、農山漁村に使われている地方色豊かな頭巾が、わずかにその名残りをとどめている。



さて、装束談義、今回は冠り物の内、頭巾を書いて見たい。烏帽子、冠、天冠はすでに書いたので次回は笠を書いてみるつもりである。

**○沙門帽子**
僧頭巾を折返して著る。禅師僧我、正尊、橋弁慶、景清、鬼界島（俊寛）等のシテ、及び経政等のワキにも用いる。

**○角帽子**
僧頭巾を沙門のように折返さないで用いる。主としてワキ著流僧に用いる。

**○唐帽子**
三笑のシテ、明君、天鼓、邯鄲、唐船等にも用い唐人を表現した帽子で、シテ以外には用いない。

**○渕明帽子**
三笑の陶渕明の役のみに用い、慰霊の上に頂く。

**○長範頭巾**
色々の裂地で作り、紅（いろ）入りである。熊坂の後シテ、烏帽子折り等に用いる。

**○頼政頭巾**
種々の裂地を縫り合わせて作ったもので、無紅（いろなし）かきまり。

**○大会頭巾**
大会の後シテの赤頭の上にこの頭巾を頂き、掛絡をつけて仏の姿を擬装する。

**○袈裟頭巾**
白布を綴った袈裟でシテの頭をつつみ、叡山の法師武者の頭巾をかたどったもの、橋弁慶、正尊等に用いる。

**○花帽子**
白布で作り、小原御幸（大原御幸）等に用いる。

**○兜巾**
黒紗を張り、頭に頂き、白紐で結ぶ。安宅のシテ、是界（善界）の前シテ、ツレ。鞍馬天狗、車僧、大会等の前シテ、摂待のツレ、その他山伏姿にはみなこの兜巾をいただく。

**○大兜巾**
普通の頭巾より多きく、裂地を張ってつくり、頭（かしら）を頂く是界（善界）、鞍馬天狗、車僧等の後シテに頂く。

**○烏甲（とりかぶと）**
錦裂を集めて作ったもので、雅楽より転化したことは明らかである。富士太鼓の後シテ、梅枝、道明寺等に用い、楽を舞う。

**（スケッチは烏兜頭巾、小原御幸の花帽子、景清の沙門帽子）**


## 伊勢

伊勢神宮文化殿　能舞台披き　予定番組
十月二十一日（火）　午後一時始

喜多流　能
翁
翁　千歳　喜多実
三番叟　大蔵弥太郎　善竹忠一郎

山本敬一郎
田鍋惣太郎　田鍋惣一郎
田鍋洋一　藤田六郎兵衛

金剛流　舞囃子
田村　シテ　金剛英謹　吉田定男　後藤孝一郎　鬼頭季信

観世流　舞囃子
羽衣　和合　シテ　大槻秀夫　山本敬一郎　田鍋惣太郎　鬼頭八郎　藤田六郎兵衛

狂言
素袍落　シテ　和泉保之　アド　井上松次郎　井上礼之助

金春流　半能
高砂　シテ　金春信高　ワキ　宝生欣哉　笛　一噌隆之　小鼓　曽我彌十郎　大鼓　柿原崇志　後見　西村欽也　山崎清介　観世元信　金春安明　田鍋洋一　鬼頭喜太郎　藤田昭彦

宝生流　舞囃子
猩々　シテ　観世元信　笛　一噌隆之　小鼓　曽我彌十郎　大鼓　柿原崇志　後見　西村欽也　山崎清介　観世元信　金春安明　田鍋洋一　鬼頭喜太郎　藤田昭彦

## 拍子謡について

大槻秀夫

まえがき
この稿は、地拍子理論を敷衍とその必ず拍子に合わせて謡うものであり、また拍子に合わない部分は、一セイ・ワカ・クリ・サシ・カ、ル・クドキ・文、等で、勿論、謡も拍子に関係ない謡である。

それはあなた方もご承知の如くばならない。

この地拍子理論は、大体等と記されている部分はことと思う。全くこの地拍子理論だけでも、昔の人は一つのことに集中してじっくりと良く考えたものと、その偉さに感嘆させられるのである。

さて、この地拍子ということは

## 青陽会（第十三期第二回）

十月十二日（日）午前十一時始
熱田神宮能楽殿

能組
菊慈童　加賀敏彦　高安勝久　観一　福井啓次郎　池田茂　鬼頭季信
研究能
仕舞
野守　高橋晴一
玉葛　祖父江修一

舞囃子
小督　竹内六郎　吉田定男　後藤孝一郎　観三男
仕舞
蝉丸　眼部紗枝
杜若　河村鉦二
松虫　加藤丈太郎

能
藤戸　久田秀雄　高安滋郎　立石澄雄　河村総一郎　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛
間　佐藤秀雄

狂言
雁礫　佐藤卯三郎　井上礼之助　大野弘之

仕舞
雲林院　柴田初太郎

能
班女　佐藤太俊　西村欽也　高安勝久　観一　田鍋惣一郎　観三男　高安勝久
間　井上松次郎　佐藤秀雄

仕舞
通小町　柴田収武
花筐　塚本秀雄

狂言

能
熊坂　山本真義　高安滋郎　吉田定男　福井啓次郎　助田竜夫　鬼頭季信
間　佐藤友彦

主催　青陽会

## 橘諷会大会

十月十九日（日）午前九時半始
熱田神宮能楽殿

素謡
井筒　奥村昌子　松田芳郎
野宮　長谷川操　関根栄子
藤戸　稲木起志　三宅安雄
葛城　高橋道子　藤原彦一

ツレ　熊沢忠美子　沢田春子

熊野　梅若修一　池内光之助

ツレ　立木昌子　鈴木八寿

葵上　佐藤順子　伊藤いさを

仕舞
花筐　浜口知子
班女　神田佳代子　探谷和代

## 観世会定式能

十一月十六日（日）午前十一時始
熱田神宮能楽殿

素謡
安達原　林甲子夫　犬飼束吉　後藤契雲

経正　小野島参郎
独吟　小野島参郎
勧進帳　佐藤祥一

素謡
ヒメ　井上敏子
トモ　関根栄子　井上治三郎

能楽
清経　笠原達山

子方
梅若猶彦
奥田敏子

仕舞
クセ　高安滋郎　観一　福井啓次郎
高安勝久

仕舞
清経　社木みき江
鵜　中山栄子

舞囃子
求塚　稲木起志　福井啓次郎　観一
雲林院　奥村昌子　観一　後藤孝一郎　助川藤田昭彦
玄象　五段　北村やえ　後藤孝一郎　観一　助川竜夫　観三男
富士太鼓　長谷川操　福井啓次郎　観一　藤田昭彦

仕舞
月前　吉岡久栄
砧　井上敏子
融　伊藤いさを
善知鳥　立木昌子

舞囃子
巻絹　鈴木八寿　後藤孝一郎　観一　助川藤田昭彦
天鼓　川浦五倶子　後藤孝一郎　観一　観三男
山姥　杉田合子　福井啓次郎　観一　助川竜夫　観三男
熊坂　笠原宗平　後藤孝一郎　観一　助川竜夫　観三男

番外
舞囃子
安宅　梅若盛義　後藤孝一郎　観一　藤田昭彦

祝言

主催　橘諷会　梅若盛義

## 名匠鑑賞能（第六十回）

十月二十六日（日）十二時半始
熱田神宮能楽殿

能組
舞囃子
小袖曽我　五木田武計　南条秀雄　吉田定男　後藤孝一郎　鬼頭季信

観世　武雄
橋岡久馬

能
通小町　福王輝幸　谷口富代三　田鍋惣一郎　観三男

狂言
地蔵舞　井上松次郎　佐藤秀雄

観世喜之

能
半蔀　植田隆之亮　観一　田鍋惣太郎　藤田六郎兵衛

間　佐藤友彦

能
融　後前　大江又三郎　鈴木一雄

福王輝幸　河村総一郎　田鍋洋一　鬼頭喜太郎　藤田昭彦

思立之出
クツロギ

間　井上礼之助

祝言

主催　名古屋能楽鑑賞会

〃　阿漕　山本勝一

能
殺生石　上田照也　高安滋郎　吉田定男　後藤孝一郎　鬼頭八郎　藤田昭彦

間　佐藤卯三郎

# 拍子について

大槻秀夫

◎まえがき

この稿は、地拍子理論を整然と解いて行くと云ったような堅苦しいものではなく、稽古場で拍子謡の話を聞くといったような軽い気持で読んで頂きたい。

× × ×

あなた方が普段お稽古をして居られる謡は、素謡である。

広い意味に於ける「能」の中にはいろ〳〵の演じ方があって、勿論その中の代表的なものが能であり、次が素謡である。

その他、番囃子・居囃子・舞囃子・仕舞・独吟・連吟・二調・一調一声・一調一管・独鼓など、まだその他、狂能・半能・無謡一調・連管などと数多くの名称を持った演じ方があるのである。

その一つ〳〵の説明はここでは省略するが、素謡と能に就いてはその謡い方が全部同じと云うわけには行かないことを知って頂かねばならない。

それはあなた方もご承知の如く素謡と云うものは、シテ・ワキ・ツレなどの役と、数人で同吟する地謡とだけで出来ているのであるから、拍子と云うものに余り拘泥せずに謡えば良いのである。しかし能の場合の謡は、囃子方に囃されながら謡うものであるから、拍子に合った謡を謡わなければならないのである。

しかしそれは一曲の間悉く囃しているわけではないから、囃子方が手を止めている間の謡は、素謡の場合の謡と全く同じである。また囃子方が打っている場合でも、拍子に合わせなければならない部分と拍子に合わせないで謡う部分がある。そのため、謡本には必ず「拍合」・「拍不合」と明記してあるので、それに従えば良い。

尤もこの明記がなくとも、拍子に合う部分は、次第・道行・下歌必ず拍子に合わせて謡うものであり、また拍子に合わない部分は、一セイ・ワカ・クリ・サシ・カル・クドキ・文、等で、勿論、謡も拍子に関係ない謡である。

この拍子に合わない部分の中に囃子がのって囃す処と、のらずに囃す処があって、それに依って謡い方にも心得が要るのであるが、その説明はこのお話の目的ではないので省略する。

さて、この拍子に合わす謡を謡えるようになるためには、どのようにして理解し、そしてどのように練習して行けば謡えるようになるかに就いて説明して行くことが本稿の目的であるが、初めから拍子謡は難かしいと、頭からあきらめてしまっている人を往々にして見受けるが、そのような中途半端な気持ちで取りかかっては途中で棒を折ってしまう結果になりがちであるが、是非覚えてしまいたいという意欲を持ってかかりさえすれば、地拍子とは決して難かしいものではなく、まことに合法的だけでも、昔の人は一つのことに集中してじっくりと良く考えたものと、その偉さに感嘆させられるのである。

さて、この地拍子ということは拍子謡の理論であるから、まず、この理論を会得して、その上で拍子にはまった謡を正確に謡って行けるように練習をして行くのである。そしてこの地拍子理論の初歩が極く大切であって、これから説明して行く簡単な原則が理解出来なければ、それは直ぐに打切ってしまうほかないが、初歩の簡単な原則が理解出来れば、あとはその僅かずつの変化を辿って行くだけのことであるから、気長に目をかけさえすれば、その全部を会得することが出来るのである。

私は、この稿を読んで、独習でも、或る程度まで修得出来るように書いて行きたいと思っているので、そのためには初歩の部分を出来るだけくど〳〵と繰り返し書いて行きたいと考えている。

（つづく）

## 古曲雑話 (9)

西村弘敬

### 第二十一番　太刀堀（たちほり）

越中の国砥並山（となみやま）の麓に蓮沼の何某という人があって、畑にする為に山の中腹を切開かせている内に、この辺りは昔の古戦場であったので一振りの太刀が出土した。相当に立派な品と見えるので家に持帰り大切に保存していた。或る時召使っていた阿古根の前という女性が何となく物狂はしくて物の気がついた様子となり、平家は経（ひうち）の城を攻め落し勝に乗ててこの砥並山まで攻め来るのに、味方の兵はなど敵を追い払わぬぞ、などと叫び出したので、如何なる者がつきそったかと尋ねると、これは古え源氏の名大将に仕えた者だというので、それでは頼光の御内かといえば、さにあらず、また頼朝、義経の御内かと聞えどそれにてもなし、さては木曽殿の御内かといえば、今井樋口などではないという。さすれば女武者の葵の前かと巴の前かというに、葵の前らしくいうので、それでは掘り出した太刀は返すからその合戦の有様を物語れと言いて、倶利伽羅合戦の模様を語らせた。以下その物語の大略を記すとまず木曽義仲は五万余騎を引率して、この砥並山の北の林に陣を取り、また平家は十万余騎にて雲霞の如くに押寄せて立向い、さながら龍虎の争いか帝釈修羅の戦いの思いをなす有様であった。木曽殿東の方を見渡せば、頃は寿永二年五月半ばの頃、青葉茂れる陰に朱の玉垣の社殿あるが見えた。あれは如何なる社ぞと聞えば、これこそ当家の氏の神、八幡大菩薩埴生（はにふ）の宮と申すと言う。義仲悦び、軍の首途に頼もしきことぞ戦勝の祈願を籠めんと祐筆の覚明と申す法師を召し、願書を認めさせ鏑矢（かぶらや）一筋を添えて社殿へ納めさせた。この覚明という法師は、元奈良の法師で法相宗学は素より和漢の学に秀でたる人にて彼の有名な木曽願書の名文を水を流すが如くに立ちどころに言いて読み上げた。その文は観世流謡曲の木曽の中に用いられている。

### 第二十二番　孫子邀（そんしばく）

唐土経陽という所に水府君と申す者があった。これは大龍王の化身であったらしく、金殿玉楼とも云うべき高壮なる邸を構えて居た。然る所この者の子が経水の野辺に遊びに行き悪童共に取り巻かれ、竹杖などにて打擲せられて出血して既に危うく見えし時、折よく孫子邀という仙人が通りかかり悪童共を追い払い、傷ついたところへ薬を与えて助けて家に帰らせた。このことを聞いた水府君は早速家来をして孫子邀の居所を探し尋ねて呼び迎え、大酒宴など開いて大きに歓待した。仙人が暇申して帰らんとしたので数多の宝珠を贈らんとしたが、孫子邀は固辞したので、代りに霊薬の一巻を贈ったところ、孫子邀は喜んでこれを請け、秘伝口伝を悉く伝えられ、大龍船に乗せられて小龍共に引かれて帰ったという節である。

### 第二十三番　鶴若（つるわか）

保元平治の乱も過ぎて、平家の栄華も漸く下火になりかかりたる頃、木曽義仲が北陸道より都へ乱入し来り、数多の狼籍を働いたので朝廷より鎌倉へ義仲の狼籍を鎮めるように勅命が下り、範頼、義経兄弟が大将として上洛することとなりたる為、奥州信夫の郡にいた佐藤継信（つぎのぶ）、佐藤忠信（ただのぶ）兄弟もこれに従軍することとなった。継信は一子鶴若を呼び寄せ、自分達は主君の御供をして西海の軍に趣くが、汝は幼きことでもあり、また母上も病気のことであるから留守居をしてよく母に仕えよと諭したが、鶴若は弓取の子として家に居残ることは出来申さず是非とも御供すると聞き入れぬけれども、ともかくも押えつけて自分達は家来を連れて旅立ち、狭布（けふ）の郡という所まで来かかると、後より鶴若が召し連れられぬを恨み、小弓に小矢を取揃え単身馬に跨り追い掛けて来た。継信兄弟はこれを見て烈しく叱り、父の命に背くならば勘当すると言い渡した。鶴若は召具せられず剃え勘当までせらるるならば生きる甲斐なし自害すると腰の刀を抜き放ち腹につき立てんとするに、父は取付きて止め忠信と相談の上、召連れることにせんとしたが、鶴若が文を所持するのを見付け目の前にて読ませたところ、母よりの文にて鶴若をとどめんとて懇々と諭しの文なれば遂に鶴若も思いとまり古郷へ帰ることとしたという節で、彼の現行曲の摂待の曲に出て来る鶴若はこの人で山伏に変装した義経主従を摂待したのである。

## 能楽の友 月刊（毎月一回10日発行）〔第34号〕昭和44年10月10日

### 十一月十六日（日）午前十一時始　熱田神宮能楽殿

宝生流　舞囃子　鶴亀　シテ　厩巴　浜口知子
喜多流　能翁　千歳　喜多実　竹田鍋惣一郎　三番叟　大蔵弥太郎　田鍋惣太郎　洋一
狂言　素袍落　シテ　和泉保之　アド　井上松次郎　井上礼之助
金春流　半能　シテ　金春信高　ワキ　高安滋郎　高砂　祝言之式　西村欽也　安宅　関所　鬼頭喜太郎　田鍋寛一　洋一　藤田昭彦
能　融　後　大江又三郎　前　鈴木一雄　福王　輝幸　河村総一郎　田鍋洋一　藤田昭彦　鬼頭喜太郎　思立之出　クツロギ　間　井上礼之助
附　祝言　能　殺生石　上田照也　高安滋郎　吉田定男　後藤孝一郎　藤田昭彦　鬼頭八郎　間　佐藤卯三郎　後見　塚本秀雄　梅若六郎
附　祝言　能　隅田川　高安滋郎　高安勝久　寛鍋惣太郎　田鍋惣一郎　藤田六郎兵衛　後見　梅田邦久　梅若景英
狂言　寝音曲　シテ　和泉保之　子方　河村大梅若六郎　井上松次郎
能　龍田　河村総一郎　西村欽也　立石澄雄　神楽留　飯富雅彦　田鍋惣一郎　鬼頭喜太郎　間　井上礼之助　後見　杉村竹翠　上田照也
仕舞　融　山本裏義
〃　船弁慶　梅若景英
〃　松虫　殿島修二
仕舞　清経　佐藤太俊
〃　放下僧　杉村竹翠
連吟　玉葛　井川秀子　飯田新子
素謡　安達原　林甲子夫　大飼末吉　後藤契雲
仕舞　花筐　浜口知子
班女　神田佳代子
松風之取　深谷和代
葵上　浜田春子　梅若修一　池内光之助
仕舞　上　立木昌子　鈴木八寿　佐藤順子　伊藤いさを


## 10月の謡曲 狂言 番組

NHK ラジオ 第2放送
毎日曜日　午前8時から9時まで
（再放送）
毎金曜日　午後2時から3時まで

10月12日（日）・17日（金）
宝生流「班　女」宝生　英雄　ほか
10月19日（日）・24日（金）
観世流「松　虫」梅若　猶義　ほか
10月26日（日）・31日（金）
喜多流「篭太鼓」粟谷新太郎　ほか
狂　言「磁　石」山本　則寿　ほか

◎ 番組のかわることがあります。
ご了承下さい。

流元　剛行　金発　流本　世家　観宗
ひのき
檜書店
東京都千代田区神田小川町2－1　電話(291)2488—9　振替東京 3552
京都市中京区二条通麩屋町東入　電話(231)1990　振替京都 113

貴金属・アクセサリー・喫煙具・オルゴール
花木商店
記念品・ご贈答品に好適な品ばかりです……
宝石のことはどんなことでもご相談承ります
名古屋市中区栄2丁目16（中日シネラマ前）　電話 (231)2891・6727　(211)1019・1974

# 観能の手びき

## 十月の能　熱田神宮能楽殿

### ―十月十二日　青陽会―

**藤戸**（ふじと）　シテ　久田秀雄

ワキ佐々木盛綱は次第のハヤシでツレを伴って出る。

シテ浦人の母は一声のハヤシで出て、常座にて「老の波」と謡うワキがその老母に詞をかけると、シテは我が子を海に沈めて殺された恨みを訴えるが、ワキは初めのうちはこれを否定するが、シテの余りの泣きくどきに遂に心動き、懺悔の心に「その時の有様語って聞かせよう」とて語になる。

去年三月二十五日の夜、盛綱は浦の男に、馬にて海を渡るために浅瀬を聞くが、このことが洩れてはと、可哀そうだと思いながらも刀で突き殺し海底にその死骸を深く沈めたことを話すのである。

シテ（母）は頻りに歎き悲しむ。

クセになり、悲しみの余り「我が子返させ給へや」とワキに詰めよる。ワキはそぞろ憐れを感じ、亡き者の跡を弔い、その妻子を世に立てようと慰め、間狂言の下人を呼んで、家へ送らせることになって前場を終る。

後場はワキの待謡にて追弔の意を謡うと、後シテ浦人の亡霊が、杖をついて現われ、常座にて「憂しや思い出でも」と語り出し、[illegible]海を渡る手柄を立て、この島を賜りながら、自分は命を取られた恨みを述べ、殺された時の有様を示すキリの場面となるのである。

**班女**（はんじょ）　シテ　佐藤太俊

狂言方が登場し、狂言口開で始まる。狂言方、野上の宿の長は、遊女花子がこの春、都から来た吉田ノ少将と深く契り、取交わした形見の扇を肌身から放さず、部屋外にも出ない有様を述べて後幕に向って花子を呼び出す。シテ花子は悄然と現われ常座に下居する。

其の花子の懐中から狂言方が形見の扇を取り上げて床に投げつけて、早く出て行けと罵って退場する。シテは扇を拾い、我が身の憂さを謡って泣く。地謡の下歌・上歌で、中入りして前段を終る。

次第のハヤシでワキ吉田ノ少将がワキヅレ従者を伴って登場し、美濃ノ国野上の宿に着いた意を謡って脇座に着く。ワキヅレに命じて花子を尋ねさせるが、宿ノ長と不仲になって、既に此の所にはいないことを聞く。やがてワキ座にて床几にかけ、ワキヅレも座につく。

一声のハヤシで、後シテ花子登場、一ノ松にてサシを謡い葬る恋の思いを述べて舞台に入り、「恋すてふ我が名はまだき立ちにけり」にて、やがて狂乱の心にて「カケリ」を舞う。クセの舞では扇に因んで濃い情緒を描き、独居の恨みと寂しさをかこち、中ノ舞となる。舞アトも、すべて形見の扇に寄せた昔の契りを嘆き、「逢はでぞ恋は添うものを」とシオルを見てワキはツレに命じて女の持てる扇を見たい旨を伝えるが、シテはそれに応じようとしない。ロンギになり、ワキも形見の扇を出してシテに渡し、「御覧ぜよ互いに」と双方扇を合せ見て、再会を歓ぶという場面にて終る。

**熊坂**（くまさか）　シテ　山本真義

ワキ佐々木盛綱は次第のハヤシでツレを伴って出る。

シテ浦人の母は一声のハヤシで出て、常座にて「老の波」と謡うワキがその老母に詞をかけると、シテは我が子を海に沈めて殺された恨みを訴えるが、ワキは初めのうちはこれを否定するが、シテの余りの泣きくどきに遂に心動き、懺悔の心に「その時の有様語って聞かせよう」とて語になる。

去年三月二十五日の夜、盛綱は浦の男に、馬にて海を渡るために浅瀬を聞くが、このことが洩れてはと、可哀そうだと思いながらも刀で突き殺し海底にその死骸を深く沈めたことを話すのである。

シテ（母）は頻りに歎き悲しむ。

クセになり、悲しみの余り「我が子返させ給へや」とワキに詰めよる。ワキはそぞろ憐れを感じ、亡き者の跡を弔い、その妻子を世に立てようと慰め、間狂言の下人を呼んで、家へ送らせることになって前場を終る。

後場はワキの待謡にて追弔の意を謡うと、後シテ浦人の亡霊が、杖をついて現われ、常座にて「憂しや思い出でも」と語り出し、[illegible]海を渡る手柄を立て、この島を賜りながら、自分は命を取られた恨みを述べ、殺された時の有様を示すキリの場面となるのである。

**班女**（はんじょ）　シテ　佐藤太俊

狂言方が登場し、狂言口開で始まる。狂言方、野上の宿の長は、遊女花子がこの春、都から来た吉田ノ少将と深く契り、取交わした形見の扇を肌身から放さず、部屋外にも出ない有様を述べて後幕に向って花子を呼び出す。シテ花子は悄然と現われ常座に下居する。

其の花子の懐中から狂言方が形見の扇を取り上げて床に投げつけて、早く出て行けと罵って退場する。シテは扇を拾い、我が身の憂さを謡って泣く。地謡の下歌・上歌で、中入りして前段を終る。

次第のハヤシでワキ吉田ノ少将がワキヅレ従者を伴って登場し、美濃ノ国野上の宿に着いた意を謡って脇座に着く。ワキヅレに命じて花子を尋ねさせるが、宿ノ長と不仲になって、既に此の所にはいないことを聞く。やがてワキ座にて床几にかけ、ワキヅレも座につく。

一声のハヤシで、後シテ花子登場、一ノ松にてサシを謡い葬る恋の思いを述べて舞台に入り、「恋すてふ我が名はまだき立ちにけり」にて、やがて狂乱の心にて「カケリ」を舞う。クセの舞では扇に因んで濃い情緒を描き、独居の恨みと寂しさをかこち、中ノ舞となる。舞アトも、すべて形見の扇に寄せた昔の契りを嘆き、「逢はでぞ恋は添うものを」とシオルを見てワキはツレに命じて女の持てる扇を見たい旨を伝えるが、シテはそれに応じようとしない。ロンギになり、ワキも形見の扇を出してシテに渡し、「御覧ぜよ互いに」と双方扇を合せ見て、再会を歓ぶという場面にて終る。

**熊坂**（くまさか）　シテ　山本真義

### ―十月十九日（日）橘醍会―

**隅田川**（すみだがわ）　シテ　奥田敏子

お素人で、この大曲に取り組まれる奥田さんは非常な芸熱心家で、小鼓を永いこと勉強され、能も何番か舞われたことと思うが、今度の隅田川はなか〳〵意欲的で見るべきものがあろう。

解説は去る九月二十一日に金沢市で、片山博太郎師が舞われた時の番組に掲載された、権藤芳一氏のものを転載させて頂く。

世阿弥の息子で、夭折した天才、十郎元雅の作。春の武蔵野、隅田川のほとり、渡守（ワキ）が客をまっている所へ、一人の女（シテ）が、物につかれたようにやってくる。京都北白川の者だが子供を人買いにさらわれ、その行方を尋ね歩いているのである。そして、乗船を頼むが、話をしているうちに、物狂しくなってくる。渡守は哀れになり、船にのせてやる。船頭は船を漕ぎながら、同舟の旅人（ワキツレ）の問うがままに、川向いの大念仏は、一年前の今日、商人に連れられて来た子供が病死したのを、人々が不憫に思い、回向しているのであると話すと、その子供こそ、尋ねる我が子梅若丸であると知った狂女は、泣き伏してしまう。

渡守は同情して、女をその塚に導いてやる。女は泣く泣く人々と共に念仏を唱えると、我が子の声（子方）がきこえ、その姿が、まぼろしのように現われたので、母は狂気して追い求めたが、夜の明けると共に、姿は消え失せ、我が子と見たのは、塚の上に生い茂る草であった。

いわゆる狂女物は八曲、そのうち子供の行方を尋ねる女が五曲ありますが、その四曲までが、子をたずね当て、めでたしめでたしで終る。しかしこの曲は、遂に生きて巡り会う事はできず、いやされる事のない動哭で終る異例の曲。

春の隅田川を背景に、美しくはかない母の狂乱、我が子の病死を知って、悲劇の影像のように、舞台にうずくまる母の傷心。念仏に現われた我が子の幻を、むなしく追う母の姿、母というものの悲しさを、象徴的に謡い上げた名曲。

### 東京

昭和四十四年度　芸術祭参加
**東京金剛会別会**
**道成寺を観る会**
**十月二十四日（金）午後六時始**

能組

はじめに　今井欣三郎
葛城　一調　奥野達也
枕慈童　仕舞　観世元信
鳴子遣子　狂言　金剛巌
能　大蔵弥太郎　大蔵基嗣　大蔵基義
道成寺　豊鶴弥左衛門　前シテ　後シテ
鈴木順一　高安滋郎　古左善竹圭五郎　藤野善作　竹善十郎　安福春雄　幸園次郎　金春惣右衛門　一噌幸政
間　広田敏秦三　金剛巌　斎藤弥一郎　田村信一郎　小久保明

### 各地だより

◇岐阜淡交会秋季別会
十月二十五日（土）岐阜・万松館
番囃子「松風」、素謡、舞囃子、仕舞十数番

◇豊春会秋の能
金剛流豊春会は創立七周年記念「秋の能」を十月十九日（日）京都・金剛能楽堂で開催する。
番組は、豊鶴弥左衛門師の「三輪」小書・神道、豊鶴三千春師の「殺生石」小書・女体ほか舞囃子「乱」、一調「花筐」、仕舞六番など。
殺生石の小書・女体は、金剛流独特の演出がある。

◇藤谷政二氏先考追善能
十一月三日（祭）上田能楽堂（神戸）
能「隅田川」観世元正、江崎金治郎　「道成寺」藤谷政二、高安滋郎

◇浦田保嗣氏三回忌追善能
十一月九日（日）京都観世会館
能「井筒」観世元正、滴治郎右衛門　「砧」浦田保利、今村知史　「道成寺」越賀義隆、高安滋郎

### 舞楽と管絃の会

**11月1日　中区役所ホールで**

名古屋市教育委員会、中部日本雅楽連盟主催、名古屋邦楽協会など後援の昭和四十四年度名古屋市民芸術祭「舞楽と管絃の会」が十一月一日午後五時から名古屋市中区役所ホールで行なわれる。
藤井制心氏による講演ののち、雅楽管絃、八雲琴、朗詠、箏曲合奏、能馬楽、平曲、舞楽など十曲が上演される。

### お知らせ

〈転居〉
喜多流・和島富太郎氏
新住所　宝塚市宝梅一丁目十二ノ一
（旧住所　西宮市津門西口町）

### 新刊紹介

**観世流謡の手引**
―頭註と傍註・素謡鳥瞰図―
**斎藤太郎著**
**檜書店**

檜書店から発行されている文庫判「能楽叢書」シリーズ、斎藤太郎氏著「初心者問答」につづく第四巻「観世流・謡の手引」がこのほど刊行された。
斎藤太郎氏は、すでに本紙で紹介した明治、大正、昭和と四十数年にわたり、自ら能をたしなみ、また多年、雑誌「観世」の主筆として能の蘊奥をきわめ、遺稿集の一環である。
副題のとおり、謡本の頭註と傍註について、きわめて平易に、しかも自らの疑問を読者とともにさぐり、解説する単刀直入、しかも流麗なタッチの説明は、読むものへの理解を深めることを[illegible]
とくに「段」についての解説、囃子方各流の一調曲目について詳細に説明されている。
また、素謡鳥瞰図の章では「素謡は能のセンターランドである。能はピラミッドの頂点で、素謡はその底辺である」として、素謡の発生の淵源をたずねている。
高級な理論をふりまわさず、基礎的なことから素直につみ上げていこうとするこの著書は、謡の手引として、また謡の楽しさと奥行きを教えてくれる名著である。
文庫本ではあるが、七十頁に盛られた内容は、幅広い角度から「謡」を解明し、導いてくれる。

アメハマ
アメハマ製菓株式会社
名古屋市西区新道町4の11
電話（代）571―1968

婚礼貸衣裳
装粧品卸
美容器材料卸
（株）才世幸や
衣裳部
名古屋市中区栄3丁目22－30号　☎（241）0555

能楽殿御用達
割烹料理仕出し
西みやか
名古屋市西区浅間町
電話（531）5507・6666

小料理と樽酒　●ご会席にもご利用下さい●
安田屋
名古屋・東新町東北側
電話（971）0916・0158番

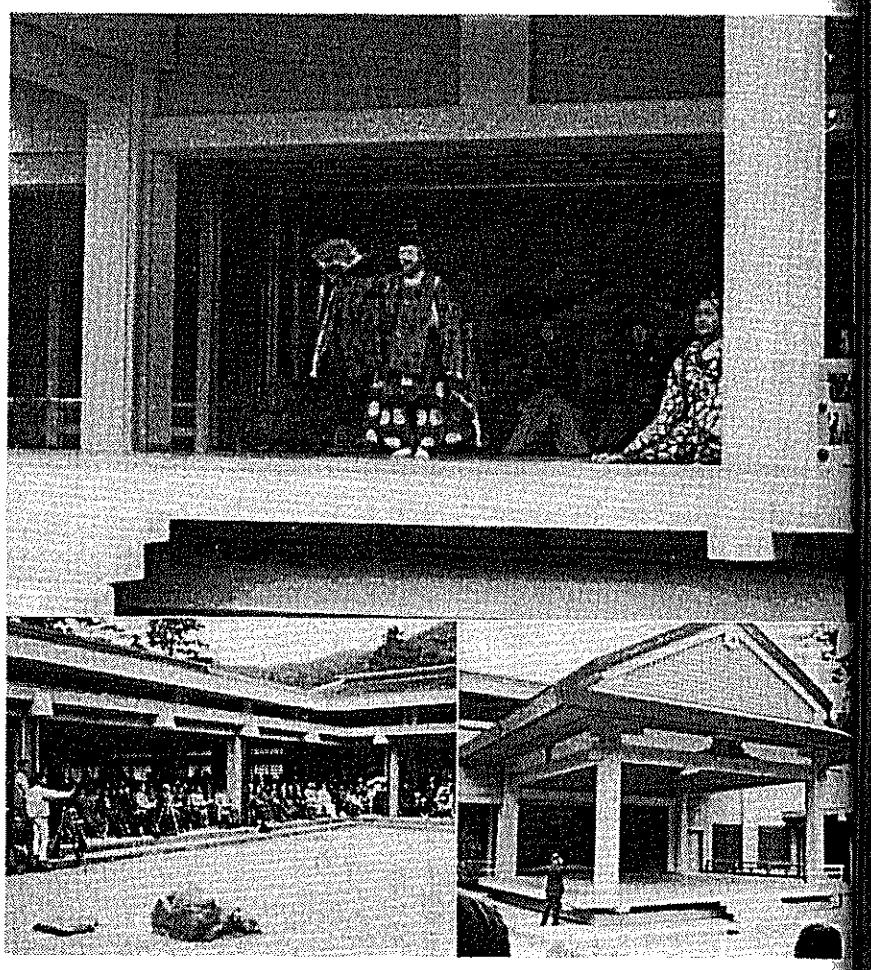
東海の3つのミリオン
ミリオン積立預金　ミリオンカード　ミリオン住宅ローン
東海銀行

# 能樂の友

題字は熱田神宮　篠田宮司筆

発行　能楽の友社
名古屋市千種区吹上本町2－20
（郵便番号　464）
電話　（731）7984
振替口座　名古屋　36393
購読料　1年　300円
郵送の場合　1年　400円
一部　30円

## 厳かに能舞台披き
### 伊勢神宮文化殿の落成



前号既報のように、能舞台をそなえる伊勢神宮文化殿は、約八カ月間順調な工事進捗により見事完工、さる十月二十一日、厳かに能舞台披きが行なわれた。

奉納能は壹多流「翁」にはじまり、宝生流舞囃子「鶴亀」金剛流舞囃子「田村」観世流舞囃子「羽衣・和合」狂言「素袍落」金春流半能「高砂・視言之式」で東西各流各会の楽師をそうえ行なわれ、地元各界多数の観客が来場参観、きわめて盛大であった。

なお、ひきつづき二十二日には有志による各流の舞囃子が奉納され、終日いとも盛大に伊勢神宮文化殿完成を祝す行事がくりひろげられた。

### 四間四方の能舞台
#### 国宝舞台の様式をもつ

文化殿能舞台は、構造上大きな特徴をもっている。たとえば鏡板の前に無地のカーテンをひき、他の芸能にも利用できるよう配慮がなされ、そのカーテンが後見座の横、一ノ松の裏側にたたみとめるようになっている点も注目される。舞台は通常の三間四方でなく四間四方をとり、十分な舞台の広さをもち、白州が非常に大きく屋外になっており、見物席と舞台が切り離された古い能舞台の形式をとって、なかなか趣きのある舞台つくりで、京都・東本願寺、西本願寺の国宝舞台の儀式がとり入れられたことも立派な着想といえる。

また白州に岩を配して砂模様をつくっているあたりは、まことに心憎いほど。その古式めいた美しさを強く感じさせる。

楽屋も全く新しい建物で、美しく落ちつきのある日本間が各役ともに準備されており、今後伊勢神宮奉納能にあたって、その行きとどいた設備はなかなか立派なものと楽師一同の評判の的となっている。

〔写真〕（上）「翁」の演能（下）（右）文化殿能舞台全景　（左）白州の広い見所

## 市民古典邦楽の会
### 市制80周年を祝し盛会

ことし市制八十年を迎え名古屋市では、全市に多彩な行事をくりひろげたが邦楽では、能楽を中心として、十月十一日熱田神宮能楽殿で、名古屋市芸術祭参加、市制八十年記念「市民古典邦楽の会」が催された。

この催しには名古屋市、名古屋市教育委員会、名古屋能楽会、名古屋邦楽協会、中部能楽師会、能楽の友社が後援、邦楽の部では舞楽「胡蝶」平曲「横笛」の上演、能楽の部では、能「羽衣・和合之舞」シテ赤間領雄氏、狂言「柿山伏」「昆布売」をはじめ観世、宝生、金剛、金春、喜多各流による舞囃子十数番が催され、市制八十周年を祝すとともに、多数の邦楽、能楽愛好者がつめかけてきわめて盛大であった。

〔写真〕（上）能「羽衣」　（右）舞楽「胡蝶」

## 演能案内

観世会定式能
十一月十六日(日)午前十一時始
熱田神宮能楽殿

素謡　安達原　林甲子夫　犬飼末吉　後藤契雲
連吟　玉鬘　芥川秀子　飯田新子
仕舞　清経　佐藤太俊
〃　放下僧　杉村竹翠
〃　松虫　殿島修二
能　龍田　山本博之　立石澄雄　西村欽也　神楽留　飯富雅介　河村総一郎　田鍋惣一郎　囃子　井上礼之助　後見　杉村竹翠　上田照也　鬼頭喜太郎　笠三男
仕舞　融　山本真義
〃　船弁慶　梅若景英
狂言　寝音曲　和泉保之　井上松次郎
能　隅田川　子方　河村大　梅若六郎　高安滋郎　高安勝久　笠鉱一　田鍋惣太郎　藤田六郎兵衛　後見　梅田邦久　梅若景英
仕舞　井筒　柴田初太郎
〃　阿漕　山本勝一
能　殺生石　上田照也　高安滋郎　吉田定男　後藤孝一郎　鬼頭八郎　藤田昭彦　間　佐藤卯三郎　後見　塚本秀雄　梅若六郎
附　祝言

## ◆演能カレンダー◆

〔11月〕
2日(日)　観世九皐会（無料）
3日(祭)　名古屋淡交会（有料）
8日(土)　修諷会（無料）
15日(土)　和泉会（有料）
16日(日)　名古屋観世会定式能　番組別掲（有料）
23日(日)　観衛会（無料）
29日(土)　南山大学自演能
30日(日)　竹韻会大会（無料）　番組別掲

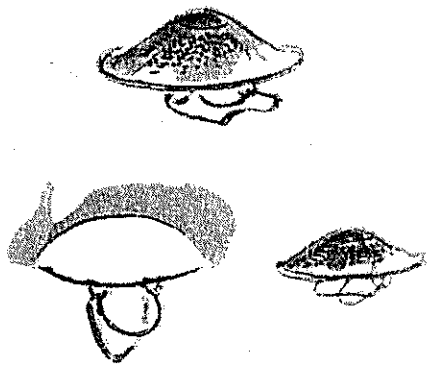
〔12月〕
6日(土)　柳原冨司忠　幸清流　職分披露能（有料）
7日(日)　邦謡会（無料）
13日(土)　歳末同情週間　義捐能（有料）
14日(日)　宝生会定式能（有料）
21日(日)　楽師会乱能（有料）

◆その他の催し
11月9日(日)　喜多流名古屋二井会　柴田舞台
11月9日(日)　龍神会　岡崎・随念寺
11月15日(土)　幸友会　八事・八勝館
11月23日(日)　春鶯会　名駅前・松岡旅館

## 装束談義（二十三）

# 笠（かさ）

ゑとふみ　二井栄逸



古い文化の残る京都に幕府がおかれたこともあって、室町時代の京都には、美しく、しぶみをもった文化が次々と生れていった。足利義満が北山の別荘に建てた三層の金閣、八代将軍の義政が京都東山の別荘に造営した二層の銀閣はともに北山、東山文化を象徴するものであった。時の文化人、義政将軍によって、能・墨芸・華道・茶の湯、或は、石をつかった造園が盛んになり、足利文化はのび〳〵と日本美を形づくっていったのである。

しかし、足利義政は、将軍としては無力で、鎌倉幕府ほどの力もなく、幕府は勿論、全国のまとまりも弱くなり、ついに応仁の乱をひきおこしてしまった。それは、鎌倉幕府の守護が大名となって将軍の力をしのぐほどの勢力を持つようになったことが一番大きな原因となっている。そして応仁の乱以後、戦国時代という百年にわたる戦乱の世となった。この群雄割拠の中に室町幕府はほろび、織田信長や豊臣秀吉によって、やっと世の中がおさまり、さしもの乱世にも終止符が打たれ、法王[illegible]

文化は益々盛んになり、庶民の間にもひろまっていった。このような戦乱の中をくぐりぬけ、以後江戸、明治、大正、現代と、いくたびの世の移り変りの中を、能は、その形をくずさず、厳然と生きぬき、世界にその光芒をはなつことになったのである。

先年、世界二十二カ国の代表者によって東西演劇の展望と相互影響というテーマで討議が行なわれた時、フランス代表は、「能の演出には永遠性がある。能の中には微笑をたたえたニヒリズムがあり、まさしく演劇の本質だけを摘出したもので、あさらかにすばらしい前衛劇である」と、激賞したそうである。

何故に能は素晴しいのか、何故に能は神秘性をもつのか、それは型式でなく、はてしない深さときびしさを追求してやまないためなのだろうか、また権勢に屈せず、世の移り変りに左右されず、唯黙々とおのれの姿を守ってきたためなのだろうか。

× × ×

さて装束談義。笠を書いて見たい。笠もなか〳〵風情のあるもので、能装束のなかにはなくてはならない冠り物の一つである。

○男笠　竹を編んで黒うるしを塗り、山形に作ったものを男笠という。黒い紐を輪にして結ぶ。芦刈、春栄、大仏供養のシテや、鉢木、清経、放下僧、土車、望月のワキ等、直面の役に使う。また、通小町、烏頭（善知鳥）にも使う。

○女笠　男笠同様竹で編み、黒うるしをかけた丸味のある笠である。卒都婆小町、富士太鼓、烏追船、鉄輪、隅田川等四番目物に用いる。

○雪笠　女笠に雪綿をつけて葛城の前シテが頂くもの。

○[illegible]笠　[illegible]

## 古曲雑話（10）

### 西村弘敬

### 第二十四番　皷の滝（つづみのたき）

当今に住える臣下が宿願のため西の宮の社へ参詣に行き、帰り途に山々の桜を見物せんとて山へ分け入った。そこに薪をとっていた老人がいたので、ここは何という所かと尋ねたところ、ここは皷の山と申す芽出度き霊地であるとのことであった。またその近くに滝があって、これは皷の滝と申して古き歌に

津の国の皷の滝を打見れば
峰山河のなるにぞ有ける

と歌われてある由色々の物語りして花を眺め、夜に入りて、この老人はこの山河を守る山神にて舞楽を調ぶる皷の滝祭の老人とは我がことであると言い捨て、滝壺に入ると見て姿を消した。やがて月の夜神楽が始まり、数々の舞楽が奏せられ勅使を慰めたとの筋である。

この曲の「くせ」を取り観世流の乱曲皷の滝として用いられてある。またこの皷の滝、皷の山とはどこにあるかと地図で色々調べて見たが判らなかった所、福王流脇師の久保田氏からこれは有馬温泉のある有馬山の一部である由御教示を戴いたので漸く判明した次第であります。

### 第二十五番　鵜祭（うのまつり）

能登の国一の宮気多明神の霜月初卯の祭礼は珍らしいとのことを聞き及ばれ、急ぎ見て参れとの宣旨を蒙りて臣下の者が能州へ下向し気多の神社へ参り、俄の降雪のため松陰に休んでいる所へ、女性が雪踏み分けて参詣に来たので、色々と尋ねたるに、この霜月初卯の祭りは殊更神秘が多く、中にも荒鵜を取り来て神前へ生贄（いけにえ）に供え祭りの終りに放ちてやればやがて飛び去るととなど第一の奇特なる由、そのほか当社の神秘色々と語りたる上、我は昔大入杵（おおいりき）の神といい、今は八幡玉殿（やひろたまとの）という神であると本体を顕わして舞楽を奏して勅使を慰め、やがて神前より鵜の鳥を抱き取り海上に向い放ちてやれば、鵜は羽風を立てて飛廻り、遥かの沖に飛去り、茲に神徳を示されたとの筋合である。

### 第二十六番　鵜羽（うのは）

九州大隅の国鵜戸の岩屋は、神代の古跡と承り勅使が参詣に来た所、神社の仮殿の屋根が黒色の羽根にて一方は葺き、今一方は葺きされあるので、そこへ来た女性に不審して尋ねたる所、これは地神五代の神を鵜の羽葺あわせずの尊と申す方の御生まれになった所でその謂れは、父の神が釣針を尋ねて龍宮に行かれ、豊玉姫と契りを結ばれ、その後豊玉姫が懐妊せられたので、この海辺に産屋を建て鵜の羽根をもって屋根を葺き、まだ全部葺き終えぬのに早や尊が御出生ありたるにより、御名も鵜羽葺不合尊（うのはふきあわせずのみこと）と申し上げたとのこと。またその御出生は秋の今日に当りたれば佳例に任せ仮殿を作りたる由を語られ、なお汐満干の珠の謂われなどをも語られ、豊玉姫は我也と名乗り海上に立つと見て失せられた。

勅使は松陰に居て神託を待つ所に豊玉姫が顕れ給い、舞楽を奏して勅使を慰められたとの筋合である。

## 各地だより

### 秘曲「檜垣」を公演

**11月30日　大阪・大槻能楽堂**

**大阪**

故観世元義師五十回忌追善能が十一月三十日、大阪・大槻能楽堂で催される。大阪文化祭参加、主催は山本博之師、最高の秘曲「檜垣」が上演される。番組は能「木曽・願書」シテ山本勝一、「班女・雅之伝」シテ観世元正、ワキ福王茂十郎、「檜垣」シテ山本博之、ワキ宝生弥一、「石橋・大獅子」シテ観世元昭、ワキ久保田巨亮、狂言「武悪」善竹忠一郎、茂山千作、茂山千三郎ほか舞囃子、仕舞十数番。会員券はA券三〇〇円、B[illegible]

### 「卒都婆小町」上演

**12月14日　京都観世会館で**

**京都**

武田小兵衛師主催による片山博通師追善能がきたる十二月十四日（日）京都観世会館で催され、「卒都婆小町」がシテ武田小兵衛師、ワキ高安滋郎師で演ぜられる。

## 会と催し

◇喜楽会
十月二十六日　津市三重会館で開催

◇和楽会
十一月三日　伊勢神宮文化殿

◇鈴鹿三流連合会
十一月五日　鈴鹿市文化会館

◇大阪仏[illegible]

### 昭和四十五年度観世会定式能予定番組

■第一回　二月八日
鉢木　観世元正
東北　観世喜之
鵜羽　観世元昭

■第二回　四月十九日
清経　梅若猶義
千手　観世銕之丞
安達原　大槻秀夫

■第三回　六月二十一日
芦刈　橋岡久共
班女　武田太加志
小鍛治　片山博太郎

■第四回　九月十三日
景清　井上嘉久
求塚　林喜右衛門
天鼓　藤井久雄

■第五回　十一月十五日
[illegible]

## 拍子謡について

大槻秀夫

まず原曲の説明をすると、謡の[illegible]

さてこれをどう謡い込むかを一[illegible]

その[illegible]

(ハ)のノリ方を「平ノリ」と言い〳〵「[illegible]」の唄は左の如き取り方で唄っている。

1 2 もしもしかめよ—かめさんよ—
8 1 2 3 4 —。せかいのうちに……

右の字配りを見ても解るように(ハ)は「半ノリ」または「中ノリ」と言い、二番目の修羅の有様を謡う場面に多く用いるので「修羅ノ芝」頼政の霊に謡で懐古の情もひとしお。午後五時すぎ帰路につき小野、逢坂山を経て、「通小町」「蝉丸」の遺跡を車中からしのび大津インターチェンジから名神ハつつがなく名古屋に到着、テレビ塔、熱田駅前にてそれぞれ散会した。（事務局記）

（写真）（左）（上）平等院扇ノ芝を参観　（下）若草山頂にて

## 宝生会定式能

十二月十四日（日）
熱田神宮能楽殿

竹韻会大会

十一月三十日（日）午前九時始
熱田神宮能楽殿

加茂　ツレ　鳥越祥吾　稲垣道雄　宮崎一斉

土蜘蛛　トモ　浅井幸男　中川かな子　胡頼　八神外史子　大井文雄　川北桂保

草紙洗小町　王　杉本佳道　戸松功克　立貫　水野猛　杉本達之　石川文三

紅葉狩　近藤タニ　櫛原浅男

輝丸　蝉　戸松功克　清水克朗　水野猛

井筒　三宅志づ　近藤タニ

独吟　花賀　神野道子
住舞　桜川　宮部保良

高砂　恒川志やう　河村総一郎　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛

遊行柳　小島とみる　河村総一郎　田鍋惣太郎　鬼頭喜太郎　藤田昭彦

融　角野博久　河村総一郎　田鍋惣太郎　鬼頭喜太郎　藤田昭彦

番囃子
安宅　子　烏越祥吾　同　大西鎮八郎　同　本多逸郎　同　戸松利作　鷺坂信子　奥村泰広　勧進帳　野口清　恒川松彦　滝川一司　戸松六雄　河村総一郎　福井啓次郎　藤田昭彦

班女　岩崎敏子　稲上絹　佐藤つる枝　大西智津子　神野道子

藤戸　飯田悦子

野宮　神田佳代子　角南智枝

定家　戸松利作　恒川松彦

実盛　本多逸郎　野口清　矢田義雄

番囃子
隅田川　子　杉本佳道　大西鎮八郎　滝川一司　宮部保良　笛　田鍋惣一郎　鼓一　三男

藤戸　鈴木公子　笛　福井啓次郎　鼓一　藤田六郎兵衛

通小町　竹内陽子　笛　田鍋惣一郎　鼓一　三男

小袖曽我　滝川一司　笛　田鍋惣一郎　鼓一　笛　三男

猩々　戸松六雄　笛　田鍋惣一郎　鼓一　鬼頭喜太郎　戸松利作

番外仕舞
屋島　杉村竹翠
雨之段　大槻文蔵
観言老松　大槻秀夫
以上

能千手　野口禄久　西村弘敬

竹韻会名古屋支部では、十二月十三日（土）歳末恒例恒例「義捐能」を熱田神宮能楽殿で開催する。第一部は午後一時始、能「鶴亀」（宝生流）能「安達原」（観世流）第二部午後五時始、能「本

# 謡曲名所めぐり

## 爽秋の大和路を訪ねる

能楽の友主催による「謡曲名所めぐり」秋の大和路をたずねるバスツアーは、爽秋の十月十日、五十四人が参加して催された。

一行は、名古屋市内在住者はじと、県下、岐阜県、長野県下の同好の方々が多数参加、午前八時三十分名古屋テレビ塔を出発、熱田神宮前駅から一路伊勢路に入り、〝熱田の社伏し拝み、木曽の大橋うち渡り、鈴鹿の山を右にみて〟との謡曲ガイドに聞き入りつつ、名四国道、名阪国道を西へ、途中天理市標本の「井筒」の遺跡を車窓から眺め奈良に到着、謡曲におなじみの興福寺、東大寺、春日大社を経て、猿沢池に「采女」の古跡をしのびつつ、春日奥山ドライブウェイを一周、若草山頂に午後一時半到着、昼食ののち再び車中の人となり、東大寺転害門（景清門）「大仏供養」をみながら奈良坂、佐保川と「百万」の一節を謡いつつ木津川へ、左岸に一休寺、音岡弥の落所の解説を聞きながら宇治に到着、ホテル静山荘で休憩〝げにや遠国にて聞き及びにし宇治の里、山の姿川の流れ、遠の里橋の景色、見所多き名所〟の説明をうけ「頼政」を同吟、それより

謡曲名所めぐり一行の記念撮影―宇治平等院にて

# 拍子謡について

大槻秀夫

まず原則の説明をすると、謡の文章は原則的に七・五調である。そして拍子の原則は八拍子（八箇拍子）である。

拍子というものは、一つだけ打ったのでは拍子とは言わず、同じ間隔をもって二つ打って始めて拍子が生ずるのである。一二一二と同じ間隔に手拍子をたたくことによって初めて間（リズム）が生ずるのである。一二三四五六七八―これが八箇拍子である。

古い唄を例にするが「汽笛一声新橋を」でも、「もし〳〵亀よ亀さんよ」でもいずれも唄の文字は七・五調であり、拍子は八箇拍子である。これが歌の原則である。

謡の高砂の第一句の「今を始めの旅衣」も七・五調である。紅葉狩の第一句「時雨を急ぐ紅葉狩」も七・五調である。次第謡の第一句は皆七・五調である。これを八箇拍子の中に謡い込むのが地拍子理論の原則なのである。

さてこれをどう謡い込むかを一緒になって考えて見よう。

◎ノリの種類

まず第一に、文字の数と拍子の数とを見くらべて見ると、文字数は七五調であるから十二文字、拍子の数は八箇である。一箇に二字の割に取って行くと、八箇拍子に十六字まで謡い込むことが出来る。また一箇に一字ずつ謡うとすれば八字しか謡えないことになる。

そこで謡を拍子にのせるノセ方に左の三通りがある。

(イ) 八箇拍子に十二文字謡い込むことを原則とする行き方。

(ロ) 八箇拍子に十六文字謡い込むことを原則とする行き方。

(ハ) 八箇拍子に八文字謡うことを原則とする行き方。また別の考え方をすれば、八箇拍子二つ（二くさり）に七・五調を謡い込みことを原則とする行き方。

そこで拍子に合う謡の殆ど九割まではこの平ノリで謡う。

(ロ)は「半ノリ」または「中ノリ」と言い、二番目の修羅の有様を謡う場面に多く用いるので「修羅ノリ」という言葉も使われる。

(ハ)は「大ノリ」と言い謡本にノルと記されている謡い方である。

この(ロ)と(ハ)は、地拍子としても理解し易く、また実際に謡う場合にも比較的易しいものである。

併し(イ)の平ノリは、(ロ)(ハ)よりは拍子理論も遥かに複雑で、また実際の謡い方も上手に謡えるようになるまでには相当の年月を要するものである。

まず七五調の十二文字を八箇拍子にのせる平ノリから研究して見よう。

◎平　ノ　リ

八箇拍子の事を術語で「本地」と言うので、之からは本地という言葉を使うことにする。

一箇拍子に二字ずつ謡い込むと本地は十六字分謡えることになるが、文字は十二文字しかないのでどれかの仮名を引張らないと十六で唄っている。

1 2 もしもしかめよ―かめさんよ―
3 4 5 6 7 8
1 2 3 4 ―。せかいのうちに……

右の字配りを見ても解るように亀よのよを一字引き、亀さんよのよを二字引いて、終りに句読点がきて息を継ぐ。即ち十二文字の仮名と三字分の引きと、一字分の句読点との合計で十六字分になっているのである。併しこれは洵に単純な取り方であって、謡ではもっと高級な取り方をあみだしている。ということは少し先きで解ることと思う。

十二文字を四で割ると三文字になり、本地を四で割ると二箇拍子になる。つまり二箇拍子に三字ずつ謡い込むようにするのである。ということは二箇拍子毎に一字分引く仮名を作って四字分にするのである。併し一句の終りには句読点がくるのが当然であるから、引く仮名は三カ所ということになる。

さてそれではどの仮名を引くようにするか。

（以下次号）

# 第一回「謡曲名所めぐり」について

今回の謡曲名所めぐりは、本紙として初めての企画にもかかわらず多数の方々のお申し込みを頂きご参加の皆様に〝是非つづけて実施してほしい〟と力強いご支援のお言葉を頂きましたことを能楽の友社同人一同厚く感謝申し上げますとともに、定員の都合にてご参加して頂くことができなかった方々に紙上をもってお詫び申上げます。

企画の不十分さから、第一回として、行程による時間の都合にて皆様に期待して頂いた「三輪」の参観など割愛せざるを得なくなったことは心残りの一つでありました。

このことは、帰路、車中における皆様のご意見拝聴の折に「時間の関係とはいえ実際に目でみる機会がもっと欲しかった」とか「解説は非常によかった。しかし、あちらこちらと車中からみるのでなく、回る場所は少なくても、じっくり落ちついて観賞したい」という強い希望意見が多くの参加者から出されました。これらの貴重なご指摘、ご意見にあわせ「今後ともぜひ実施してほしい」「二回、三回と続けてほしい」なかには、「車中でみんなで謡曲を謡うという楽しみが最高」とか「長い間いきたいと思っていた若草山、平等院は本当によい思い出となった」と有難いご声援を頂きました。

能楽の友社では、これら第一回謡曲名所めぐりの貴重な経験、ご意見をもとに、次回は、より慎重にスケジュールを立てるべく努力致す所存であります。

現在①琵琶湖を中心とする志賀のふるさと②洛北をたずねる③洛南の名所めぐり等のプランが出ておりますが、詳細は読者皆様のご意見ご希望を汲んで決定したいと考えております。次回は明春発表の予定です。

（今回は、同人として梅田邦久、杉村竹翠氏が同行致しました）

なお今回参加された木曽福島、桜井源一さんから「謡曲の名所旧蹟を保存する運動を起こしてほしい」と提案があり、参加者の共鳴を呼びました。この趣旨は「私の発言」として記させて頂きます。

（編集同人　加野記）

（写真）（左）（上）平等院扇ノ芝を参観　（下）若草山頂にて


池田和市著　うたい名所を歩く　価 600円　〒 70円
全国の謡曲名所旧蹟を足でたずねた紀行集

宝生宗家著　図解仕舞集第8巻　価 700円　〒 70円
加茂・小袖曽我・藤・松風・高野物狂　他

東京都千代田区神田神保町3-9　振替 東京 4163番　わんや書店　東京都中央区銀座8-7-5　電話 (571) 0514

登録商標　島料理　本場名代　島定
赤ごや中通茶二丁目一番二四号　電二三一一七二〇　〇一五五


## 11月の謡曲 狂言 番組

NHK ラジオ 第2放送
毎日曜日　午前8時から9時まで
（再放送）
毎金曜日　午後2時から3時まで

11月16日（日）・21日（金）
観世流「花　筐」片山博太郎　ほか

11月23日（日）・28日（金）
下宝生「鉄　輪」松本　謙三　ほか
狂　言「鳴　子」三宅藤九郎　ほか

11月30日（日）・12月5日（金）
観世流「紅葉狩」永島　誠二　ほか

◎ 番組のかわることがあります。ご了承下さい。

十月二十六日　津市三重会館で開催
◇和楽会
十一月三日　伊勢神宮文化殿
◇鈴鹿三流連合会
十一月五日　鈴鹿市文化会館
◇大阪和謡会
十月十三日　大阪市中央公会堂
■第四回　九月十三日
泉　清井　嘉久　小鍛冶　片山博太郎
宗　塚　林　喜右衛門　天　坡　藤井久雄
■第五回　十一月十五日
実盛　大西信久　場世　梅若万三郎　能　千　野口　禄久　能　手　西村　弘敬　能　黒　塚　倉本　雅　能　千　野口　禄久　能　手　西村　弘敬　能　黒　塚　倉本　雅　西村　欽也
御来賓歓迎　十二月十四日（日）　熱田神宮能楽殿
番外仕舞　屋島　杉村竹翠　雨之段　大槻文蔵　祝言老松　大槻秀夫　以上
杉竹会　能の会
十月十三日（土）歳末商情週間「義経捐能」を熱田神宮能楽殿で開催する。第一部は午後一時始、能「鶴亀」（宝生流）能「安達原」（観世流）第二部午後五時始、能「鉢木」（観世流）能「羅々」（喜多流）会員章五百円。

# 観能の手びき

## 十一月の能　熱田神宮能楽殿

―十一月十六日(日)観世会―

### 竜田（たつた）

シテ　山本博之

このたびは小書「神楽留」であるから神楽（かぐら）の舞の後の直り二段を省くから結局三段となるのである。

まづ後見が一畳台を大小前に据えその上に引廻のままの小宮の作物を置く。次第の囃子でワキ旅僧ワキヅレを伴い出で、次第・名ノリ・道行を謡い、着セリフで竜田川に到着し、川を渡って明神に参詣する態に脇座に行きかけるを、シテ巫女が呼掛で現われる。シテは川を渡りかけたワキを戒め、舞台に入り、常座でワキと竜田川の紅葉の古歌を引いて問答する。

さして型もなく、中入地の「われはまことはこの神の竜田姫は我なりと」にて、扇を扉に擬して押し開く型をし、神殿にかくれる意味に作物の内に入る。（中入）

間狂言は竜田ノ里人で間語（あいがたり）に竜田の明神の謂われを物語る。

ワキは神前通夜の態に待謡を謡う。出端の囃子で後シテ竜田明神は、作物の中で引廻しをかけた儘で「神は非礼を享け給はず」と謡い出し、地とのカケ合の後、「あらたに御神体現れたり」にて引廻が外され、床几にかけた姿でシテが現われる。サシの終りでシテは作物から出て、クセを舞う。

クセの後「月も霜も白和幣」でクツロギ幣を持って神楽（序アリ）を舞う。

### 隅田川（すみだがわ）

シテ　梅若六郎

隅田川は前号（十月号）に掲載したから省略する。

### 殺生石（せっしょうせき）

シテ　上田照也

後見方が一畳台を持って出で大小前に据え、その上に石の作物を載せて退くと、次第の囃子でワキの玄翁和尚が間狂言能力に払子（ほっす）を肩に持たせて登場する。次第、名ノリ、道行に奥州から都に上る途中、那須野の原に来た旨を謡い、脇座にゆく。狂言は空を見上げ、石の上を飛ぶ鳥の落ちるさまに驚くセリフがあって、それを聞いたワキが作物に向うと「のうその石のほとりへな立ち寄らせ給ひそ」と、シテ里女の呼掛の出となる。

シテは舞台に入り常座でワキとの掛合に殺生石の謂われを謡う。すなわち玉藻ノ前の執心が石と化して今も行き来の人に、あだをするというのである。クセは居グセで型はなく、帝の寵愛をほしいままにした美貌の玉藻ノ前の事跡を聞かせる。次いで問答で、化生の玉藻ノ前が見破られ、那須野の原に姿を隠したことを語り、なお我が身はその殺生石の石魂だと本体を明かして「あら恥しや我が姿」とワキを見込み立って常座に行き「石に隠れ失せにけりや」で作物の石に中入する。

出端の囃子にシテは作物の中から「石に精あり」と謡い出し「石魂忽ち現われ出でたり」で石を二つに割って、後シテ野干（やかん）の精が姿を見せる。後見はその石の作物を退く。

床几にかけたシテとワキのカケ合ありて後、「玉藻に御幣を持たせつゝ」とシテは扇を幣に擬して左に持ち「やがて御体を苦しめて」と打切拍子を踏む。以下勇壮無比の型の連続で、非常に変化に富んだ、所作が多く、前シテの妖しいまでの美女が、からりと豪壮なもっとも動きの早い型ものに豹変するところに興味が尽きないものがあり、見ごたえのする曲と言えよう。

## 演能記録　十月の能から

**風韻会能**　早朝から観客がつめかけ大入満員の盛況であった。

「清経」シテ　富士道周明

**橘諷会能**　奥田敏子さんの「隅田川」当日は天候にも恵まれ満員の盛会であった。

## 能舞台をそなえる伊勢神宮文化殿

### 「能翁」「高砂」など奉納

能舞台をそなえる伊勢神宮文化殿は、本紙で報道したように、ことし二月十二日起工式が行なわれ、順調な工事運びで予定どおり一日午後一時から能二番、舞囃子三番、狂言一番で奉納。観世、宝生、金剛、金春、喜多の五流をそ

文化殿能舞台披きは、十月二十

## 私の発言

### 謡曲の名所を保存しよう

木曽福島・桜井源一氏のご意見

このたび能楽の友社主催の謡曲名所めぐりに参加し、同好の方々と有意義な旅行をさせて頂きましたことを感謝致します。

とくにこの旅行で痛感したことは、謡曲の名所旧蹟が非常に荒廃していることです。

たとえば「井筒」の旧蹟、解説の方は、「井筒」のイメージのために車窓からみるだけの方がよいといわれたが、それもたしかにうなづけるものがあるほどです。

都市開発、道路建設のかげに、文化がこわされてきています。謡曲の名所は、心のふるさとでありそれを探すのに困難となってきています。

「井筒」の旧蹟があのように荒れはてたものであることは非常にさびしい。こうしたことは他にもあるのでないでしょうか。この企画をなされた能楽の友社の方々が中心となり、宗家はじめアマチュアの力をかりて旧蹟を少しでも保存し、多少なりとも管理運営する「日本謡曲古蹟保存会」といったものを結成して後世に伝えていくことが大切ではないでしょうか。

同好の方は全国に居られます。これらの人々が力を合わせてそれぞれに謡曲名所を大切に守っていくことを訴えたい。そして保存会を窓口として、このための運営活動をして頂きたいと強く希望するものです。

（文責記者）

## 5月に万国博能

### 大阪国際フェスティバルホール

明春三月十五日から開かれる日本万国博覧会の催し物プログラム案がまとまった。

会場は、お祭り広場、万国博ホール、大阪国際フェスティバルホール、野外劇場、水上ステージの五会場で、世界の芸能、文化が交流される。

能楽関係は、大阪国際フェスティバルホールを会場として、五月に「万国博能」の上演が予定されている。

この大阪国際フェスティバルホールでは、三月「ベルリンオペラ」、四月「パリ管弦楽団」、五月が「万国博能」「ベルリンフィルハーモニー」「カナダ・ナショナルバレエ」六月「ボストンバレエ団」「ドフィルハーモニー」、八月「ニューヨークフィルハーモニー」「パリショエオペラ」の公演など世界一流の芸能の祭典がくりひろげられる予定である。


中日スポーツ　東京中日新聞　北陸中日新聞　月刊　岳人　中日文化センター　中日劇場
東京新聞　中日新聞
中部日本新聞社　名古屋市中区大の内3-12-21　TEL大代表201-8811
割烹・小料理　城　・住吉小路（中区栄3-10）電話241-0248　・喫茶とグリル　労働文化センター内　電話731-1128
欧風料理　とんかつ　きん亭　名古屋市千種区大久手町4-11　TEL731-3680
御料理・仕出し　鮮魚・粕漬　熱田神宮御用達　中日タウン　惣菜部　合資会社　玉傳本店　名古屋市中区栄四丁目18の19・電（241）3845 9945
御料理　蓬莱軒　本店　熱田区神戸町34　電話(671)8686～8688　神宮東門店　熱田区新宮坂町1　電話(671)5596～5598

古い歴史・新らしい経営・若い力
でご奉仕する〈じゅうろく〉
十六銀行
創立　明治10年
本店　岐阜市
資本金　24億円

# 能樂の友

題字は熱田神宮　篠田宮司筆

発行　能楽の友社
名古屋市千種区吹上本町2－20
（郵便番号　464）
電話（731）7984
振替口座　名古屋36393
購読料　1年　300円
郵送の場合　1年　400円
一部　30円

## 歳末助け合い　義捐金募集能

### 能楽協会名古屋支部が主催

### 愛知県、名古屋市が後援

社団法人能楽協会名古屋支部（支部長田鍋惣太郎氏）では、歳末助け合い運動に協賛して、きたる十二月十三日（土）熱田神宮能楽殿で義捐金募集の能を開催することになった。

この歳末助け合い運動には能楽界として、すでに東京、大阪では毎年、歳の瀬をむかえて企画され、東京では「朝日歳末たすけあい運動参加公演・能楽協会東京支部能」として、ことしで第七回目、二日間にわたって行なわれ、また大阪では「朝日新聞歳末助け合い協賛能」として、三日間の日程で開催、能楽協会の積極的な社会福祉活動として大きな成果をあげ、社会的評価を博しているものである。

能楽協会名古屋支部が催すこのたびの初の義捐金募集能は、愛知県、名古屋市が後援、能楽界の社会事業の一環として、観世、金春、宝生、金剛、喜多の五流の能、舞囃子、仕舞、和泉流狂言などを公演、第一部午後二時始、第二部午後五時半始、会費は一部、二部各五百円となっており、能楽愛好者のご協力を得て意義ある助け合い義捐金募集の能が成果を収める事を期待されている。

能組は別項のとおり。

なお会員券は、各出演楽師、プレイガイドで取扱われている。

#### 開催のごあいさつ

今般歳末助け合い運動に協賛致しまして義捐金募集の能を開催致すことになりました。

ご承知の如く東西各支部におきましては已に数年前より催し、多大の成果を挙げております。

何卒趣旨にご賛同賜り御協力の程偏に御願い申し上げます。

能楽協会名古屋支部

#### 「小督」の解説

平家物語「小督の事」に拠った「小督」は、名月に映し出される嵯峨野と琴の音で描かれる。シテ仲国が名残の舞は、直面の男舞で四番目物の直面物。

平家物語には「小督の殿、内裏にて琴弾き給いし時、仲国、笛の役に召されまいらせしかば、その琴の音はいづくにても聞き知らむずるものを……」のとおり、笛を中心として大小鼓の囃子が小督の情緒を高め、作物の片折戸柴垣付がいちだんと風情をそえる。

「小督」のスケッチ
仙田雪山子画

## 演能案内

歳末助け合い　義捐金募集能
十二月十三日（土）
於熱田神宮能楽殿

能組

第一部　午後二時始

舞囃子（宝）鶴亀　内藤泰二　吉田鍋惣一郎　定男　野崎太郎　藤田六郎兵衛
能（宝）花月　西村欽也　寛福井啓次郎　鉱一　寛三男　間佐藤秀雄　後見葛原正枝　竹内澄子
仕舞（観）松風　服部沙枝　能（観）鞍馬天狗　高木美智子
狂言　宵薬煉　井上松次郎　井上礼之助　梅田邦久
能（観）安達原　高安滋郎　高安勝久　河村総一郎　後藤孝一郎　鬼頭八郎　藤田昭彦　野村又三郎　間加藤保彦　後見殿島修二

附祝言

第二部　午後五時半始

舞囃子（春）弱法師　前田晶広　河村総一郎　田鍋惣太郎　寛三男
能（観）鉢木　佐藤太俊　河村鉦二　西村欽也　高安勝久　吉田定男　福井啓次郎　鬼頭季信　井上松次郎　佐藤友彦　間　後見杉村竹翠　柴田初太郎
舞囃子（剛）山姥　片野東四郎　河村総一郎　福井良久　助川滋夫　藤田昭彦
仕舞（観）阿漕　竹内六郎　加藤丈太郎
狂言　瓦　佐藤卯三郎　佐藤秀雄

能（喜）猩々　長田驍　西村弘敬　寛鉱一　田鍋洋一　鬼頭富太郎　鹿取希世　後見和島富太郎　富田陽二

主催　能楽協会名古屋支部
後援　愛知県　名古屋市　名古屋能楽会

第十三期
第三回　名古屋宝生会定式能
十二月十四日（日）午後一時始
於熱田神宮能楽殿

素謡　坂　朝倉象太郎　馬場富四夫　地謡　中野静松　典機　戸田秀雄　高田井松　倉象太郎　堀江真六広　朝倉象太郎　馬場富四夫　昌　鬼頭嘉男
能　千手　内藤泰二　野口禄久　西村弘敬　河村総一郎　田鍋惣一郎　藤田六郎兵衛　地謡　石井孝三　鈴木松太郎　平子稲太郎　溝口好忠　浜村園子　倉本雅　後見　衣斐正宜　巳孝　稲川寿一　朝倉象太郎
狂言　ぬけがら　井上松次郎　佐藤秀雄
仕舞　忠度　衣斐正宜　葛城　竹内澄子　地謡　野口禄久　馬場富四夫　勝一　歌占　辰巳孝
能　黒塚　倉本雅　西村欽也　高安勝久　吉田定男　後藤孝一郎　鬼頭八郎　藤田昭彦　井上礼之助　間　後見　吉田俊彦　内藤泰二　地謡　加藤周三　須賀鈴木　小沢辰巳　近藤喜一朗　源十郎　馬場富四夫　加藤勝利　義久孝
附祝言

主催　名古屋宝生会
名古屋市東区東門前町三ノ二二
高橋銭三郎方　電話九七一－一四二九番

## ◆演能カレンダー◆

〔12月〕

6日（土）　柳原富司忠　幸清流　職分披露能（有料）
7日（日）　邦謡会（無料）
13日（土）　歳末間情週間　義捐能（有料）
14日（日）　宝生会定式能（有料）　番組別掲
19日（金）　高校生能楽鑑賞会（有料）
21日（日）　楽師会乱能（有料）　番組別掲

〔1月〕

3日（土）　能楽協会名古屋支部　新年謡初式
7日（水）　学生能
15日（祭）　清韻会（無料）　番組別掲
18日（日）　宝生会定式能（有料）
25日（日）　和島富太郎、泉嘉夫、野村又三郎の三人を観る会（有料）　番組別掲

――以上熱田神宮能楽殿――

喪中につき年賀欠礼仕ります

## 装束談義（二十四）

# 直垂（ひたたれ）

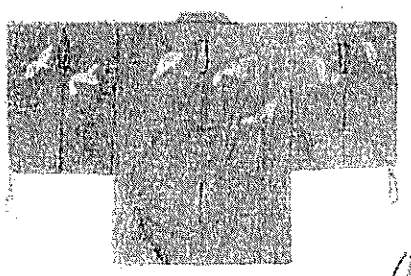
ゑとふみ　二井栄逸

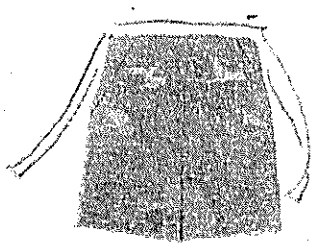
さざんかがちら〳〵と咲きそめ、柿の葉がべにがらをぬったように赤くなる。十月から十一月にかけて、催しが色々と続き、あちらの舞台、こちらの会館をゆききしているうちに、早や、十二月になる。今年から、名古屋も歳末たすけあいの一端をになって、義捐金募集能が県・市共催で催されることになり、東京、大阪と歩調を合わすことになった。企画にあたった人の労苦が思いやられる。

わけても朝霧の山路をゆくような、すが〳〵しさを覚えるのは、豊かな人間、すぐれた芸術、というオアシス地帯を展開し、ともすれば、今どきの日々のあわただしさのため本来の人間性を失おうとする人々の心の中に、灯をともそうと各地で催される文化庁主催の青少年芸術劇場である。今年で第三年目、本年は宝塚、東北地方の北ぐにを中心に、狂言（和泉保之師ほか）、能（廣多長世師ほか）の公演が続けられたのである。それは、少くとも若い人達の間に、能というものに、魅力を感じさせ、あらためて能を見直そうという気運をおこさせたことであろう。

× × ×

さて、装束談義。前回で能装束七つの分類の内、冠り物、頭髪、着附、上衣、袴を終わり、今回から上下、附属物と順次述べてみる。





ひたたれは、室町時代から武士の礼装用として用いられ、垂頸（たりくび）式の服装で、襟の合せ方が現在の着物と同じである。平安時代には、一般庶民の日常服であったようである。勿論、鎌倉時代のようにキチンとした形式はととのっていなかったが、平安の末期になると、武家もよろい下に着るようになり、鎌倉時代には、武家の服装として独特の形式をととのえ、江戸時代には武士の大礼服となり、将軍を初め、侍従以上のものが着用したのである。

直垂は上衣とはかまからなり、上下とも同色、同質のものを用い、上衣ははかまの紐下に着こむ。上衣の両脇はあいて、胸紐、菊綴（きくとぢ）が、飾りにつき、袖には括紐（くくりひも）がある。

能においては、掛直垂（かけびたたれ）が多く、直面の男が下に大口をはき、厚板の上にひたたれを掛け、腰帯を以って結ぶ。小袖曽我、夜討曽我、盛久などのシテが着る。

（スケッチは小袖曽我のキリ、及び直垂上下）

---

## 拍子（ひょうし）話（うたい）について

大槻秀夫

その三

今回は、上下、を三つに分けて、直垂（ひたたれ）素袍（すおう）裃（かみしも）の内、直垂をかいて見る。

現在物として、よく取り上げられるポピュラーな能に小袖曽我がある。いわゆる曽我ものである。曽我兄弟の父は、伊豆の豪族、河津三郎祐泰であったが、所領争いが原因で一族の工藤祐経に

だ討ちを決行しようと祐成、時致が母にいとまごいをする場面が小袖曽我の能になっている。当時、工藤祐経は源頼朝の信任があつく兄弟が自分をねらっていることをひそかに知り、兄弟の殺害を頼朝にうったえたが、梶原景季等の反対で、挫折している。

この小袖曽我のシテ、ツレが着

---

## 新年初会

### 能楽協会名古屋支部初謡会

能楽協会名古屋支部では、一月三日熱田神宮能楽殿で初謡会を開催する。

**二井会初謡会**

一月九日　四日市市・笹井屋別館ホール
一月十日　松阪市・八雲会館
一月十一日　名古屋・米川嘉吉邸

### 昭和四十五年度宝生会予定番組

■第一回　一月十八日（日）一時始
　楊貴妃　宝生九郎
　春日龍神　内藤泰二
■第二回　六月二十八日（日）一時始
　「福の神」は福の神・野村又三郎、「望月」シテ宝生九郎、ツレ内藤泰二、子方藤田昭彦、小鼓河村総一郎、太鼓鬼頭喜太郎の諸師。
■第三回　十二月十三日（日）一時始
　実盛　野口禄久
　篭太鼓　倉本雅

宝生会定期能会費は三、五〇〇円（なお四十五年度から特別会員制は廃止される）

### 名古屋から放送

**12月28日「望月」「福の神」**

12月28日（日）NHKラジオ第2放送「謡曲・狂言の時間」は、名古屋から宝生流番囃子「望月」和泉流狂言「福の神」が放送される。

出演は「望月」シテ宝生九郎、ワキ高安滋郎、ツレ内藤泰二、子方衣斐正宜、地・馬渕富士雄、笛藤田昭彦、小鼓田鍋惣一郎、大鼓河村総一郎、太鼓鬼頭喜太郎の諸師。

---

## 地拍子の手の拍ち方

これから平ノリを研究して行くのに先立って、まず地拍子を稽古する時の手の

---

## 楽師会乱能

十二月二十一日（日）正午始
熱田神宮能楽殿

能　通小町　雨夜之伝
　後藤孝一郎　田鍋惣一郎　鬼頭八郎　西村弘敬　橋岡久馬　衣斐正宜
　後見　野崎太郎　助川竜夫　地謡　池田茂　吉田定男　河村総一郎　覚三男　和泉保之
舞囃子　小督
　鬼頭季信　有賀滋子　柴田初太郎　塚本秀雄　助川竜夫　覚三男　鉱一
　地謡　覚
狂言　昆布売
　戸田秀雄　河村鉦二
能　松風
　田鍋惣太郎　井上松次郎　和泉辰巳　保之孝　殿島修二
　見留　林甲子夫
　後見　田鍋惣一郎　佐藤大野弘之　佐藤卯三郎
　後藤孝一郎　地謡　井上礼之助　佐藤友彦　西村弘敬　高安滋郎　西村欽也
狂言　二九十八
　高安滋郎　西村欽也
一調　三井寺
　田鍋惣太郎　観世喜之
舞囃子　船弁慶
　河村総一郎　内藤加藤　秦二良久　井川服部　秀子紗枝
　地謡　田鍋惣一郎　田鍋洋一郎
能　紅葉狩
　助川竜夫　吉田鉱一　覚定男　三男
　福井啓次郎　池田茂　鬼頭喜太郎　梅田一邦　鈴木一雄　加藤丈太郎　久田秀雄
　囲　末社女　山口義郎　佐藤太俊
　後見　鬼頭八郎　鬼頭季信　地謡　田鍋洋一　田鍋惣太郎　藤田六郎兵衛
附祝言
　主催　能楽協会名古屋支部　中部能楽師会
　後援　社団法人名古屋能楽会

## 宝生会定式能

一月十八日（日）
熱田神宮楽能殿

能　楊貴妃
　宝生九郎　高安滋郎
能　春日龍神
　内藤泰二　西村欽也

## 名古屋清韻会能

昭和四十五年一月十五日（祭）十時始
熱田神宮能楽殿

神歌
　坂崎勝彦　千歳福間昌作
舞囃子　波
　富士道周明　河村総一郎　後藤孝一郎　助川竜夫　藤田昭彦
素謡　雲林院
　下山鉱一　長谷川実
狂言　樋ノ酒
　井上松次郎　井上礼之助　佐藤卯三郎
小督
　守部啓子　吉田智子　定男半田　富士道周明
熊野
　奥村久枝　河村総一郎　田鍋洋一郎　鹿取希世
葛城
　坂田猛　水谷文雄　田島英太郎　助川竜夫　覚三男
独吟　杜若
　大西鐘八郎　弱法師　松本顕一
仕舞
　小袖曽我　鬼頭貴代子　富士太鼓　竹内陽子　阿漕　長谷川実
　奥村久枝　坂崎勝彦　下山鉱一
砧
遊行柳
　伊勢信雄　覚鉱一　田鍋惣一郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛
　青柳之舞
善知鳥
　水野雍子　吉田定男　山口亮　香取希世
　ツル殿島満里子　カメ殿島阿子　福間昌作
能　亮
　高安勝久　飯富滋郎　雅介　河村総一郎　田鍋惣一郎　助川竜夫　藤田昭彦
　佐藤秀雄
　後見　泉嘉夫　大槻秀夫　地謡　坂田猛　桑原信夫　坂崎勝彦　下山鉱一　富士道周明　水藤康孝　又吉文蔵　大槻秀夫　里井順次郎　岡田光紘　吉田定男　川村富美子　鹿取希世
安宅
　桑原信夫
百萬
　高田みね子　水谷文雄　山口亮　覚三男　鬼頭喜太郎
野守
　三木美智子　吉田定男　田鍋洋一　助川竜夫　藤田昭彦
　佐藤アヤ子　殿島修二
半能　養老
　高安勝久　西村欽也　飯富雅介　覚鉱一　水波之伝　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　三男
　後見　大槻文蔵　大槻秀夫　地謡　多久島利之　福間昌作　長谷川実　田村杉村　伊勢信雄　竹翠博　三島憲　岡田嘉夫　泉光紘
　番外奉仕
　山姥　大槻秀夫
　船弁慶　大槻文蔵
附祝言
　主催　名古屋清韻会

## 泉嘉夫　野村又三郎　三人を観る会

一月二十五日（日曜）午後一時
於熱田神宮能楽殿

能　清経
　泉嘉夫

# 拍子謡について

大槻秀夫

その三

七五調の句を「いろはにほへとちりぬるを」とすると、「い―ろは」「に―ほへ」「と―ちり―」「ぬるを。」の如く一字目、四字目、七字目を引くか、それとも「いろ―は」として二字目、五字目、八字目を引くか、或いはまた三字目、六字目、九字目を引くか、この三通りが考えられるのである。

そして現在では、この内の一字目、四字目、七字目を引く取り方をしていて、これを現行式と名付けている。

近古式と言って昔は二字目、五字目、八字目を引くことにしていたようで、観世流謡本の「昭和本」にはこの近古式の拍子当りで記されていた。現在の「大成版」では現行式の当り（取り方）に改められている。これを書き表わすと左の如くになる。

―1―2―3―4―5―6―7―8
い―ろはに―ほへと―ちりぬるを○―

この線の上の仮名が当った処の仮名である。つまり手拍子を取りながら謡えば、この123……の横線の上の仮名が膝をたたいた時の仮名である。線と線との間にある仮名は手を上げた処にくる仮名である。

右の如く一字目、四字目、七字目の仮名、即ち「い―」「に―」「と―」の三つの引きは、これは謡の節の廻しとか振りとか引きというような、節としての引きとは違うのであるから、実際に謡う場合には出来るだけ目立たないように引くのであるが、地拍子の研究をする場合には、節の引きと同じように引いて謡わなければいけないのである。そしてこの三つの引きは八拍子のために生まれてきた字であるので、これを「生み字」と名付けている。この生み字は、繰返していうと節としての引きではなく、拍子の上から生まれてきた引きであるので、実際には目立たないように前後の仮名と振り分けて謡って行くのが理想であるが、それは地拍子理論をのみこんでしまってからすることであって、理論としてはあくまで「い―ろは」と引いて謡って練習しなければいけないのである。

単純でみて、謡では（　）の仮名は生み字の方をすると申したのは、つまり謡ではその生み字を節にしないで目立たぬように謡い、また場合によっては（鼓の手によっては）全然生み字を消してしまうこともあるので、相当の熟練を要さないと拍子謡はこなせないということになるのである。

平ノリ、半ノリ、大ノリとノリに三種類あると申したので、一応ここに三種類の原則的な例を左の如く挙げて見よう。

〔平ノリ―例、高砂〕
―1―2―3―4―5―6―7―8
い―まをは―じめの―たびごろも○―

〔半ノリ―例、海士〕
―1―2―3―4―5―6―7―8
ひとびとよろこびひきあげたりけり

〔大ノリ―例、船弁慶〕
―1―2―3―4―5―6―7―8
そ―の―と―き―よ―し―つ―ね―す―こ―し―も―さ―わ―がず―

〔大ノリ―例、羽衣〕
―1―2―3―4―5―6―7―8
あア―づ―ま―あ―そ―び―の―オかア―ず―か―アずゥ―に――○

◎地拍子の手の拍ち方

これから平ノリを研究して行くのに先立って、まず地拍子を稽古する時の手の拍ち方を覚えることが必要である。

ただ手や、或いは指先きで拍子を取っていては、はたして八つたたいたか、或いは七つか九つか句切りがないのでわからなくなるので、そのため左右の手を使って八つの拍子を紛れなく拍てるように作ってある。それは――

まず両手の指をのばして両膝の上に載せる。これから手を動かし始める処から「間」が始まるのである。

(1)まず右手を高めに上げて膝を拍つ。これが一拍目である。

(2)次に膝の上に指先きを残したまま掌だけ上げて押える。これが二拍目である。

(3)は(1)と同じ動作をする。

(4)は(2)と同じ動作をする。

(5)は左手に移って(1)と同じ。

(6)は(2)と同じ動作。

(7)は左手で左膝の真横を軽目に拍つ。

(8)は(1)と同じように上げて拍つ。

（以下次号）

## 古曲雑話 (11)

西村弘敬

### 第二十七番　浦島（うらしま）

亀山の院の臣下が丹後の国水の江に浦島の明神という霊神のある由を聞き、急ぎ参詣せよとの勅諚を蒙り、丹州九世戸の浦へ行った。海辺に女人の釣人が居たので、浦島の明神への道を尋ねたるに、その道は汀もさだかならぬので、この舟にて渡し申そうというので、舟に乗って浦島の明神へ着き参詣してから、浦島の明神の子細を色々と尋ねたるに、浦島太郎が龍宮より貰って来た玉手箱は明けてはならぬのを明けたがために忽ちに老体となり滅にくやしき結果となった。これとは反対に、明けて嬉しかったのは天の岩戸の故事で、忽ち日の光りに一同が悦びをなしたなど色々の物語の後、我は蓬萊の仙女であるから我君を御守りの不老不死の霊薬を授けると海中に入った。その夜中に浦島の神託にて五色の亀が白波に浮んで来り、龍神も表われ出て君が代を守る誓いを示し、不老不死の霊薬を捧げ来て勅使へ授け退めたという筋である。

### 第二十八番　空蟬（うつせみ）

諸国一見の僧が都へ上って来て三条京極中川の宿りへと着いた。昨日今日秋の気配の庭の面影に稍の蟬の声を聞いて古事を思い出し「うつせみの葉におく露の　こがくれて　忍び忍びにぬるゝ袖かな」と空蟬の女の詠歌を口ずさんで居ると一人の女性が来り、何とて光源氏の御歌を詠じ給わぬぞその御歌は

「空蟬の身をかへてける木の下に　猶人がらのなつかしきかな」と光源氏の詠じ給いし歌にて、空蟬の女が自分の醜きと身分の低さ並に年長にて到底光源氏には随い得ないのを覚悟してひそかに抜け出して身を退いて逃うとしなかったが、その齢い九十に達せられ歩行困難となり、自然参内することも稀になった。昔花山の僧正に仁寿殿にて賀を給いたる前例に倣い、釈阿にも和歌所にて賀を賜うべき由宣旨が下され、霜月二十三日に定められ和歌所の南の方に御座所をしつらいて玉座となし、東の方には四季の屏風を立てて入道の座とし、西の上座は摂政大政大臣、北の方は公卿殿上人の座を設けられ四季の屏風に春夏秋冬を描かれ特に桜の絵には御製

「桜咲く遠山鳥のしだり尾の　ながながしくもあかねさしかな」

と御寿ぎの悦びの御歌を下された。そのほか参列の面々よりも色々様々の祝いの御詠歌などにてまた人道には鳩の杖をも賜り終日悦びの宴に浸り定家卿に扶けられ目出度帰館したとのことである。

空蟬の詠んだ歌に対し、光源氏が詠じた返事の歌であると色々の物語りの後、僧が空蟬の跡を弔って居ると空蟬の霊が表われて昔語りをした。

### 第二十九番　九十賀（くじうのが）

藤原俊成卿入道釈阿は御歌所の師範として宮中に御仕えして居ら

## 多彩な催能で……

### 飾った昭和44年

とくに、能楽が市民のなかにとけこんだ催しとしては、第四回を迎えた「名古屋薪能」「大衆能」十月に行なわれた「市民古典邦楽の会」、そして十二月に行なわれる初の「歳末助け合い義捐金募集能」である。

「名古屋薪能」は、ことしは台風七号のため熱田神宮能楽殿で催

ことしの中部能楽界は、多彩な催能で飾られた。定期能をはじめとする各流、各会の記念能、追善能に能楽への理解と鑑賞の機会をひろめたことは一九六〇年代の掉尾をかざるにふさわしいものであった。

本紙では、この創刊満三周年を記念して、明春三月二十一日「創刊三周年記念能」を開催、意義ある催しとする予定であり、詳細は新年号にて発表される。どうかご期待下さい。（編集同人一同）

■第一回　一月十八日（日）　一時始
楊貴妃　宝生九郎
春日龍神　内藤泰二

■第二回　六月二十八日（日）　一時始
八百屋　野村又三郎
熱田神宮　西村欽也
キ高安滋郎、ツレ内藤泰二、子方衣斐正宜、地・馬場富士雄、笛藤田昭彦、小鼓　田鍋惣一郎、大鼓　河村総一郎、太鼓　鬼頭齊太郎の諸師。

「福の神」は福の神・野村又三郎、井上敬次郎、井上祝

能　楊貴妃　宝生九郎　高安滋郎
能　春日龍神　内藤泰二　西村欽也

熱田神宮楽能殿


御来観歓迎
野村又三郎
一月二十五日（日曜）午後一時
於熱田神宮能楽殿
能　清経　替之型　泉嘉夫
狂言　三人片輪　野村又三郎　和島富太郎
能　船弁慶　真之伝　波間之拍子　岡早苗
ほか　仕舞数番
（会員券一、五〇〇円、学生券　五〇〇円）

附祝言
山姥　大槻秀夫
船弁慶　大槻文蔵

番外奉仕
地謡　長谷川信雄　伊勢実　三島憲　泉田嘉夫　岡田光弘　村田勇

主催　名古屋清韻会
後援　熱田神宮


## 12月の謡曲狂言番組

NHKラジオ第2放送
毎日曜日　午前8時から9時まで
（再放送）
毎金曜日　午後2時から3時まで

12月14日（日）・19日（金）
観世流「鵺」観世武雄　ほか
観世流「野守」観世元昭　ほか

12月21日（日）・26日（金）
金春流「妒女」金春栄治郎　ほか

12月28日（日）
宝生流「望月」辰巳孝　ほか
和泉流狂言「福の神」野村又三郎　ほか

◎番組のかわることがあります。ご了承下さい。


流元
剛流
金春流
観世流
宗家本
檜書店
東京都千代田区神田小川町2－1
京都市中京区二条通麩屋町東入
電話(291)2488―9
振替東京3552
電話(231)1990
振替京都113

特選貴金属・洋品雑貨・贈答用品の専門店
日本趣味の店
名古屋市中区栄一丁目15番　電話 211－1651
東京・名古屋・一宮

# 観能の手びき

## 十二月の能　熱田神宮能楽殿

### ―十二月十四日(日)宝生会―

**千手**（せんじゅ）
シテ　野口禄久
ツレ　内藤泰二

囃子はなく、ツレの平ノ重衡が静かに登場して、脇座の床几に座つく。

名ノリ笛で、ワキ狩野ノ介宗茂が出、一ノ谷の合戦で生捕になった重衡を預っている由を述べ頼朝が千手ノ前を遣わされたので、両中のつれづれの慰めに、酒を勧めようと思うとて、地の前に座つく。次第の囃子でシテの千手が登場し、常座にて、次第、サシ、下歌、上歌にて、重衡の身に同情を寄せる心を謡い、ワキとの問答があって後シテは太鼓座にクツログ。

ツレの重衡は「身はとれ槿花一日の栄」と謡い、サシ謡に幽囚の身の悲哀を謡う。ワキは千手の前が来たことを述べて問答する。

ワキがシテに今日の対面のかなわない旨を言う。

千手ノ前は頼朝の御せで琵琶弾を持って来たのだからと言い、ワキがそれをツレに伝え、「たゞとなたへと謂ずれば」と言い、シテは「その時千手立ち寄りて」と謡ってツレの方にツメル。地になって正中に出で下居する。

重衡は頼朝に願い出てあった出家の望みの許否を尋ねる。シテは朝敵の故に許されぬ旨を伝え、次いで重衡の境遇に同情するクダリがあり、酒宴になる。シテは酒の酌に立ちツレを慰める。

クリ、サシ、クセは重衡の身の上を細かく叙した文章で終始してある。クセが終りやがて序ノ舞を優婉に舞い、ツレも漸く興に乗じ扇を開き左に持ち琵琶を弾く型をする。斯くの如くして幽閉されている平家の貴公子と美女との哀恋を骨子とした優艶で品格のある劇能で、本三番目ものの、代表的のものである。

**黒塚**（くろづか）
シテ　倉本　雅

観世流では「安達原」と言う。引廻をかけた荻小屋を、後見が大小前に置く。ワキ山伏祐慶は、ワキヅレと共に次第の囃子で登場する。サシ、道行で熊野本山から廻国行脚に出、陸奥の安達原に来て、人里のない野原に灯を見つけて宿を借りようとする。

作物の引廻が下されると、中にいるシテ、里女は、いぶせき賤が家にいる態に下居のまま、はかない孤独の境涯をサシに謡い、一夜の宿を乞うワキ達の頼みを一旦断るが、なお乞われてそれに応じ、作物の戸を開けて出る。

角に置いてある枠棹輪を、ワキは何であるかを訊ねるので、シテは、それで糸を紡ぐ所作を始める。サシ、クセで、生き永られた浮世のつれなさを謡い、ロンギで糸づくしの文句を連ね、月影に見入る。シテは裏の山へ薪を取りに行き火にたいて饗応するからと出かけるが、「や」と足を止めて、閨（ねや）の中を見てくれるなと、くどく戒めて中入する。

間狂言能力は、見てはいけない筈の閨の中をのぞき、仰天して、ワキ達に、中の恐ろしい有様を物語る。その中には人の死骸が山と積まれているのである。

斯くする中、後シテ鬼女は柴を背負って走り出で、一ノ松でワキに向って面をキリ、打杖を振りかざして奥いかかるのである。

イノリは、魔力と法力との闘争を示す所作があり、シテとワキとの渡り合いがあって、やがて鬼女は祈り伏せられてしまう。

### ―十二月十五日(祭)清韻会―

**鶴亀**（つるかめ）
シテ　福間昌作
ツル　殿島満里子
カメ　殿島博子

清韻会では、赤間鎮雄氏のシテで、能「頼政」が予定されていたのが、ご病気のため、急に福間昌作氏の「鶴亀」に変更になった。

後見方が、一畳台を大小前に据え、その上に引立大宮の作物を載せて退場する。

間狂言官人が唐人の装束で出て皇帝が四季の節会の儀式を月宮殿で行われる旨を述べて退く。即ち狂言口開の形式である。

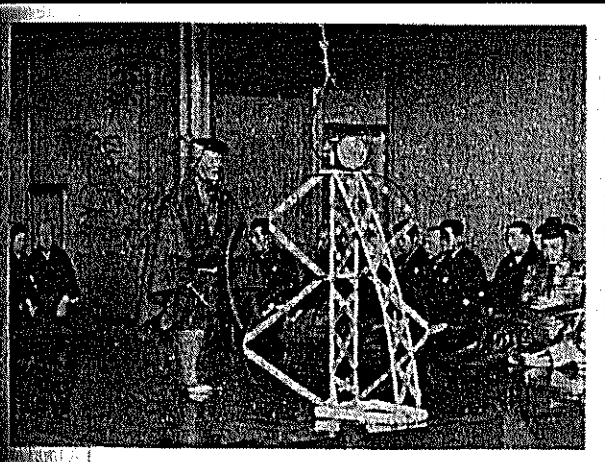
真ノ来序の囃子で、シテ皇帝が静かな運びで登場する。ワキ、ワキヅレ従臣がこれに続く。シテは舞台に入って一畳台に上り床几にかけワキ、ワキヅレは脇正面に下居する。舞台は月宮殿にさまざまな大臣や侍臣が参内した場面となる。シテ「それ青陽の春になれば」と荘重に謡い出す。地とのカケ合いに宮殿内の大臣たちの拝賀の有様を謡い、「庭の砂は金銀の」と地謡は、おごそかで美しい宮殿の光景を上歌に謡う。この上歌の中に、ツレの鶴と亀とは、鶴を先にして登場し、橋掛に留り、正面を向いて下居する。やがて地の「亀は万年の齢を経、鶴も千代をや重ぬらん」で鶴と亀は舞台に入り、中ノ舞を合舞にて舞い、「庭上に参向申しければ」でツレ二人は皇帝の前に拝礼して、地謡前に行き下居する。シテは「君も御感の余りにや、舞楽を奏して、舞い給う」にて「楽」を舞う。

楽は天下泰平、万民繁栄を喜ぶ心に舞い、更にキリは「月宮殿の白衣の袂」から「還御なるこそめでたけれ」迄ゆたかに舞いおさめる優雅な曲で、物語の筋はなくても見る人を恍惚の境に誘い込むゆかしい能である。

**半能　養老**（よおろお）
シテ　殿島修二
天女　佐藤アヤ子

半能であるので、前段は全部が省かれる。なお小書「水波之伝」であるために、まづ出端の囃子でツレ天女が出て、天女ノ舞を舞う。舞い終って、シテの謡うサシ「ありがたや治まる御代の習いとて」をツレが謡う。シテは「我はこの山山神の宮居」と謡い乍ら幕から出る。以下ツレとの掛合となりシテ舞台に入りツレと向き合って連吟にて「たゞこれ水波の隔てにて」と謡い、ツレは地の前へクツログ、シテは神舞（四段目から笛は盤渉調となる）を舞い、「波悠々たり」のあとにイロエが入り、脇能の中での佳作で、息もつがせぬ豪華能といえよう。

## 演能記録



### 十一月の能から

#### 観衛会の天鼓

十一月二十三日の名古屋観衛会に社中の加藤歌子さんの能「天鼓」が出た。最近の天鼓は殆んどが弄鼓の小書付きで、小書のない常の天鼓は珍らしい。そのため前シテの出も一声、下歌、上歌となる。伸々落ちついた謡いぶりでよかった。ワキとの問答のあと初回で舞台へ入り、またワキとの問答となるワキの「よしよし鳴らずは力なき事」と同情を含めた謡いもしっとりとした気持を味わえた。そのあと「さては辞すとも叶ふまじ」とワキをジッと見つめて謡う間のとり方、面の使い方など伸々よくきいて居り稽古の完璧を思わせた。地謡の山本勝一、真義兄弟も随分の力の入れようで、笛、鼓ともに人を得て面白い天鼓であった。後シテになって立派な装束に身を包んで久方振りに黄鐘調の楔を面白く聞くことが出来、シテの足拍子のノリの良さにはゾッとさせられた。切も型の多い場面であったが謡のうまさがすっかり見直されたと感じた。

#### 11月の観世会を観て

S　生

十一月十六日の観世会を観て、いろいろ感じたこともあったので、一寸書いて見ました。

龍田は山本博之氏所労のため、子息勝一氏が代勤されたが、神楽留の小書のため、替装束となったのは、常の時よりも非常に変った感じを受けた。氏の能も久方振りに見たが以前より随分芸格が上り、すっかり見違えるようになった。梅若六郎氏の女婿という立場がそうさせたか?……後シテも品よく舞いこなしていた。

隅田川は六郎氏のこととていつもながらそつのない芸を見せてくれた。風邪のためか一寸調子の悪い時もあったが謡のうまさがすっかり頼もしく思った。

梅若氏は殆んど子方を使われないと聞いていたが、今回は子方を使われ見事に母親の子を慕う情が表現され親子の別れの哀しさをしみじみ感じさせられた。

殺生石は神戸の上田照也氏であった。氏の能も久方振りに見せて貰ったが、随分芸が大きくなったように思われた。前シテの唐織と面も立派なものであった。氏の体の大きさも女物に程よい寸法か、なかなかしっくりとした感じであった。後シテの石の割れる時に後見の山本真義氏と梅田邦久氏が作り物の石の始末が実に美事で少しも邪魔に感ぜず後見の立派さをまざまざと見せられた。後シテの動きも実にあざやかでアッと言う間に演了してしまった。今日一日良い能を観て楽しかった。

#### 「卒都婆小町」上演

**12月14日　京都・片山定期能**

片山定期能楽会では、十二月十四日(日)京都観世会館で故片山博通先生七回忌追善能楽会を催す。

蝉　梅田邦久
小林　小丸　慶三
替之形　西本平三郎
羽衣　片山博太郎
彩色之伝　岡治郎右衛門
卒都婆小町　武田小兵衛
高安滋郎
谷田宗二朗
古橋正士
杉浦豊彦
橋本保向
武田欣司
青木祥二郎
正尊　江崎金治郎
起請文

狂言「武悪」茂山千作、茂山千之丞、茂山忠三郎


市寿司　仕出し
新東寿司
名古屋市千種区楠元町2
電話（761）9428番

登録商標
恩料理
本場名代
恩
ふぐ
ふぐや中華料理
一番二四号
電二三一（一七二〇）（〇一五五）

能楽殿御用達
八百彦支店
名古屋市東区相生町2の18
電話（941）4707番

うなぎ釜まぶし
うなぎ　大友
ナゴヤ納屋橋畔店（231）2709・6818
名鉄百貨店九階　のれん茶屋店